

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集

## 平成19年度発掘調査報告書

小 館 遺 跡	森 崎 II 遺 跡
細谷地遺跡第18次調査	南日詰八坂遺跡
矢盛遺跡第14次調査	八坂遺跡
雨 滝 遺 跡	鶴ヶ沢遺跡
落 合 II 遺 跡	瀬原II遺跡第10次調査
落 合 III 遺 跡	金浜 I 遺 跡
戸仲遺跡第2次調査	金浜 II 遺 跡
湯 沢 I 遺 跡	可 能 性 あ り ⑩
下平遺跡第2次調査	北 部 環 状 線 G H I
清 田 境 I 遺 跡	ほか調査概報

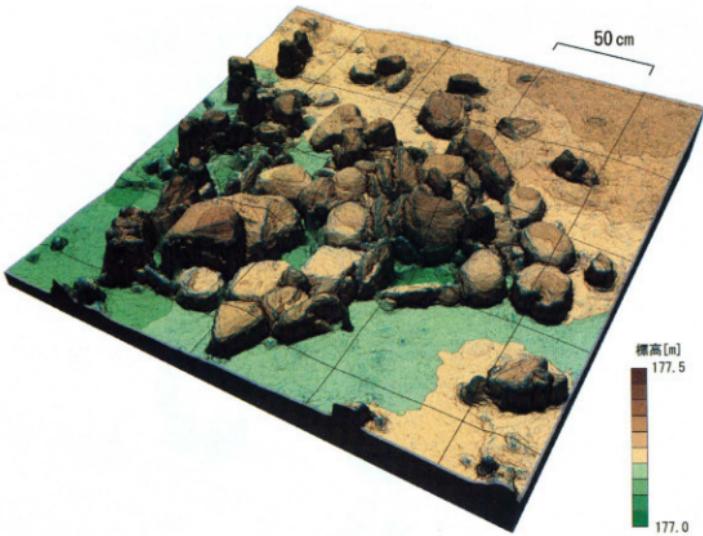
2008

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書  
第524集 平成19年度発掘調査報告書  
正誤表

頁	誤	正
253頁・4行目右	1,793m <sup>2</sup>	1,889m <sup>2</sup>

# 平成19年度発掘調査報告書



川目A遺跡第5次調査補足 繩文時代配石遺構立体図



写真1 道上遺跡木製品出土状況



写真2 隠里III遺跡 平安時代住居状遺構（工房）



写真3 割沢遺跡 上屋の伴う鍛冶炉

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成19年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で58遺跡63件、242,285㎡が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

奥州市の岩洞堤遺跡では後期旧石器時代のナイフ形石器や台形様石器・彫刻刀形石器など約350点が複数のブロックから出土しました。縄文時代の盛岡市川日A遺跡第5次調査からは後期中葉から後葉の配石遺構と遺物包含層などが検出され、隣接する同遺跡第6次調査では前期と中期の住居跡が確認されています。北上市の境遺跡は弥生時代中・後期の集落跡であることが明らかになりました。平安時代の遺跡としては宮古市の賽の神Ⅲ遺跡・同市隱里Ⅲ遺跡で製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・排滓場といった鉄生産関連遺構が検出されたことが注目されます。また、紫波町の下川原Ⅰ遺跡では12世紀平泉藤原氏のかわらけ・白磁・青磁などが出上しました。

このように今年も各地の調査で地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 武田牧雄

# 目 次

## 序

平成19年度の調査結果について

## I 発掘調査報告

(1) 小館遺跡（花巻市）	5	(9) 下平遺跡第2次調査（平泉町）	135
(2) 細谷地遺跡第18次調査（盛岡市）	13	(10) 清田境I遺跡（一関市）	147
(3) 矢盛遺跡第14次調査（盛岡市）	23	(11) 森崎II遺跡（宮古市）	153
(4) 雨滝遺跡（二戸市）	43	(12) 南日詰八坂遺跡（紫波町）	159
(5) 落合II遺跡（住田町）	71	(13) 八坂遺跡（花巻市）	175
(6) 落合III遺跡（住田町）	85	(14) 鶴ヶ沢遺跡（一関市）	185
(7) 戸仲遺跡第2次調査（盛岡市）	89	(15) 頭原II遺跡第10次調査（平泉町）	191
(8) 湯沢I遺跡（北上市）	115		

## II 試掘・確認調査報告

(16) 金浜I遺跡（宮古市）	203	(18) 可能性あり⑩（宮古市）	210
(17) 金浜II遺跡（宮古市）	207	(19) 北部環状線GH I（宮古市）	213

## III 発掘調査概報

(20) 川日A遺跡第5次補	219	(41) 境遺跡	240
(21) 川目A遺跡第6次	220	(42) 成田岩田堂館遺跡	241
(22) 鶴ノ木遺跡	221	(43) 宝禄II遺跡	242
(23) 倉沢3区I遺跡	222	(44) 上野I・II・III遺跡	243
(24) 中鳴遺跡	223	(45) 下川原I遺跡	244
(25) 賽の神III遺跡	224	(46) 市の川I遺跡	245
(26) 八木沢II遺跡	225	(47) 山の川II遺跡	246
(27) 木戸井内IV遺跡	226	(48) 山口遺跡	247
(28) 隠里III遺跡	227	(49) 小川屋敷遺跡	248
(29) 大平野II遺跡	228	(50) 六日市遺跡	249
(30) 坪瀬II遺跡	229	(51) 八天北遺跡	250
(31) 岩洞堤遺跡	230	(52) 合野遺跡	251
(32) 上町	231	(53) 小林繁長遺跡	252
(33) 剖沢遺跡	232	(54) 道上遺跡第3次	253
(34) 細谷地遺跡第17次	233	(55) 倉沢3区II遺跡	254
(35) 矢盛遺跡第13次	234	(56) 松屋敷遺跡	255
(36) 細谷地遺跡第16次	235	(57) 八木沢駄込I遺跡	256
(37) 矢盛遺跡第12次	236	(58) 八木沢ラントノ沢I遺跡	257
(38) 本波VII遺跡	237	(59) 八木沢駄込II遺跡	258
(39) 板子屋敷3遺跡	238	(60) 下嵐江I・II遺跡	259
(40) 桂平I遺跡	239	卷頭の立体図は懇ラング作成	

## 平成19年度の発掘調査結果について

平成19年度の発掘調査事業は53件48遺跡199,311m<sup>2</sup>で開始したが、年度途中での追加を含めて最終的には63件58遺跡242,285m<sup>2</sup>の調査に着手した。本調査以外では宮古道路建設事業関連遺跡などの試掘・確認調査を実施している。

後期旧石器時代は前年度からの継続になる奥州市岩洞堤遺跡（31）と同鶴ノ木遺跡（22）を調査した。岩洞堤遺跡ではナイフ形石器や台形様石器・彫刻刀形石器など約650点が9ブロックから、鶴ノ木遺跡ではナイフ形石器のはか、石核や剥片など約1,680点が3ブロックから出土した。

縄文時代の盛岡市川日A遺跡第5次調査補（20）は前年度同様、配石造構と遺物包含層を主体にした調査になった。配石造構8基は小規模な列状と扇状になる各1基のはかは小腰が梢円形に集合した状態のもので、1.3×0.9mほどの規模である。大量の上器・石器のはか、各種の上製品と石製品が遺物包含層から出土した。造構・遺物とも後期中葉～後葉が主体になる。隣接する若干高い区域を中心調査した第6次調査（21）は早・前期5棟と中期10棟の堅穴住居が沢を挟んで占地を界にして検出され、遺物は早期中葉～晚期中葉の各時期のものが出土した。川日A遺跡以外の集落遺跡は7カ所と少なく、検出棟数はそれぞれ1～4棟であった。時期は中期～晚期である。宮古市所在の八木沢Ⅱ（26）や八木沢駒込Ⅱ（59）・木戸井内Ⅳ（27）の各遺跡では中期の堅穴住居2～4棟が検出された。また、奥州市宝緑Ⅱ遺跡（43）は後期、宮古市賽の神Ⅲ遺跡（25）は晚期の集落遺跡である。

弥生時代は北上市境遺跡（41）で中・後期の堅穴住居6棟を調査した。北上川東岸の沖積微高地に立地し、平安時代の集落と複合している。該期の集落遺跡が少ない本県においては好資料となろう。また、鶴ノ木遺跡では土製紡錘車1点が出土した。本県では類例の少ない遺物である。

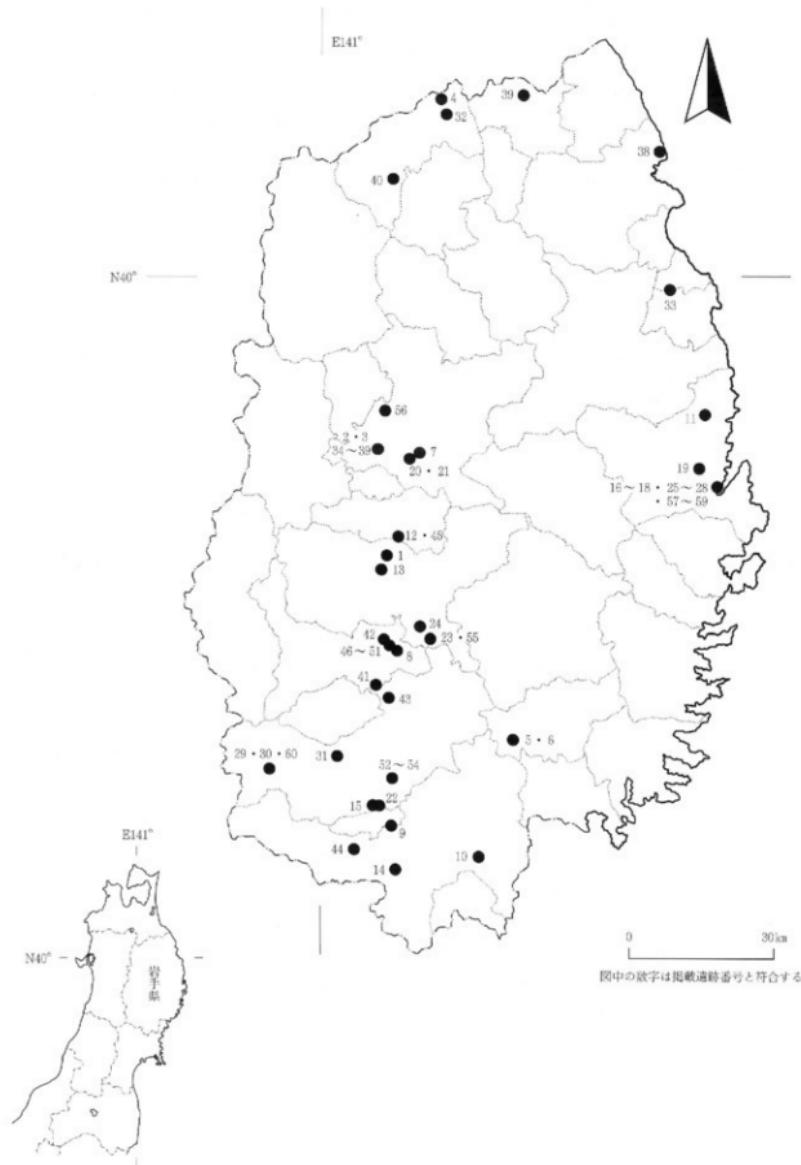
奈良時代の調査は少なく、堅穴住居1棟が木戸井内Ⅳ遺跡で見つかっただけである。同遺跡は平安時代の集落遺跡でもあり、堅穴住居9棟を調査した。

平安時代の集落遺跡は15カ所である。花巻市中嶋遺跡（24）や北上市湯沢Ⅰ遺跡（8）は井戸1～2基を伴う。鉄生産関連遺構は宮古市福里Ⅲ遺跡（28）にある。堅穴住居4棟のはか、カマドをもたない9棟の住居状遺構があり、うち2棟は鍛冶炉を内部に伴う。また、炭窯2基や排溝場2カ所が検出され、遺物では宮古地方初となる灰釉陶器片が出土した。賽の神Ⅲ遺跡では製鉄炉8基と炭窯6基・排溝場1カ所が谷部に集中して検出された。年代決定資料を欠くが、古代の可能性が大きい。紫波町下川原Ⅰ遺跡（45）では土坑9基や掘立柱建物などが検出され、土坑は墓壙と推測された。かわらけ・白磁・青磁・刀子のはか、遺構内外から少量出土した遺物は12世紀のものである。平泉藤原氏の一族、橿爪氏の居館である比爪跡から南東1.8kmに位置し、関連が注目される。

中世城館調査には北上市成田岩田堂館遺跡（42）がある。北上川西岸の河岸段丘に立地し、この地方を支配した和賀氏の本城である二子城跡の北側に位置する16世紀後半の館跡である。遺跡は、東側が段丘崖になり、南北200m・東西100mの三方が土塁と堀に囲われている。今回は西辺の堀と上塁の一部を調査し、堀は上幅約4.4m・深さ1.8m、土塁は下幅2.8m・高さ1.2～1.5mであった。掘立柱建物9棟の中には規模の大きな総柱建物があるなど、城館内の中心的な場であったことが考えられる。

普代村割沢遺跡（33）では文化11年（1814）から文政12年（1829）にかけて操業された盛岡藩の割沢鉄山の一部を調査した。鍛冶炉4基、それの上屋や作業棟と推測される掘立柱建物3棟、排溝場3カ所ほかの遺構が検出され、大量の鉄滓と羽口・陶磁器・鉄製品・銅製品が排溝場から出土した。鉄山の調査例が少ない本県にあって、文献に現れる鉄山を調査したことは貴重である。

（首席文化財専門員 三浦謙一）



### 平成19年度調査遺跡位置図

# I 発掘調査報告書

#### 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

## (1) 小館遺跡

所 在 地 花巻市石鳥谷町字好地 地内  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
事 業 名 直轄河川改修事業石鳥谷地区  
発掘調査期間 平成19年4月9日～5月14日

遺跡番号・略号 LE96-0305・KD-07  
調査対象面積 1,650m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 1,650m<sup>2</sup>  
調査担当者 吉田泰治・米田 寛

### 1. 調査に至る経緯

小館遺跡は「石鳥谷地区堤防事業」の築堤工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一級河川北上川は岩手県と宮城県2県に跨る一級河川である。事業対象地域である「好地地区」においては、堤防の背後地に住家連想地区があり、その堤防背後地資産の保護のために工事着手するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所から平成18年7月11日付国東整岩一工第33号「河川事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年8月10日に試掘調査を実施し、工事に着手するには小館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年8月31日付教生第773号「直轄河川改修事業北上川上流石鳥谷築堤における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当岩手河川国道事務所へ回答してきた。その結果を踏まえて、当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年4月2日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省 東北地方整備局 岩手河川国道事務所）



第1図 遺跡の位置

## 2. 遺跡周辺の地理的・歴史的環境地理

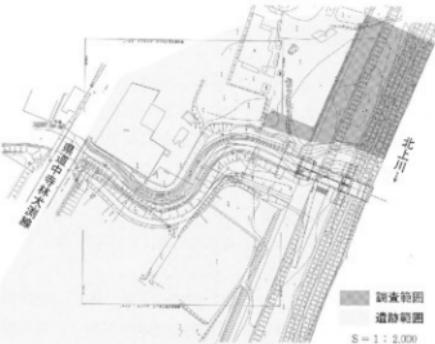
### 形環境

小館遺跡は、北上川と大沢口川の合流点に位置し、JR石鳥谷駅から東に約400mの北上川西岸に所在する（第1図）。調査地内の最も高所は標高85.660mで、北上川との比高差は5m程度である。遺跡所在地は北上川の洪水で幾度となく被害を受けた地域内にあり、昭和22年のカスリン台風通過時には遺跡範囲全域が浸水した。現況は宅地、畑地を主体とし、北上川と接する範囲は雑種地となっている。周辺住民によると、かつては地下水が豊富に湧き出し、沼地が存在する環境であったという。遺跡周辺の地形（第2図）は、東から順に、①北上川、②北上川の氾濫によって形成された自然堤防、③自然堤防の西側に沿地状の後背湿地、④宅地の広がる高位面、となる。本遺跡はその遺跡名から中世城館の可能性が指摘されており、主体は④の高位面にあるものと考えられる。なお、今回の発掘調査は②と③に跨る範囲であった。また、旧地権者によれば、北上川に面する範囲は、昭和60年代には現況よりも2~3m近く北上川まで張り出していたらしい。それが近年の洪水・増水のたびに崩落し、現在の崖状のラインが形成されたという。

### 歴史的環境

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年3月31日現在のまとめによると、花巻市石鳥谷町は190の遺跡が登録されている。多時期に跨って利用された複合遺跡が多く、時期別には旧石器時代4、縄文時代105、弥生時代2、古墳時代8、古代78、中世36、近世13を数える。このうち小館遺跡は中世の城館跡として登録されている。

小館遺跡をはじめとして花巻市内には中世の城館が31ヶ所登録されている。旧花巻市・大迫町・東和町そして石鳥谷町の稗貫53郷は稗貫氏の支配下にあった。登録された31ヶ所の多くは稗貫氏およびその臣属が居住したとされる。主な城館跡を概観すると、葛丸川・耳取川の上流付近には瀬川氏が支配した大瀬川館（館山）・大興寺城・芳館、沢田氏が支配した長谷堂館、葛丸川・耳取川の中・下流域の戸塚氏の富沢館・北寺林館、河野太郎通後の次男伊予守通重の居館とされる光林寺館、JR石鳥谷駅付近の商店や住宅が集中している好地地区の小館・備中館、新堀地城を所領した新堀氏の新堀城・新堀下館・新仙寺館（上館）・新堀中館（侍従館または侍中館）・殿屋敷・堀子田・赤間館、滝田氏の笠原館などが存在する。南の滝沢川中流から河口の両岸では、黒沼氏の黒沼館とその一部と考えられている堀の内遺跡、黒沼館西側に小森館（小森林館）、南側に江曾氏の江曾館（北館）があり、周辺一帯が城館群となっている。また、この地域には古館、柳館、矢の目館などがあり、柳館は11世紀の前九年の役で安倍氏が籠もった矢根橋に比定されている。北上川を挟んでその対岸には関口氏が支配した関口館・下館・関口南館とそれに関連する遺跡群があり、船着き場も確認されている。さらに八重畠地区には八重畠氏の宿館（八重畠館）・猪鼻館（広济寺館）が存在する。また、宿館の東を流れれる添市川下流には隅っこ館がある。中世における小館が、これら城館跡のいくつかと何らかの有機的な関連性を有するものと考えられる。



第2図 遺跡調査範囲

小館の築城時期は明らかではないが、藤原秀衡の家臣で照井堀を開削した照井太郎高春の子が築いたという伝承がある。照井家は本遺跡周辺や上和町方面で繁栄した一族で、遺跡周辺には照井姓が多い。稗貫氏の家臣の中には、遺跡周辺の地名を姓にする好地氏がいるが、伝承に沿えば小館は好地氏家臣の照井氏の城館ということになろうか。

近世では、好地地区は明暦4年(1658年)に開設された奥州街道沿いの宿場町として栄えている。天明5年(1785年)と8年(1788年)には、文人の菅江真澄が石鳥谷にその足跡を残している。

### 3. 基本土層

第I層	10YR3/4	暗褐色砂層(洪水砂の土壤化)	粘性微	しまり粗	層厚15~50cm
第IIa層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂層(洪水砂層)	粘性微	しまり粗	層厚120~450cm
第IIb層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂層(洪水砂層: III層との境界に水酸化鉄内が密集)	粘性弱	しまりやや強	水酸化鉄10%包含 層厚10~20cm
第III層	10YR5/2	灰黄褐色粘質土層	粘性強	しまり強	水酸化鉄25%包含 層厚50~70cm

### 4. 調査概要

検出遺構: 曲輪1ヵ所、堀跡1条

出土遺物: 土師器片6点、寛永通宝(文鏡)1点、瀬戸・美濃産近世陶器片2点

明確な掘り込みのある遺構は確認できなかった。ここで遺構認定したのは、立地条件から、自然地形を巧みに利用したと考えられる範囲についてである。また、遺物はIIa層で古代の土師器片が1号曲輪上と調査区西端で、同じくIIa層で近世陶器と寛永通宝が1号曲輪上から出土した。

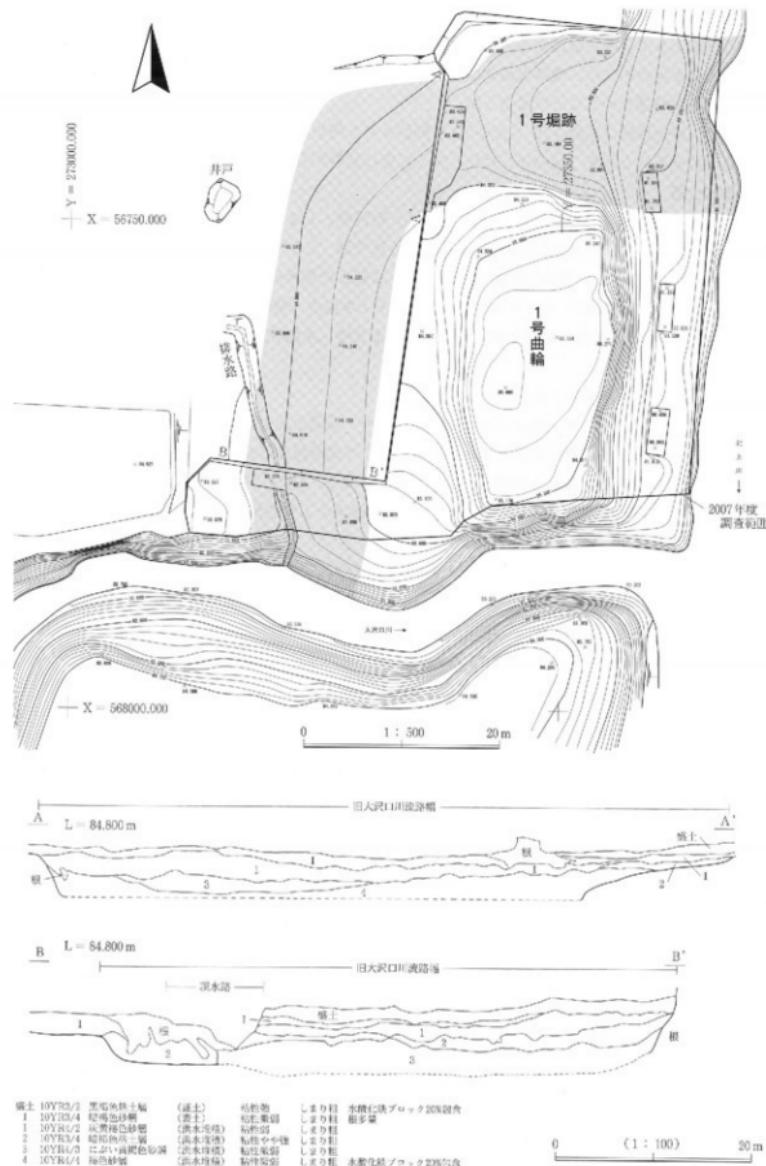
#### < 1号曲輪 >

自然堤防上の平坦面範囲である。長さは南北27m、東西13.5m、面積は約350m<sup>2</sup>である。1号曲輪範囲は人力で掘削した。IIa層を50cm掘削したところで土師器、近世陶器、寛永通宝が出土した。その後、遺構検出作業と暗褐色~褐色のシミ状に見える遺構推定範囲の断面観察を繰り返し、最終的にはシミのなくなる深さで検出作業を終了した。表十からは約70cmの深さである。平坦面の平面形は長方形で、柱穴などの明確な遺構は確認できなかった。曲輪の東側は北上川の増水によって削平されており、断面観察をおこなったところ、曲輪が盛土によって形成されたものでないと容易に理解できた。

#### < 1号堀跡 >

大沢口川の旧流路であった範囲を天然の堀として利用したと考える。現在の大沢口川は、流路が直線状になるよう河口を開削したものであり、それ以前の大沢口川は1号曲輪の西側と北側を流れ、北上川に注いでいた。IIa層を切り込んで形成されている。旧流路は調査区南西部で上幅11.8m、北上川と合流する調査区北部では上幅11~14mに達する。小館主体部と1号曲輪との間に橋を渡しているものと推察されるが、今回の調査区内では橋の痕跡を確認できなかった。調査区北側の堀の深さについては、数十年前まで北上川と合流していた場所であることを考慮すると、表十から底面まで4~5m近く掘削が必要と予想された。調査区北側及び南西部では表土から50cm程度で湧水し始めたため、部分的に掘り下げることに調査方針を変更してトレーナーを設定し、表土から約1.5mまで掘り下げたところで作業を終えた(第3図A-A'・B-B')。これは旧河路範囲を大きく掘り下げることで、地盤沈下や北上川への土砂の流出及び北上川の流入の危険性があり、それにともなって調査区外の細地や宅地の崩落が予想されたため、安全対策上やむなく選択した措置である。したがって今回の調査では、1号堀跡の底面標高は不明となった。ただし、周辺住民によれば、かつての大沢口川の調査区南西部付近は深さ2~3m、調査区北側では深さ4~5m程度であったという。

(1) 小館遺跡



第3図 捜出遺構

## まとめ

今回の調査では中世城館跡とされる小館の居館等の建物を確認できなかった。古代と近世の遺物が出土したことから、本遺跡は古代～近世の所産と言える。今回の調査では、見張り場に相当する曲輪と、大沢口川旧流路を利用した天然の堀跡を確認した。

岩手県教育委員会が刊行した『岩手県中世城館跡分布調査報告書』によれば、「小館：東流する大沢口川が北上川に合流する北側の段丘上。西側には幅8mの堀。規模60×60m」と記されている。この記載の「幅8mの堀」とは今回の1号堀跡を指すものなのか、あるいはかつて現在よりも2m程度低かった県道中寺林・犬渕線付近のことを指すのか詳細は不明である。また、「規模60×60m」とあるものの、1号堀跡から東へ60mの場所は北上川流路内にあたり、不適当である。広めに範囲を設定したか、あるいは今回の調査区よりも西側を示す記述かもしれない。小館遺跡の中で中世城館跡の主体部が確認されるとすれば、今回の調査区より標高の高い1号堀跡と県道中寺林・犬渕線に挟まれた範囲、すなわち宅地が立ち並ぶ範囲に設けられたものと推測される。

なお、小館遺跡2007年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

## &lt;引用・参考文献&gt;

石鳥谷町史編纂委員会 1981 『石鳥谷史 上・下巻』石鳥谷町

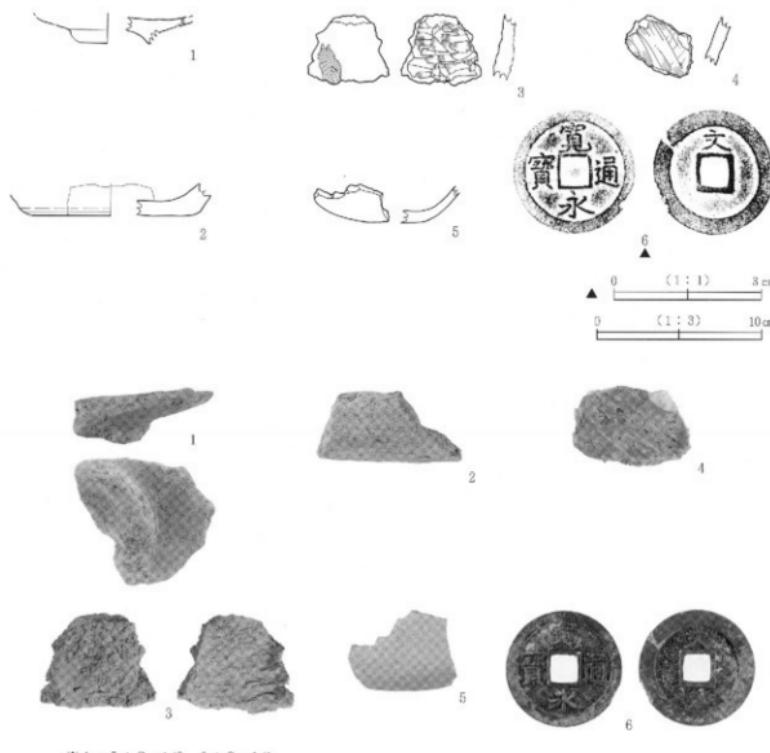
岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	小館遺跡						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	吉田泰治・米田 寛						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
小館遺跡	岩手県花巻市 石鳥谷町字好地 地内	LE96- 03205 0305	39度 29分 17秒	141度 09分 04秒	2007.4.9 ~ 2007.5.14	1,650m <sup>2</sup>	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小館遺跡	敷布地 城館	古代 中・近世	曲輪 堀	土師器 近世陶器 寛永通宝			
JR石鳥谷駅から東に400mの北上川氾濫平野上に立地する。岩手県中世城館跡分布調査報告書には「東流する大沢口川が北上川に合流する北側の段丘上。西側には幅8mの堀。規模60m×60m」と記されている。今回の調査は城館の主体となる範囲の東側で、自然地形を利用した曲輪と大沢口川の流路を利用した天然の堀跡を検出した。これらの範囲には明確な構築物の根跡を確認できなかったものの、その立地条件から見張り場的な機能を有する場所ではなかったかと推察される。							

\*緯度・経度は世界測地系による数値である。

(1) 小館遺跡



※ 1 ~ 5 : S = 1/2、6 : S = 1/1

第4図 出土遺物

第1表 遺物観察表

No	種別	器種	部位	出土位置	時期	特徴	備考
1	土師器	高台付皿	底部	I号曲輪: IIa層	10世紀	外面: ナデ 内面: ナデ、底径4.4cm	
2	土師器	碗	底部	I号曲輪: IIa層	10世紀以降	外面: ナデ 内面: 黒色処理・ナデ、底径10.0cm	
3	土師器	甕	胴部	調査区西端: IIa層	古代	外面: 磨耗・ハケメ 内面: ハケメ	
4	土師器	甕	胴部	調査区西端: IIa層	古代	外面: ケズリ 内面: ナデ	
5	陶器	碗	胴部	I号曲輪: IIa層	18世紀	湘戸・美濃産	
6	銅錢	寛永通宝		I号曲輪: IIa層	初説1668年	外径2.50cm、内径0.60cm、厚さ0.13cm、重量2.8g	文鏡



米軍空中写真（昭和23年撮影）

「USA - RI424 - 54」



調査区遠景

(1) 小館遺跡



遺跡現況（北から撮影）



遺跡現況（東から撮影）



調査区北部 1号堤跡断面



調査区南西部 1号堤跡断面



調査区全景

写真図版2 小館遺跡（2）

## (2) 細谷地遺跡 第18次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原42-6 ほか  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
事 業 名 一般国道46号盛岡西バイパス建設事業  
発掘調査期間 平成19年7月17日～8月24日

遺跡コード・略号 LE26-0214・OHY-07-18  
調査対象面積 1,675m<sup>2</sup>  
調査終了面積 1,675m<sup>2</sup>  
調査担当者 村木 敬・小林弘卓

### 1 調査に至る経過

「細谷地遺跡」は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え、国道13号に接続し、秋田市に至る総延長約117kmの主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋と日本海を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

盛岡西バイパスは、盛岡市永井第一地割字高屋と同市上厨川字前潟の間約7.8kmの区間で計画されている。近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に、昭和59年度に事業着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

「細谷地遺跡」については、盛岡南新都市開発整備事業の区域に存する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会及び盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。平成18年度に「細谷地遺跡」の試掘調査を実施しており、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成19年6月15日付で岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「細谷地遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡の位置

## 2 遺跡の位置と立地

細谷地遺跡は、岩手県盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南方に約3kmに位置し、零石川右岸の中～低位段丘上に立地する。今回の調査区の標高は約123mで、現況は宅地・畠地である。

### 3 基本土層

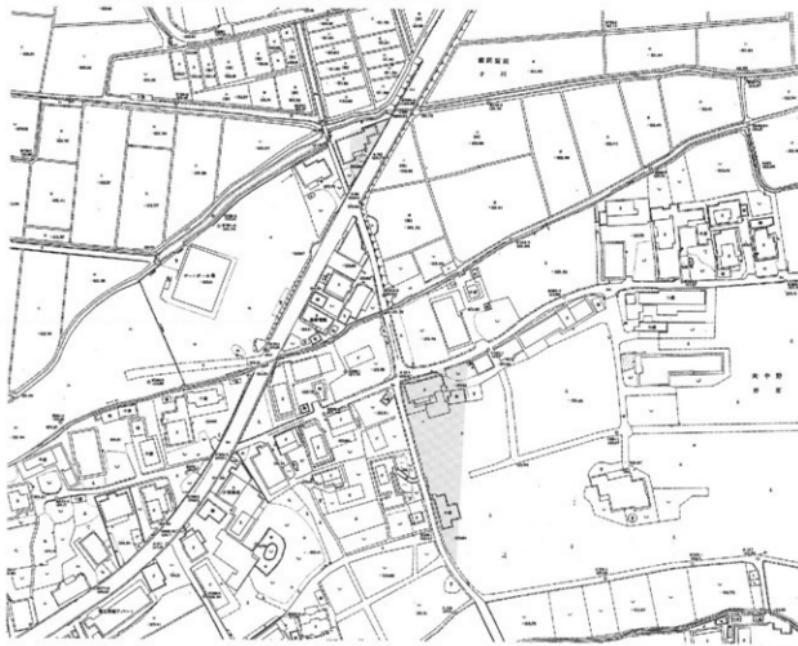
調査地点が2箇所に分かれることから、北側をA区、南側をB区と呼称した。各調査区の基本土層は以下のとおりである。

#### A区

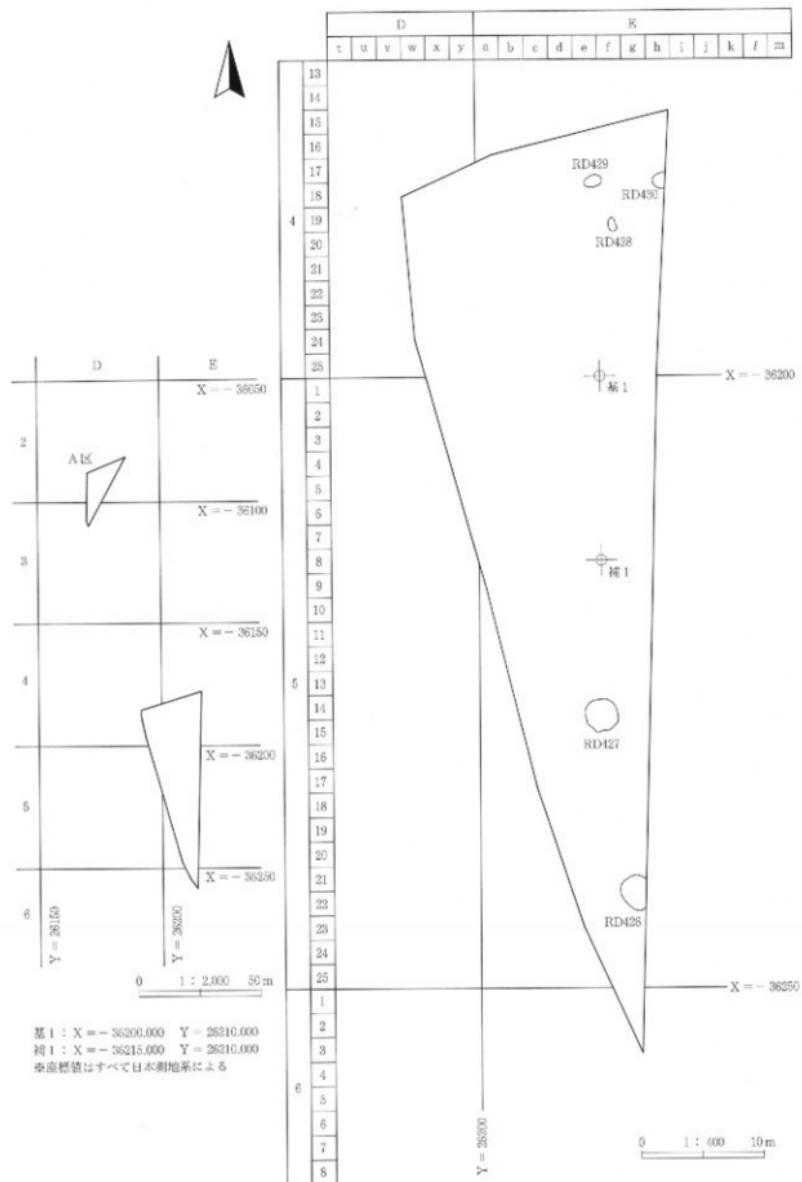
- I層 碎石等から成る盛上層。層厚60～80cm。
- II層 黒褐色土層。盛土以前の表土。層厚0～20cm。
- III層 褐色土層。遺構検出面。層厚不明。

#### B区

- I層 黒色土層。現表土。一部、現耕作土も含む。層厚40～60cm。
  - II層 暗褐色土層。遺構検出面。調査区北東部でのみ確認できる。層厚0～10cm。
  - III層 褐色土層。遺構検出面。0cm～層厚不明。
  - IV層 浅黄色砂質土層。遺構検出面。一部分でのみ確認できる。層厚不明。
- III層はA・B両区に対応したローム層である。なお、B区におけるII・III・IV層はいずれも遺構検出面となるが、II・IV層は部分的にしか存在しない。そのため、遺構検出面までの層位は地点によって、I-II層、I-III層、I-IV層のいずれかとなる。



第2図 調査区の位置図



第3図 グリッド配置図・遺構配置図

#### 4 調査の概要

A・B両区とも重機により表土を除去し、遺構検出を行った。その結果、A区では遺構は全く確認されず、B区においてのみ遺構プランが検出された。その後、遺構精査に着手したが、検出されたプランの多くから現代の陶磁器類や工業製品が出土しており、現代における掘削痕であることが判明した。結果、今回の調査で確認された遺構は土坑4基と墓壙1基である。

なお、調査区のグリッド設定は、過年度と同様、盛岡市教育委員会が定めたものに従った。平面直角座標第X系（日本測地系）に則り、50m間隔で南に向かい1・2・3……とアラビア数字を、東に向かいA・B・C……とアルファベット大文字を付し、大グリッドを設定している。さらにこれらを2m間隔で25分割し、南に向かい1～25とアラビア数字を、東に向かいa～yとアルファベット小文字を付し、これらの組み合わせで小グリッドを表している。北西端を基準とし、1 A 2 bというように呼称した。

##### (1) 遺構

###### RD428土坑

5 E 21 g・22 g グリッドに位置し、Ⅲ層面で検出した。東側の一部分が調査区外へと延びるため全容は不明だが、平面形は円形が推測される。規模は開口部径約280cm、底部径約250cmである。壁の立ち上がりは直角に近く、深さは約25cmを測る。埋土は黒色土の單層である。底面は概ね平坦である。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

###### RD427土坑

5 E 15 f グリッドを中心に位置し、Ⅲ層面で検出した。平面形は円形で、規模は開口部径約260cm、底部径約240cmである。壁はやや外側に傾斜するものの、直角に近い角度で立ち上がり、深さは約30cmを測る。埋土は上位の砂質土と下位の黒色土に分層される人為堆積土と思われる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

###### RD428墓壙

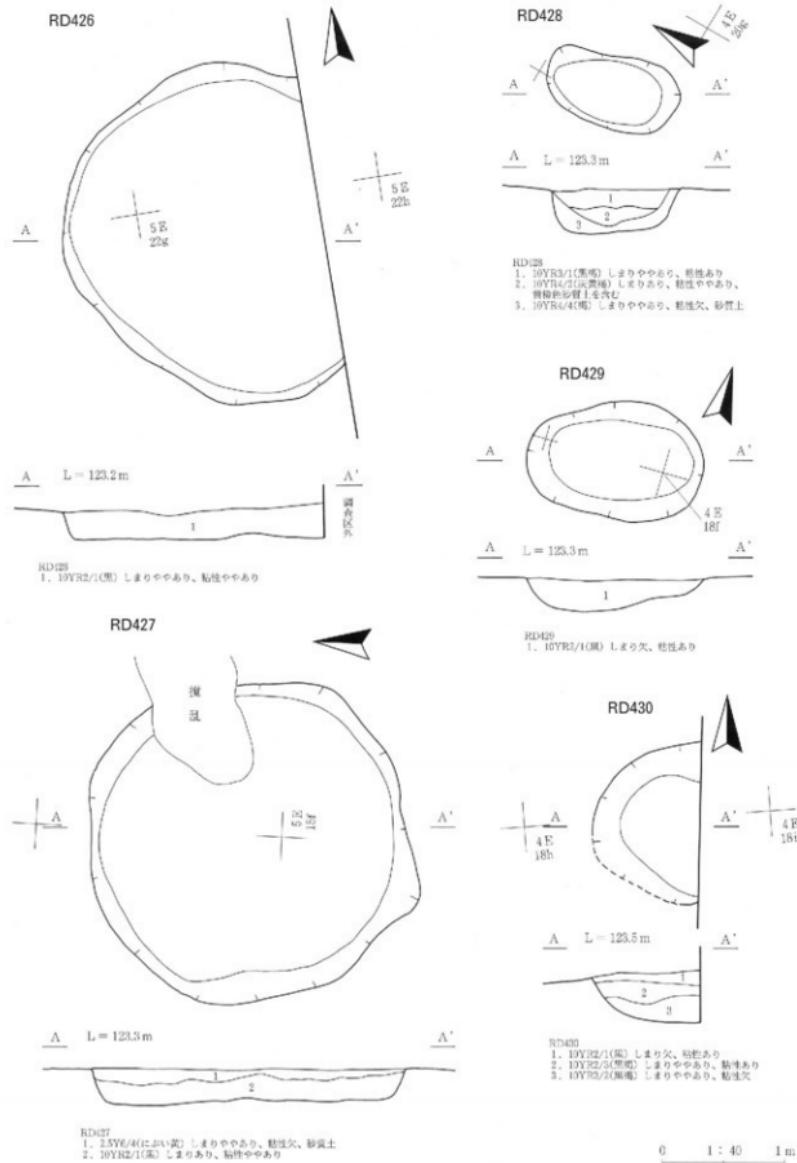
4 E 19 f グリッドに位置し、Ⅱ層面で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はほぼ北-南にある。規模は開口部約110×60cm、底部約90×50cmである。壁は底面からやや丸みを帯びながら直角に近い角度で立ち上がり、深さは約35cmを測る。埋土は3層に細分され、層位の状況から人為堆積と判断される。底面はほぼ平坦で、北側から人骨が出土している。これを分析したところ、頭蓋骨片や歯牙が検出され、成年後半～壮年期の女性の可能性がある土葬骨であることが判った。併せて行った放射性炭素年代測定では680±30BPという補正年代が得られた。副葬品等は確認できなかったが、自然科学分析の結果から、本遺構は13世紀後半の土葬墓と判断される。

###### RD429土坑

4 E 18 e グリッドに位置し、Ⅱ層面で検出した。平面形は楕円形で、長軸方向は西-東にある。規模は開口部約140×100cm、底部約120×60cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは約25cmを測る。埋土は黒色土の單層である。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

###### RD430土坑

4 E 17 h・18 h グリッドに位置し、Ⅱ層面で検出した。東側半分が調査区外へと続くため全容は不明だが、平面形は円形を呈するものと思われ、規模は開口部径約130cm、底部径約90cmが推測される。壁はやや外側に開いた角度で底面から緩やかに立ち上がり、深さは約40cmを測る。埋土は3層に分層されるが、いずれも黒～黒褐色土を基調としており、自然堆積したものと考えられる。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。



第4図 検出遺構

## (2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土製品1点と自然遺物(人骨)1点である。土製品(1)はB区遺構外1層から出土したものである。素焼きの土人形の一部と思われる。表面は指頭によるナデ調整が施され、中央は帶状に隆起する。背面には成形時の押圧による指頭痕がみられる。詳細は不明であるが、近世以降に製作されたものと思われる。人骨はRD428より出土したものである。同定の結果、頭蓋骨片と歯牙1数本が確認された。詳細については後述の附編を参照していただきたい。

## 5まとめ

今回の調査において、確認された遺構は土坑4基と墓壙1基、出土遺物は土製品1点と自然遺物1点のみという結果に終わった。自然化学分析の結果、13世紀後半という年代が得られた中世墓1基を除き、その他の土坑についての詳細は不明である。本遺跡の過年度の調査結果を鑑みても、中世の遺構・遺物自体が少なく、中世墓については初めての検出である。周辺遺跡では、今次調査地点から北西方向にある台太郎遺跡で約360基が検出された例があり、矢盛遺跡・向中野館跡などでは比較的多くの中世遺構が確認されていることから、これらに関連する可能性が考えられるが、分布状況としては散発的であると言えよう。いずれにしても、今次調査区は遺構密度・遺物出土量とも稀薄な区域であり、遺跡の縁辺部に相当するものと判断される。

なお、細谷地遺跡第18次調査に関する報告はこれを以って全てとする。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	細谷地遺跡 第18次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第521集							
編著者名	小林弘卓							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下板岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
細谷地遺跡 第18次調査	岩手県盛岡市 向中野字原野 42-6 ほか	03201	LE26- 0214	39度 40分 34秒	141度 08分 07秒	2007.7.17 ~ 2007.8.24	1,675m <sup>2</sup>	一般国道46号 盛岡西バイパス 建設事業に 伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
細谷地遺跡 第18次調査	散布地	中世 不明	墓壙 土坑	1基 4基	自然遺物(人骨) 土製品			
要約	過年度の調査結果では、周辺に縄文時代・古代～近世の遺構が存在しているが、今回の調査では、明確な遺構は中世墓壙1基しか確認されなかった。このような結果から、今次調査区は遺跡の縁辺部に相当するものと思われる。							

\*緯度・経度は世界測地系による数値である。



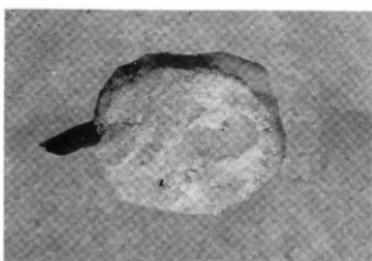
B区 完了全景（北から）



RD426 完掘



RD426 断面



RD427 完掘

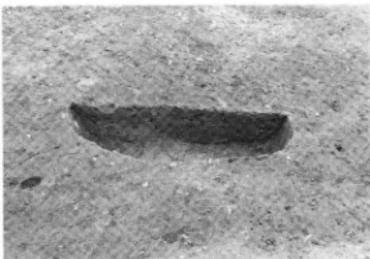


RD427 完掘

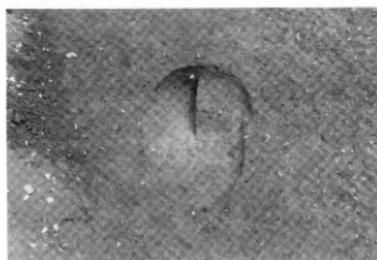
写真図版1 検出遺構（1）



RD428 完振



RD428 断面



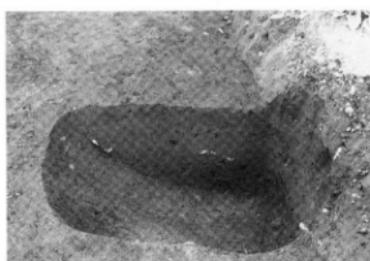
RD429 完振



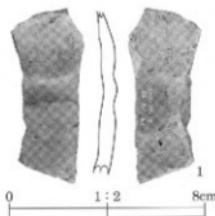
RD429 断面



RD430 完振



RD430 完振



第1表 土器品観察表

No.	出土地点・層位	種別	色 裏	特 殊	時期
1	B区南斜 表土	土器形	にかい褐色	表面:ナゲ/背面:指痕有り	近世?

写真図版2 掘出構造(2)・出土遺物

## 附編 細谷地遺跡第18次調査出土人骨の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 試料

試料は、RD428の埋土最下層から出土した人骨で、土壤中に複数点の歯牙および骨片がみられる。この土壤について0.5mmの箇で篩別を行って歯牙および骨片を抽出した。抽出した歯牙・骨片に付着していた泥分は、乾いた筆で静かに除去して分析試料とした。なお、放射性炭素年代測定は、骨片の中で約3cm程度の最も大きな部位不明破片について、観察・記録を行った後に測定試料とした。

## 2 分析方法

## (1) 放射性炭素年代測定

コラーゲンを抽出した後、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)、850°C(2時間)で加熱する。液体空素と液体空素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて二酸化炭素を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した二酸化炭素と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9 SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いてδ<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

## (2) 人骨判定

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、部位の特定を行う。なお、歯牙計測については、藤田(1949)に基づく。

## 3 結果

## (1) 放射性炭素年代測定

同位体効率による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。測定の結果、測定年代が540±30BP、補正年代が680±30BPを示す。また、暦年較正結果は、 $\sigma$ の場合、calAD1,278-1,301、calAD1,368-1,381、また $2\sigma$ がcalAD1,269-1,316、calAD1,354-1,389である。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表1 放射性炭素年代測定結果

遺構	部位	種類	部位	補正年代(BP)	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	測定年代(BP)	Code No.	Measurement No.
RD428	埋土最下層	人骨	不明	680 ± 30	-16.43 ± 0.43	540 ± 30	9883-1	IAAA-71938

表2 歴年較正結果

遺構	部位	種類	部位	補正年代(BP)	歴年較正年代(ka)		相対比	Code No.
					$\sigma$	cal AD 1,278 - cal AD 1,301		
					cal AD 1,368 - cal AD 1,381	cal BP 562 - 569		
RD428	埋土最下層	人骨	不明	682 ± 31	cal AD 1,269 - cal AD 1,316	cal BP 581 - 634	0.640	9883-1
					cal AD 1,354 - cal AD 1,389	cal BP 536 - 561	0.360	

## (2) 人骨同定

結果を表3に示す。確認された部位は、頭蓋片、左下顎第1大臼歯、右上顎犬歯、右上顎第1・2小白歯、右上顎第1・2・3大臼歯、右下顎第2小白歯、右下顎第2大臼歯、齒冠部片、歯根片である。これらの歯牙は咬耗しており、右下顎第2大臼歯はエナメル質が点状に露出する。

## 4 考察

放射性炭素年代測定の結果、本人骨は補正年代で680±30BPである。これは人骨自体の年代を示していると考えられる。本遺跡の過年度の調査では近世の墓壙が検出されているが、本人骨は中世段階の人骨とみられる。本人骨が出土したRD428が近世の墓域から離れた場所に位置するのも、そのような時代差を反映しているのであろう。埋葬された人骨は火を受けた痕跡がみられず、土葬骨と判断される。年齢は、右上顎第3大臼歯が確認されたことから成年（16～20歳程度）後半に達していたと判断される。なお、当時の食性によって咬耗の程度に差が生じるが、右下顎第2大臼歯の咬耗状態を考慮すると、壮年（20～39歳程度）の可能性がある。性別に関しては、頭蓋や寛骨が検出されていないため詳細不明である。ただし、男女の歯牙について歯牙計測値をまとめた櫻田（1959）を参考にすると、大半の歯牙が女性の平均値を下回ることから、本人骨は女性の可能性もある。

## &lt;引用文献&gt;

- 藤田恒太郎, 1949, 齧の計測基準について, 人類学雑誌, 61, 27-32.  
櫻田和良, 1959, 齧の大きさの性差について, 人類学雑誌, 67, 151-162.

- 1: 右上顎第3大臼歯
- 2: 右上顎第2大臼歯
- 3: 右上顎第1大臼歯
- 4: 右上顎第2小白歯
- 5: 右上顎第1小白歯
- 6: 右上顎犬歯
- 7: 右下顎第2大臼歯
- 8: 右下顎第2小白歯
- 9: 左下顎第1大臼歯
- 10: 頭蓋骨片（年代測定試料）



写真図版 出土人骨

### (3) 矢盛遺跡 第14次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田4地割字姫中18-1ほか	遺跡コード・略号	LE26-0139・IYM-07-14
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	7,147m <sup>2</sup>
事 業 名	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業	調査終了面積	7,147m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年7月17日～10月5日	調査担当者	村木 敬・小林弘卓

#### 1 調査に至る経過

「矢盛遺跡」は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え、国道13号に接続し、秋田市に至る総延長約117kmの主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋と日本海を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

盛岡西バイパスは、盛岡市永井第一地割字高屋と同市上厨川字前潟の間約7.8kmの区間で計画されている。近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に、昭和59年度に事業着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

「矢盛遺跡」については、盛岡南新都市開発整備事業の区域に存する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会及び盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。平成18年度に「矢盛遺跡」の試掘調査を実施しており、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成19年6月15日付で岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「矢盛遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 矢盛遺跡の位置

## 2 遺跡の位置と立地

矢盛遺跡は、岩手県盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南方に約3kmに位置し、零石川右岸に形成された中～低位段丘上に立地する。本遺跡の調査はこれまで数次にわたって行われている。主に縄文時代・古代・中世・近世の遺構が確認されており、広い時期幅をもつ複合遺跡であることが明らかとなっている。今次調査区は遺跡の北端と南側の中央部に位置する。北端部調査区の北方には飯岡才川遺跡があり、東側は道路を挟んで細谷地遺跡と接する。現況は宅地・畑地・道路で、標高123m前後を測る概ね平坦な地形となっている。

## 3 基本土層

調査区が北側と南側の2箇所に分かれ、さらにこれらが道路や排水路によって分断されることから、これらを境に各々に北側よりアルファベットで調査区名を付した。A・B・C区が北側の調査区、D・E区が南側の調査区にあたる。調査地点によって基本土層に大きな相違がみられ、以下のような状況となっている。

### A区

I層 宅地造成時の盛土層。層厚80cm。

II層 10YR1.7/1 黒色土層。層厚20～30cm。

IV層 10YR4/6 褐色土層。遺構検出面。

### B・C区

I層 畑作の耕作土層。層厚20～40cm。

IV層 10YR4/4 褐色土層。遺構検出面。

VI層 2.5Y7/4 浅黄色砂礫層。遺構検出面。層厚不明。

### D・E区

I層 現表土である耕作土層。層厚30～50cm。

II層 10YR1.7/1 黒色土層。層厚10～20cm。

III層 10YR3/3 暗褐色土層。遺構検出面。層厚0～10cm。

IVa層 10YR4/4 褐色土層。遺構検出面。層厚40cm。

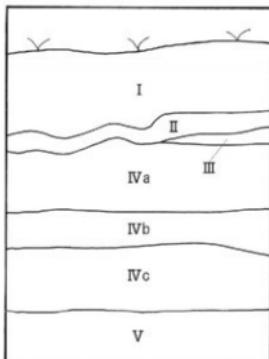
IVb層 10YR4/6 褐色土層。層厚20cm。

IVc層 10YR4/4 褐色砂質土層。層厚40cm。

V層 2.5Y3/3 暗褐色砂層。層厚不明。

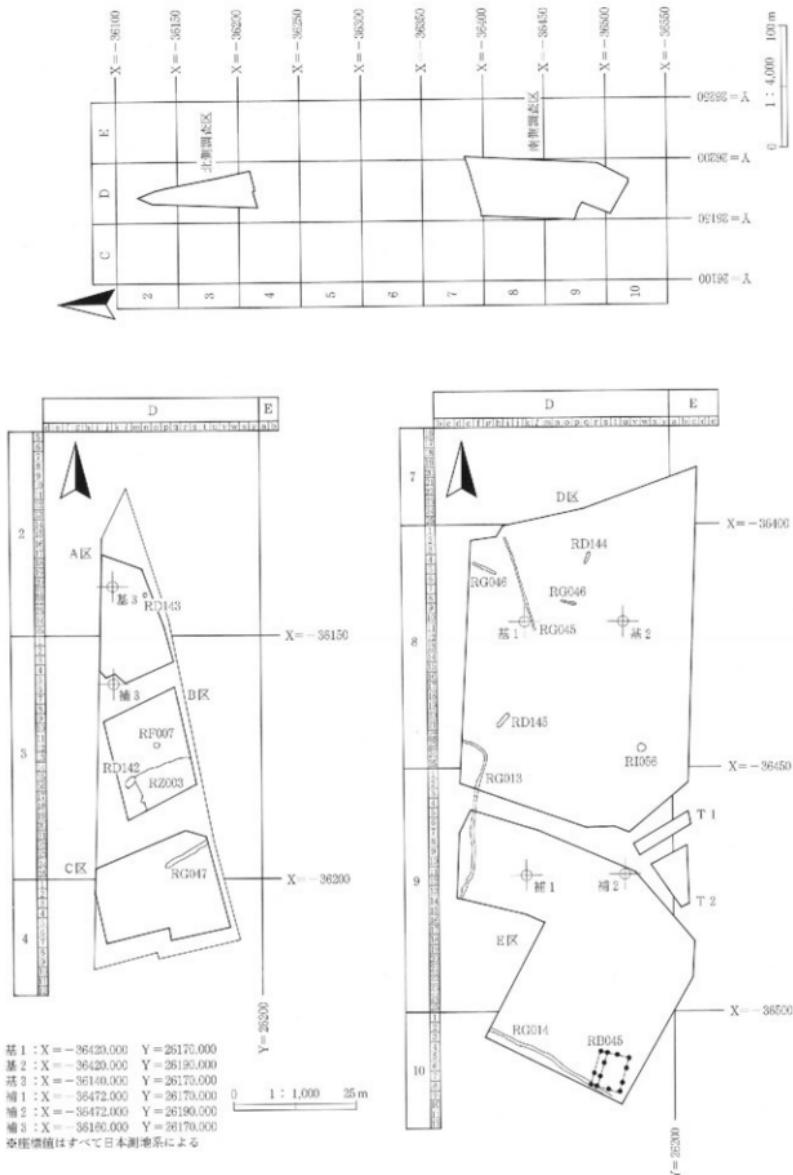


第2図 調査区の位置図



第3図 基本土層柱状図 (D・E区)

遺構検出面はIII層以下のいずれかとなるが、北側と南側調査区によって大きく異なる。北側のA・B・C区ではIII層は確認されず、IV層が基本的な遺構検出面となるが、B区においてはこれも一部分でしか存在せず、大半がVI層の砂礫層となっている。一方、南側のD・E区ではIII層が北西側でみられ、III層及びIV層が遺構検出面となる。IV層は厚く堆積しており、細分したものがIVa～IVc層である。下位層になるほど砂質の度合いが強まるが、基本的にはIVa層が遺構検出面となる。



第4図 グリッド配置図・造構配置図

#### 4 調査の概要

調査区のグリッド設定は、過年度同様、盛岡市教育委員会が定めたものに従った。50×50mを大グリッド、これを2×2mで分割したものを小グリッドとし、平面直角座標第X系（日本測地系）に則すよう、南に向かってアラビア数字、東に向かってアルファベットを付したものである。

＜北側調査区＞調査区内に排水路及び舗装路が延びるため、これを境にA～C区の3区に分けた。本来はこれらも調査範囲に含まれるものだが、排水路は近隣の世帯で使用しており、また明らかに造構検出面より下位に掘り込んで構築されていることから除外することとした。舗装路についても、近隣住民が頻繁に利用することから、これに接する部分の造構の有無に合わせて調査を行うこととしたが、結果、近接する部分では検出されなかったため、これも除外することとした。この区で確認された造構は、土坑2基、炉跡1基、溝跡1条、不明造構1基で、遺物の出土量も極めて少量であった。

＜南側調査区＞調査区中央に農地用運搬路が横断するが、近隣世帯での需要があるためこれを調査から除外し、これを境に北側をD区、南側をE区とした。また、D・E区の境部分の東側には水道管が存在することから、これを避けるためトレンチを2箇所（T1・T2）設定し、造構の有無を確認することとした。造構検出の結果、多くのプランが確認できたものの、その大半が畑作時の植栽痕であることが判明した。結果、確認された造構は、掘立柱建物跡1棟、陥し穴状造構2基、溝跡4条、井戸跡1基で、出土遺物も少量であった。

##### （1）造構

今回の調査で確認された造構は、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、陥し穴状造構2基、炉跡1基、溝跡5条、井戸跡1基、不明造構1基である。

##### RB045掘立柱建物跡（第5図、写真図版3、第1表）

E区、10D5r～9tグリッドに位置し、検出面はIII層及びIVa層面である。本造構はRG014と重複するが、断面状況から本造構の方が古いと判断した。使用した柱穴は13個で、桁行727cm×梁間612cm、面積は約45.7m<sup>2</sup>である。桁行の軸方向はおよそ北北西～南南東にある。柱間寸法は、216～242cm（7.1～8.0尺）が多用され、この他、桁行中央で312cm（10.3尺）、梁間西側で148cm～150cm（4.9尺）が認められる。出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、周辺の過年度の調査結果から、近世に属する可能性が考えられる。なお、周辺において本建物跡を構築する柱穴以外に8個の柱穴が検出されている。併せて図に記載した。

##### RD142土坑（第6図、写真図版3）

B区、3D16lグリッドに位置し、検出面はVI層面である。東側でRZ003と重複するが、本造構の方がこれを切っているため新しい。平面形は長楕円形を呈し、規模は開口部約280×140cm、底部約180×80cmである。長軸方向はおよそ北東～南西方向にある。壁は底面から緩く鈍角に立ち上がり、深さは約30cmを測る。埋土は2層に分けられるが、いずれも自然流入した黒褐色土である。底面には凹凸がみられる。出土遺物はなく、時期・性格等は不明である。

##### RD143土坑（第6図、写真図版3）

A区、2D21nグリッドに位置し、IV層面にて検出した。平面形は円形で、規模は開口部径約80cm、底部径約40cmである。断面形は皿状を呈し、深さは中央部で約20cmを測る。埋土は黒色土の単層である。出土遺物はなく、造構の時期・性格等は不明である。

##### RD144陥し穴状造構（第6図、写真図版3）

D区、8D4qグリッドに位置し、検出面はIII層面である。平面形は溝状を呈し、規模は長軸約280cm、短軸約50cmである。長軸方向は北北西～南南東にある。断面形は底部が丸みを帯びるV字状

をし、深さは約100cmを測る。埋土は7層に細分される自然堆積上で、最下層には黒褐色土が確認できる。出土遺物はないが、形態から縄文時代の構築と推測される。

#### RD145陥し穴状遺構（第6図、写真図版4）

D区、8D20h グリッドに位置し、検出面はIV a 層面である。平面形は溝状を呈し、規模は長軸約370cm、短軸約70cmである。下部においては両端が丸く広がるアレイ状となる。長軸方向はおよそ北東・南西にある。断面形は箱形を呈し、深さは約90cmを測る。埋土は5層に細分される自然堆積土で、最下層には黒褐色土が確認できる。出土遺物はないが、形態から縄文時代の構築と推測される。

#### RF007炉跡（第7図、写真図版4）

B区、3D12o グリッドに位置し、検出面はVI層面である。本遺構は、掘り込みを有し壁面に焼土がみられることから、炉跡と判断した。平面形はやや歪ながら円形を基調としており、規模は開口部径約100cm、底部50×35cmである。礫の立ち上がりは、底面付近では直角的だが開口部付近では外側に開いた形をとる。深さは約65cmを測る。埋土は5層に細分されるが、上位の黒色土を除き、中位以下は黄灰色系の砂に大別できる。壁面中位から上位にかけて、厚さ約5～15cmの焼土が広がる。遺物は近世と思われる土製品（18）が1点出土したのみである。遺構の性格等は不明である。

#### RG013溝跡（第7図、写真図版4）

D・E区、8D23d～9D14d グリッドに位置し、検出面はIII層及びIV a 層面である。走向方位が8D24g グリッド付近で北西～南東から北東～南西へとほぼ直角に折れ曲がる形状をし、確認された部分の全長は約35m、幅約40～60cmである。なお、本遺構の西側と南側は今次調査区外へと延びるが、南側については、昨年度の第9次調査で検出されたものと連結し、同一遺構であることを確認している。深さは10～30cm程度で、底面標高は南側へ向かうほど徐々に低くなる。埋土は地点によって異なるが、黒色土を主体としている。遺物は陶磁器片2点（3・4）が埋土中から出土している。出土遺物より、18～19世紀に構築の可能性が考えられる。

#### RG014溝跡（第7図、写真図版4）

E区、10D2f～9s グリッドに位置し、検出面はIII層及びIV a 層面である。北西側は今次調査区外へと延びるが、昨年度の第9次調査で検出されたものと連結する同一遺構である。南東端は畑作時の削平により遺存しない。また、南東部においてRB045と重複関係がみられ、断面状況から本遺構の方が新しいと判断される。今次調査で検出した部分は、全長約28m×幅約50～60cmで、幾分蛇行するものの走向方位はおよそ北西～南東にある。深さは約10～15cmで、底面標高は南東に向かって低くなる。埋土は黒色土を主体としている。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

#### RG045溝跡（第8図、写真図版5）

D区、8D2h～11l グリッドに位置し、III層及びIV a 層面で検出した。両端を畑作時の植栽痕により損壊されたため全容は不明だが、長さ約20.3m×幅約30cmの一直線状に延びる部分が確認されている。走向方位はおよそ北北西～南南東方向にある。深さは10cm程で、底面標高は南側に向かうほど低くなる。埋土は地点によって相違がみられ、南側以外では火山灰の堆積が確認できる。これを分析鑑定したところ、十和田a火山灰と十和田中瀬テフラの両者が認められる再堆積層であることが判った。この結果、本遺構の構築時期は十和田a火山灰降下以後と判断されるが、周辺地域における十和田a火山灰の検出が少ないとなどを考慮すると、降下後さほど時間の経っていない時期が推測される。この他、時期が特定できるような出土遺物はなく、詳細については不明である。

#### RG046溝跡（第8図、写真図版5）

D区、8D5e～9p グリッドに位置し、III層及びIV a 層面で検出した。残存状況が悪く、途中で

途切れるため、西側の部分をA、東側をBとして調査を行った。両者を併せた長さは約23m、幅は40～60cmで、北西～南東方向に一直線に走向している。深さは10cmに満たない程度で、底面標高は南東側の方がやや低くなる。埋土は黒色土の単層である。出土遺物はなく、時期・性格等は不明である。

## RG047溝跡（第9図、写真図版5）

C区、3D22s～24p グリッドに位置し、IV層面で検出した。北東側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、調査区内では長さ約10m×幅約90cmの一一直線状に延びる部分が確認されている。走向方位はおよそ北東～南西方向にある。深さは30cm程度で、底面標高は南西端の方が低い。埋土は地点により異なるが、黒褐色土を主体としている。出土遺物はなく、遺構の時期・性格等は不明である。

## RI056井戸跡（第9図、写真図版5・6）

D区、8D24v グリッドに位置し、検出面はIVa層面である。平面形は円形で、規模は開口部径約170cm、底部径約200～230cmである。断面形は下半部が開口部より大きく広がる袋状を呈し、深さは最深部で約150cmを測る。埋土は20層に細分できるが、上位から中位の黒褐～褐色土系と下位の黄褐色系に大別される。層位状況から人為的に埋め戻されたものと判断される。また、上位からは多量の破碎石が出土しており、同時に投棄されたものと思われる。底面はグライ化、一部鉄化が認められ、現状でも僅かであるが湧水している。出土遺物がないため、詳細な時期については不明であるが、過年度の周辺調査の結果から中世～近世期のものと推測される。

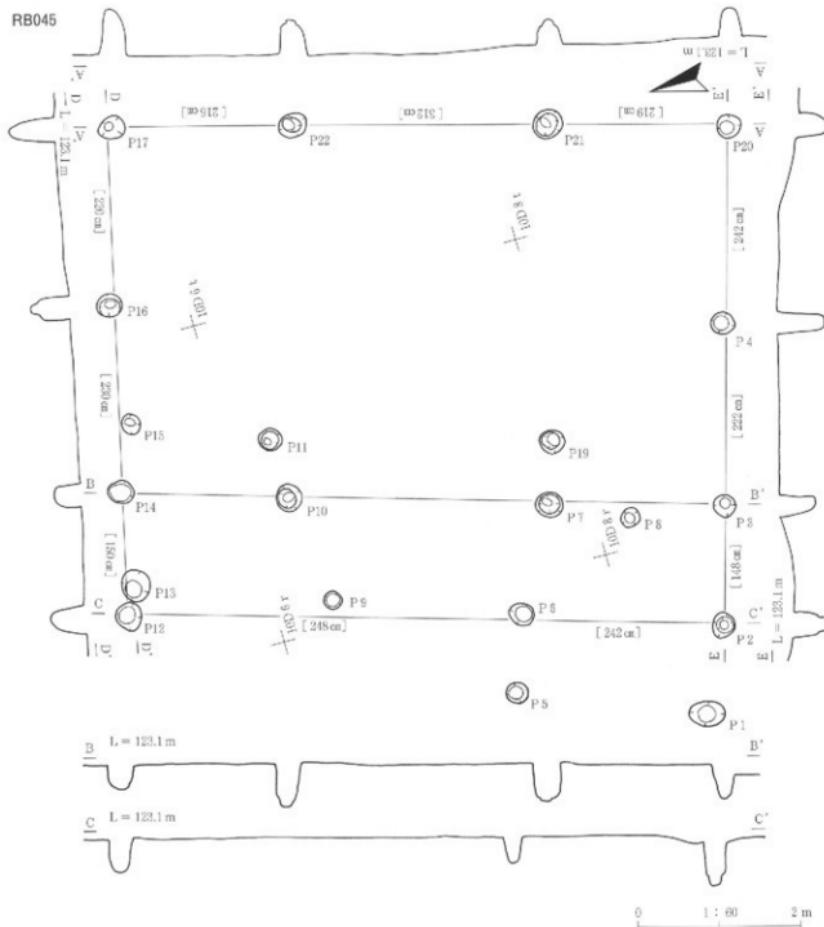
## RZ003不明遺構（第4・9図、写真図版6）

B区、3D15l～17q グリッドに位置し、検出面はVI層面である。北西側でRD142と重複するが、これに切られているため、本遺構の方が古いと判断した。東・南側が舗装路に差し掛かるため詳細は不明だが、確認できる部分では約11×7mの長方形を呈する。壁の立ち上がりは直角に近く、深さは地点によって異なり約20～60cmを測る。埋土は7層に細分されるが、各層位の混入土の状況から人為堆積と思われる。底面は凸が著しく、やや大径の礫がみられる砂礫層である。遺物は、埋土中より陶磁器片4点（5～8）が出土している。このうち3点が18世紀の肥前産である。出土遺物より、本遺構の帰属年代は18世紀の可能性が考えられるが、性格等詳細は不明である。

## （2）遺物

今回の調査で出土した遺物の総点数は19点である。種別ごとの内訳は縄文土器・上師器・十製品・古錢が各1点と陶磁器が15点である。遺構内出土は少なく、陶磁器6点と土製品1点のみである。

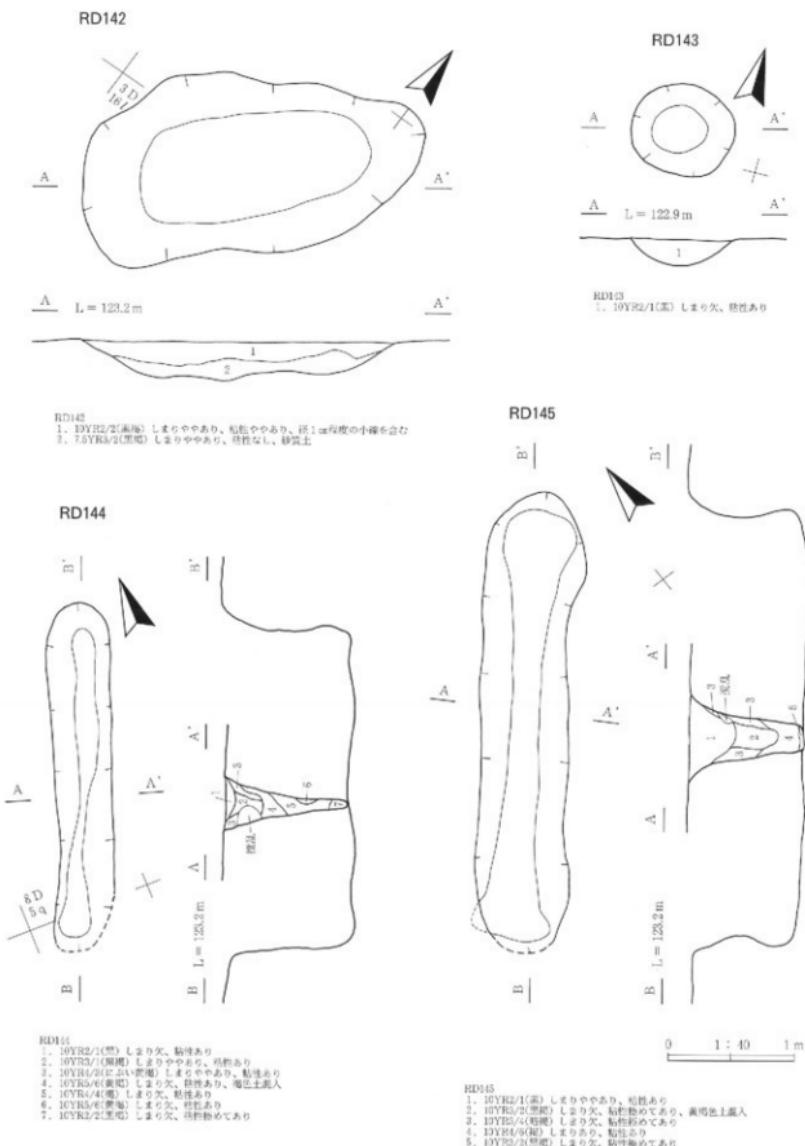
1は大木8b式に比定される縄文土器である。隆沈線が施されており、展開した渦巻文の下位部分と推測される。2は彫形の底部片と思われる上師器である。内外面ともにロクロによるナデ痕がみられる。3～17は陶磁器である。3～8は遺構内出土遺物で、3・4はRG013、5～8はRZ003から出土している。3・9～12は大堀相馬座の碗である。年代不明のものもあるが、18～19世紀の製作と推測される。3はやや緑色掛かった灰釉で、高台には釉が施されていない。9は灰白色の釉調を呈し、頸部に段をもつ。12は外面には鉄釉、内面には灰釉が施されている。4～7・13・14は肥前産のもので、製作年代は18～19世紀内に属すると思われる。4・7・14は皿、5・6・13は碗で、いずれも染付が施されている。15は瀬戸産の碗で、製作年代は19世紀と思われる。小片のため詳細は不明だが、内外面とも染付がみられる。8・17は在地系と思われるものである。8は深緑色の釉調をする鉢で、製作年代は不明である。17は徳利の頸部片で、外面に染付が施されている。19世紀の製作と思われる。16は産地・製作年代とも不明なもので、内外面に染付が施された碗である。18は素焼きの十人形の頭部である。背面には成形時の指頭痕がみられる。近世の製作と思われる。19は寛永通宝である。字体より新寛永と判断される。



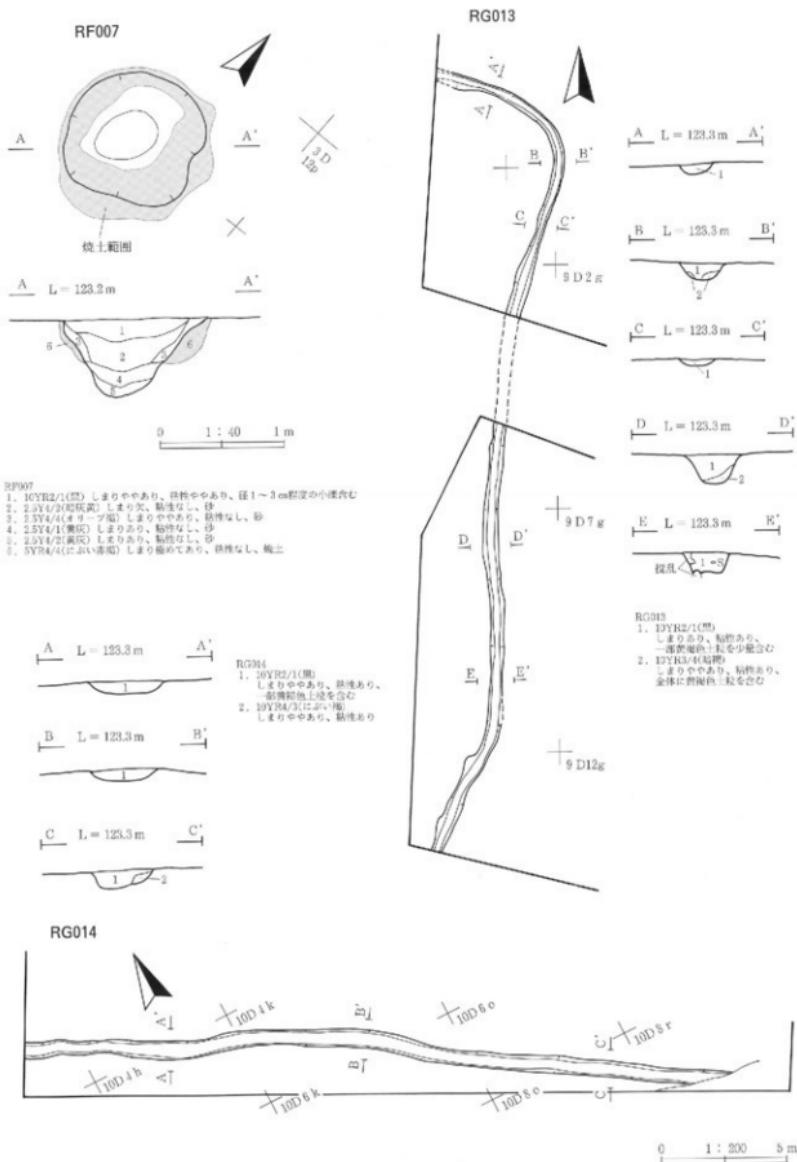
第1表 立穴計測表

点	間口(m)	奥行き(m)	武曲高さ(m)	断面	点	間口(m)	奥行き(m)	武曲高さ(m)	断面
P2	33×25	53	122.46	ICVR2/2(直)	P7	41×35	45	122.42	ICVR2/2(直)
P3	29×25	41	122.56	ICVR2/2(直)	P8	25×25	26	122.56	ICVR2/2(直)
P4	29×25	68	122.45	ICVR2/2(直)	P9	25×27	55	122.79	ICVR2/2(直)
P5	29×25	32	122.66	ICVR2/2(直)	P11	21×20	37	122.66	ICVR2/2(直)
P6	26×30	41	122.55	ICVR2/2(直)	P12	28×28	47	122.57	ICVR2/2(直)
P7	21×30	48	122.55	ICVR2/2(直)	P13	38×34	45	122.58	ICVR2/2(直)
P8	26×30	52	122.43	ICVR2/2(直)	P15	35×22	68	122.62	ICVR2/2(直)
P9	26×31	43	122.66	ICVR2/2(直)	P16	38×38	84	122.67	ICVR2/2(直)
P10	31×26	52	122.72	ICVR2/2(直)					
P11	32×28	47	122.55	ICVR2/2(直)					
P12	24×28	55	122.40	ICVR2/2(直)					
P13	29×29	37	122.41	ICVR2/2(直)					
P14	27×33	21	122.54	ICVR2/2(直)					
P15	26×30	53	122.53	ICVR2/2(直)					

第5図 検出構造(1) RB045

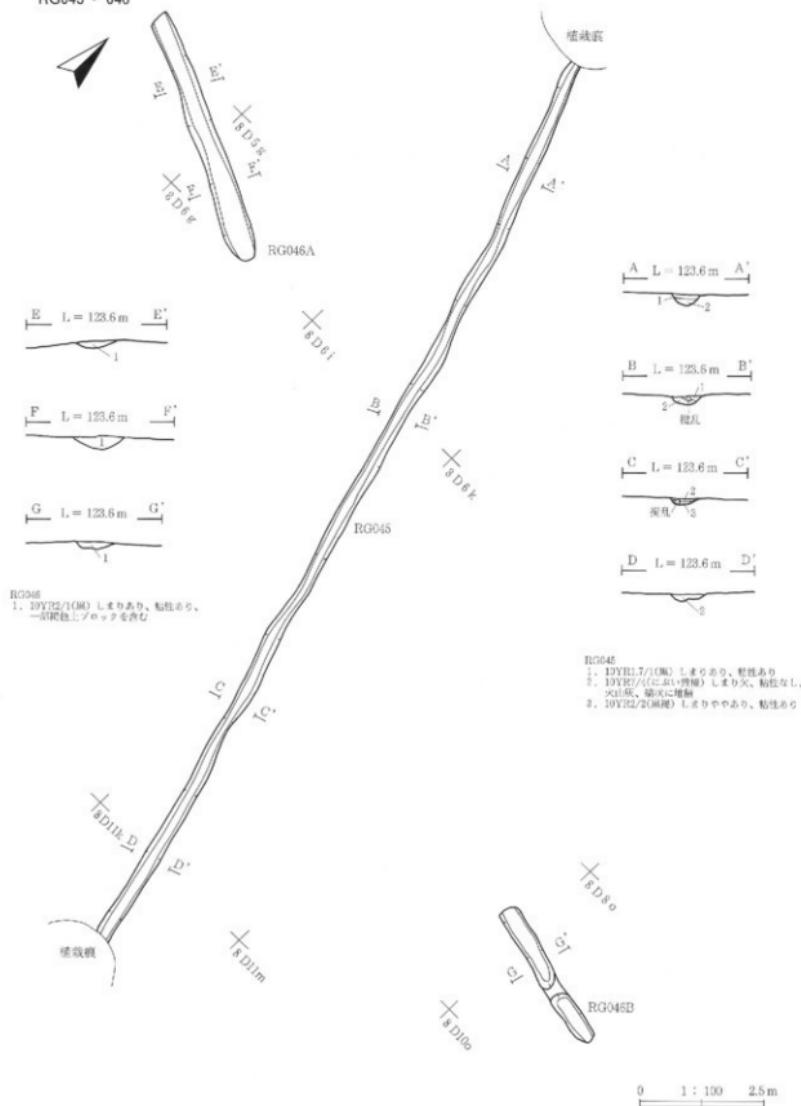


第6図 検出遭撲(2) BD142~145

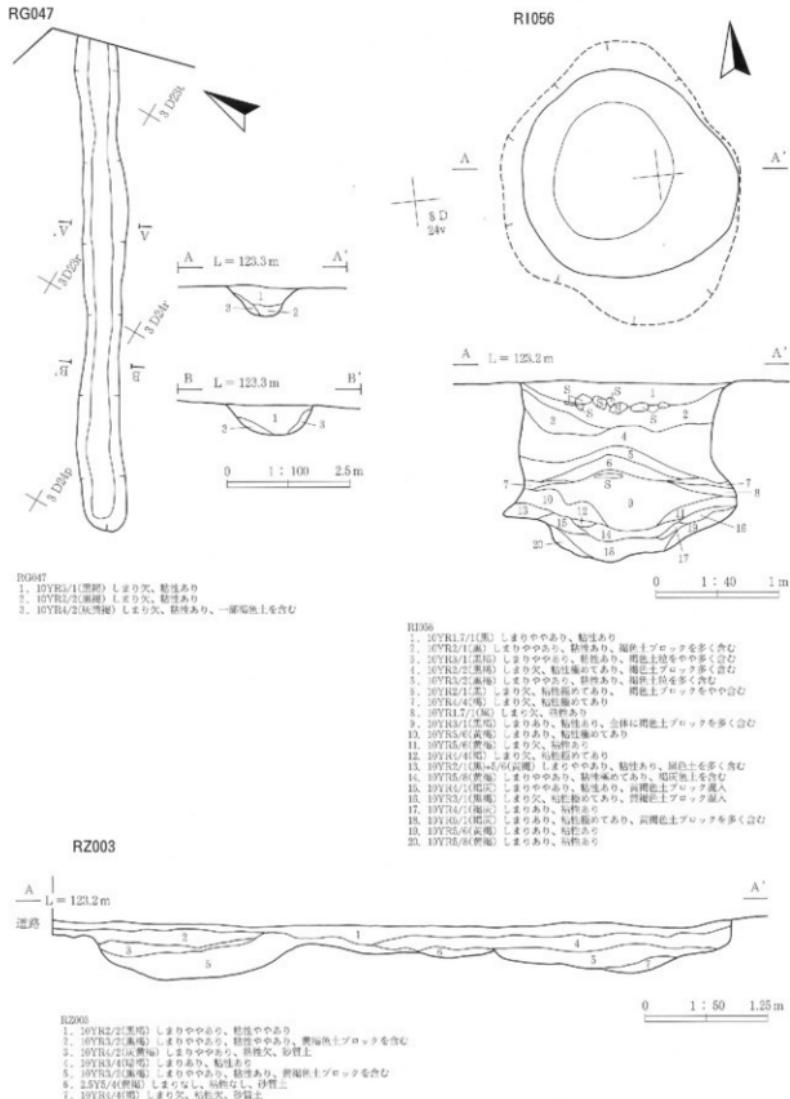


第7図 検出遭難(3) BE007, BG013・014

RG045 • 046



第8図 検出機構(4) RG045・046



第9図 検出遺構 (5) RG047、RI056、RZ003

## 5 まとめ

今次調査における北側調査区は、周辺の過年度の調査結果から、近世の遺構が分布しているものと思われるが、遺構・遺物とも少數であるため、遺跡の縁辺部に相当するものと推察される。

南側調査区については、複数の時代の遺構が存在することが明らかとなった。陥し穴状遺構が検出されたことから、縄文時代には狩猟場として活用されていたと考えられる。その他の遺構は、明確な遺物を作出するものが少ないと詳細は不明だが、過年度の調査結果を考慮すると!J1~近世に属するものと推測される。遺構の密度としては稀薄であるが、掘立柱建物跡や井戸跡等の位置的状況から、分布が東側に延びる可能性が考えられる。

なお、矢盛遺跡第14次調査に関する報告はこれを以て全てとする。

第2表 遺物観察表  
縄文土器觀察表

No	出土地点・層位	断面	底面	文様・特徴	器式
1	D× 表土	鉢形	鉢形	底沈線(底面火下線)/内底:ナゲ	大入子b式

土器器觀察表

No	出土地点・層位	断面	底面	内観	時期
2	T1 表土	直	純い環状	内外面:ロクロナメ/底面:ヘラケズリ	古代~中世?

陶器器觀察表

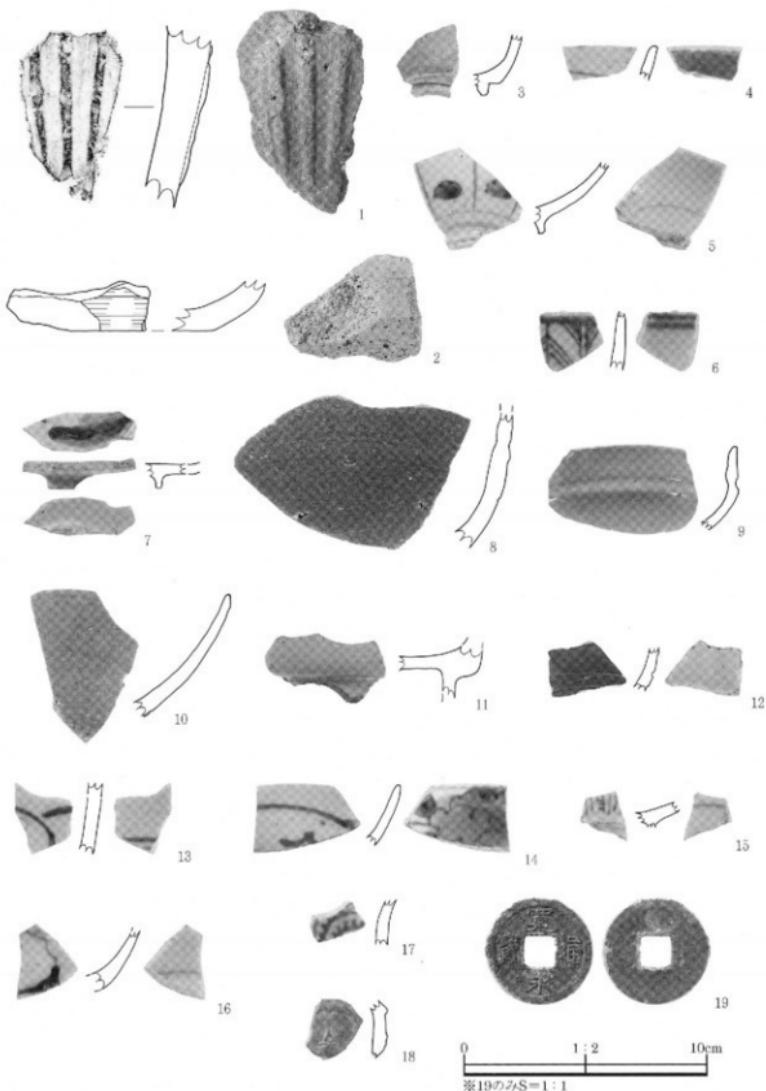
No	出土地点・層位	断面	底面	軸窓色・縁付	底地	寺廟
3	RG013 墳上	直	灰白色	灰オリーブ色	大腹細高	18世紀
4	RG013 墳上	直	灰白色	縁付	肥前	19世紀?
5	RZ005 墳上	直	灰白色	染付	肥前	18世紀
6	RZ005 墳上	直	灰白色	染付	肥前	18世紀
7	RZ009 墳上	直	灰白色	染付	肥前	18世紀
8	RZ008 墳上	直	灰白色	灰オリーブ色	笠地	不明
9	B区 表土	直	灰白色	灰白色	大腹細高	18~19世紀
10	D区 掘出し	直	灰色	灰オリーブ色	大腹細高	18世紀
11	D区 棚丸	直	灰色	灰オリーブ色	大腹細高	不明
12	H区 表土	直	灰白色	外縁:肥後/内面:灰白色	大腹細高	18~19世紀
13	D区 掘出し	直	灰白色	縁付	肥前?	19世紀
14	T1 表土	直	灰白色	染付	肥前	19世紀前半
15	D区 棚丸	直	灰白色	染付	肥前	19世紀?
16	T1 表土	直	灰白色	染付	不明	不明
17	D区 表土	縁付	灰白色	染付	笠地	19世紀

土製品觀察表

No	出土地点・層位	断面	底面	特徴	時期
18	RP007 墳上	土人形	褐色	背面に施墨痕あり	近世?

古錢觀察表

No	出土地点・層位	断面	特征	時期
19	B× 表土	闕水道互	外縁:凸・背丸:7×7/鍛厚:1	新開(3期)



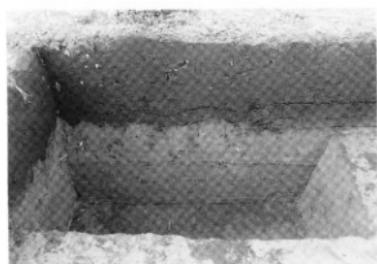
写真図版 1 出土遺物



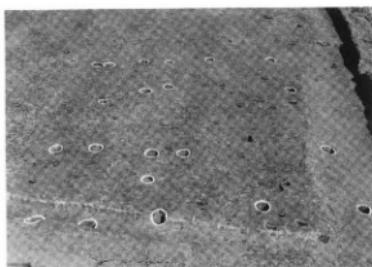
南側調査区 全景（直上から）



調査区 遠景（南から）



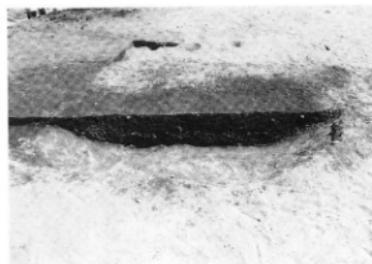
基本土層（T1）



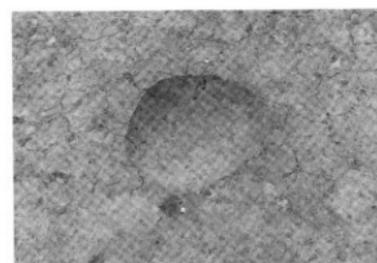
RB045 完整



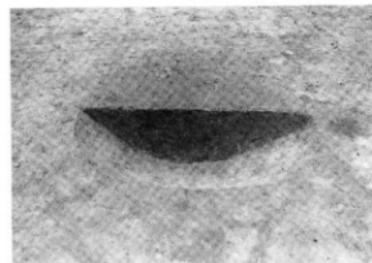
RD142 完整



RD142 断面



RD143 完整



RD143 断面



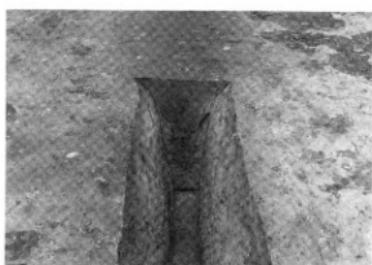
RD144 完整



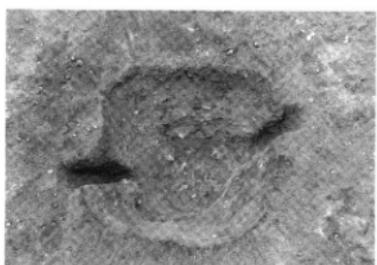
RD144 断面



RD145 完掘



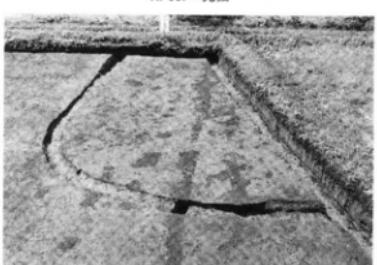
RD145 断面



RF007 完掘



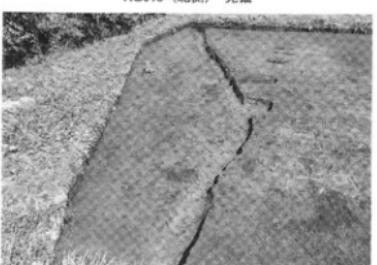
RF007 断面



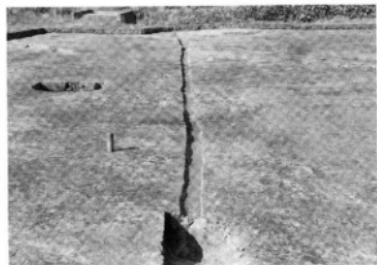
RG013 (北側) 完掘



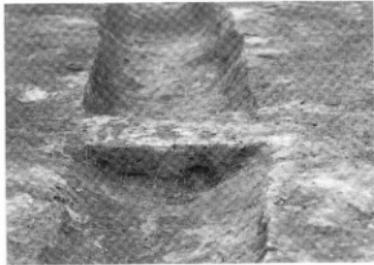
RG013 (南側) 完掘



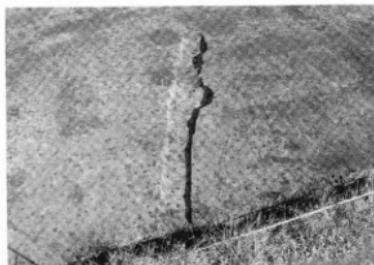
RG014 完掘



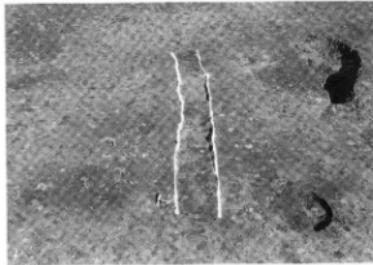
RG045 完掘



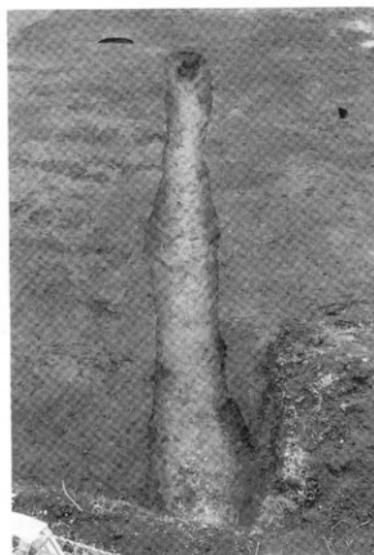
RG045 断面（火山灰検出）



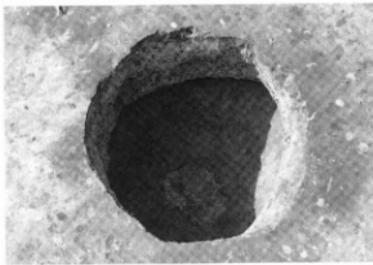
RG046A 完掘



RG046B 完掘



RG047 完掘



RI056 完掘



RI056 断面



RI056 磚群出土状況



RZ003 完掘

写真図版 6 検出遺構 (4)

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	矢盛遺跡 第14次調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	小林弘卓							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積	調査原因	
矢盛遺跡 第14次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田4地割 字畠中18-1ほか	03201	LE26- 0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2007.7.17 ~ 2007.10.5	7,147m <sup>2</sup> 一般国道46号 盛岡西バイパス建設事業 伴う緊急発掘 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
矢盛遺跡 第14次調査	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構	2基	繩文土器 土師器	1点 1点		
			中世	掘立柱建物跡	1棟	陶磁器		15点
				火跡	1基	土人形		1点
				溝	5条	寛永通宝		1点
				散布地	~	土坑		2基
		近世	不明 遺構	1基				
要約	北側調査区は、遺構・遺物とも極めて少數であるため、遺跡の縁辺部に相当するものと思われる。南側調査区においては、陥し穴状遺構が検出されたことから、縄文時代は狩猟場として活用されていたことが推測される。その他の遺構については、過年度の周辺の調査結果から中世～近世に属するものと思われるが、密度や遺物の出土量などからみても、稀薄な区域と判断される。							

幸緯度・経度は世界測地系による数値である。

## 附編 岩手県矢盛遺跡第14次調査における火山灰鑑定

株式会社 古環境研究所

## 1はじめに

東北地方岩手県域には、岩手、秋田駒ヶ岳、十和田、焼石、栗駒、鳴子、鬼首、肘折など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、テフラの可能性がある上層が検出された盛岡市矢盛遺跡においても、発掘調査担当者により採取されたRG045埋土試料を対象に、テフラ検出分析と火山ガラス比分析を実施して、含まれるテフラ粒子の起源について調べた。

## 2 テフラ検出分析

## (1) 分析方法

試料に含まれるテフラ粒子の特徴を定性的に知るためにテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

①試料15gを秤量。②超音波洗浄により泥分を除去。③80°Cで恒温乾燥。④实体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴や量を観察。

## (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料には火山ガラスが少量含まれている。重鉱物としては、量は少ないものの、斜方輝石や単斜輝石が認められる。ほかに高温型石英も含まれている。

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
矢盛遺跡	RG045埋土	-	-	-	+	pm>bw	透明,白	(opx,cpx)

+++:とくに多い。++:多い。+:中程度。+:少ない。-:認められない。bw:バブル型。pm:軽石型。opx:斜方輝石。cpx:単斜輝石。( )は量が少ないと示す。

## 3 火山ガラス比分析

## (1) 分析方法

- ①テフラ検出分析済み試料について、分析筛により1/4~1/8mmと1/8~1/16mmの粒子を筛別。
- ②1/4~1/8mmの粒子について、偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。合わせて重鉱物の比率についても調べる。

## (2) 分析結果

火山ガラス比の分析結果を表2に示した。試料には、火山ガラスが少量(2.8%)含まれている。含まれる火山ガラスは、比率が高い順に分厚い中間型ガラス(1.6%)、纖維束状に充満した軽石型ガラス(0.8%)、平板状のバブル型ガラス(0.4%)である。また、含まれる重鉱物の比率は2.4%で、非常に少ない。

表2 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	重鉱物	その他	合計
矢盛遺跡	RG045埋土	1	0	0	4	0	2	6	237	250

数字は粒子数。bw:バブル型。md:中間型。pm:軽石型。cl:透明。pb:淡褐色。br:褐色。sp:スポンジ状。fb:纖維束状。

#### 4 屈折率測定

##### (1) 測定試料と測定方法

一般的に、土壤や堆積物などに含まれる細粒の火山ガラスの起源を求めるためには、よほど特徴的な粒子が検出されない限り、テフラ検出分析や火山ガラス比分析に合わせ、さらに高度なレベルの分析測定が必要である。そこで火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製 MAIOT）により、火山ガラスの屈折率（n）の測定を実施した。

##### (2) 測定結果

試料に含まれる火山ガラス（29粒子）の屈折率（n）はbimodalで、1.499–1.504（26粒子）と1.514–1.515（3粒子）の値が得られた。

#### 5 考察

今回は現地における十層の観察ができないために、試料の詳細については不明な点が多いが、試料を観察する限りでは、全体としては軟らかい腐植質の暗灰褐色上で、黄灰色砂質火山灰を多く含むように入れる。分析でも、十和田系、焼石系、さらに鳴子系などの更新世テフラに含まれる角閃石が認められないことから、完新世の土壤あるいは堆積物から採取されているように思われる。また、火山ガラスの比率も高くなく、それでいて重鉱物も多くないことから、テフラの一次堆積層の可能性は高くないうようである。

試料に含まれる屈折率（n）が1.499–1.504の火山ガラスについては、その値から、A.D.915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰（To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981など）に由来すると思われる。一方、屈折率（n）が1.514–1.515の火山ガラスについては、約5,500年前<sup>1)</sup>に十和田火山から噴出した十和田中振テフラ（To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川, 1983, 福田, 1986, 町田・新井, 1992）に由来すると考えられる。

テフラの純度については試料の採取のしかたにもよるが、今回の分析結果からは、試料中にTo-aとTo-Cuに由来する火山ガラスが混在している可能性が高い。その比率から、試料中に含まれている黄灰色火山灰についてはTo-aの可能性がより高いように思われる。火山灰編年学においては、テフラの一次堆積層の利用が基本であり、現地での層相観察が不可欠である。分析者による現地での十層観察や試料採取が期待される。

#### 6まとめ

盛岡市矢盛遺跡において発掘調査担当者により採取された試料を対象として、テフラ検出分析と火山ガラス比分析などが実施された。その結果、試料には十和田a火山灰（To-a, A.D. 915年）と十和田中振テフラ（To-Cu, 約5,500年前<sup>1)</sup>）の2層の指標テフラに由来する火山ガラスが混在している可能性が高いことが明らかになった。

\* 1：放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代。腐芽校正年代は、約6,000年前（町田・新井, 2003）。

#### <文献>

- 福田友之（1986）考古学からみた「中興経石」の下年代。弘前大学考古学研究, 3, p.4–15.
- 早川山紀夫（1983）十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代。火山、第2集, 28, p.263–273.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス、東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562–569.
- 人池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第四紀研究, 11, p.232–233.
- 人池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀 研究, 5, p.29–35.

## （4）あまたさ 雨滝遺跡

所 在 地 二戸市金田一字雨滝40-1ほか  
委 託 者 岩手県二戸地方振興局土木部  
事 業 名 一般県道上斗米金田一線豊年橋工区  
緊急地方道路整備事業  
発掘調査期間 平成19年5月15日～7月13日

遺跡コード・略号 IE79-1126・AT-07  
調査対象面積 4,746m<sup>2</sup>  
調査終了面積 4,746m<sup>2</sup>  
調査担当者 北田 熟・川又 晋

### 1 調査に至る経過

雨滝遺跡は、「一般県道上斗米金田一線緊急地方道路整備事業」工事に伴い、事業計画区内に存することから発掘調査を行うことになったものである。

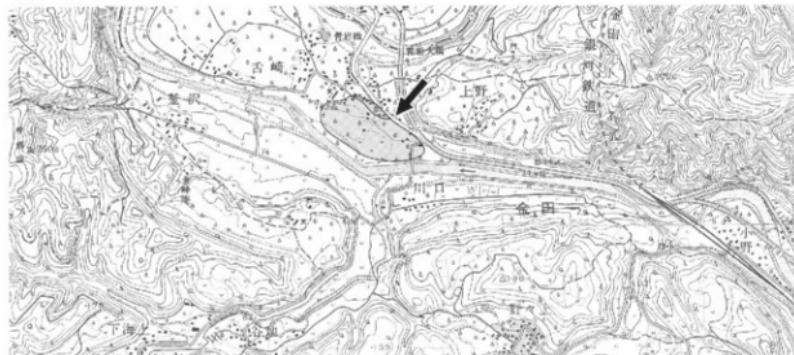
一般県道上斗米金田一線は二戸市北西部に位置し、二戸市北部の横軸をなす道路であり、その機能としてはバス路線や農作物の運搬路線となっており、地域を支える生活路線となっている。

事業対象区間である「豊年橋工区」においては、当該路線の終点側（東側）に位置しており、幅員が狭く車両のすれ違いが困難な昭和38年架設の橋があるほか、曲線半径30m以下の見通しの悪いカーブを多数抱えた隘路区間となっている。また、過去に台風の出水により現豊年橋が全面通行止めとなり、地域の生活に多人な影響を及ぼした経緯がある。

ということから、地域の住民が安全・安心に暮らせる地域の実現を目指して平成12年度に「地方特定道路整備事業」により着手したものであるが、平成16年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択になり早期完成を目指すものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成18年9月21日付け二地土第319号により岩手県教育委員会に対し試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた県教育委員会では、平成18年10月5日に試掘調査を実施し、工事に着手するには雨滝遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年10月17日付け教生第973号により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は県教育委員会と協議し、平成19年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。  
（二戸地方振興局土木部）



第1図 遺跡の位置

1 : 25,000 二戸・陸奥福岡



第2図 周辺の遺跡と地形

## 2 遺跡の位置と立地

雨滲遺跡は、IGR金田一温泉駅の北西3.3kmに位置し、馬瀬川によって形成された河成段丘上に立地している。調査区の標高は62.5~70m、現況は宅地・畑地・果樹園である。

## 3 遺跡の基本層序

調査区内の基本層序は下記の通りである。

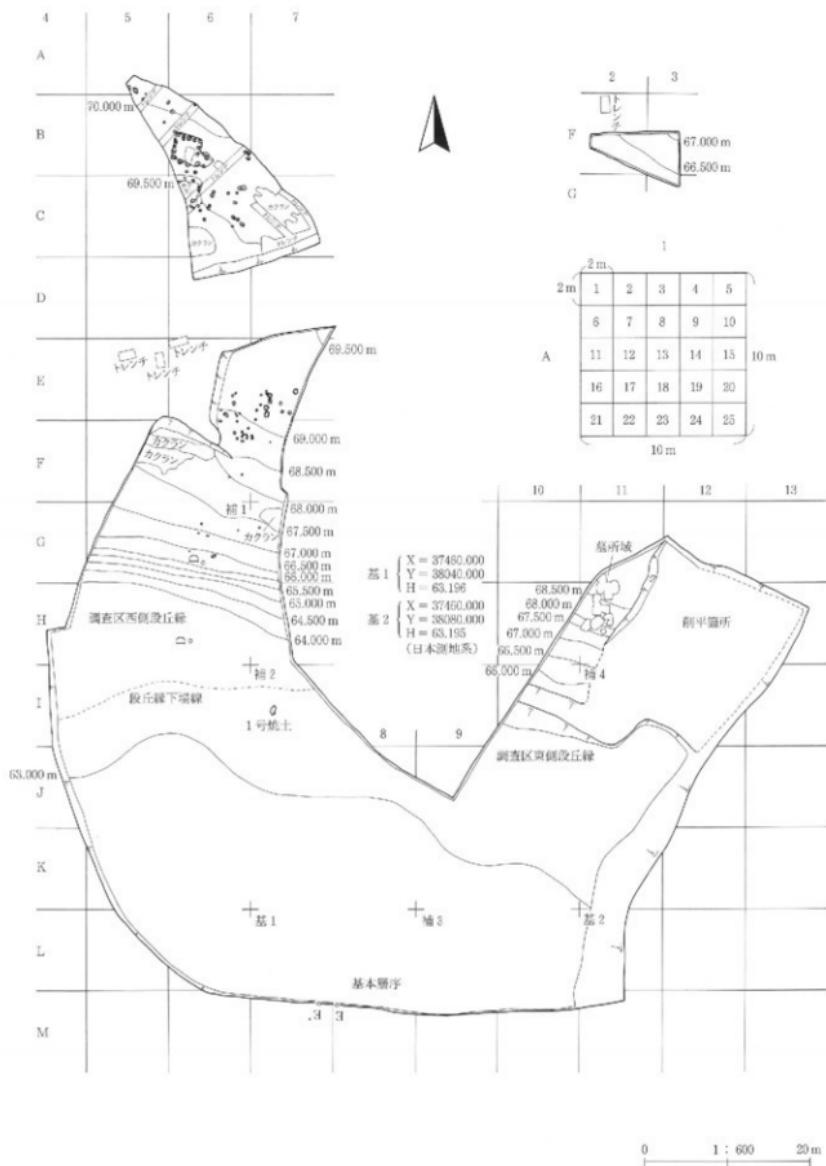
基本層序はI~V層。I層は現耕作土・表土層、II層To-bテフラを含む黒褐色土（縄文晩期遺物包含層）、III層To-Cuテフラを含む黒褐色土（上位に遺物包含・下位は無遺物）、IV層To-Cuテフラ純層、V層黄褐色粘土質土（上面が最終遺構検出面）。

## 4 過去の調査

本遺跡は明治大学により、1953・1958・1963年の計3回調査が行われている。遺構についての詳細は不明だが、第2回調査で円窓群が見つかっている。遺物包含層は厚さ2mに及び、上層から縄文時代晩期前葉の大洞C式相当を含む層、晩期初頭の大洞B・BC式相当を混在する層、後期末葉の新地式相当を含む層の計3枚の包含層が確認され、土器・石器のほかに上偶や岩版などの土・石製品、骨製品など多量の遺物が出土した。この大洞B・BC式相当が混在するという層位的な事実から、いわゆる「雨滲式土器」が提唱されるに至った。

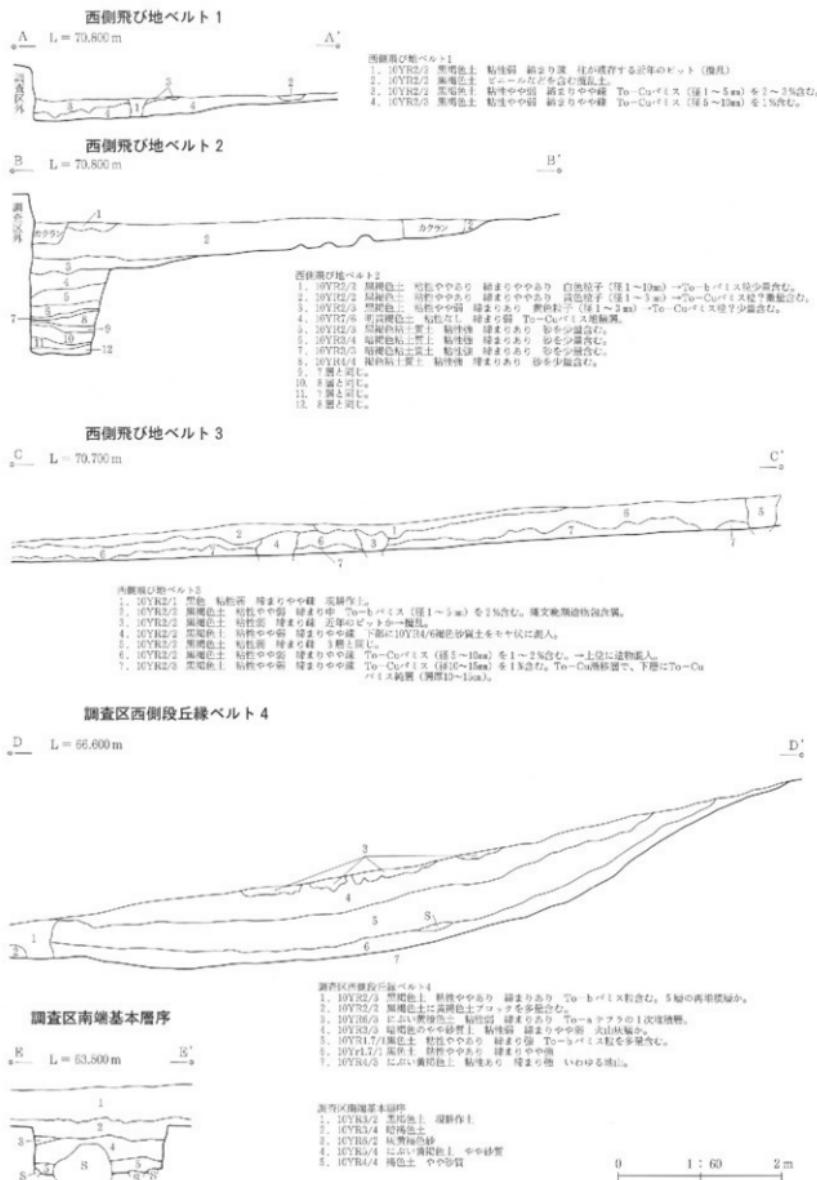
## 5 調査の経過と概要

今回の調査区は明治大学による過去の調査地点の南東側にあたり、河成段丘面では1~3段低い地形面に立地する。



第3図 遺構配置図（全体）

#### (4) 雨滻跡



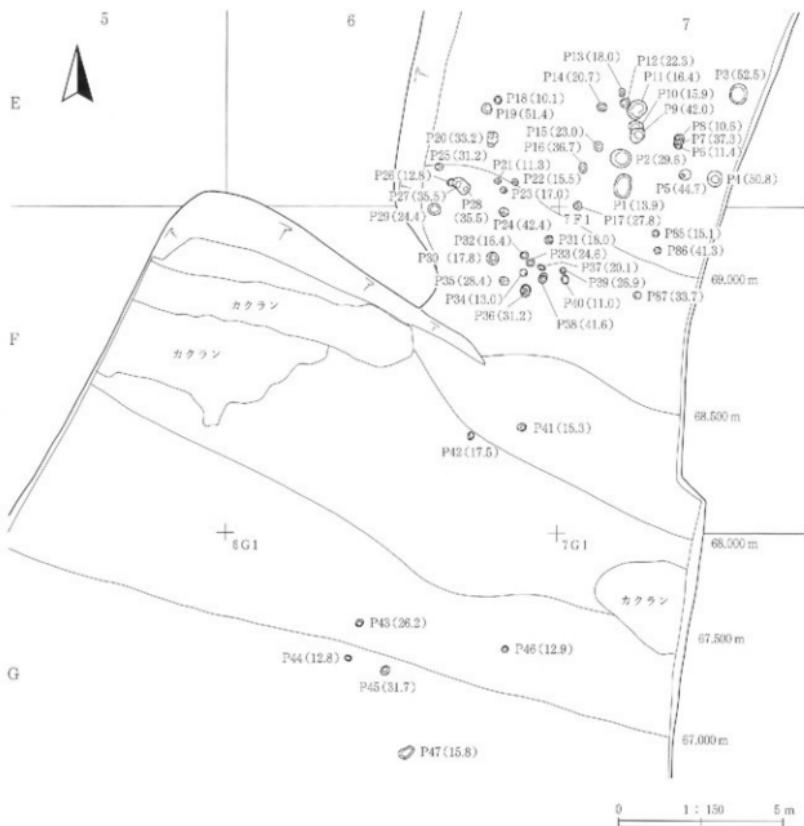
第4図 基本層序・遺物包含層断面



第5図 遺構配置図（調査区西側飛び地）

最も標高の低い馬淵川沿いの5~11・K~M区は表土(0.5~1m)の下にV層黄褐色粘土質土が部分的に見られたが、大部分は砂礫質であり1m大の巨礫も多数確認された。さらに下層に至ると、砂・隙層が続き基盤である岩盤層となることから、元来は河川岸・河床であったと思われる。このため、遺構はほとんど確認されず、斜面上位から流入した遺物が散逸的に出土するのみであった。

中段面は最も近年の擾乱が著しく、表土が20cm程度と薄いことから影響を受けやすかったと思われる。また、畑地などの造成による削平も成されていると見られ、遺構・遺物ともに確認されなかった。中段と下段の地形変換点である段丘線にはII層を基本とする堆積層が確認され、若干の遺物を含む。上位には再堆積と思われるTo-aテフラ層も見受けられた。



第6図 遺構配置図（調査区西側段丘線）

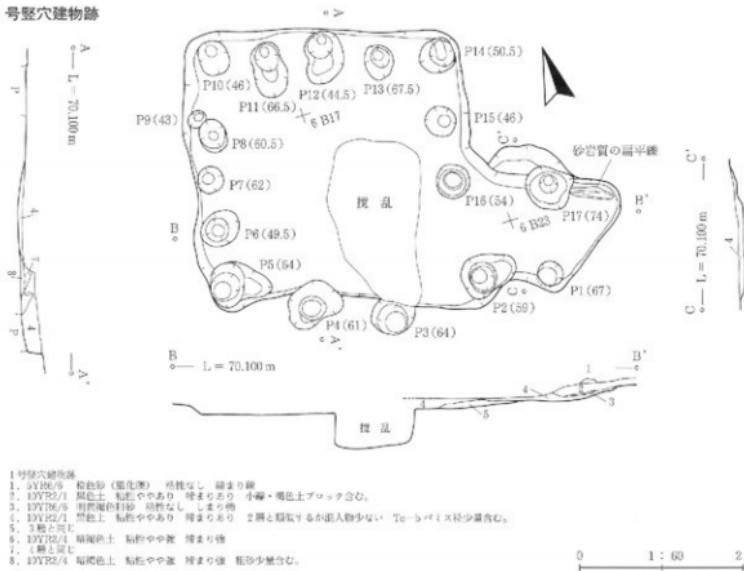
遺構・遺物が最も残存しているのは上段の調査区で、中でも過去の調査地点に近い5～7・B～C区（西側飛び地）ではII層を中心とする遺物包含層が形成されていた（約300m<sup>2</sup>・層厚10cm）。また、調査区東側の11H区では調査前に移設が完了していると思われた近世～近現代の墓坑が約15基残っており、調査中に委託者立ち会いのもと業者による再度の移設を行った。

### （1）遺構

今回の調査で見つかった遺構は、縄文時代の遺物包含層1カ所（約300m<sup>2</sup>・層厚10cm）、中世の竪穴建物跡1棟、時期不明の焼土1基、ピット87個である。

（遺物包含層）今回の調査区で最も標高の高い5～7・B～C区（西側飛び地）に形成されている。この区域は、住宅を1軒挟んで明治大学調査地点に接しておらず、段丘面では1段低い地点である。遺物は基本層序II層～III層上位（上面）まで包含されており、これより下層からは出土しなかった。

## 1号堅穴建物跡



+ 7112からEに1m

## 1号出土

- 1号出土
1. SYTR5/8 明赤褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  2. SYTR5/6 明赤褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  3. SYTR5/7 1層のブロックを少量含む。或れ込みか。
  4. YTR2/2 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  5. YTR2/3 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  6. YTR2/4 明赤褐色 地下部 粘性弱 糙まり弱を粘土に20%含む。
- P1
1. YTR2/2 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  2. YTR2/3 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  3. YTR4/4 黑褐色 地下部 粘性弱 糙まり弱を粘土に20%含む。
- P2
1. YTR2/2 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  2. YTR2/3 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  3. YTR4/4 黑褐色 地下部 粘性弱 糙まり弱を粘土に20%含む。
- P3
1. YTR2/2 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  2. YTR2/3 黑褐色土 粘性やや弱 糙まりやや弱
  3. YTR4/4 黑褐色 地下部 粘性弱 糙まり弱を粘土に20%含む。

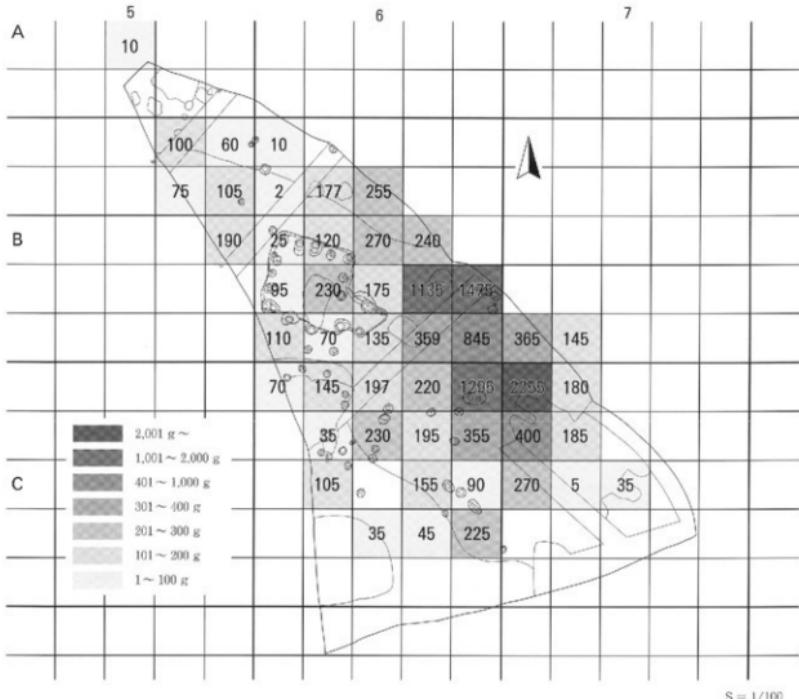
0 1:20 50cm

第7図 検出遺構

層厚は平均10~15cm、範囲は約300m<sup>2</sup>である。

第8図に遺物包含層が形成されていた5~7・A~C区(西側飛び地)における出土器重量分布図を示した。大グリッド10×10mの中に小グリッド2×2mが25分割している。この包含層からの土器出土総量は1,367点(13.5kg)で、最も多いのは7C1グリッド付近で2,255g、次いで6B20(1,475g)や6C5(1,295g)、6B19(1,135g)など調査区の中でも斜面上位に集中している。分布は標高が低くなるほど散逸する傾向にある。この他では、10J斜面下位~11J斜面上位の段丘縁のⅡ層起源土から2,165g、また5G・H、6G・H・I、7H・I、8I・J調査区西側段丘縁から4,029g出土している。

〈堅穴建物跡〉調査区西側飛び地6B17付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形はほぼ正方形を呈し、東壁に東側へ方形に張り出し部を持つ。規模は、北壁3.2m、東壁3.2m、南壁3.3m、西壁3.3mで、張り出し部は東壁の南寄りにあり、1.5×1.4mのほぼ方形であるが先が切り出し状となっている。掘り込みは主体部よりも浅い。張り出し部の北壁際に直立する砂岩質の扁平礫が出土した。51×33×7cmで赤みを帯びており、受熱しているものと思われた。用途は不明だが、遺構に伴うものと思われる。主軸方向はN-72°-Wである。壁面は外傾しながら急斜度に立ち上がる。壁高は北壁2cm、東壁5cm、南壁18cm、西壁12cmで、貼り床は施されていない。床面は大部分がIV層の露出した状



態である。堆積土はII層より上位層である黒色土で構成される。壁際を中心に17個の柱穴を検出した。図の( )内は深さである。平均で57.6cmと深い。流入した縄文土器以外の出土遺物がないため、明確な時期は不確かであるが、形態から中世に帰属する可能性がある。

〈焼上〉調査区西側段丘縁下位の7I-12付近に位置する。II層上面で検出した。範囲は59×27cmの不整形を呈し、4～8cmの深さまで熱を受けて赤変している。検出面から縄文土器片1点を出土しているが、流れ込みも考えられるため縄文時代とは判断できない。

〈ピット〉調査区西側飛び地・上段の5～7・A～G区を中心に87個のピットを検出した。検出面は主にIII層上面（一部IV層上面）である。規模は一様でなく、バラつきがある。図の( )内は深さであるが、深さは平均で30.2cm（最小10.1cm、最大73.8cm）である。何らかの建物などを構成する柱穴と思われるが、狭小な調査区のため不明である。時期は大半が遺物を出土していないため不明だが、近代～近現代のものも多く含まれると思われる。

## (2) 遺物

遺物総量は大コンテナ3箱（50.9kg）である。内訳は、縄文土器が大2.5箱（2,210片・22.3kg）、石器・石製品が大0.5箱（66点・26.8kg）、陶磁器9号袋1袋（104片・1,147.7g）、鉄製品・鉄滓4号袋（21点・613.3g）、銭貨3点（6.1g）である。

〈縄文土器〉出土土器のうち、復元可能な個体や特徴的な口縁などを中心に61個体（121片）を掲載した。器種は、深鉢・鉢・台付鉢・台付浅鉢・浅鉢・皿・壺・注口がある。1～3は後期に比定されるもので、いずれも斜面下位の段丘縁から出土したものである。4～63は晩期初頭～前葉大洞BC～C1式に比定されるもので、深鉢13点・鉢17点・台付鉢8点・浅鉢10点・皿1点・壺7点・注口3点である。大半が小破片であるため、器種認定に捉え間違いがあるかもしれない。

〈石器・石製品〉66点出土し、製品を中心に18点を掲載した。石鎚・石錐・石匙・籠状石器・石核・磨製石斧・礫器・敲石・凹石・砥石の各種石器、石製円盤・硯・石鉢・石臼の各種石製品が出土した。64～78は出土上器に伴うため、晩期初頭～前葉を中心とするもので、79～81は中世～近代と思われる。

〈陶磁器〉104点出土し、2点を掲載した。いずれも瀬戸焼陶器の腰錆碗で、18C中葉以前と思われる。

〈鉄製品・鉄滓〉21点出土した。表土から出土したものが多く、時期は不明である。

〈銭貨〉3点出土した。84・85は寛永通寶、86は樋管の雁首を平らに潰した雁首錢と思われる。

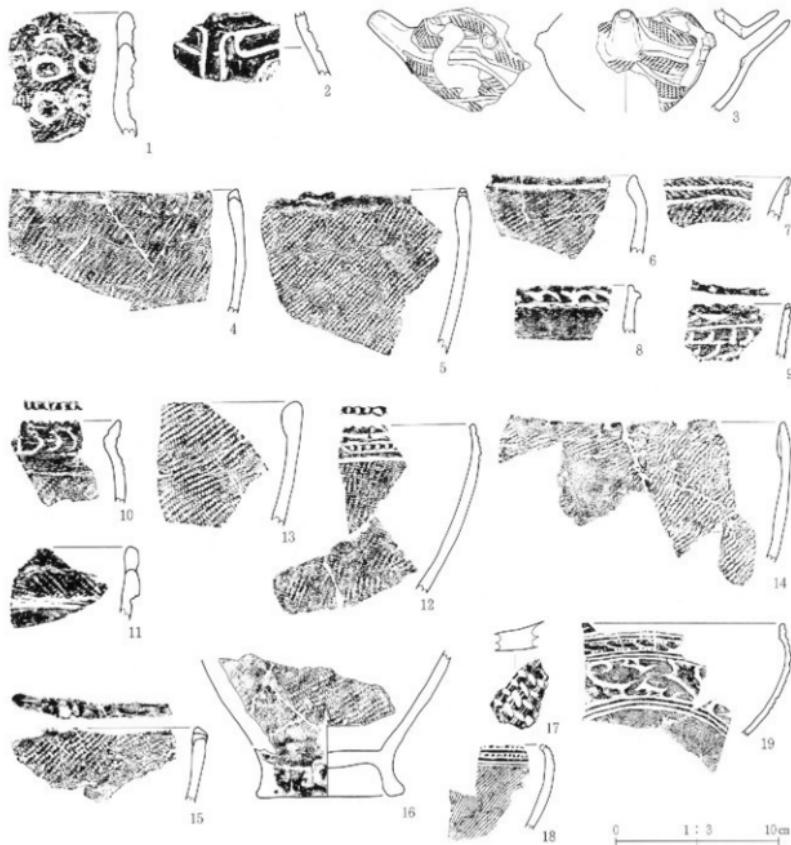
## 6まとめ

今回の調査では、過去3回行われた明治大学による調査のような厚い遺物包含層は検出されなかった。第3回調査ではI層耕作土（層厚10～20cm）、II層黒褐色土（30～40cm）の下に1～4に細分されるIII層黒色～黒褐色土（40～80cm）、1～3に細分されるIV層黒褐色土（20～50cm）など計IX層まで区分されており、III層が主包含層とされている。今回の調査で検出したTo-bテフラを含むII層黒褐色土はこの層位に対応するものと考えられるが（III層-3か）、下位段丘面の包含層端部で層厚が10～15cmと薄く、分布が希薄なため、詳細に細分して取り上げを行うことは出来なかった。よって、出土土器は大洞BC～C1式までが混在するものとなった。

なお、雨滻遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

## <引用・参考文献>

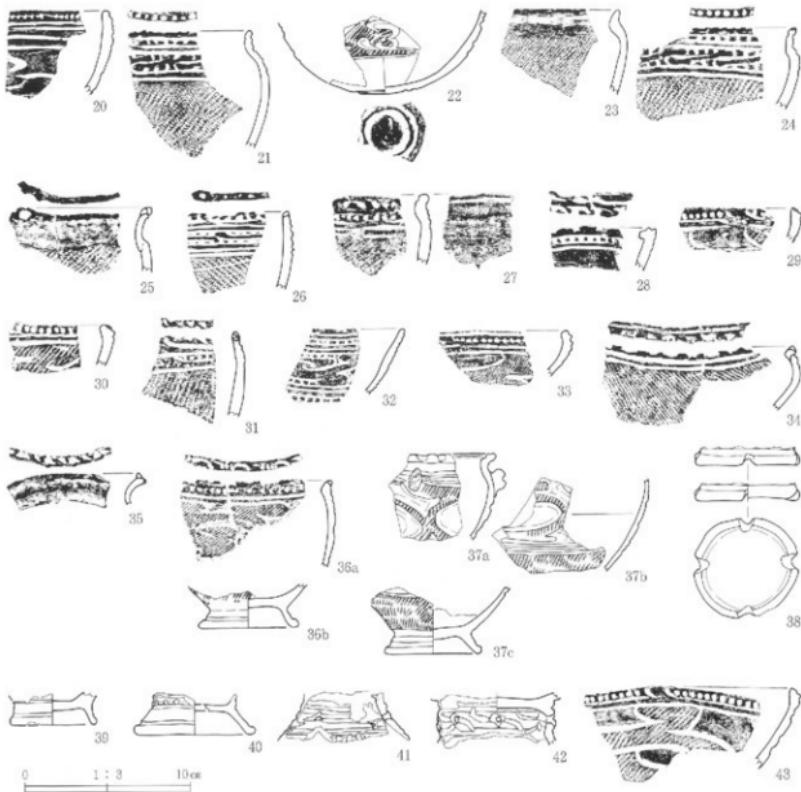
- 芹沢長介 1960 「石器時代の日本」 藤原書館  
 明治大学考古学博物館 1991 「縄文晩期の世界」『明治大学考古学博物館叢書』  
 明治大学博物館叢書 岩手県金沢一村雨滻遺跡第1～3回調査報告



標文土器觀察表

序号	出土地点	项目	特征	断面图	地层	地层位	地层年龄	特征与年代学意义		编考
								时代	地层关系	
1	1区(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	1	深灰色	Ⅲ-1	晚商	Ⅲ-1	Ⅲ-1	Ⅲ-1
2	6区(禹州东周城)	自耕层	上部	1	浅灰	Ⅳ-2	晚商	Ⅳ-2	Ⅳ-2	Ⅳ-2
3	10区(禹州东周城)	自耕层	上部	2	灰白	Ⅴ-1	晚商	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1
4	7C1	自耕层	上部	3	深灰	Ⅵ-1	晚商~早周	Ⅵ-1	Ⅵ-1	Ⅵ-1
5	8C1	自耕层	上部	4	深灰	Ⅶ-1	晚商~早周	Ⅶ-1	Ⅶ-1	Ⅶ-1
6	11区(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	1	深灰	Ⅷ-1	晚商~早周	Ⅷ-1	Ⅷ-1	Ⅷ-1
7	13区(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	1	深灰	Ⅸ-1	晚商~早周	Ⅸ-1	Ⅸ-1	Ⅸ-1
8	14区(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	1	深灰	Ⅹ-1	晚商~早周	Ⅹ-1	Ⅹ-1	Ⅹ-1
9	5B2	自耕层	上部	1	深灰	Ⅺ-1	晚商~早周	Ⅺ-1	Ⅺ-1	Ⅺ-1
10	7D1(东周)	自耕层	上部	1	深灰	Ⅻ-1	晚商~早周	Ⅻ-1	Ⅻ-1	Ⅻ-1
11	7D2(东周)	自耕层	上部	1	深灰	Ⅻ-2	晚商~早周	Ⅻ-2	Ⅻ-2	Ⅻ-2
12	15C1(东周)	自耕层	上部	3	深灰	Ⅼ-1	晚商~早周	Ⅼ-1	Ⅼ-1	Ⅼ-1
13	6B2(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	3	深灰	Ⅽ-1	晚商~早周	Ⅽ-1	Ⅽ-1	Ⅽ-1
14	6C2(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	3	深灰	Ⅾ-1	晚商~早周	Ⅾ-1	Ⅾ-1	Ⅾ-1
15	6C2(禹州西郊东周城)	自耕层	上部	3	深灰	Ⅿ-1	晚商~早周	Ⅿ-1	Ⅿ-1	Ⅿ-1
16	7C1	自耕层	上部	6	灰白	ⅰ-1	晚商~早周	ⅰ-1	ⅰ-1	ⅰ-1
17	7C1(禹州西郊东周城)	自耕层	中下部	6	灰白	ⅱ-1	晚商~早周	ⅱ-1	ⅱ-1	ⅱ-1
18	7C1(禹州西郊东周城)	自耕层	中下部	7	灰白	ⅲ-1	晚商~早周	ⅲ-1	ⅲ-1	ⅲ-1
19	7C1(禹州西郊东周城)	自耕层	中下部	7	灰白	ⅳ-1	晚商~早周	ⅳ-1	ⅳ-1	ⅳ-1

### 第9図 出土遺物（1）

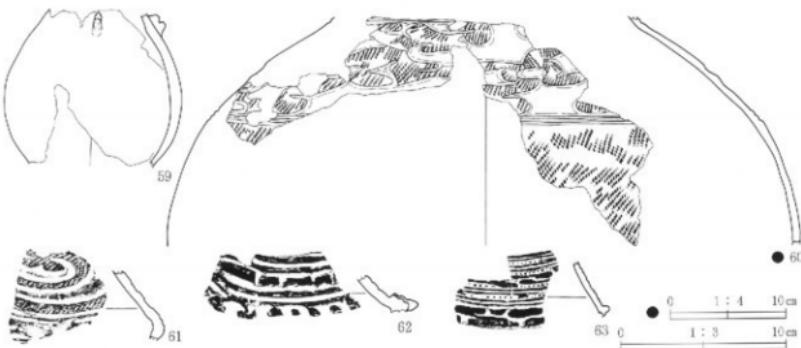


### 縄文土器製作表



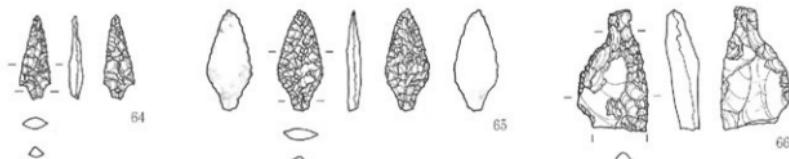
### 繩文土器觀察表

第11図 出土遺物（3）



縄文土器観察表

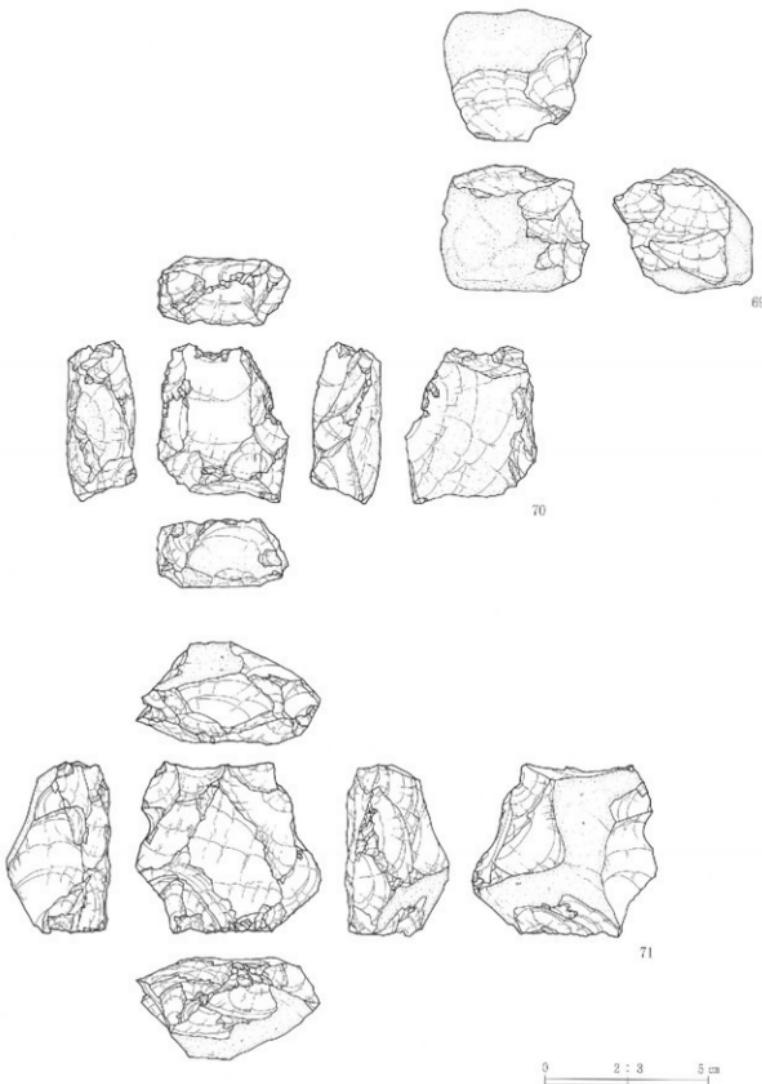
%	出土地點	層位	板厚数	縦横比	断面	既存部位	調整・施文など	備考
59	RC7 雨滴遺跡 (鹿谷区西側底びり)	基盤上位 Ⅱ带	10 2	12	▲	洞	突起・Lガタ	
60	RC1 雨滴(鹿谷区西側底びり)	基盤中位 Ⅲ带	1					
61	RC5 雨滴(鹿谷区西側底びり)	基盤中位 Ⅲ带	2					
62	RC1 雨滴(鹿谷区西側底びり)	基盤下位 Ⅳ带	5					
63	RC5 雨滴(鹿谷区西側底びり)	基盤下位 Ⅳ带	3					
64	71A (鹿谷区西側底びり)	Ⅰ带	1		□口	□口	外削・刃き引い的・施文(LR)	
65	85×トランチ (鹿谷区西側底びり)	Ⅰ带	1		□口	□口	外削・突起	
66	85×トランチ (鹿谷区西側底びり)	Ⅰ带下位	1		□口	□口	外削・執底刃(摩...)引出)	



剥片石器観察表

%	出土地點	層位	面理	石材	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	欠損	自然面	備考
64	雨滴遺跡	Ⅱ带下位	石頭	鶴羽岩	3.05	1.39	0.45	2.6	右斜・	
65	RC1	Ⅱ带下位	石頭	鶴羽岩	3.64	1.34	0.41	3.4	右斜・黒色・	
66	RC5	Ⅱ带下位	石頭	鶴羽岩	2.10	1.02	0.30	刀削(?)	黒色	
67	サブトレ2 (RC2)	Ⅲ带下位	板状石	鶴羽岩	5.78	2.75	1.00	17.7	○	
68	調査以外	基盤	石頭	鶴羽岩	5.08	3.30	1.08	12.1	○	

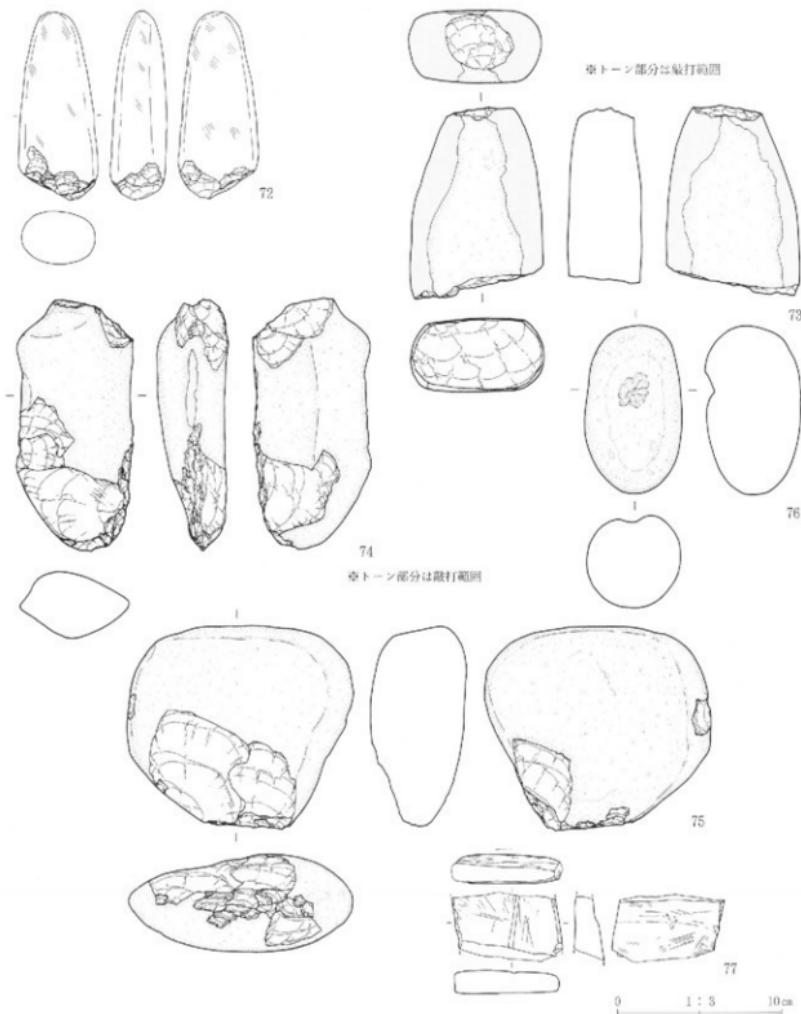
第12図 出土遺物 (4)



剥片石器觀察表

號	出土地點	層位	釋名	石材	計測值				次數	自然面	備考
					長(公分)	寬(公分)	厚(公分)	重量(克)			
69	門6(陝西西安半坡)	Ⅲ層	石塊	巨石	4.16	4.43	3.45	89.4	○		
70	鹿邑區外	表層	石塊	巨石	4.94	3.90	2.03	34.4	○		
71	69區(陝西西安半坡)	Ⅲ層(上)	石塊	巨石	6.14	6.67	3.05	88.7	○		

第13図 出土遺物 (5)



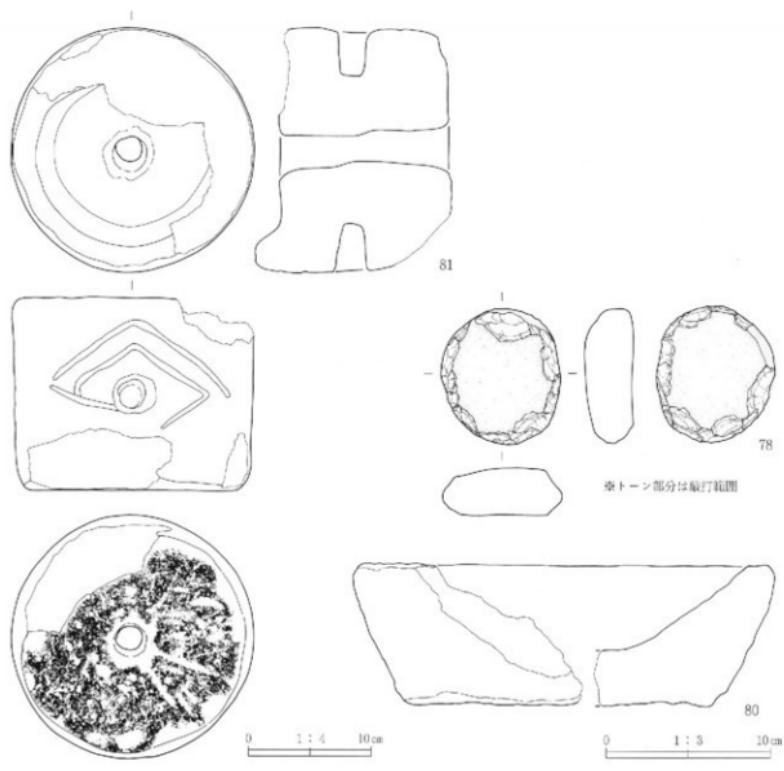
石斧類觀察表

No.	出土地點	調査	遺物	石材	計測値 長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	特徴	欠損	自然面	参考
72	羽田区(西園区高井戸7丁目)	火山灰堆成後、下部剥離土上部	磨製石斧	閃綠岩	11.64 4.76 0.36 293.4				
73	ノゾミケ(6号地)	主層上部側面剥離土下部(1~10cm)	磨製石器	閃綠岩	11.23 6.18 0.49 271.3	側面削形	基盤・刃部	○	
74	005(葛西区高井戸7丁目)	上部上層	磨製石斧(刃部むきか)	頁岩	15.44 6.96 4.16 543.1				

礫石類觀察表

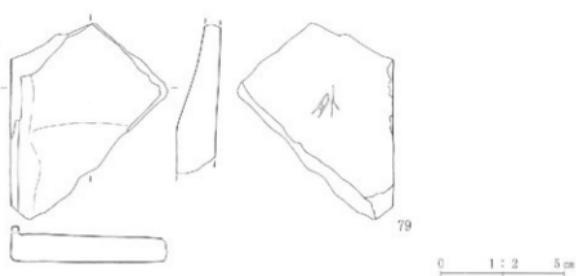
No.	出土地點	調査	遺物	石材	計測値 長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	特徴	欠損
74	005(葛西区高井戸7丁目)	上部上層	磨製石斧(刃部むきか)	頁岩	15.44 6.96 4.16 543.1		
75	葛西区東御台南トレンチ	三層上部剥離土より奥深部上	破片	頁岩	12.13 5.86 0.86 158.1	側面削形	
76	7122	東御台下	石斧	頁岩	19.00 8.00 5.71 557.2	側面削形	刃部
77	72	上層	石斧	閃綠岩	6.92 6.40 1.61 61.4	側面削形	

第14図 出土遺物(6)

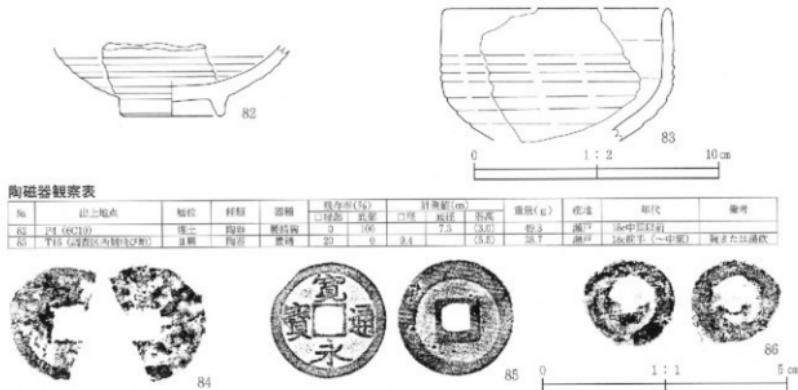


石製品観察表

%	出土場所	層位	器種	石材	直徑(cm)	厚さ(cm)	周長(cm)	重さ(g)	特徴	欠損	自然面	備考
78	8212	上部土位	石打子盤	花崗閃长岩	8.40	1.90	2.90	294.4	全面に敲打痕有り	○		
79	79	上部	盤	砂岩	(0.30)	(0.30)	2.90	7.3		○	裏に斜(?)角	
80	80	表面付近(?)	石棒	安山岩	242.9				端部(?)削り	○		
81	81	(81-1) (81-2)	石打子盤下(?)	安山岩	19.76	19.71	16.94	6000.0		○	三日	



第15図 出土遺物 (7)



陶器観察表

No.	出土場所	種類	材質	直縦	横幅(%)	横幅(%)	計測値(m)	重積(g)	用途	年代	参考
82	24 (6C10)	第二 陶器	陶器	0	100	75	0.38	15.2	罐	晩中世	
83	119 (6C10) (馬頭形埴輪)	第三 陶器	陶器	22	0	8.4	0.35	15.6	罐	晩前半 (～中期)	陶器または酒杯

第16図 出土遺物（8）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさはうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	雨滻遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	北田 黙							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
雨滲遺跡	市町村 雨滲40-1 ほか	03213	IE79 -1126	40度 20分 21秒	141度 16分 39秒	2007.5.15 ~ 2007.7.13	4,746m <sup>2</sup>	一般県道上斗米 金田一線豊年橋 工区緊急地方道路整備事業に係 る緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
雨滲遺跡	集落跡	縄文時代 中世 時期不明	遺物包含層 1カ所 堅穴建物跡 1棟 焼土基・ピット 87個	縄文土器・石器 堅穴建物跡・石器・瓦器・銅貨	晩期前第大洞BC～C1式			
要約		明治大学により1953・1958・1963年の計3回調査が行われ、大洞B・BC式が混在するという層位的な事実から「雨滲式土器」が設定された包含層を主体とする遺跡である。今回の調査では過去の調査地点の1段低い段丘面に形成された小規模な遺物包含層（約300m <sup>2</sup> ・層厚10cm）を検出した。この他に、中世と思われる堅穴建物跡1棟が見つかっている。		※緯度・経度は世界測地系による数値である。				

(4) 雨竈遺跡



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（直上、上が北）

写真図版 1 空撮



調査区西侧飛び地ベルト 1 断面（東から）



調査区西侧飛び地ベルト 2 断面（東から）



調査区西侧飛び地ベルト 3 断面（東から）



調査区西侧段丘縁ベルト 4 断面（北東から）

(4) 雨漏遺跡



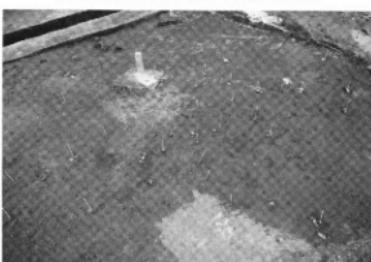
調査区西侧飛び地ベルト 2 深掘断面（東から）



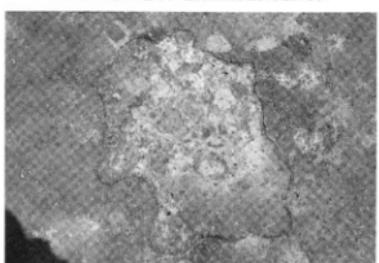
調査区南端基本層序ベルト 4 断面（北から）



6 B + C 区 II 層下位遺物出土状況（北から）



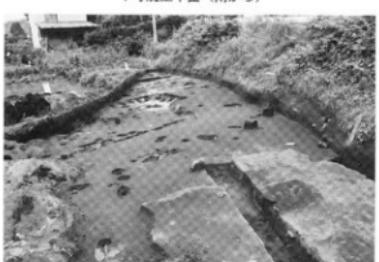
7 C 1 付近 II 層下位遺物出土状況（東から）



1号焼土平面（南から）



1号燒土断面（南から）



調査区西侧飛び地ピット検出状況（東から）



6 + 7 E 区ピット検出状況（南東から）



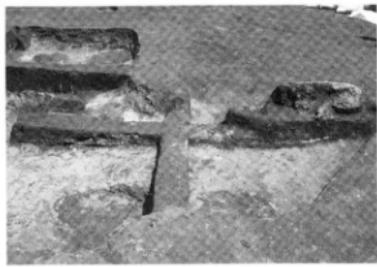
平面（西から）



断面A（東から）

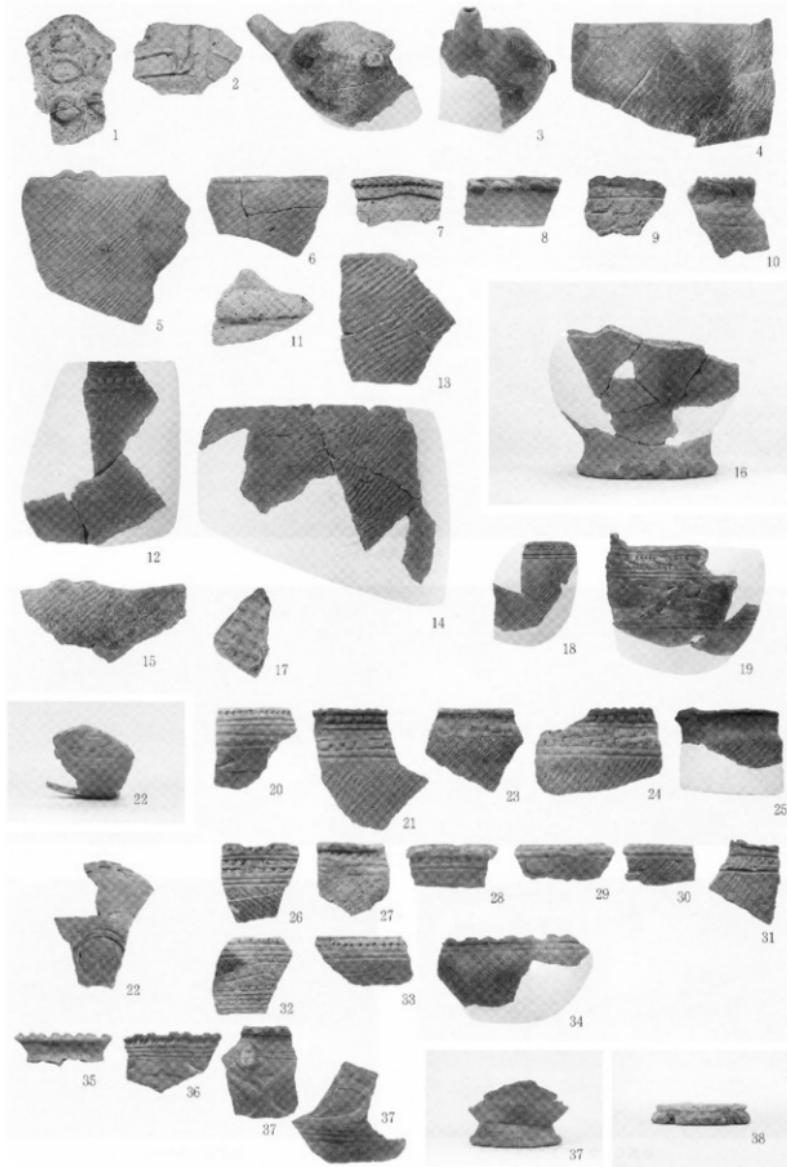


断面C（東から）

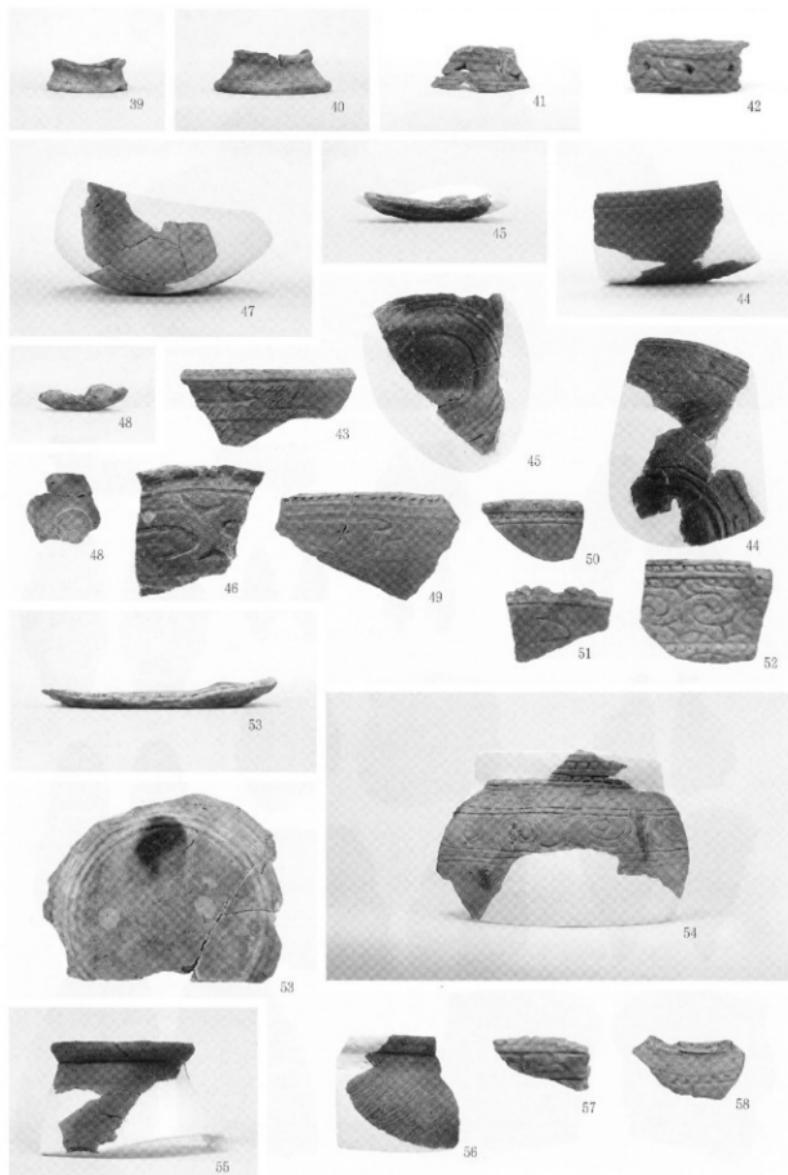


断面B（南から）

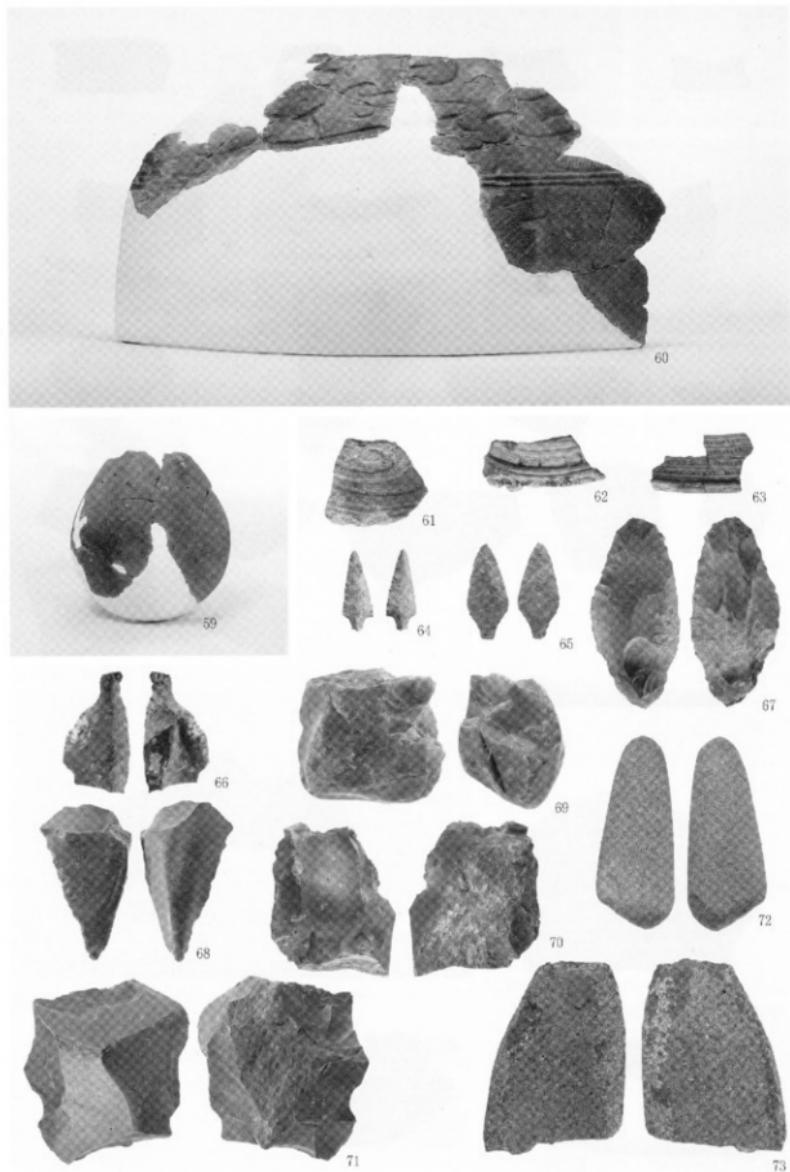
(4) 雨滴遺跡



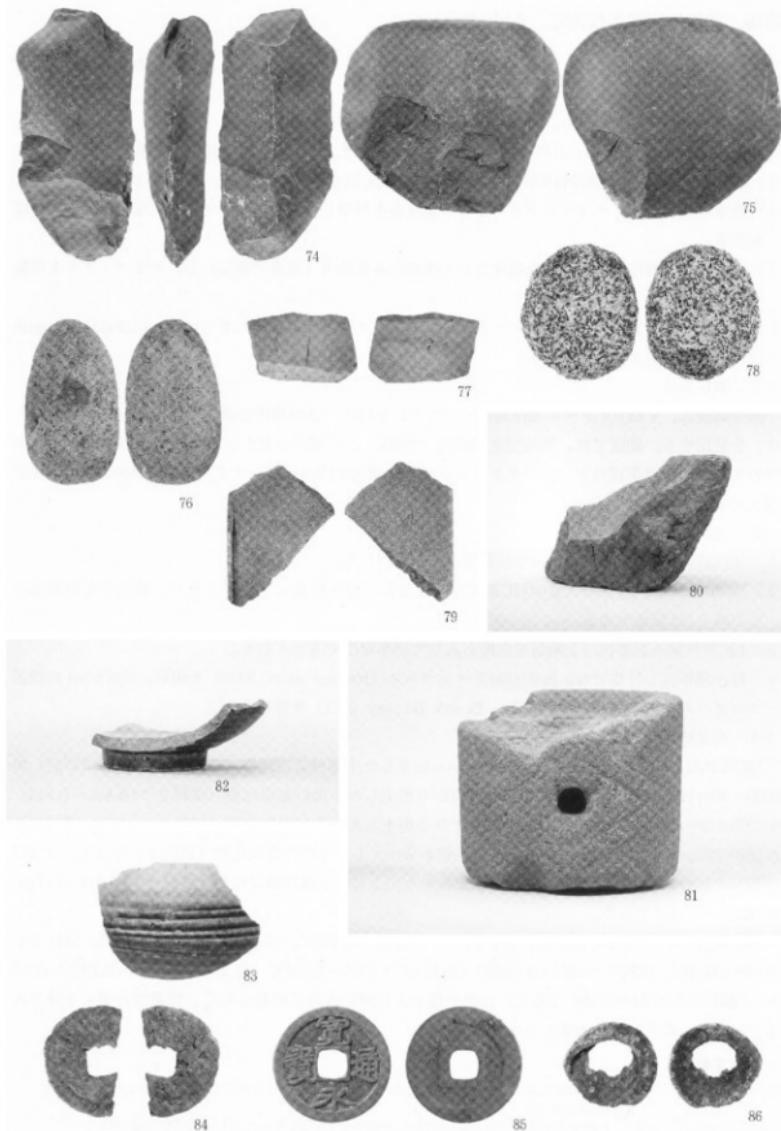
写真図版 5 出土遺物 (1)



写真図版 6 出土遺物 (2)



写真図版7 出土遺物（3）



写真図版 8 出土遺物 (4)

## 附編 放射性炭素年代測定(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### (1) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA(Acid Alkali Acid)処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。
- 3) 試料を酸化銅1 gと共に石英管に詰め、真空ドレ封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### (2) 測定方法

測定機器は、3 MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により13C/12Cの測定も同時に実施する。

### (3) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る14C年代である。
- 3) 14C年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 4) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース(Reimer et al. 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001)を使用した。

### (4) 測定結果

14C年代は、7C11グリッドのII層中位から出土した土器付着炭化物(試料1:IAAA-71744)が2920±40yrBP、6C5グリッドのII層下位から出土した土器付着炭化物(試料2:IAAA-71745)が2970±30yrBP、7C6グリッドの褐色土から出土した土器付着炭化物(試料3:IAAA-71746)が2890±30yrBP、6B17グリッドのII層中位から出土した土器付着炭化物(試料4:IAAA-71747)が3020±40yrBP、7C6グリッドのII層上位から出土した土器付着炭化物(試料5:IAAA-71748)が2830±40yrBPである。

曆年較正年代( $1\sigma=68.2\%$ )は、試料1が1200~1040BC、試料2が1260~1120BC、試料3が1130~1010BC、試料4が1380~1340BC(16.8%)・1320~1250BC(41.1%)・1240~1210BC(10.3%)、試料5が1020~925BCである。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素含有率も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

### <参考文献>

- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430  
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363  
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

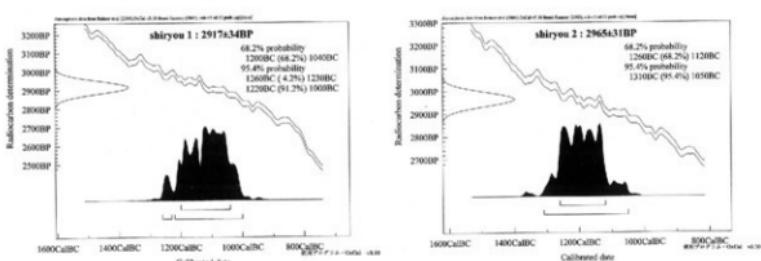
第1表 雨滲遺跡放射性炭素年代測定結果

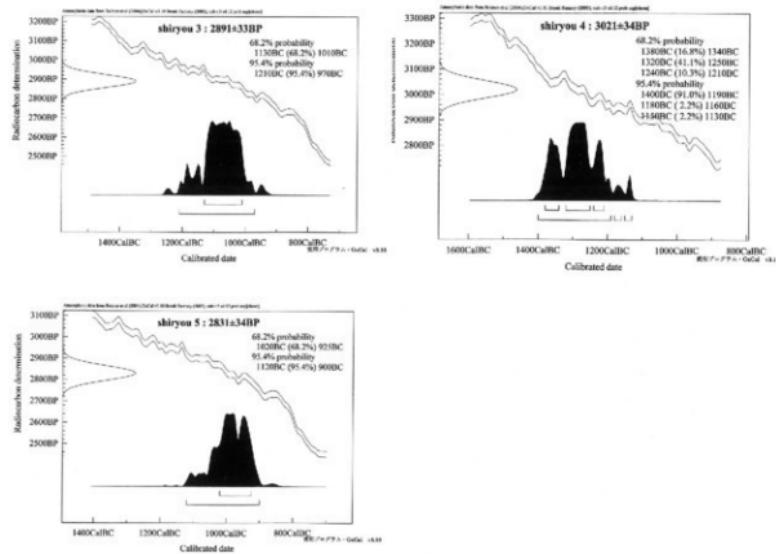
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比	
		Libby Age(yrBP)	±
IAAA-71744 #1991-1	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料1 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ pMC(%)	2.920 ± 40 -23.24 ± 0.89 -304.6 ± 3 69.54 ± 0.3 -302 ± 2.7 69.8 ± 0.27
	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料2 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ pMC(%)	2.970 ± 30 -27.55 ± 0.64 -308.6 ± 2.7 69.14 ± 0.27 -312.3 ± 2.5 68.77 ± 0.25
	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料3 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ pMC(%)	2.890 ± 30 -23.81 ± 0.6 -302.3 ± 2.9 69.77 ± 0.29 -300.6 ± 2.8 69.94 ± 0.28
	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料4 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ pMC(%)	2.890 ± 30 -23.81 ± 0.6 -313.5 ± 3 68.65 ± 0.3 -300.6 ± 2.8 68.83 ± 0.28
	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料5 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ pMC(%)	2.870 ± 30 -23.76 ± 0.65 -311.7 ± 2.8 68.83 ± 0.28 3.000 ± 30 70.3 ± 0.3 -296.8 ± 2.8 70.32 ± 0.28
	試料採取場所： 岩手県二戸市金田一宇雨滲40-1ほか 雨滲遺跡 試料形態： 炭化物 試料名(番号)： 試料1 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP)	2.830 ± 30

第2表 雨滲遺跡暦年較正年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-71744	試料1	2917±34
IAAA-71745	試料2	2985±31
IAAA-71746	試料3	2891±33
IAAA-71747	試料4	3021±34
IAAA-71748	試料5	2831±34

※ここに記載するLibby Age(年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。





※ ( ) 内数字は掲載頁と共通。

雨滴遺跡 年代測定試料

## (5) 落合Ⅱ遺跡

所 在 地	気仙郡住田町世田米子飼沢8-2ほか	遺跡コード・略号	NF13-1146・OA II-07
委 託 者	大船渡地方振興局土木部	調査対象面積	1,066m <sup>2</sup>
事 業 名	津付ダム建設事業	調査終了面積	1,066m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年7月17日～8月30日	調査担当者	溜 浩二郎・藤原大輔

### 1 調査に至る経過

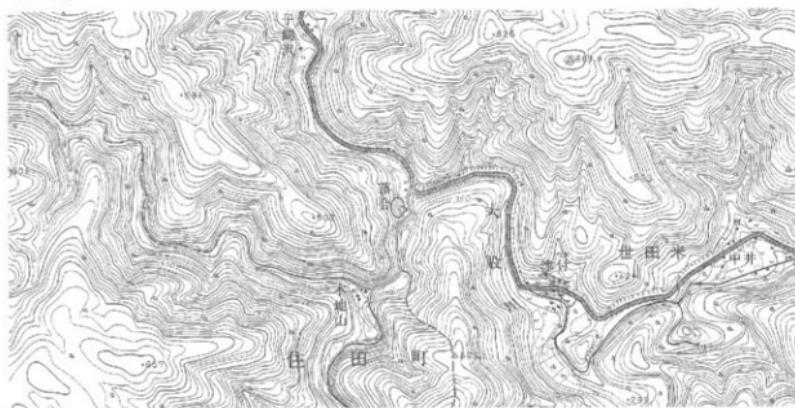
落合Ⅱ遺跡は「津付ダム建設事業」の工事用道路工事に伴い、その事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。津付ダムは気仙郡住田町と陸前高田市を流れる二級河川気仙川の支流、大股川の住田町世田米字子飼沢地内に建設される治水専用ダムである。気仙川流域は過去に、カサリン・アイオン台風や低気圧などの影響により、多くの洪水被害を受けてきたことから、洪水被害を防止するために事業に着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所から平成18年11月27日付大地土津第57号「津付ダム建設事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年11月28日に分布調査を実施し、平成18年12月7日付教生第1266号「津付ダム建設事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（回答）」により、当津付ダム建設事務所へ回答してきた。

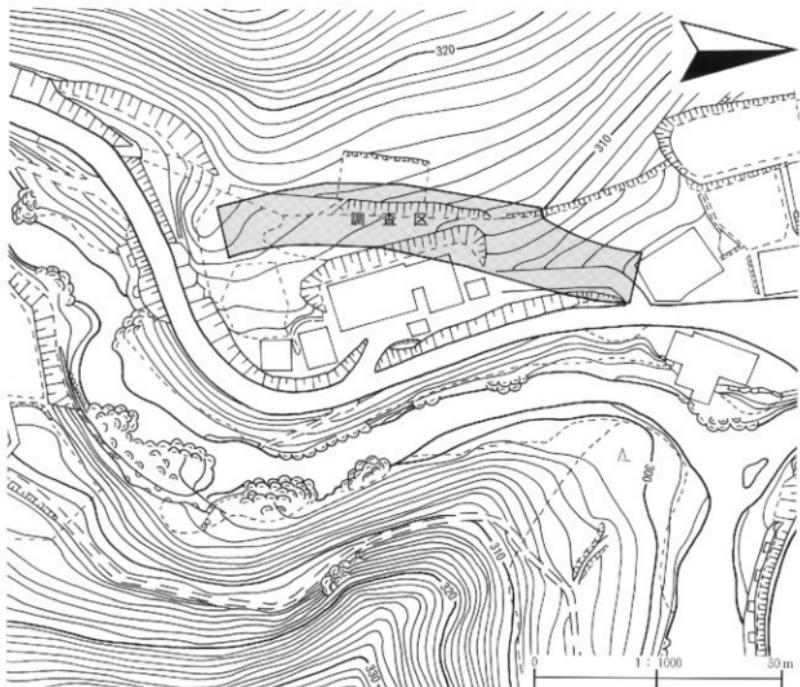
それに伴い、津付ダム建設事務所から平成18年12月13日付大地土津第63号「津付ダム建設事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して、試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月27日付教生第1327号「津付ダム建設事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、当津付ダム建設事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当津付ダム建設事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年7月6日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（大船渡地方振興局土木部）



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

## 2 遺跡の位置と立地

落合II遺跡は岩手県南東部の住田町世田米に所在し、町役場から西へ約11kmに位置し、大股川支流の篠倉沢左岸に立地している。遺跡の標高は303～314mで、調査前の状況は山林及び畠地、宅地跡である。

## 3 基本土層

本遺跡の基本土層は概ね以下の通りである。

- I層 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし しまりややあり 径10mmの礫20%含む。現表土。
- II層 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり 径10mmの礫3%含む。
- III層 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 径3cmの礫10%含む。
- IV層 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまりあり 径3cmの礫20%含む。地山。

I層は畠地、宅地造成に起因する現表土の層である。II層及びIII層からは、主に縄文時代中期後葉～末葉（大木9～10式相当）と思われる土器が出土するものの、調査区中央から北側では造成のため消滅している。また、調査区南西側の一部を除き、全体的に擾乱された部分が多く見られる。地山のIV層上面は遺構検出面である。

#### 4 調査の概要

##### (1) 遺構

検出した遺構は、縄文時代の土坑3基、炉跡1基、焼土遺構1基。時期不明の土坑1基である。

##### 土坑

###### 1号土坑（第4図・写真図版2）

II A 9 f グリッドに位置し、III層に覆われたIV層上面で検出した。規模は長軸82cm、短軸62cm、深さ52cmである。平面形は橢円基調の不整な形状である。底面は平坦、壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は自然堆積で、全体に礫が混入する黒褐色土を主体とする。埋土から縄文土器1,556.3g、礫石器1点が出土している。このうち縄文土器5点（1～5）、礫石器1点（15）を掲載した。1・3・5にはC字状文、またはS字状文が描かれていることから大木10式に、4は沈線と磨消繩文による長楕円形文が描かれていることから大木9式にそれぞれ比定される。15は石皿で底面中央からの出土である。検出状況と出土遺物から縄文時代中期後葉の構築と推定される。

###### 2号土坑（第4図・写真図版2）

II A 9 e グリッドに位置し、III層に覆われたIV層上面で検出した。規模は長軸132cm、短軸122cm、深さ118cmである。平面形は円形である。底面は平坦、断面の形状はフラスコ状を呈し、底面から60cm程の高さで壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色土を主体とする自然堆積である。埋土および底面から縄文土器981.5gが出土している。このうち1点（6）を掲載した。6は沈線と磨消繩文による長楕円形文が描かれていることから大木9式に比定される。検出状況と出土遺物から縄文時代中期後葉の構築と推定される。

###### 3号土坑（第4図・写真図版2）

II A 9 f グリッドに位置し、攪乱の影響を強く受けたI層に覆われるIV層上面で検出した。規模は長軸106cm、短軸90cm、深さ72cmである。平面形は橢円形である。底面は平坦、断面形状はフラスコ状に近い形状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土していない。構築時期は推定する材料に乏しいため不明である。

###### 4号土坑（第4図・写真図版3）

II A 9 e グリッドに位置し、III層に覆われたIV層上面で検出した。規模は長軸69cm、短軸52cm、深さ45cmである。平面形は橢円基調の不整な形状である。底面はやや丸く、壁面は外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土を主体の自然堆積である。遺物は出土していない。検出状況から縄文時代中期後葉の構築と推定される。

##### 炉跡

###### 1号炉跡（第4図・写真図版3）

II A 9 e グリッドに位置し、III層に覆われたIV層上面で検出した。規模は長さ86cm、幅42cmである。地山を浅く掘り廻めた周間に礫を配置している。礫によって囲まれた内部、および礫自体に被熱の痕跡はほとんど見られなかったが、形態から炉跡として登録した。炉を構成する礫の上から出土した縄文土器の口縁部片1点（7）を掲載した。7は磨消繩文によって描かれた文様の上端がわずかに見えることから、大木9～10式のものと考えられる。検出状況と出土遺物から縄文時代中期後葉～末葉の

構築と推定される。

#### 焼土

##### 1号焼土（第4図・写真図版3）

II A 9f グリッドに位置し、III層に覆われたIV層上面の搅乱範囲内で検出した。規模は長軸14cm、短軸12cm、最大厚2cmである。平面形は橢円形である。検出状況から縄文時代中期後葉の構築と推定される。

#### （2）遺物

出土総量は上器が13,827.5g（大コンテナ1箱分）、石器が40,267.87g（12点で中コンテナ2箱分）である。出土地点は大部分が調査区中央から南側にかけてのII、III層が残存する区域である。以下では遺構外から出土した遺物について述べる。

#### 土器

全体的に接合状況が悪く、文様構成がわかりづらいものや縄文のみの破片が多いが、特徴的な文様を持つものから縄文時代中期後葉～末葉の大木9～10式が主体と思われる。また、II～III層から出土した以外にも、搅乱の中からは縄文時代晚期に属するとと思われるものが出土している。遺構外の上器は文様に特徴のあるものと接合状況が良好な4点を掲載した。9は沈線と充填縄文によって区画した文様が見られることから、大木10式に比定される。接合状況が良好で完形に近い8は、1号土坑付近の検出面上で出土していることから大木9～10式期のものと思われる。11は搅乱部分から出土している深鉢で、口唇部から口縁部にかけての文様と、肩部が大きく張り出す器形のそれぞれの特徴は、縄文時代晚期の大洞A～A'式のものに類似する。

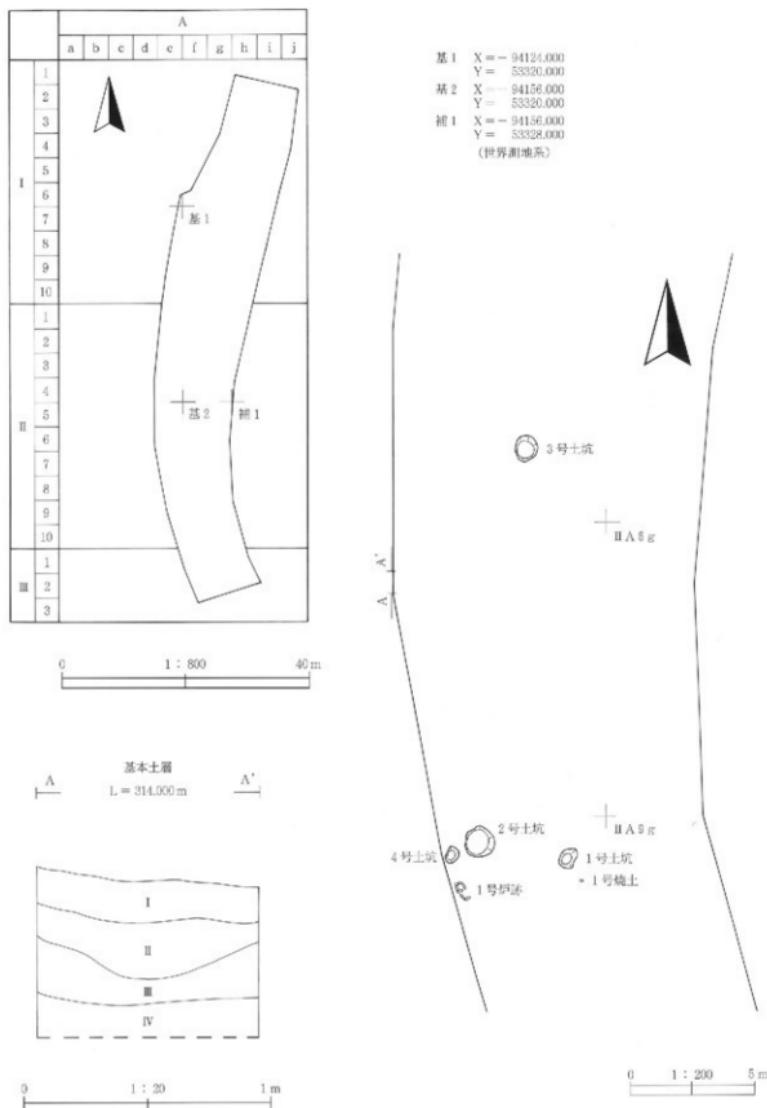
#### 石器

遺構外の石器は石匙1点、石籠1点、敲石1点、石皿1点の計4点を掲載した。14の敲石は脆い石材のためか崩れたような痕跡が一端のみに見られる。16の石皿は片面のみに磨面を確認した。

#### 5 まとめ

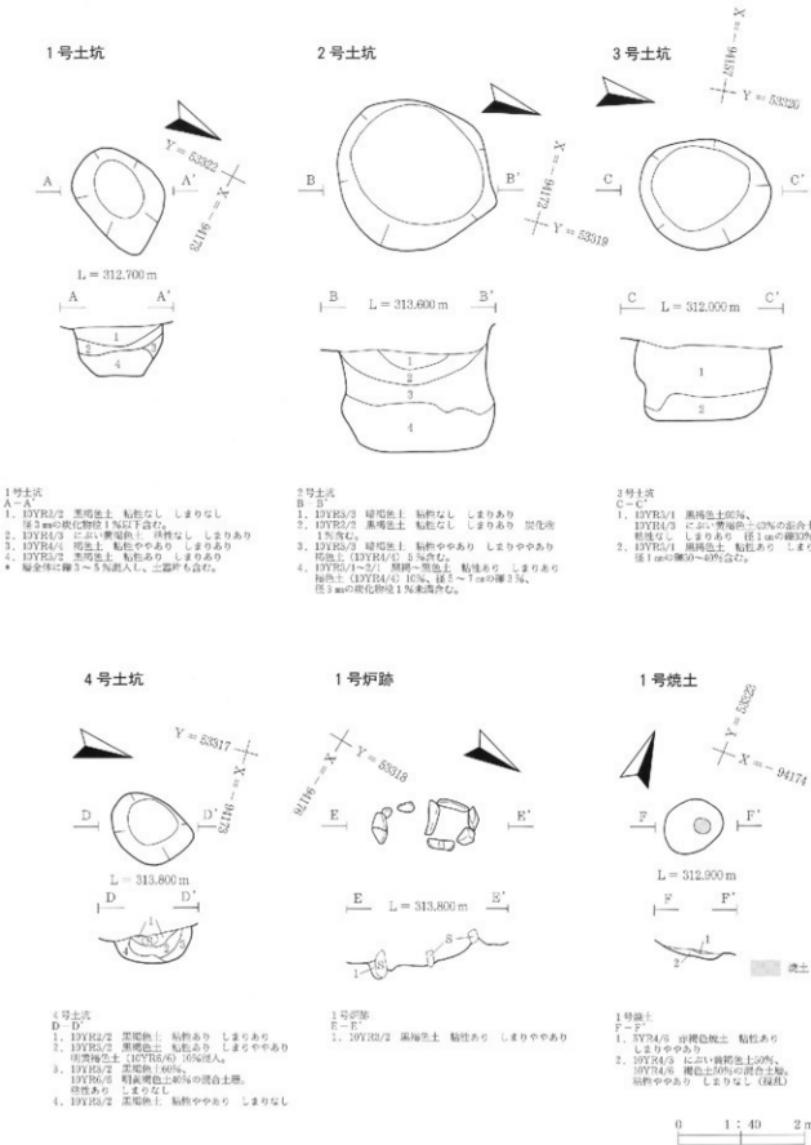
今回の調査では、調査区南側で縄文時代中期後葉～末葉にあたる遺構と遺物、搅乱部分から縄文時代晚期にあたる遺物をそれぞれ確認した。本調査に先立って行われた県教育委員会の試掘では、周辺から住居状の遺構を検出しており、これらを踏まえて落合II遺跡は、縄文時代中期後葉～末葉と晚期の集落跡が複合して存在していた可能性が考えられる。

なお、落合II遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



第3図 グリッド配置図・遺構配置図・基本土層

### (5) 落合Ⅱ遺跡



第4図 检出指標



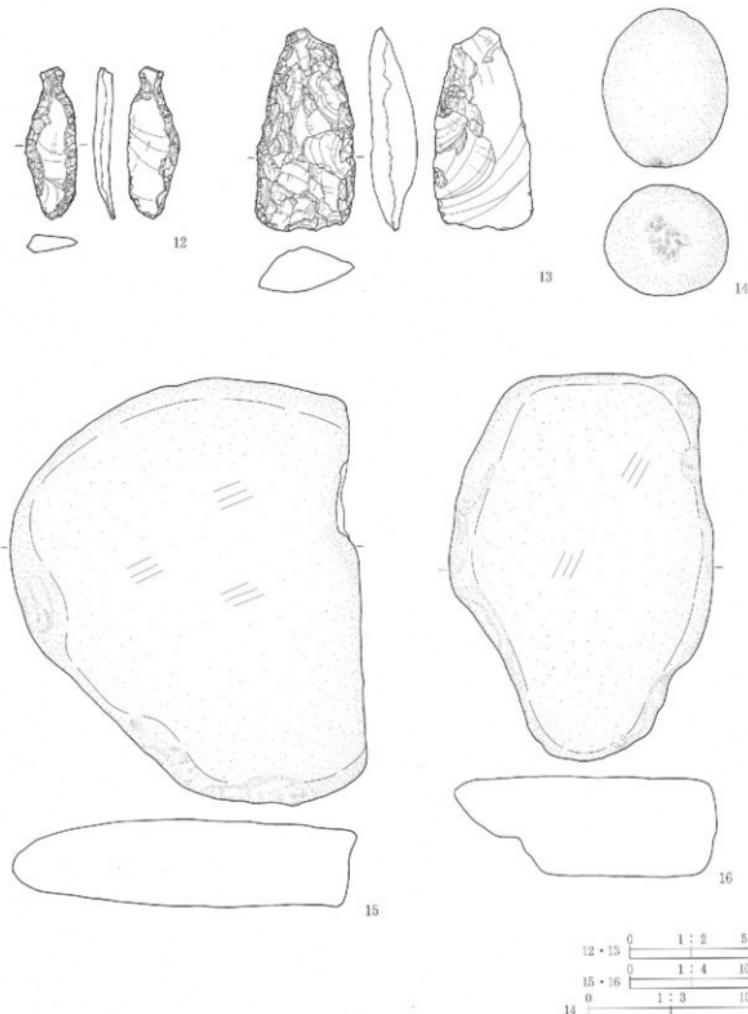
第5図 出土遺物(1) 土器



0 1 : 3 10 cm

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様	備考
1	1号土坑	埋土	深鉢	口縁部	C字状文、磨消繩文？(L.R)	
2	1号土坑	埋土	深鉢	口縁部	刺突文、横沈綫、C字状文？	
3	1号土坑	埋土	深鉢	口縁部	C字状文、磨消繩文？(L.R)	
4	1号土坑	埋土	深鉢	肩部	長梅円形文、磨消繩文？(L.R)	
5	1号土坑	埋土	深鉢	口縁～肩部	S字状文、磨消繩文？(R.L)	
6	2号土坑	底面	深鉢	口縁部	口縁部：波状 長梅円形文、磨消繩文？(R.L)	外面：炭化物付着
7	1号伊器	直上	深鉢	口縁部	磨消繩文(R.L?)	
8	II A 9 f	II	深鉢	略完形	繩文 L.R	1号土坑附近出土
9	II A 9 e	II	深鉢	肩部	S字状文、充填繩文(R.L.)	
10	II A 9 g	II	小口直唇	略完形	被節繩文 R.L.R	
11	II A 6 e	搅乱	深鉢	口縁～肩部	波状刻目、横沈綫 肩部：羽状繩文(R.L)	

第6図 出土遺物(2) 土器



No.	出土地点	層位	岩種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	産地(生成時期)
12	II A 7 e	II	石匙	6.4	2.1	0.8	8.59	頁岩	奥羽山脈(新生代新第三紀)
13	II A 10 f	II	石匙	8.3	4.0	2.0	60.78	頁岩	奥羽山脈(新生代新第三紀)
14	II A 9 f	III	敲石	9.9	7.6	6.9	736.40	花崗閃綠岩	北上山地(中生代白堊紀)
15	1号土坑	底面	石皿	35.0	29.0	7.4	11400.00	細粒花崗閃綠岩	北上山地(中生代白堊紀)
16	II A 8 f	III	石皿	31.7	21.7	8.4	9430.00	細粒花崗閃綠岩	北上山地(中生代白堊紀)

第7図 出土遺物(3) 石器

(5) 落合II遺跡



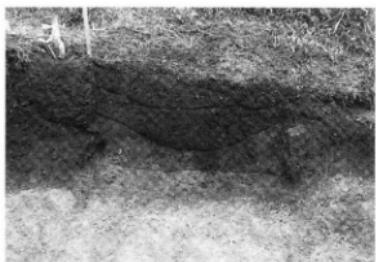
道路遠景（南から）



調査区全景（西から）



調査前状況



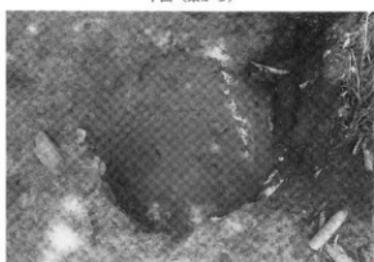
基本土層



平面 (東から)



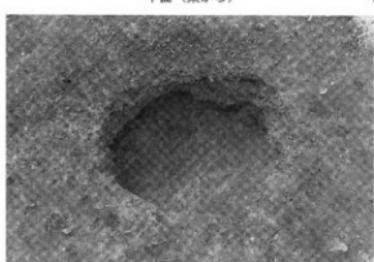
断面 (東から)



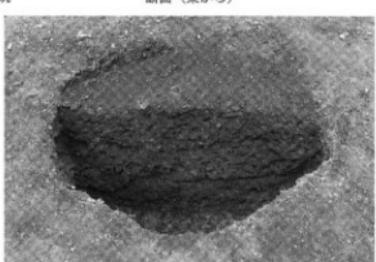
平面 (東から)



断面 (東から)



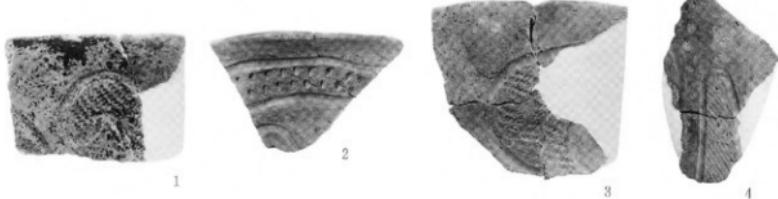
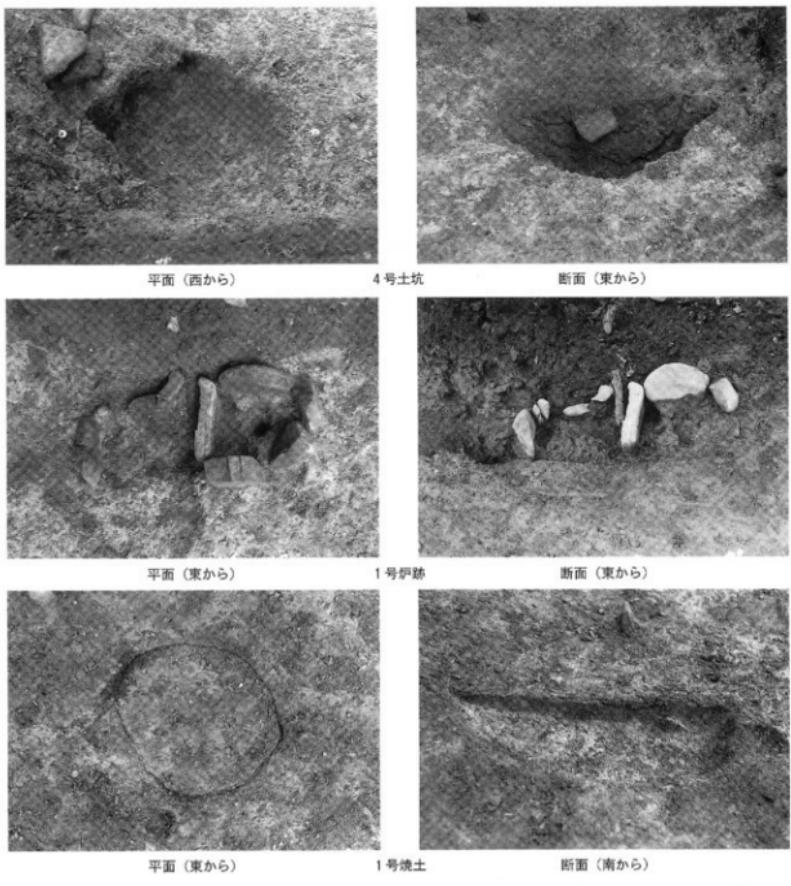
平面 (東から)



断面 (東から)

写真図版2 調査前状況・基本土層・検出遺構 (1)

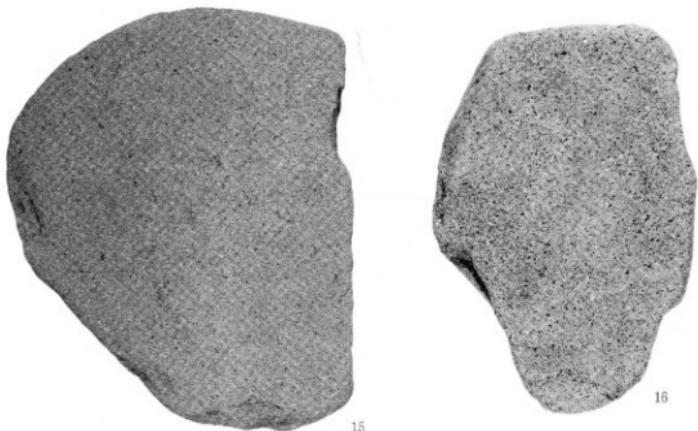
(5) 落合II遺跡



写真図版3 検出遺構(2)・出土遺物(1)



写真図版 4 出土遺物 (2)



写真図版5 出土遺物（3）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	落合II遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	藤原大輔・溜 浩二郎							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
落合II遺跡	いわてけいさくせんぐ 岩手県気仙郡 住田町世田木子 飼沢8-2ほか	03441 NF13- 1146	39度 09分 02秒	141度 27分 01秒	2007.7.17 ～ 2007.8.30	1,066m <sup>2</sup>	津付ダム建設 事業に伴う緊 急発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
落合II遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 時期不明	土坑 か跡 焼土遺構 土坑	3基 1基 1基 1基	縄文土器 大1箱 石器	12点		
要約	主に縄文時代中期後葉～末葉の遺構と遺物を確認した。畠地、宅地の造成により大部分が削平されていたものの、調査区付近では住居状遺構が確認されていることから、集落跡が存在していた可能性が考えられる。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (6) 落合Ⅲ遺跡

所 在 地	気仙郡住田町世田米子飼沢10ほか	遺跡コード・略号	NF13-1156・OAⅢ-07
委 託 者	大船渡地方振興局土木部	調査対象面積	997m <sup>2</sup>
事 業 名	津付ダム建設事業	調査終了面積	997m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年8月1日～8月30日	調査担当者	瀬 浩二郎・藤原大輔

### 1 調査に至る経過

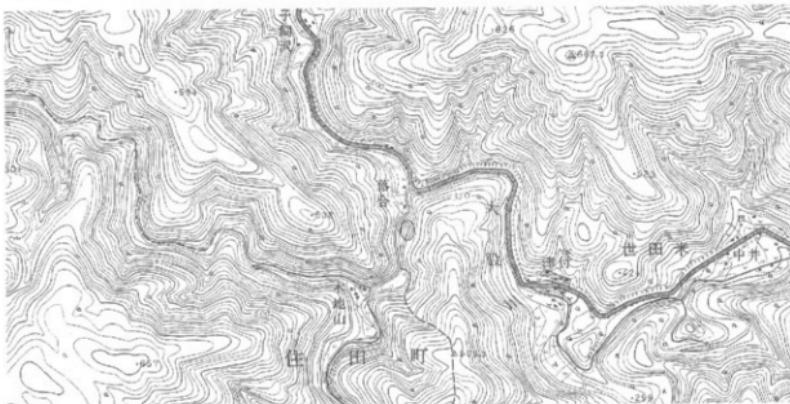
落合Ⅲ遺跡は「津付ダム建設事業」の工事用道路工事に伴い、その事業区域内に埋蔵文化財が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。津付ダムは気仙郡住田町と陸前高田市を流れる二級河川気仙川の支流、大股川の住田町世田米字子飼沢地内に建設される治水専用ダムである。気仙川流域は過去に、カサリン・アイオン台風や低気圧などの影響により、多くの洪水被害を受けてきたことから、洪水被害を防止するために事業に着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所から平成18年11月27日付大地土津第57号「津付ダム建設事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年11月28日に分布調査を実施し、平成18年12月7日付教生第1266号「津付ダム建設事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（回答）」により、当津付ダム建設事務所へ回答してきた。

それに伴い、津付ダム建設事務所から平成18年12月13日付大地土津第63号「津付ダム建設事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して、試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月27日付教生第1327号「津付ダム建設事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、当津付ダム建設事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当津付ダム建設事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年7月6日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなつた。

（大船渡地方振興局土木部）



第1図 遺跡の位置

1 : 25,000 鷹ノ巣山



第2図 調査区と周辺の地形

## 2 遺跡の位置と立地

落合Ⅲ遺跡は岩手県南東部の住田町世田米に所在し、町役場から西へ約11kmに位置し、大股川支流の篠倉沢右岸に立地する。遺跡の標高は313~315mで、調査前の状況は山林及び水田跡である。

## 3 基本土層

本調査区は南西側の一部を除き造成による影響のため地山まで掘削された状況である。基本土層は以下の通りである。

I層 10YR3/1 黒褐色土 粘性なし しまりややあり 径10mmの礫20%含む。現表土。

II層 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 遺物包含層。

III層 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまりあり 径3cmの礫20%含む。地山。

## 4 調査の概要

### (1) 遺構

検出した遺構は無い。

### (2) 遺物

出土総量419.7g。出土地点は全て遺物包含層からである。全てが縄文の破片であり、詳細な時期の特定ができなかった。

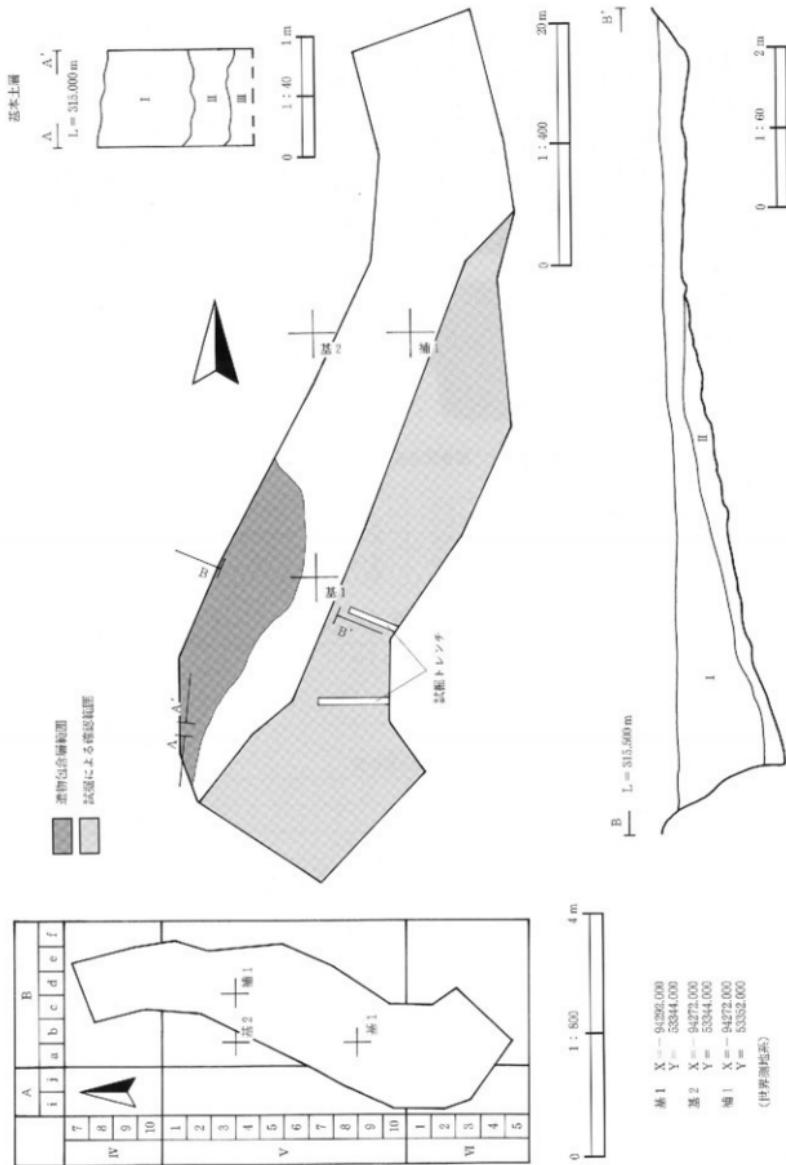
## 5 まとめ

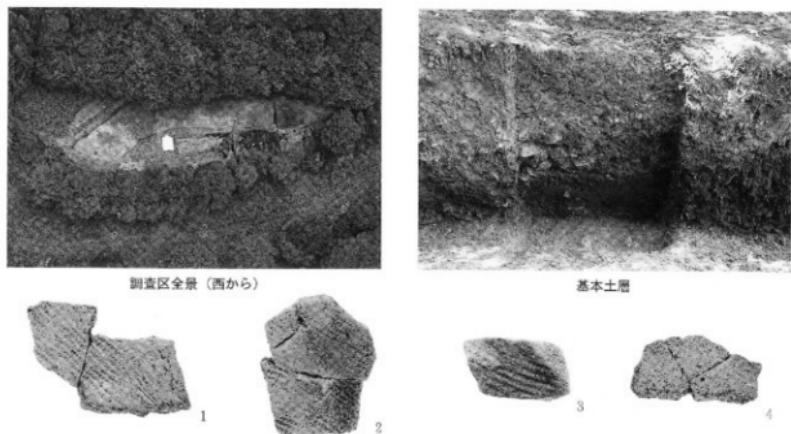
今回の調査では南西側縁辺部から遺物が出土したが、調査区の大部分が造成による影響で掘削されていたため遺構は検出できず、遺跡の詳細は不明である。

なお、落合Ⅲ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



第3図 出土遺物





写真図版1 調査区全景、基本土層、出土遺物

土器観察表

No.	出土地点	層位	深幅	部位	文様	備考
1	V A 7 j	II	深鉢	胴部	縄文LR	
2	V A 7 j	II	深鉢	胴部	縄文LR	
3	V B 7 a	II	深鉢	胴部	縄文LR	
4	V B 8 a	II	深鉢	胴部	縄文LR	

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	落合Ⅲ遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	藤原大輔・溜 浩二郎						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下敷岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
落合Ⅲ遺跡	岩手県気仙郡 住田町世由米子 飼沢10ほか	03441	NF13- 1156	39度 08分 57秒	141度 27分 02秒	2007.8.1 ~ 2007.8.30	997m <sup>2</sup> 津付ダム建設 事業に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項		
落合Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器			
要約	今回の調査では旧縄部から縄文土器片を確認したが、調査区の大部分が造成により削平さ れていたため、遺跡の詳細は不明である。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (7) 戸仲遺跡 第2次調査

所 在 地	盛岡市川日4-61-7ほか	遺跡コード・略号	LE28-0232・YTT-07-02
委 託 者	盛岡地方振興局土木部	調査対象面積	180m <sup>2</sup>
事 業 名	特定安全施設整備事業	調査終了面積	180m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年10月15日～11月14日	調査担当者	瀬 浩二郎・藤原大輔

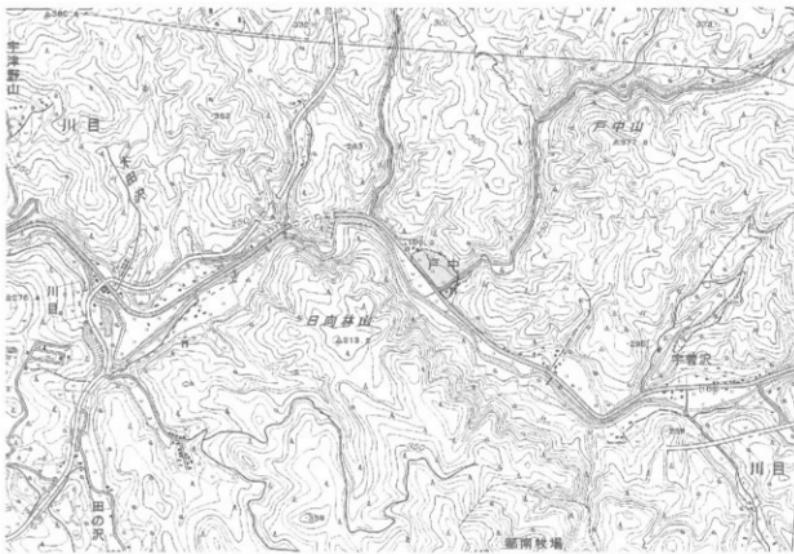
### 1 調査に至る経過

戸仲遺跡は、一般国道106号川日地区特定交通安全施設整備事業の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

事業地区である盛岡市川日地区は盛岡市立川日小学校、盛岡市立河南中学校および盛岡市内の高等学校等の通学路である。一般国道106号は、県都盛岡市と岩手県沿岸市町村を連絡するアクセス道路であることから自動車交通量6,427台／24h、重交通量1,191台／24hと交通量が多い路線であるが、事業地区的川日地区には歩道が未整備であるため、通学児童及び地域住民の交通安全確保が困難な状況である。そのため、本事業により歩道を整備し、通学児童及び地域住民の交通安全確保を行うものであり、平成16年度より歩道整備を実施している。

当該遺跡については、本事業の施工主体である盛岡地方振興局土木部からの依頼により、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が平成17年度に試掘調査を実施した。その結果を踏まえ、岩手県教育委員会と協議し、平成18年度に財団法人岩手県文化振興事業団と盛岡地方振興局との間で委託契約を締結し、平成18～19年度に発掘調査を実施することになった。

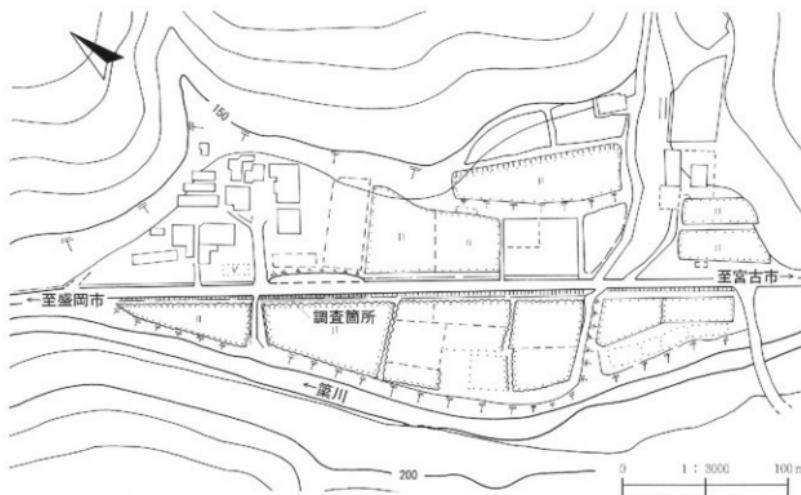
(盛岡地方振興局土木部)



第1図 遺跡の位置

## 2 遺跡の立地

遺跡はJR東北本線盛岡駅から南東約8.7kmに位置し、蘆川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は190m前後で、調査前の現況は水田である。



第2図 調査区と周辺の地形

## 3 基本土層

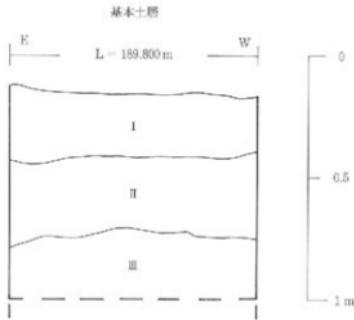
調査区は一般国道106号の法面と隣接する水田とに挟まれた部分で、道路に平行して東西に細長い調査区となっている。調査前の現況は水田と隣接するため、道路からの雨水の流入を防ぐために排水用の溝が掘られ、この掘削が地山までおよん

でいる状況であった。表土は水田開発時に盛られたもので縄文時代の遺構・遺物が残存するのは表土下の第II層からで、第II層が残存しない西側では第III層で遺構が確認された。

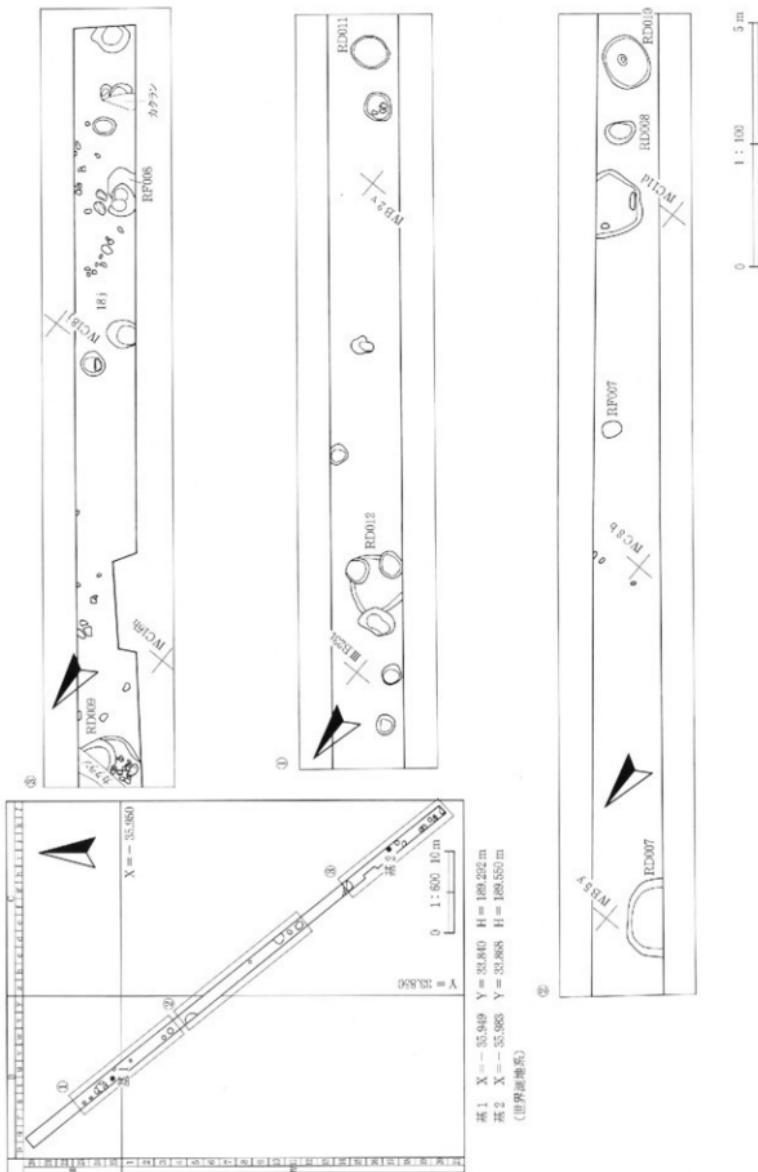
第I層 10YR3/1 黒褐色 粘土 粘性あり しまりややあり 現表上。水田造成時の整地層。

第II層 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりあり 遺構検出面・遺物混入。

第III層 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性なし しまりややあり 遺構検出面。



第3図 基本土層



第4図 造構配図

## 4 調査の概要

## (1) 遺構

検出した遺構は土坑6基、焼土2基、柱穴状土坑17個である。調査区が細長く狭いために遺構の一部のみ検出したものが多く、他の遺構との関わりが不明なものがほとんどである。

<土坑> 検出した土坑はRD011以外はすべて調査区外へ延びるものや他の遺構との重複などにより、一部のみの検出である。形状は円形基調のものがほとんどある。

土坑觀察表

遺構名	グリッド	形状	口徑値(cm)	底径値(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
RD007	IV B 5 x	円形?	160×■	125×■	36			
RD008	IV C 10 d	?	140×■	118×■	22	1・2	後期前～中葉	
RD009	IV C 14 g	不明		92×62	21	3～5	中期後葉	
RD010	IV C 11 e IV C 12 e	楕円形	110×87	108×88	40	6～10	後期前～中葉 底面中央よりやや東面に深30×18cm、深さ44cmの小穴あり	
RD011	IV B 3 w IV B 4 w	楕円形	80×66	70×60	16			
RD012	■ B 24 t ■ B 25 t	不規形			20			

\* 口徑値・底径値は長軸×短軸、深さは最深部

<焼土> 表土下の第II層より2基検出した。いずれも黒褐色土などが混合しており、焼土は二次的な堆積によるものである。

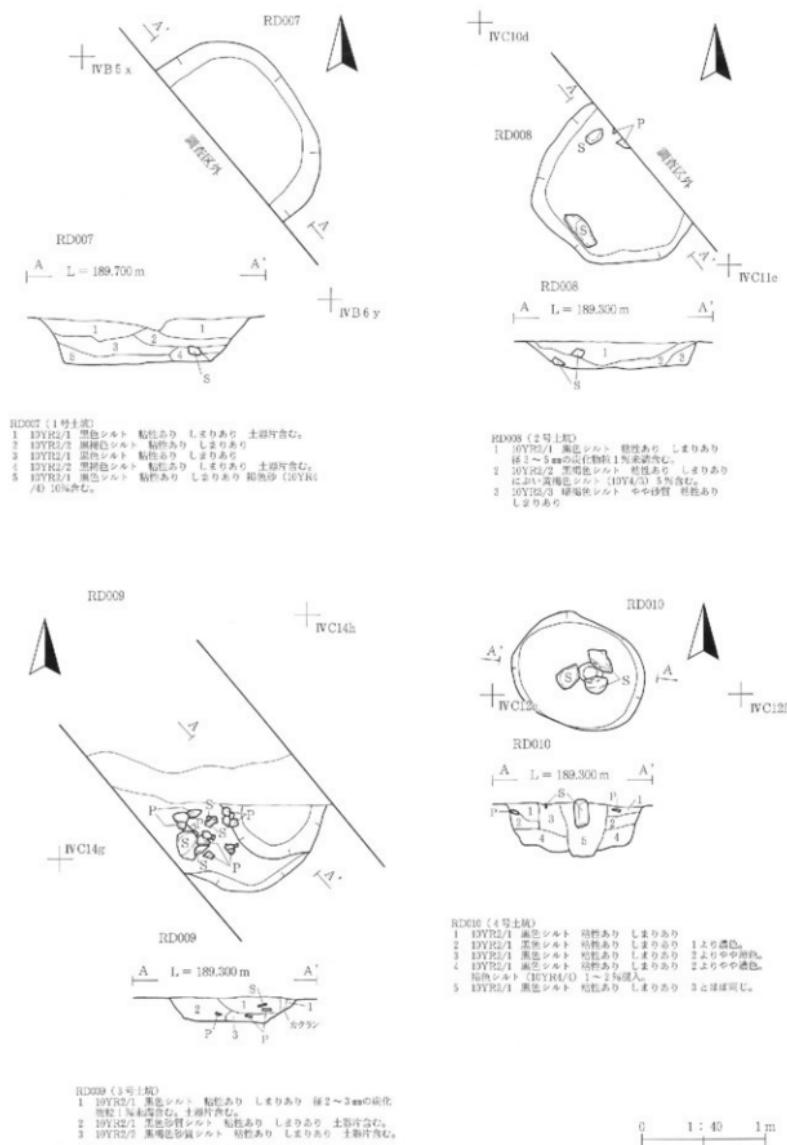
<柱穴状土坑> 17個確認された。規模は径34～70cm、深さは20～92cmで調査区の幅が約1.2mと狭く細長いため、建物の構造等については不明である。遺物はP6・P7・P10・P15などから縄文時代後期～晩期のものが出土している。また、P6の柱痕埋土からは多量の炭化種子が出土している。各柱穴の詳細については下記の表のとおりである。

柱穴状土坑觀察表

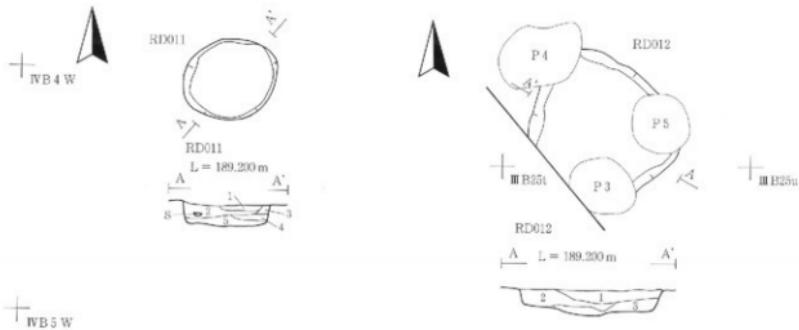
NO	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
P 1	■ B 23 s	46×36	22		
P 2	■ B 24 s	39×36	31	柱痕あり	
P 3	■ B 25 t	56×46	28	柱痕あり	
P 4	■ B 24 t	68×46	38		
P 5	■ B 24 t	50×45	38	柱痕あり	
P 6	■ B 3 w	55×55	27	10・11	柱痕あり、施期
P 7	IV C 20 k IV C 20 l		22	12	施期初頭
P 8	IV C 20 l		20		
P 9	■ B 25 u	40×38	64		
P 10	IV C 19 k	46×38	40	13・14	施期初頭
P 11	IV C 19 k		81		
P 12	IV C 17 j	48×45	29		
P 13	IV C 18 j	■×58	92		
P 14	IV B 1 u IV B 1 v	34×30	32		
P 15	IV C 20 l	70×■	81	15	後期末葉
P 16	IV C 11 d IV C 11 e	62×44	36	柱痕あり	
P 17	IV C 19 k		40		

掲載した遺構の略号  
RD・・・土坑  
RF・・・焼土  
P ・・・柱穴状土坑

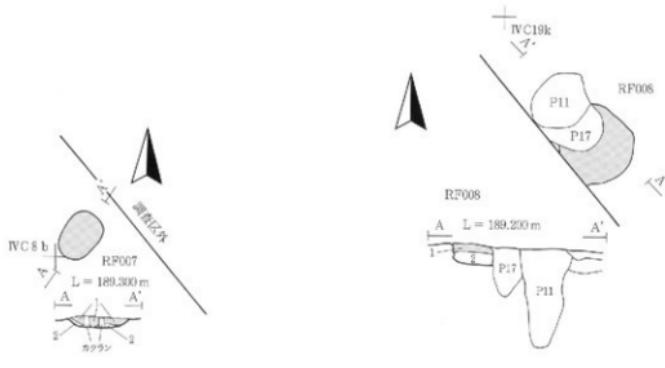
\* 径は長軸×短軸、深さは最深部



第5図 掘出遺構(1)



- RD011 (5号土壌)**
- 1 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 活性やあり しまりややあり
  - 2 10YR2/2 黒褐色シルト 活性あり しまりあり 葉緑植物(浮) 1%を含む
  - 3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 活性やあり しまりややあり
  - 4 10YR3/2~3/3 黒褐色~棕褐色砂質シルト 活性ややあり しまりややあり
  - 5 10YR2/2 黒褐色シルト 活性あり しまりあり



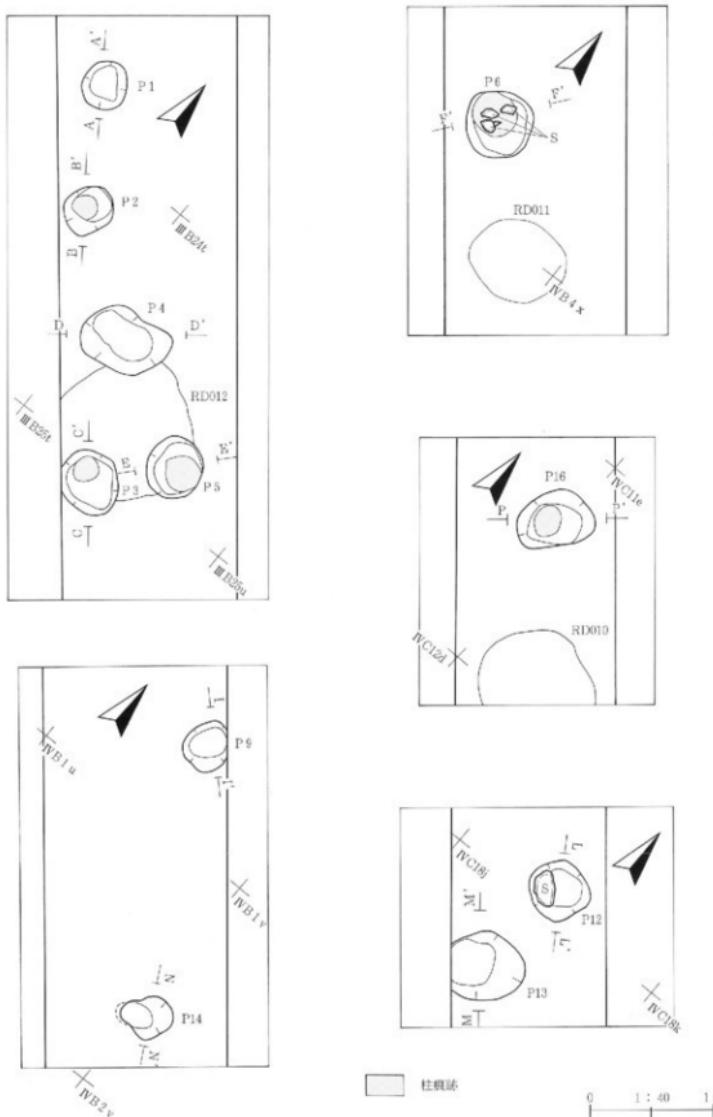
- RF007 (1号地盤)**
- 1 10YR4/6 黄褐色漂土 粘性あり しまりあり
  - 2 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 活性ややあり しまりあり

- RF008 (2号地盤)**
- 1 10YR4/6 黄褐色漂土 粘性なし しまりあり
  - 2 10YR3/5 棕褐色砂質シルト 粘性あり しまりあり

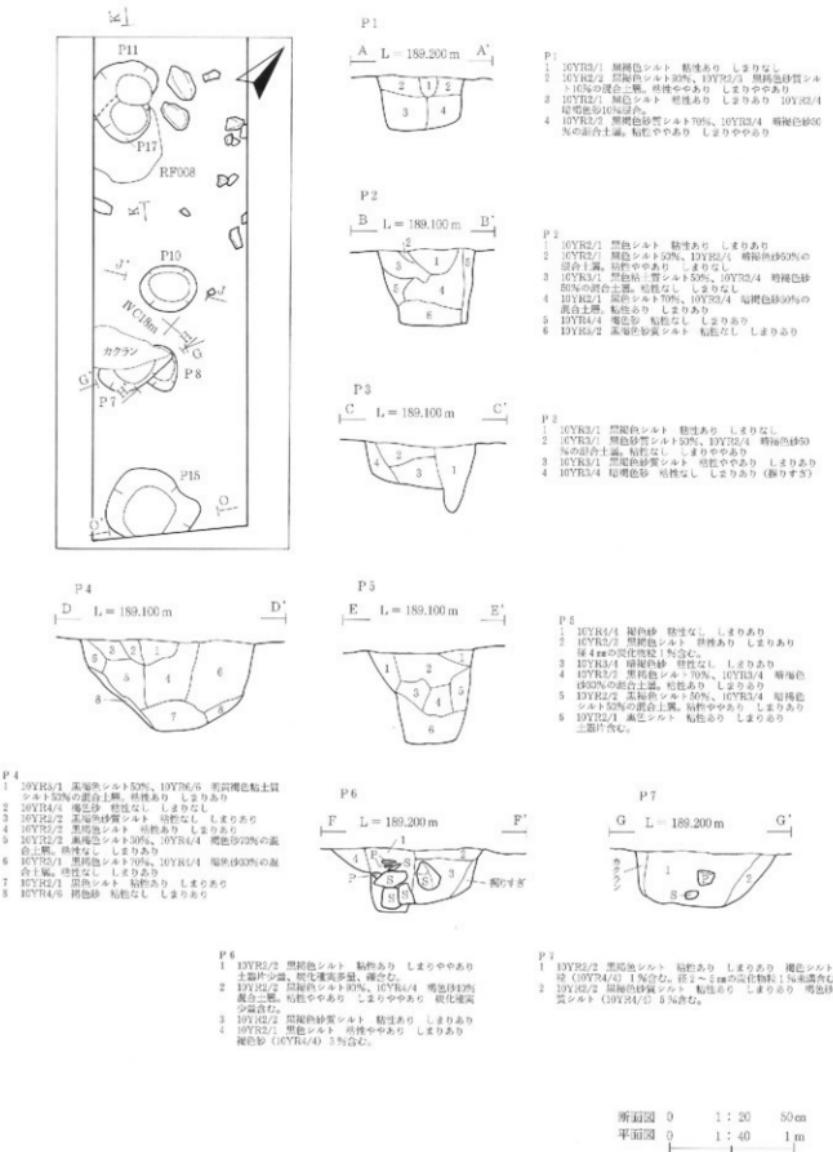


RF007	0	1 : 20	50 cm
RD011, RD012, RF008	0	1 : 60	1 m

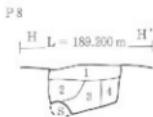
第6図 検出構造(2)



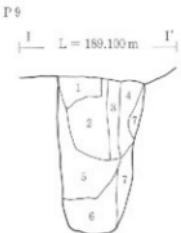
第7図 掘出遺構(3)



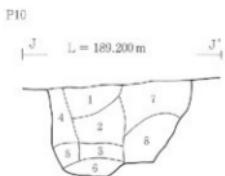
第8図 検出構造(4)



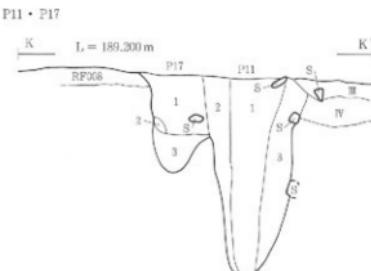
- 1: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり  
2: 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまりあり  
3: にせい黄褐色シルト (10YR4/4) 5%含む。  
4: 10YR2/2 黒褐色シルト 5%含む。 10YR2/2 にせい  
黄褐色シルト 30%の混合土層。 粘性なし しま  
りあり  
4: 10YR5/4 にせい黄褐色シルト 粘性あり しま  
りあり



- 1: 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり 厚さ2  
mm、炭化物1%を含む。  
2: 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり  
3: 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり  
4: 10YR2/2 黑褐色シルト 90%、10YR5/6 明黃褐色シルト  
10%の混合土層。 粘性あり しまりあり 黄褐色  
シルト (10YR5/6) 3%含む。  
6: 10YR5/1 黑褐色シルト 90%、10YR5/6 明黃褐色シルト  
10%の混合土層。 粘性あり しまりあり  
7: 10YR4/1 黑褐色シルト 粘性なし しまりややあり 黄  
褐色シルト (10YR5/1) 3%含む。

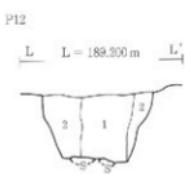


- 1: 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性ややあり しまりあり  
2: 10YR2/1 黑褐色シルト 経過あり しまりあり 1層より濃色。  
3: 10YR2/2 黄褐色砂質シルト 粘性あり しまりややあり  
4: 10YR2/1 黄褐色シルト 粘性ややあり しまりややあり  
5: 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり  
6: 10YR2/1 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり  
7: 10YR2/1-2 黄褐色砂質シルト 粘性あり しまりあり  
8: 10YR2/2 黄褐色砂質シルト 粘性あり しまりややあり にせい  
黄褐色シルト (10YR5/4) ブロックで5%含む。

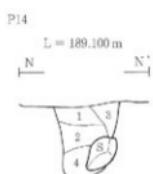


- P11  
1: 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり  
2: 10YR2/3 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり  
3: 10YR5/3 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり

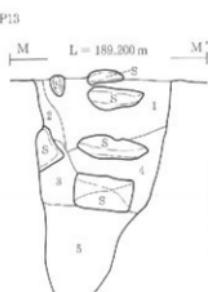
- P17  
1: 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 非  
固結 (SYR2/3) 1-2%含む。  
2: 10YR2/3 黄褐色砂質シルト 粘性あり しまりなし  
3: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり 非  
固結 (SYR4/5) 5%含む。



- P12  
1: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性あり しまりあり  
2: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性あり しまりやや  
あり 厚5mmの炭化物1%を含む。



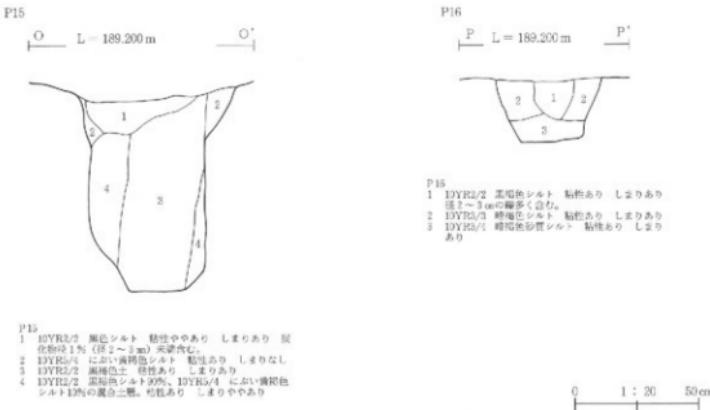
- P14  
1: 10YR2/1 黑褐色シルト 20%、10YR2/2 黄褐色砂質  
シルト5%の混合土層。 粘性ややあり しまりあり  
2: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性ややあり しまりあり  
3: 10YR2/2 黑褐色シルト 20%、10YR3/3 明黄褐色砂質  
シルト8%の混合土層。 粘性ややあり しまりあり  
4: 10YR2/1 黑褐色シルト 90%、10YR4/4 黄褐色土質シ  
ルト10%の混合土層。 粘性あり しまりあり 厚  
10cmほどの黒多量鉢入。



- P13  
1: 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 厚5mm  
の炭化物2%を含む。  
2: 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 粘性ややあり しまりあり  
3: 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性ややあり しまりあり 厚5mm  
黄褐色砂質シルト (10YR5/4) 10%含む。  
4: 10YR2/2 黄褐色シルト90%、10YR4/4 黄褐色土質シ  
ルト10%の混合土層。 粘性あり しまりあり  
5: 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり 厚  
10cmほどの黒多量鉢入。



第9図 検出構造(5)



第10図 検出遺構 (6)

## (2) 遺物

<縄文土器> 土器は総量で大コンテナ2箱分、総重量21,612.9gが出土した。このうち遺構内から出土したもの（1～15）と遺構外から出土した文様や器形などに特徴があるもの（16～31）を掲載した。1～9は土坑、10～15は柱穴状土坑から出土した。中期後葉～晚期後葉のものである。

遺構内出土のものは1～15で、1・2はRD006から出土した後期の上器で、1は深鉢の口縁～体部破片で条線による弧状の文様が施されている。3～5はRD009より出土した深鉢の破片で、3は沈線による梢円形の区画内に工具により刺突文が施されるもので、中期後葉の大木9式に比定される。RD010から出土した6～9は後期前～中葉のもので6・7は深鉢の口縁部破片で工具による連続刺突文が数段施されている。10・11はP6から出土し、10は鉢、11は深鉢の口縁部破片で晚期中葉、12はP7から出土した台付鉢で台部には透かし文様が施されている。P10から出土した13は後期の深鉢、14は晚期初頭の鉢の口縁部破片である。

遺構外出土のものは16～20が後期のもので、器種はいずれも深鉢の口縁部である。時期は16が後期前葉、17は後期前～中葉、18～20は後期末葉にそれぞれ比定される。21～31は晩期のもので器種は鉢類・壺・注口土器などで、21～23は前葉、24～26は中葉、27～31は後葉に比定される。

<弥生土器> 32は弥生時代中期後葉の鉢で、口縁部に突起を有し、沈線区画による口縁部文様帶には、数本の平行沈線を鋸歯状に施し、沈線間の結合部には工具による刺突を施している。

<石器> 14点を記載した。磨製石斧6点、凹石1点、石皿7点である。磨製石斧は33以外は一部が欠損したものであり、また35～38は未製品である。いずれも遺構外から出土している。石材にはすべて蛇紋岩が使用されている。40～46は石皿で40・42が柱穴状土坑から出土し、他は遺構外からの出土である。石材に斑岩・花崗閃綠岩・ディサイトなどを使用している。

<土製品> 出土した土製品は土偶と円盤状土製品で各2点である。土偶はいずれも欠損品で47はP6の埋土1層の搅乱土中、48はIV C 15h グリッドの風倒木痕からそれぞれ出土した。48の部位は右脚である。円盤状土製品はいずれも遺構外からの出土で、49は底部破片である。

<石製品> 2点出土した。50は断面形が瓢箪状を呈するもので、RD011から出土した。石材は頁岩を使用している。51は円形基調で扁平な形状を呈し、中心に径12mmの円形の孔が施されている。遺構外からの出土である。

<自然遺物> 水洗選別法により、炭化種子、動物遺存体などを検出した。炭化種子の検出にあたり対象としたサンプルはP-6埋土の大半にあたる約39kgとIVB-2vグリッド内で検出した炭化物が多く含まれる土壤約26kgで、水洗後に検出した炭化物の重量は1,164gである。選別で使用した篩のメッシュは最小1mmであるが、残渣試料も含め一部ではあるが外部委託による分析を行い当時の食糧状況を調査した。詳細は付録のとおりである。動物遺存体は前述サンプルと調査時に目視により確認できたものを含め、約20g検出した。いずれも部位の特定が困難な細片で、主に獸骨破片である。

## 5まとめ

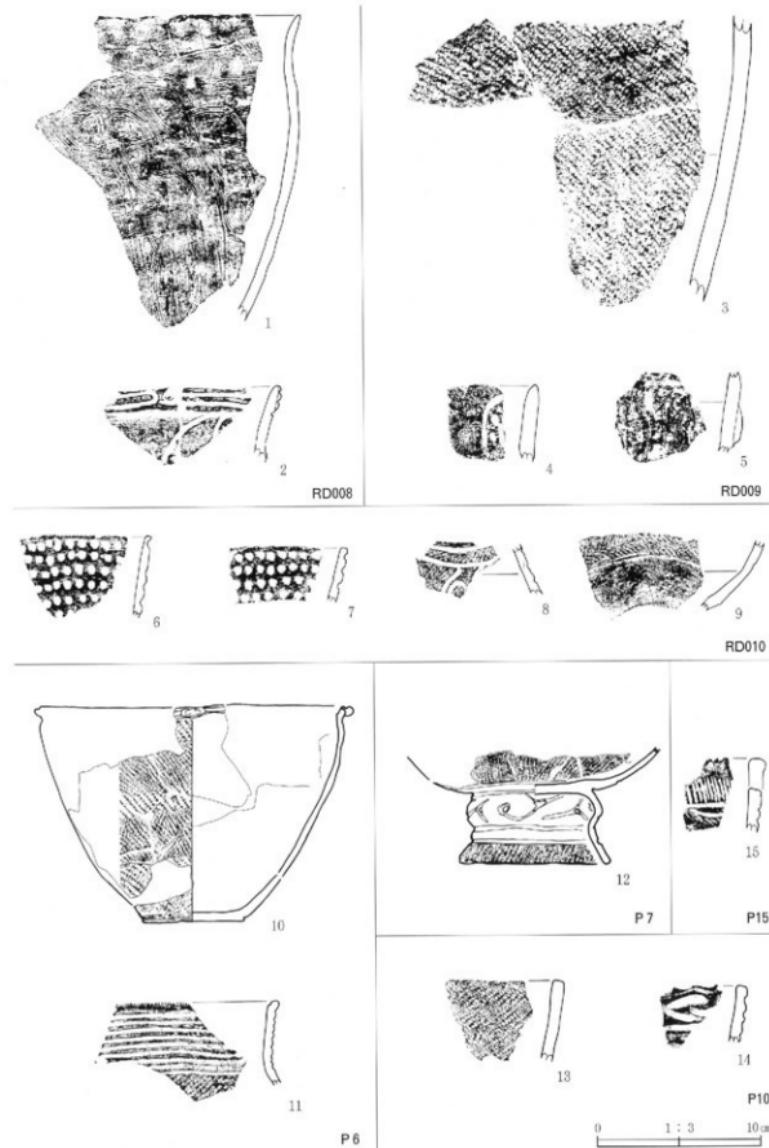
昨年からの調査で築川右岸の河岸段丘上に形成された縄文時代の集落跡の一部であることが、確認された。築川流域には山間部を流れる沢との合流地点などに小段丘が点在し、そのような場所に縄文時代の遺跡が存在する。本遺跡より下流の開けた低位段丘上には川目A遺跡・川目C遺跡など大規模な縄文集落が存在しており、この流域では段丘の規模と集落の規模が比例する傾向にあると考えられる。また、弥生時代の土器も1点出土しており、周辺に弥生時代の遺跡が存在する可能性が考えられる。

なお、戸仲遺跡第2次調査に関する報告はこれをもって全てとする。

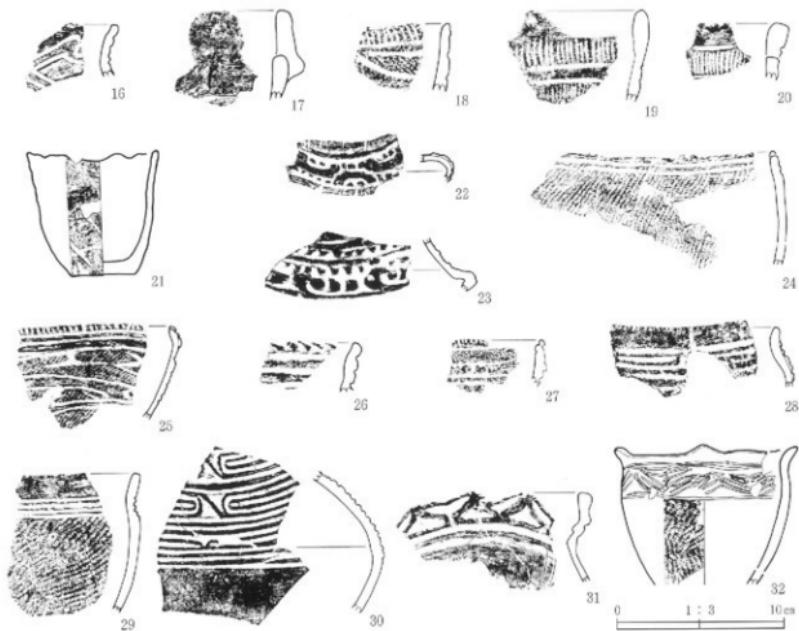
## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	戸仲遺跡第2次調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	溜 浩二郎						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下蔽岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○○○	調査期間	調査面積	調査原因
戸仲遺跡 第2次調査	岩手県盛岡市 川目4-61-7 ほか	03201	LE28 0232	39度 40分 32秒	141度 13分 39秒	2007.10.15 ～ 2007.11.15	特定安全施設整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
戸仲遺跡 第2次調査	集落跡	縄文時代	上坑 焼土 柱穴状土坑	6基 2基 17個	縄文土器・石器(中期後葉～晚期後葉) 上製品(土偶) 石製品(石棒類・有孔石製品など)	昨年度出土していない 弥生時代の土器1点出土。	
要約	遺跡は盛岡市から宮古市へと続く国道106号沿いに立地し、北上山地の山間部を流れる築川によって形成された河岸段丘上に立地する。昨年度行われた第1次調査同様、縄文時代中期後葉～晚期中葉を中心とした遺構・遺物が見つかっており、集落跡の周縁部と考えられる。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。



第11図 出土遺物 (1)



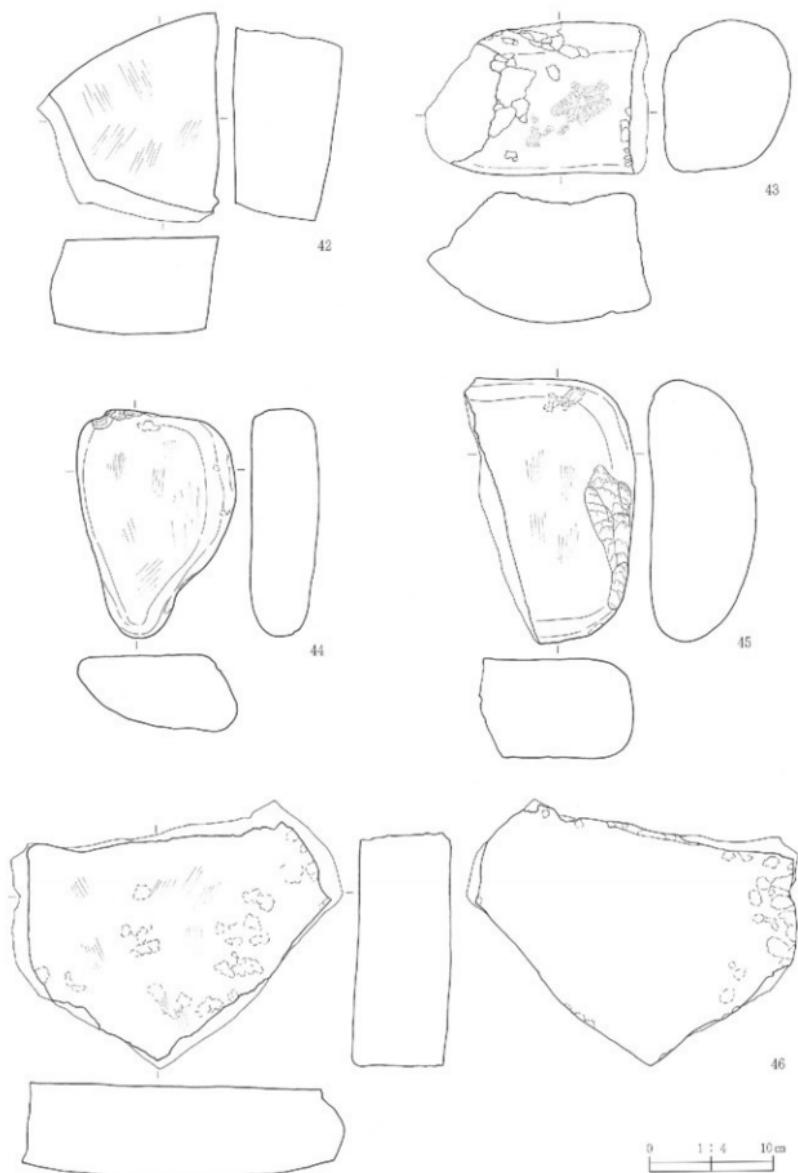
土器観察表

NO.	出土地点・位置	器種	部位	外観(文様・装飾・地文・原体など)	内面	時期	備考
1	RD008 球土	深鉢	口縁～外部	多角による彫刻文	ナゲ	後期前葉	
2	RD008 球土	鉢	口縁部	口縁部凹起による重複円文、外側は彫刻文?	ナゲ	後期前葉	
3	RD009 球土上位	深鉢	全体	彫文L.R面	ナゲ	中期後葉	
4	RD009 球土上位	深鉢	口縁部	彫刻文、彫刻文	ナゲ	中期後葉	
5	RD009 球土上位	深鉢	全体	彫刻	ナゲ	中期後葉	
6	RD010 地上	深鉢	口縁部	段状の複数の刺方文	ミガキ	後期山形	
7	RD010 地上	深鉢	口縁部	段状の複数の刺方文	ミガキ	後期山形	
8	RD010 地上	深鉢	全体	彫刻文、彫文L.R	ナゲ	後期山形	
9	RD010 地上	鉢	全体	彫刻文、彫文L.R、RL	ナゲ	後期山形	
10	P 6 杜瀬内	鉢	口縁～底部	口縁部突起、彫文RL	ミガキ	後期山形	
11	P 6 球土	深鉢	口縁部	口縁部突起、平行沈線文、彫文SL	ミガキ	後期山形	
12	P 7 地上1層	台付鉢	全体	透かし状の地壙、沈線文、彫文L.R	ミガキ	後期初頭	
13	P 10 地上	深鉢	口縁部	段状平滑、LR	ミガキ	後期	
14	P 10 地上	深鉢	口縁部	小波状口縁、三叉文、沈線文	ナゲ	後期初頭	
15	P 15 地上	深鉢	口縁部	突起、沈線文、彫刻文	ナゲ	後期末葉	
16	IV B 15 h II層	深鉢	口縁部	波状口縁、沈線文、彫文RL	ミガキ	後期中期～前葉	
17	IV B 17 i II層	深鉢	突起	突起	ミガキ	後期山形	
18	IV C 23 i II層	深鉢	口縁部	彫刻文、彫削長文、彫文RL	ナゲ	後期末葉	
19	IV C 15 h カララン	深鉢	口縁部	彫刻文、彫削長文	ナゲ	後期末葉	
20	IV B 1 v II層下	深鉢	口縁部	口縁部突起、沈線文、彫刻文、彫文RL履	ナゲ	後期末葉	
21	IV C 19 i II層	鉢	口縁～底部	小波状の口縁部、彫文原体は不明	ナゲ	前期前葉	
22	IV B 2 v II層	鉢	全体	半圓状文	ナゲ	前期前葉	
23	IV B 1 v カララン	口付鉢	半圓状文		ナゲ	前期前葉	
24	IV B 15 h カララン	深鉢	口縁～底部	口縁部突起、沈線文、彫文LR	ミガキ	前期中葉	
25	IV B 2 v カララン	鉢	口縁部	彫刻文、彫文LR	ナゲ	前期中葉	
26	IV C 16 k カララン	深鉢	口縁部	小波状口縁、平行沈線文	ナゲ	前期中葉	
27	IV C 20 i II層	鉢	口縁部	口縁部突起、口縁内面沙彫文、外側斜溝?	ナゲ	前期中葉	
28	IV B 1 v カララン	深鉢	口縁～全体	彫削文	ナゲ	前期後葉	
29	IV C 18 j II層	鉢	口縁～全体	彫刻文、彫文LR	ナゲ	前期中～後葉	外側に赤色顔料付着
30	IV B 1 v カララン	鉢	全体	彫削文	ナゲ	前期後葉	外側に赤色顔料付着
31	IV C 12 e II層	鉢	口縁部	彫削文	ナゲ	前期後葉	外側に赤色顔料付着
32	IV C 18 j II層	鉢	口縁～全体	口縁部突起、口縁部沙彫文により山形状の文様、沈線連鎖部に刺突文、彫文RL	ナゲ	早期中期後葉	

第12図 出土遺物(2)



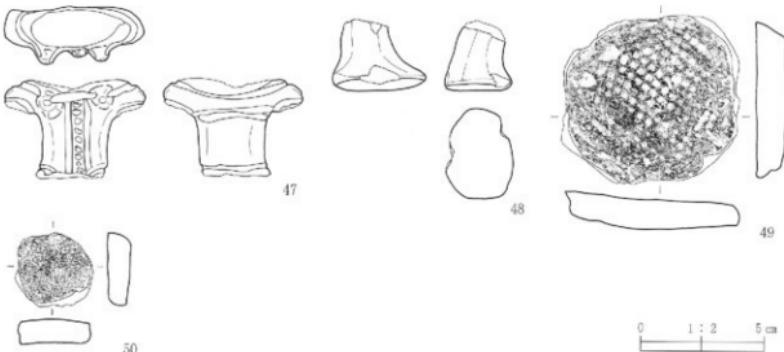
第13図 出土遺物 (3)



第14図 出土遺物 (4)

## 石器観察表

NO	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
33	IV C 15 h	縦乱	磨製石斧	5.4	2.5	0.6	18.58	蛇紋岩	ほぼ光沢品
34	IV C 18 k	Ⅱ層	磨製石斧	(8.4)	5.5	2.7	150.99	蛇紋岩	基部欠損
35	IV C 17 j	縦乱	磨製石斧	13.5	4.2	2.8	259.44	蛇紋岩	片面欠損
36	IV C 18 k	Ⅱ層	磨製石斧	(6.9)	5.2	2.3	101.72	蛇紋岩	刃部欠損
37	IV C 18 k	Ⅱ層	磨製石斧	(9.9)	5.7	4.0	313.51	蛇紋岩	基部欠損
38	IV C 14 g	Ⅱ層	磨製石斧	8.0	4.2	2.7	151.17	蛇紋岩	刃部欠損
39	IV C 19 k	Ⅱ層	磨製石斧	(11.6)	9.3	7.8	609.8	ひん石	
40	P 6	柱痕痕	石皿	12.4	9.7	5.6	989.2	花崗岩	
41	IV C 8 b	Ⅱ層	石皿	(7.3)	(6.5)	4.9	350.5	ディサート	
42	P 15	理上	石皿	(17.1)	(14.6)	7.9	2,865.4	斑岩	
43	IV C 15 i	Ⅱ層	石皿	12.6	(17.9)	9.8	3,660.0	斑岩	
44	IV C 18 k	樹倒木	石皿	18.8	12.9	5.3	2,012.1	ディサート	
45	IV C 19 e	Ⅱ層	石皿	21.7	(13.6)	8.8	3,965.0	ひん石	
46	IV C 18 k	樹倒木	石皿	(22.0)	(26.7)	7.7	6,400.0	斑岩	



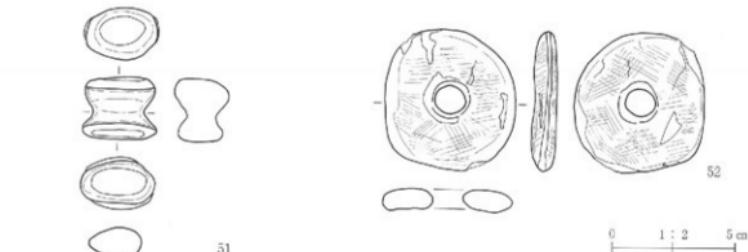
## 土製品観察表

## 土偶

NO	出土地点	部位	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	つくり	文様	時期
47		カクラン	腹部	4.1	5.7	2.3	29.42	中実	縫合、側突起、背面に沈文	後期
48	IV C 15 h	カクラン	右側	2.9	2.7		18.92	中実		後期

## 円盤状土製品

NO	出土地点	部位	盤径(cm)	横径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	文様	備考
49	IV C 15 i	Ⅱ層	6.7	7.2	1.2	59.37	明代模	外縁打欠
50	IV C 19 k	Ⅱ層	3.1	3.1	0.9	10.10	無文	外縁打欠



## 石製品観察表

NO	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
51	RDOH1	底面	不明	2.7	3.0	1.2	17.69	頁岩	
52	IV C 17 i	Ⅱ層	有孔石製品	5.7	5.3	0.9	43.0	頁岩	

第15図 出土遺物 (5)

## 付編 自然化学分析

青川純子（古代の森研究会）

## 戸仲遺跡第2次調査で出土した炭化種実

## 1. はじめに

戸仲遺跡は盛岡市南東の葉川により形成された河岸段丘上に位置する绳文時代の集落跡であり、遺物はおもに後期中葉から晩期中葉が検出されている。調査区内では17基の柱穴状土坑が検出されており、このうち晩期前葉～中葉とみられるP6（柱穴状土坑）埋土39kgおよび楓倒木とされる木痕周辺のIVB2vグリッドに集積していた炭化物約26kgより炭化種実が得られたため、当時の食料状況を調査する目的で分析を行った。

## 2. 同定結果および考察

表1 戸仲遺跡出土炭化種実

同定結果を表1に示す。P6からはトノキ子葉の大きい破片を出土し、コナラ節、ホオノキ、ミズキ、ヤマボウシ、エノキグサを少量出土した。ホオノキは炭化した子葉のみ、ミズキとエノキグサ

分類群名	学名	出土部位	P6柱穴状土坑		IVB2v II層下部
			1	2	
クヌギ節	<i>Quercus sect. Acuta</i>	炭化子葉半分	1	-	-
コナラ属	<i>Quercus</i>	炭化子葉半分	1	-	2
ホオノキ トノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunberg <i>Aesculus turbinata</i> Blume	炭化子葉 炭化子葉半分	-	1	-
		炭化子葉	6	-	-
		炭化子葉3分の1	7	-	-
		炭化胚軸	-	4	1
		炭化種皮破片	5	4	-
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemslay	内果皮	-	1	1
ヤマボウシ	<i>C. kousa</i> Buerger ex Hanse	炭化内果皮破片	-	3	-
エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> L.	種子	-	1	4

は炭化していないかった。IVB2vからはコナラ節、トノキ、ミズキ、エノキグサをいずれも少量出土した。ミズキ、エノキグサは炭化していないかった。以下に同定された種実の形態記載をおこなう。

クヌギ節：高さ13ミリメートルでほぼ球形、表面にはきわめて浅く不明瞭な溝があり、上部には胚軸の抜けた小孔がある。

コナラ属：高さ15ミリメートルで楕円形、子葉表面には縦に浅い溝があり、上部に胚軸の抜けた小孔がある。

ホオノキ：高さ6ミリメートルの子葉で、三角形、表面には縦方向に浅い溝がある。種子壁は堅く、炭化しても残っていることが多いが、本遺跡では中の子葉だけが出土した。

トノキ：子葉、胚軸、種皮破片を出土した。完形であればゆがんだ球形である。子葉は表面に不規則な凹凸があり、断面は子葉中心から放射状に細胞が配列しているので放射状にひびがはいる。胚軸は細長い三角形で湾曲して薄い。種皮は表面に流理状ないし指紋状の微細模様があり、光沢がある。比較的大きい破片で胚軸と種皮とともに出土しているので、完形で炭化し廃棄時もしくは取り上げ時に割れたと考えられる。

ミズキ：内果皮は偏球形で高さより幅がやや長く上下方向全面に流理状の溝がある。

ヤマボウシ：内果皮はゆがんだ三角形で壁が厚く表面は光沢が無く滑らかである。

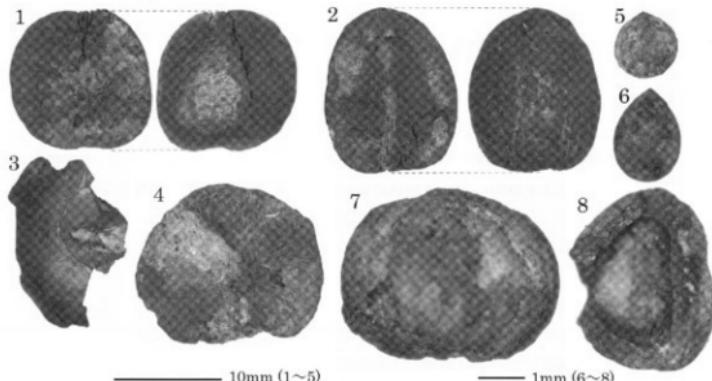
エノキグサ：種子は水滴形で表面は平滑、きわめて微細で規則的な網目模様が全面にある。

本遺跡は調査区が狭く、柱穴状土坑が検出されているが建物跡か否かの確認はされていない。柱穴には炭化物とともに上器片などが堆積しているため、柱を抜いた穴にこれらの炭化物等を廃棄したと考えられる。ミズキ、エノキグサは炭化していないため混入の可能性も否定できないが、冷涼な地域

では条件によって残存する場合も考えられ、柱穴状土坑内の埋土であることから混入の可能性は極めて低いと考えられる。出土種実のうちクヌギ節、コナラ属、トチノキはあく抜き処理の後食用とされる種類であり、ミズキ、ヤマボウシはそのまま食用とできる種類である。縄文時代晩期の集落ではクヌギ節やコナラ属、トチノキを利用していたと考えられ、ヤマボウシ、ミズキもとともに利用していた可能性がある。縄文時代には中期後半頃からトチノキの食料としての利用が本格化し（吉川ほか2005）、後晩期になると大量利用の痕跡とされる廃棄層が是川遺跡（吉川2002）など各地で発見されており、本遺跡周辺でもコナラ属などとともに普通に利用されていたと考えられる。

吉川純子, 2002, 是川中居遺跡D区より産出した大型植物化石, 八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集八戸市内遺跡発掘調査報告書15是川中居遺跡1, 青森県八戸市教育委員会, 76-87.

吉川昌伸・吉川純子, 2005, 縄文時代中・後期の環境変化, 日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集, 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会, 13-22.



図版1 戸仲遺跡第2次調査出土種実

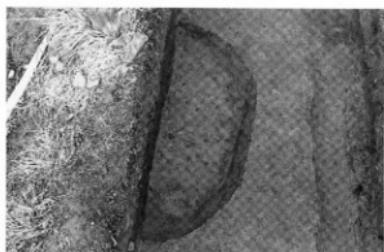
1.クヌギ節、子葉 2.コナラ属、子葉 3.トチノキ、種皮破片 4.トチノキ、子葉 5.ホオノキ、子葉 6.エノキグサ、種子 7.ミズキ、内果皮 8.ヤマボウシ、内果皮



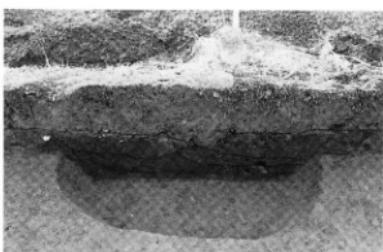
遺跡遠景（東から）



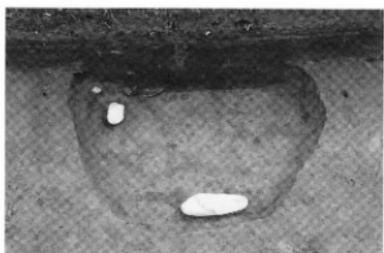
調査区（真上から）



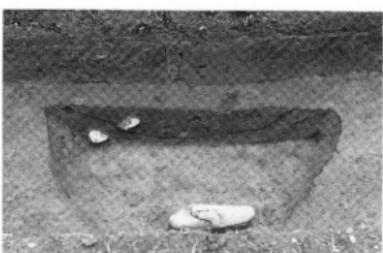
RD007 (南東から)



RD007 断面 (北東から)



RD008 (南西から)



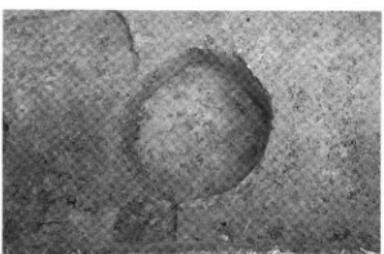
RD008 断面 (南西から)



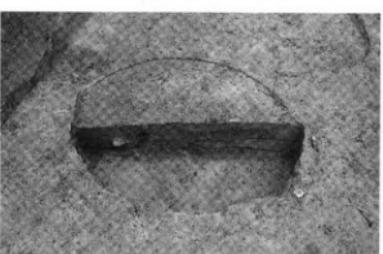
RD009 (南西から)



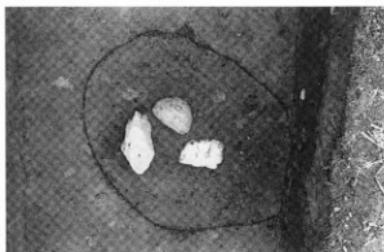
RD009 (南西から)



RD010 (南東から)



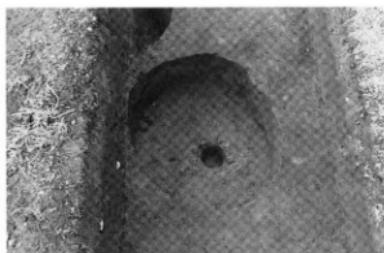
RD010 断面 (南東から)



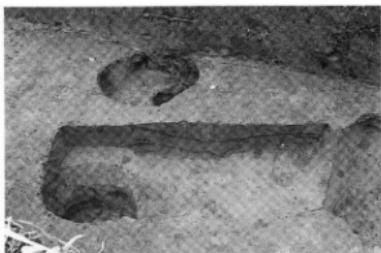
RD011 検出（北東から）



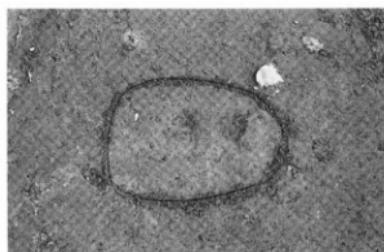
RD011 断面（北から）



RD011 完掘（南東から）



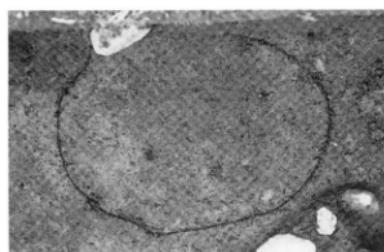
RD012 断面（北東から）



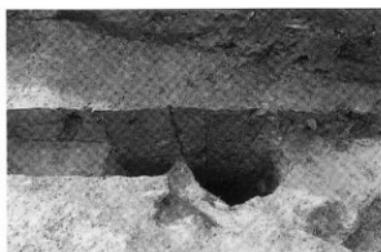
RF007（南東から）



RF007 断面（南東から）



RF008（北東から）



RF008 断面（北東から）



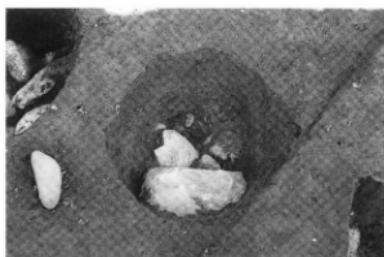
P 6 (南東から)



P 6 断面 (南東から)



P 5 (南東から)



P 12 (南西から)



土器出土状況 (P 7)



基本土層 (北東から)



調査前風景 (北東から)



調査区 (南東から)

写真図版4 検出遺構 (3)、基本土層、調査区



1



3



4



5

RD009



2



6



7



8



9

RD010



10



12



15

P7

P15



11

P6



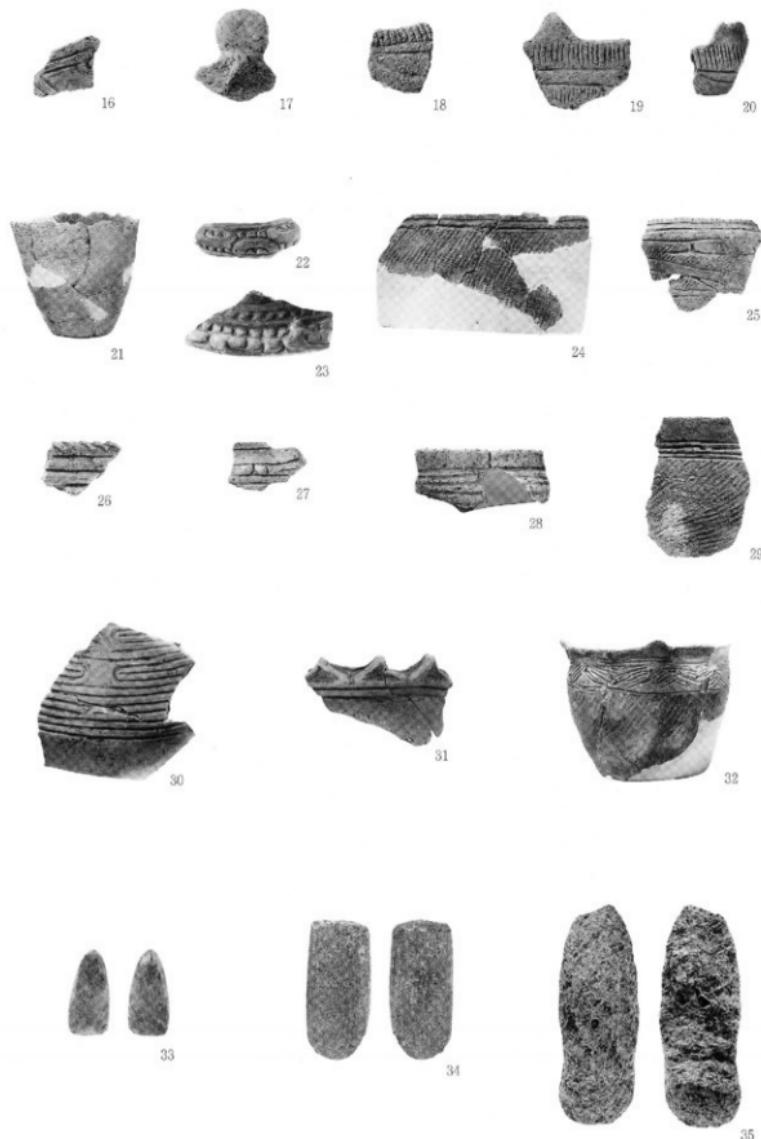
13



14

P10

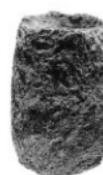
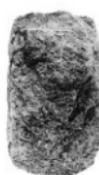
写真図版 5 出土遺物 (1)



写真図版 6 出土遺物 (2)



36



38



37



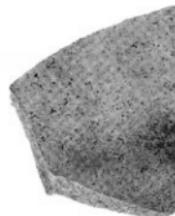
39



40



41



42



43



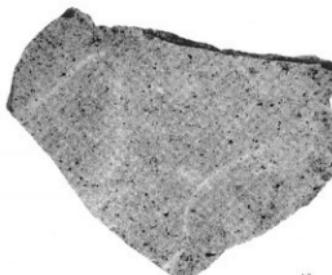
44



45



46



写真図版 7 出土遺物 (3)



47



48



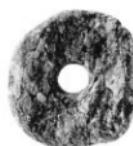
49



51



52



50



炭化種子の一部



動物遺存体の一部

## (8) 湯沢 I 遺跡

所 在 地	北上市湯沢 7 地割ほか	遺跡番号・略号	NE57-0097・YZ・I-07
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局土木部	調査対象面積	720 m <sup>2</sup>
事 業 名	緊急地方道整備事業平沢地区	発掘調査面積	720 m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年6月1日～6月29日	調査担当者	杉沢昭太郎・田中美穂

### 1 調査に至る経過

湯沢 I 遺跡は、緊急地方道路整備事業である主要地方道花巻北上線黒岩工区の事業区域内に存在することから、工事施行前の発掘調査が必要となり、平成19年度に発掘調査を実施した。

主要地方道花巻北上線は、花巻市から北上市に至る幹線道路であり、国道4号の代替路線として交通量の増大が見込まれている。黒岩地区は沿線の黒岩小学校及び東陵中学校の通学路となっているが、近年の交通量の増大に伴い、歩行者が危険にさらされていることから、歩道の整備を行っているものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、当部から平成18年10月3日付北総土第503号にて岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（以下、生涯学習文化課）に試掘調査を依頼し、平成18年10月19日に生涯学習文化課が試掘調査を実施した。その結果、工事施行前の発掘調査が必要であることが明らかになった。

その結果を踏まえ、生涯学習文化課の調整を受けて、財団法人岩手県文化振興事業団との間で平成19年5月25日に受託契約を締結し、発掘調査を実施したものである。

（県南広域振興局北上総合支局土木部）

### 2 遺跡の位置と立地

湯沢 I 遺跡は北上市の東部、JR東北本線北上駅から約5.5kmに位置し、北上川東岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の範囲は南北約300m、東西約180mの範囲があり、標高は82～85mを測る。調査前の現況は畑地・宅地などであった。



第1図 遺跡の位置

### 3 基本層序

調査区は東から西へ緩やかに下る緩斜面であるが、北端だけは沢地形の部分となる。調査したところ削平により基盤層の下まで削られていた。他の調査区でも宅地のところは基本的に旧表土が残っておらず、現表土の下は地山となるところが多かった。ここでは調査区北側での状況を記すが、そこでは遺構・遺物は殆ど出土しなかった。

第I層 10Y R2/3黒褐色土 層厚10~20cm  
現表土。土器・石器を含む。

第II層 10Y R2/2黒褐色土 層厚20~40cm  
土器・石器を含む。

第III層 10Y R3/3暗褐色土 層厚10~20cm  
遺構検出面。

第IV層 10Y R6/6明黄褐色土 層厚30cm~

### 4 調査の概要

湯沢 I 遺跡は北上市の東部、JR東北本線北

上駅から北東約5.5kmに位置し、北上川東岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の範囲は南北約300m、東西約180mの範囲があり、標高は82~85mを測る。北上川東岸の湯沢、平沢、黒岩地区は段丘面とその東側にある山地との幅が狭いこと、この山地より流れる小規模な沢が東西方向につくりだした細長い緩斜面がいくつも連なっているのが特徴といえよう。したがって遺跡も多くは段丘面と沢に沿って形成された狭い緩斜面に分布している。中世城館などは段丘縁辺部の他、舌状に張り出した丘陵先端部や集落・北上川を見下ろす山頂部付近などを利用している。本遺跡は段丘面から沢筋に沿った緩斜面へ地形的にも変化する部分に立地しており、北→北東部はすぐに山地となっている。緩やかに沢の流れる南側と北上川のある西側へ下がっていく地形である。

今回の調査では南側で平安時代の堅穴住居跡が1棟、井戸跡が2基検出された。他に近世の柱穴が約100個、時期不明の土坑5基・溝跡6条が検出された。遺物は平安時代の土師器・須恵器が小コンテナ1箱、縄文時代の土器・石器が小コンテナ1箱、近世陶磁器が小コンテナ0.5箱出土した。

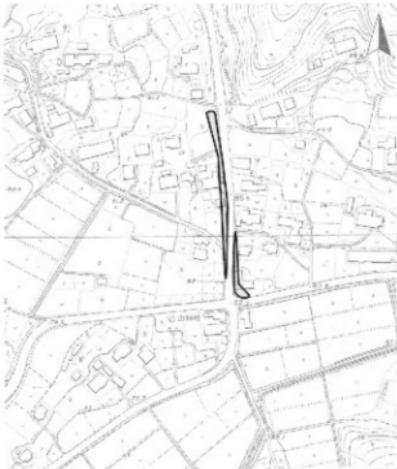
#### (1) 遺構

<堅穴住居跡>（第5図・写真図版3）

1号堅穴住居跡：西側調査区の南側平坦部で検出された。一辺が約3.4mあるが西側が殆ど調査区外へ延びており、全体規模は不明であるがやや不整な方形を呈すると思われる。底面は堅ね平坦であったが、とくに貼床をしたり、床面が固く締まった部分などはみられなかった。壁の立ち上がりは南壁が最も緩やかとなる。柱穴・壁溝はない。埋土は黒褐色土を主体とする人為堆積のようである。カマド・焼土なども検出されていないので、調査区外にあると推測される。出土遺物は無いが付近には土師器片が散在すること、平安時代と見られる1号井戸跡に近いことから、本遺構も平安時代に属する可能性が最も高いと判断される。

<井戸跡>（第5図・写真図版3・4）

1号井戸跡：西側調査区の南側平坦部で検出された。1号堅穴住居跡の約2m南側に位置している。



第2図 調査区と周辺の地形

遺構検出面での上端は南北2.1m以上、東西1.7m以上、下端は径0.4mの円形で深さは約1.2mを測る。底部付近まで精査が及ぶと壁から湧水が認められ、壁も深さ1m以上になるとグライ化していく。埋土は黒褐色土から暗灰色粘土で下位のほうはグライ化している。底部付近は粘土主体で埋め戻されていた。須恵器甕片(5)と須恵器系上器(4)が出土した。出土遺物から平安時代と考えられる。

2号井戸跡：東側調査区の南端平坦部で検出された。1号井戸跡とは直線距離で35m離れている。遺構検出面での上端は南北2.1m以上、東西1.8m以上、下端は径1.0mの円形を基調とし深さは約0.9mを測る。井戸枠などはない素掘りの井戸のようである。埋土はグライ化し灰色から褐灰色土が主体で人為堆積のようである。湧水は無かった。須恵器系土器(3)、須恵器壺(9)、甕(7)が出土したことから、木造構は平安時代に属する。

#### <十坑>(第6図・写真図版4・5)

土坑の特徴については一覧表にまとめた。

遺構名	位置	規模(長×幅×深m)	埋土	時期ほか
1号十坑	東側調査区の中央	1.3×0.9×0.2	褐色土ブロックが多く含む人為堆積。	出土遺物もなく、時期は不明。
2号土坑	東側調査区の中央	1.3×1.2×0.4	黄褐色土ブロックが多く含む人為堆積。	出土遺物もなく、時期は不明。
3号土坑	東側調査区の中央	1.5×0.6×0.4	暗褐色土ブロックが多く含む人為堆積。	出土遺物もなく、時期は不明。
4号土坑	東側調査区の南部	1.6×0.8×0.3	自然堆積か人為堆積か不明。	出土遺物もなく、時期は不明である。自然堆積の蘊みか。
5号土坑	東側調査区の中央	2.0×0.8×0.3	暗褐色土ブロックが多く含む人為堆積。	出土遺物もなく、時期は不明。

#### <溝跡>(第7図・写真図版2・5)

検出された溝跡は6条であるが、幅の狭い調査区であったために全容を把握できた遺構はない。出土遺物が無く、時期不明なものが多いが、遺構検出面から現表土から掘り込まれたものはない。溝の方向が現在の地割と異なり本来の地形に影響を受けているとみなせる1~4・6号溝などは中世-古代に構築されたのかもしれない。各遺構の特徴については一覧表に整理した。

遺構名	位置	規模(長×幅×深m)	埋土	時期ほか
1号溝跡	西側調査区の南部	4.6×0.4×0.2	自然堆積のようである。	出土遺物なし。時期不明。
2号溝跡	西側調査区の南部	7.2×0.3×0.1	自然堆積のようである。	出土遺物なし。時期不明。
3号溝跡	西側調査区の中央	10.0×0.7×0.1	自然堆積か人為堆積か不明	出土遺物なし。時期不明。
4号溝跡	西側調査区の中央	4.0×0.4×0.1	自然堆積か人為堆積か不明	出土遺物なし。時期不明。
5号溝跡	東側調査区の中央	1.5×0.9×0.1	暗褐色土の厚層。土器類須恵器片出土	自然地形か。
6号溝跡	東側調査区の北部	11.2×0.7×0.3	自然堆積のようだが、湧水の痕跡あまりない。	出土遺物なし。時期不明。

#### <柱穴>

調査区内で112個確認された。東側調査区では南部から、西側調査区では中央部にまとまりを持つて分布していた。調査区の幅が狭く建物を推定することは難しかったが東側調査区の柱穴群は東側の調査区外へ、西側調査区の柱穴群は西側の調査区外へ広がっていくようである。付近から出土した陶磁器や現表土から掘り込まれている柱穴はないことから、その多くが近世の柱穴になる可能性が高い。

#### (2) 出土遺物(第10図・写真図版6)

遺物は、小コンテナで約2箱分出土した。平安時代の土器・須恵器が最も多く、次に近世陶磁器、繩文土器・石器類である。ここでは不掲載遺物も含めた出土傾向について述べ、個々の特徴は観察表に記した。

<土師器・須恵器>

最も多く出土したのは 2 号井戸跡とその付近である。次いで 1 号井戸とその周辺である。他に西側調査区の北端と南端から数片出土していた。9 世紀後半から10 世紀前半頃が主体のようである。

<近世陶磁器>

比較的柱穴が密に分布していた東側調査区の南端と西側調査区の中央部から出土した。この他に西側調査区の北部から 2 点程出土している。

<縄文土器・石器>

西側調査区の北部と東側調査区の中央部から出土した。今回の調査は西隣りの三坊木遺跡に近い部分を調査したわけだが、予想に反して出土量は少なかった。

5 まとめ

今回の調査区は遺跡の中でも西端部を細長く調査したことになる。調査区の北端が遺跡の北西端でもあり、調査区の南端が遺跡の南西端ということになる。隣接する遺跡として西側の段丘面には三坊木遺跡（平安・縄文）が、東側沢沿いに張り出した丘陵には湯沢館（中世・縄文中期）がある。沢を挟んだ南東側には神行田遺跡（縄文中期）、南東へ 500m 程行くと中世和賀氏の居城であった黒岩城がある。ここでは、時代ごとに推察される点、課題として残った点などを整理しておく。

縄文時代の遺構は検出されていない。土器片と礫石器が少量出土したのみであった。土器片は西側調査区からのみ出土し東側調査区からは出土しなかった。遺跡の中心により近い東側調査区で遺物が出土しなかったことから、出土した土器片は西隣する三坊木遺跡に関連のある資料とみた方が良いのではないかろうか。

平安時代の遺構は竪穴住居跡が 1 棟、井戸跡 2 基が検出された。9 世紀後半から10 世紀前半頃を主体とする土師器・須恵器もこれらの遺構内及びその近くから出土していた。遺構群は遺跡南西端に偏ってみられる事、西隣する三坊木遺跡でも土師器・須恵器が散布していることから、平安時代の集落は湯沢 I 遺跡の南西部から三坊木遺跡にかけて展開しているのかもしれない。古代の井戸跡は肘沢城や徳丹城以外にも事例がある。北上市では上河岸 II 遺跡、岩崎台地遺跡群などが知られている。他に金ヶ崎町妻根遺跡、奥州市江刺区宮地遺跡や落合 III 遺跡、二戸市諏訪前遺跡があり、宮城県北部では田尻町金鏡神遺跡、高清水町鶴音沢遺跡から検出されている。多くは井戸枠を有する井戸で、本遺跡のように素掘りの井戸は多くはない。狭い調査区であったため集落と井戸との関係についてもこれ以上は明らかにはできない。

中世和賀氏の居城である黒岩城と本遺跡とは直線距離で 500m 程である。また東隣りは湯沢館である。黒岩城の周辺には中世の集落が散在していたと考えるのが素直で、本遺跡からも中世の遺構・遺物が確認されると予想された。今回の調査区は狭かったため、該期の遺構・遺物は見つからなかったが本遺跡が中世の遺跡ではないと考えるのは早計である。前述のように城館に近いこと、沢沿いに東へ行けば東和町、遺跡から北へ向かえば更木・花巻へ通じ、南は黒岩・立花方面に出ることから、人々の往来があったことは容易に想像ができる。この時期の集落遺跡はあまり調査例のない本県に於いては注視したい遺跡と思っている。

近世の遺構としては 112 個の柱穴が検出されているが、現在ある家屋の近くからまとまって分布する傾向があった。幅の狭い調査区であったため建物を推定することはできなかったが、概ね現在の集落と近世の集落とは重複しているのであろう。陶磁器の出土状況も同様の傾向を示す。近世集落の成立時期と展開など課題が残っているが、中世から連続する可能性もあり興味深い遺跡である。

なお、湯沢 I 遺跡に関わる報告は、これをもってすべてとする。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	湯沢I遺跡							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	杉沢昭太郎・田中美穂							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0833 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 ○○°	東経 ○○°	調査期間	調査面積	調査原因	
湯沢I遺跡	岩手県北上市 湯沢I地割ほか	03206	NE57- 0097	39度 19分 3秒	141度 9分 47秒	2007.6.1 ~ 2007.6.29	720m <sup>2</sup>	緊急地方道整備事業平沢地区に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
湯沢I遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器・石器	・縄文時代の遺構は検出されていない。			
	集落跡	平安時代	住居跡 井戸跡	1棟 2基				土師器 須恵器
	散布地	近世	柱穴	112個				陶磁器
		不明	土坑 溝跡	5基 6条				
要約	平安時代の住居跡・井戸跡、近現代の柱穴・土坑類などが検出された。特に、平安時代の井戸跡は一般集落から見つかるることは稀で興味深い資料といえる。また、縄文時代の遺物が少量出土しているが、遺構は確認されていない。 本遺跡は、中世と賀氏の本城黒岩城や白山神社にも近い。中世の遺構・遺物は確認されなかつたが、本遺跡内にはこの時期の遺構・遺物がある可能性が高いと考えられる。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

縄文土器観察表

仮番	番号	出土地点、層位	器種	部位	文様の特徴	その他
7B	1	西側調査区北側、I~Ⅲ層	鉢類か	体部	LR	後曉期の掛製土器か
7A	2	西側調査区北側、I~Ⅲ層	鉢類か	体部	LR	後曉期の掛製土器か

土師器須恵器

仮番	番号	出土地点、層位	種別	器種	部位	調整・特徴	法寸(cm)	その他
12	3	2号井戸跡埋土	須恵器系土器	壺	底一体	ロクロ	底深: 3.6	
14	4	1号井戸跡埋土	須恵器系土器	壺	底一体	ロクロ	底深: 5.5	須恵器か
5	5	1号井戸跡埋土	須恵器	甕	外: タタキ			
4	6	東側調査区中央、換面塗	須恵器	甕	外: タタキ			
3	7	2号井戸跡上	須恵器	甕	外: タタキ			
2	8	東側調査区、南端部	須恵器	甕	外: タタキ			
13	9	2号井戸跡埋土	須恵器	壺	ロクロ	口径: 20.0		
1	10	5号調査区	須恵器	甕	外: タタキ			
6	11	2号井戸跡検出面	須恵器	甕	外: タタキ			
8	12	西側調査区北側、I~Ⅲ層	須恵器	甕	外: タタキ			

## 陶磁器

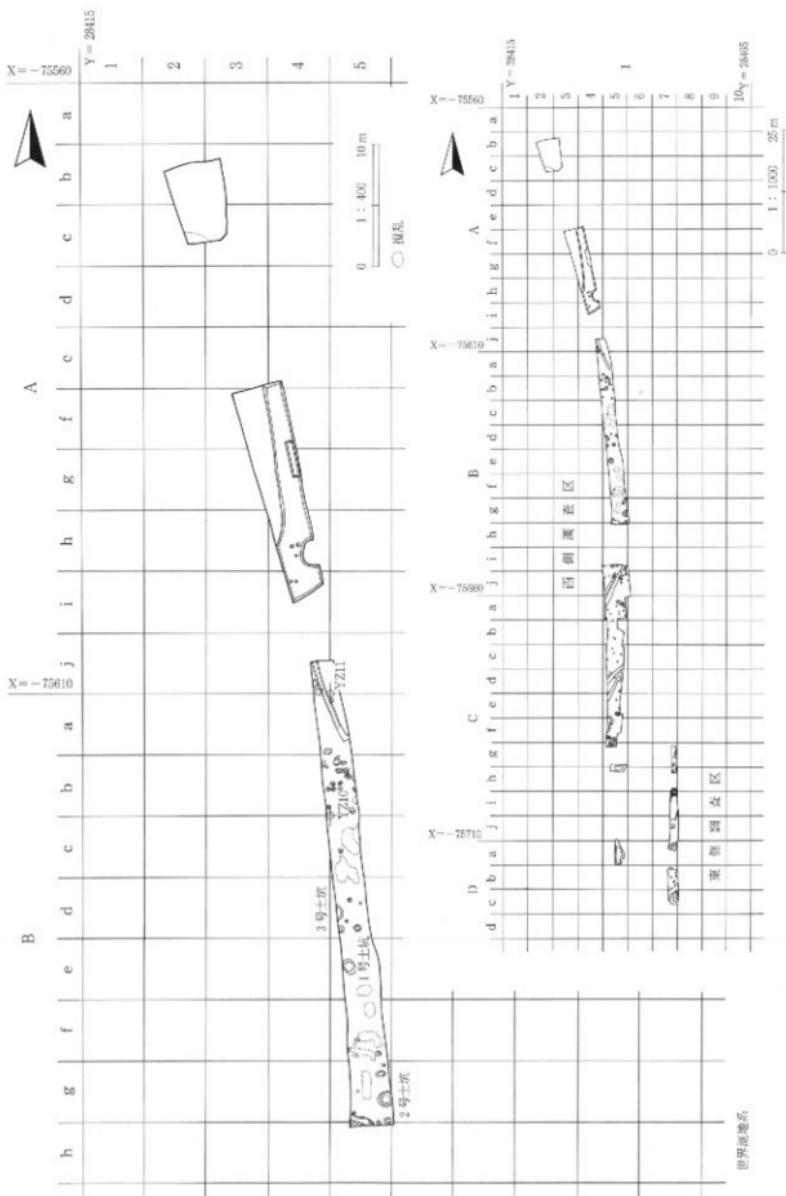
仮番	番号	出土地点、層位	種別	構体	部位	特徴	法寸(cm)	その他
9	13	西側調査区北部、I層	陶器	瓶体	体部	素面		19c 以降
10	14	東側調査区内端	陶器	罐体	体部	深丸		19c 以降
15	16	西側調査区中央、II層	陶器	小皿	口縁-底部	鉢形、焼明皿か	口径:7.5、底径 4.5、高さ1.6	18c 後~19前頭
16	16	西側調査区中央、II層	陶器	折線皿	底部	灰釉、七哩文押印	底径3.1	18c 後、大堀相馬
11	17	東側調査区南端	陶器	蓋	縁	澤褐色の胎		19c

## 石器

仮番	番号	出土地点、層位	器種	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
17	18	東側調査区中央部、I ~Ⅱ層	駿石	完形	12	6.5	3.3	382.1	

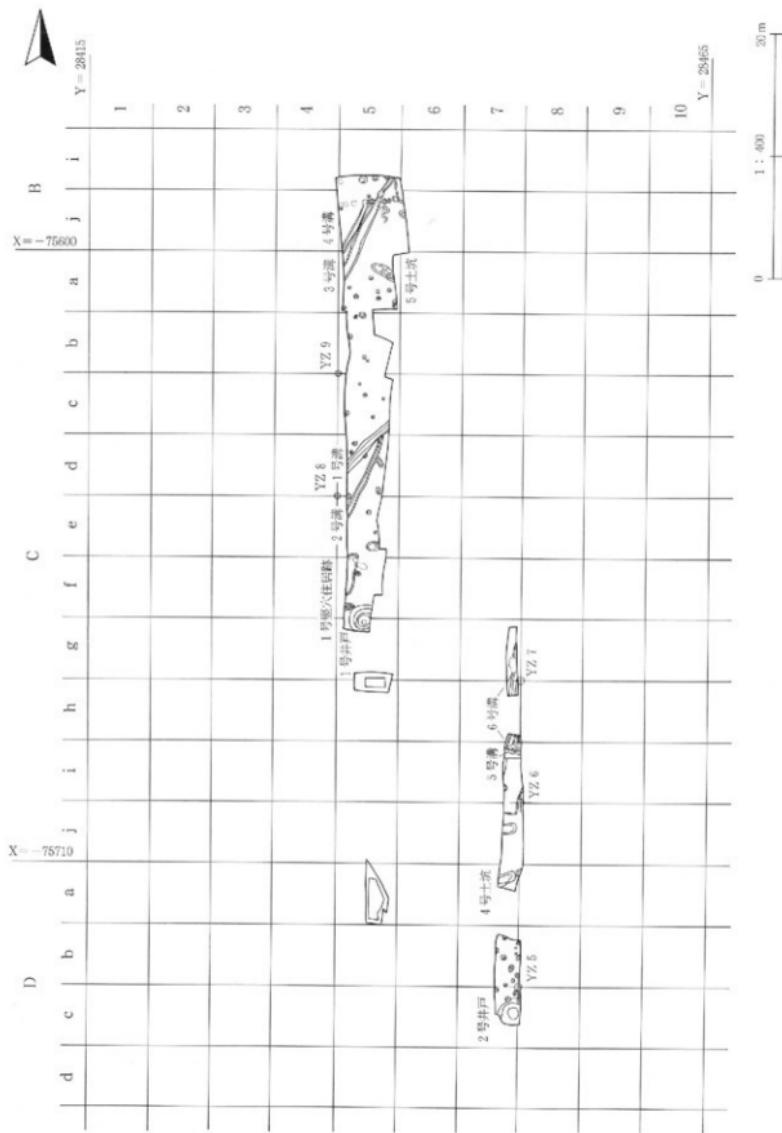
## 柱穴觀察表

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1	21	19	9.7	41	46	44	14.7	81	25	25	11.2
2	16	16	7.3	42	70	39	29.5	82	42	37	28.2
3	34	32	5.3	43	85	49	22.9	83	33	25	35.1
4	32	23	21.9	44	49		17.4	84	—	24	4.5
5	21	18	10.9	45	28	27	36.9	85	—	37	7.0
6	19	18	9.3	46	44	42	22.7	86	56	36	12.6
7	16	16	7.6	47	25	21	22.8	87	39	35	8.9
8	—	54	7.9	48	30	28	13.1	88	23		10.5
9	55	53	8.1	49	50	46	11.4	89	38	38	28.0
10	14	13	22.7	50	53	—	11.4	90	—	45	18.6
11	30	23	24.8	51	45	39	7.9	91	10	9	13.6
12	—	34	8.8	52	63	55	11.5	92	20	17	11.5
13	73	47	21.9	53	51	36	5.6	93	45	—	6.1
14	59	26	12.1	54	36	35	3.9	94	—	32	9.1
15	51	50	9.4	55	44	39	5.1	95	44	—	5.4
16	42	32	17.0	56	52	47	5.6	96	16	14	10.9
17	23	20	8.9	57	38	32	17.3	97	13	11	9.2
18	11	10		58	23	20	4.6	98	24	24	22.1
19	55	—	21.1	59		63	13.5	99	40	36	55.9
20	37	20	14.4	60		46	16.7	100	34	—	34.5
21	59	43	14.6	61		53	14.3	101	46	38	42.4
22	56	43	6.8	62	29	29	14.0	102	16	16	11.3
23	48	45	21.1	63	57	25	8.9	103	26	23	22.0
24	42		7.5	64	27	15	18.4	104	29	26	9.4
25	35	34	13.6	65	43	28	13.5	105	21	21	3.6
26	49	32	21.6	66	32	30	5.4	106	47	—	8.9
27	46	40	17.5	67	33	33	6.2	107	18	17	9.6
28	41	39	17.9	68	24	18	28.3	108	22	22	10.0
29	33	28	21.6	69	34	33	6.5	109	30	—	3.3
30	34	—	32.0	70	26	19	14.6	110	21	23	21.3
31	30	24	6.9	71	48	43	7.0	111	21	22	14.5
32	53	47	23.5	72	28	19	13.4	112	37	27	
33	31	28	8.2	73	—	32	7.1				
34	34	30	6.6	74	8	8	—				
35	21	20	7.9	75	23	22	28.9				
36	28	24	5.1	76	8	8	16.8				
37	—	51	9.1	77	20	19	21.8				
38	58	50	5.5	78	27	25	23.0				
39	33	32	7.4	79	22	20	13.7				
40	22	21	16.5	80	43		8.7				



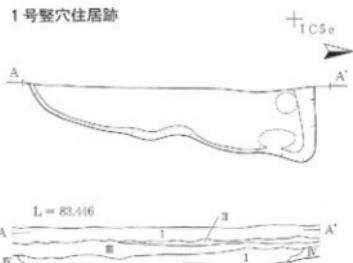
第3図 湯沢I遺跡 遺構配置図(1)

(8) 湯沢 I 遺跡



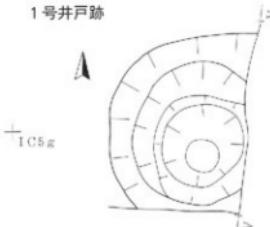
第4図 湯沢I遺跡 遺構配置図(2)

## 1号竪穴住居跡



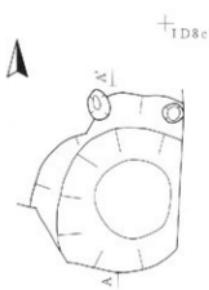
- 1号竪穴住居跡  
 1 10Y4/1 岩灰土 粘性、締まりやや有り。(灰土)  
 2 灰土  
 3 10YR5/3 緑褐色土 粘性やや弱。締まりやや有り。  
 4 10YR5/2 黄褐色土 粘性やや弱。締まりやや有り。  
 5 10YR5/2 黄褐色土 地山ブロック少量含む。  
 粘性。締まりやや有り。(人骨)

## 1号井戸跡



L = 83.146

## 2号井戸跡



## 1号井戸跡

- 1 10YR5/3 岩灰土 粘性やや弱。締まりやや有り。(灰土)  
 2 10YR5/5 灰褐色土 地山ブロック多量含む。粘性弱。  
 締まりやや有り。(灰土)  
 3 10YR5/5 灰褐色土 地山ブロック多量含む。粘性弱。  
 締まりやや有り。(灰土)  
 4 10YR5/1 岩灰土 地山ブロック多量含む。粘性弱。  
 締まりやや有り。(灰土)  
 5 10YR5/1 岩灰土 地山ブロック多量含む。粘性弱。  
 締まりやや有り。(灰土)  
 6 10YR5/2 岩灰土 地山ブロック多量含む。粘性有り。  
 締まっている。  
 7 10YR5/2 岩灰土 地山ブロック多量含む。粘性有り。  
 締まっている。

2 10YR5/2 岩灰土 粘性有り。締まっている。

3 10YR5/2 岩灰土 粘性有り。締まっている。

専からというより壁の本筋にみ出ている差し柱がある。

自然な人為かは不明。地山ブロックはあまり入らない。

既付記は軸上全体で想め焼いていた。

専からというより壁の本筋にみ出している差し柱がある。

自然な人為かは不明。地山ブロックはあまり入らない。

既付記は軸上全体で想め焼いていた。

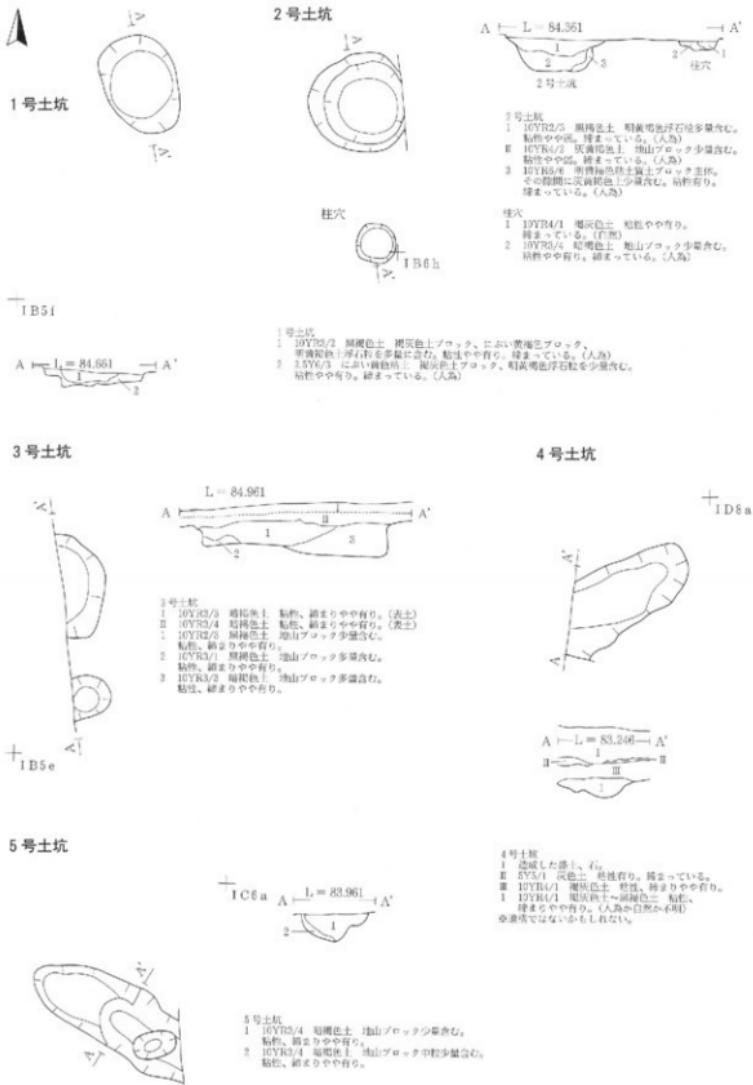
## 2号井戸跡

- 1 N5/1 灰褐色土 硬板、地山ブロック少量含む。粘性有り。  
 締まりやや有り  
 2 10YR5/2 岩灰土 全体に酸化している。壁体は地山  
 ブロックを含む。粘性、締まりやや有り。  
 3 N3/1 灰褐色土 全体に酸化している。粘性有り。  
 締まりやや有り  
 4 N3/1 灰褐色土 全体に酸化している。地山ブロック大・  
 中量含む。粘性有り。締まりやや有り。  
 \*基本的には人為修復でよいと思う。

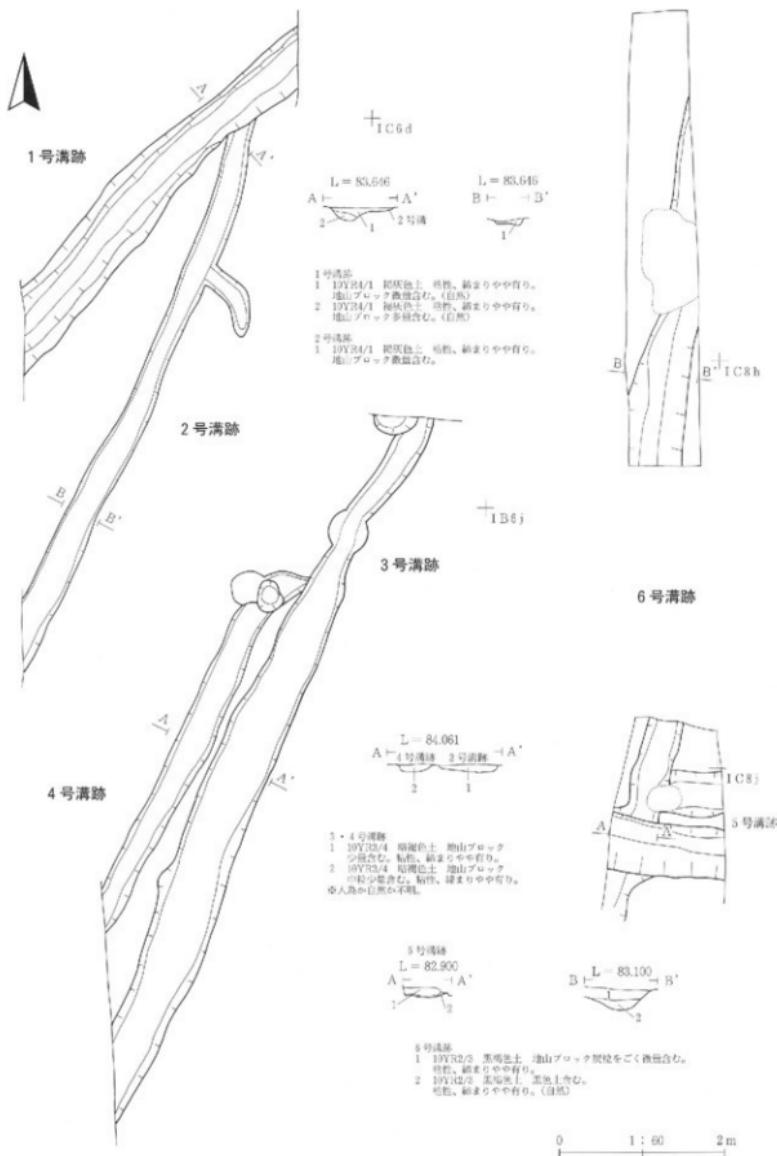
0 1 : 60 2m

第5図 1号竪穴状遺構・1号・2号井戸跡

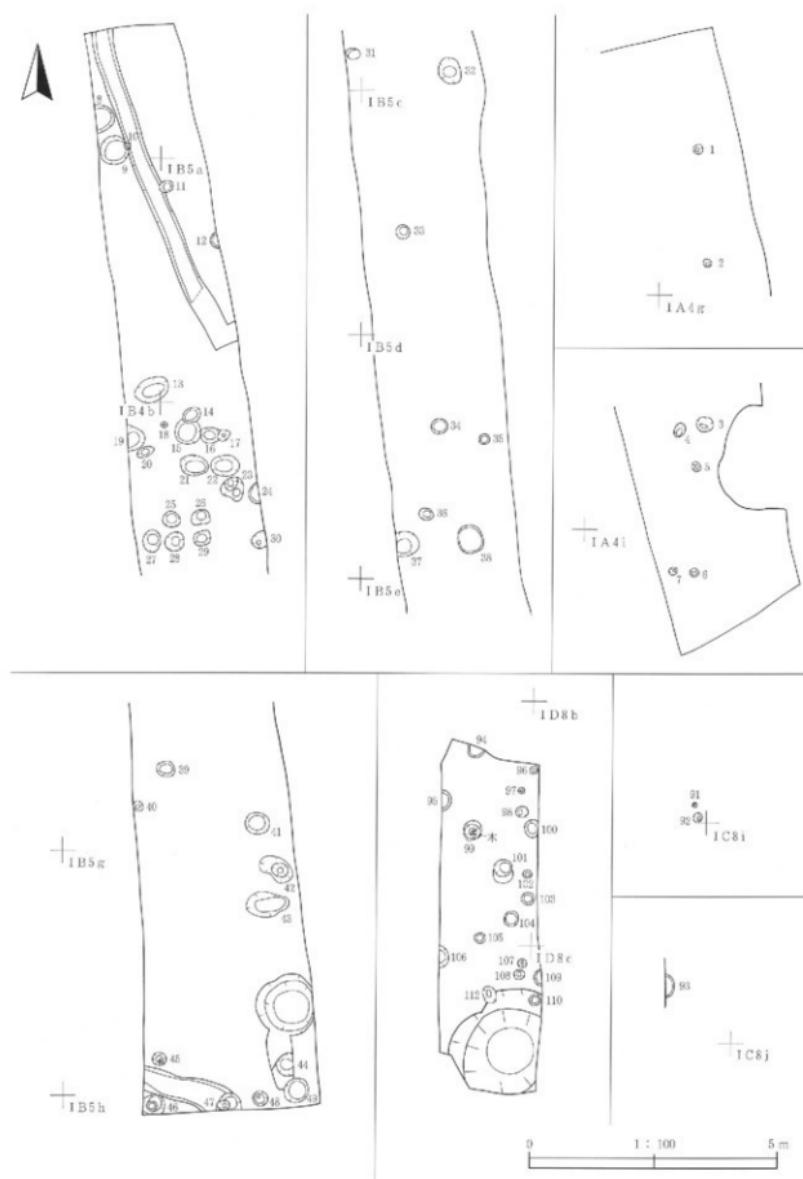
(5) 湿沢 I 遺跡



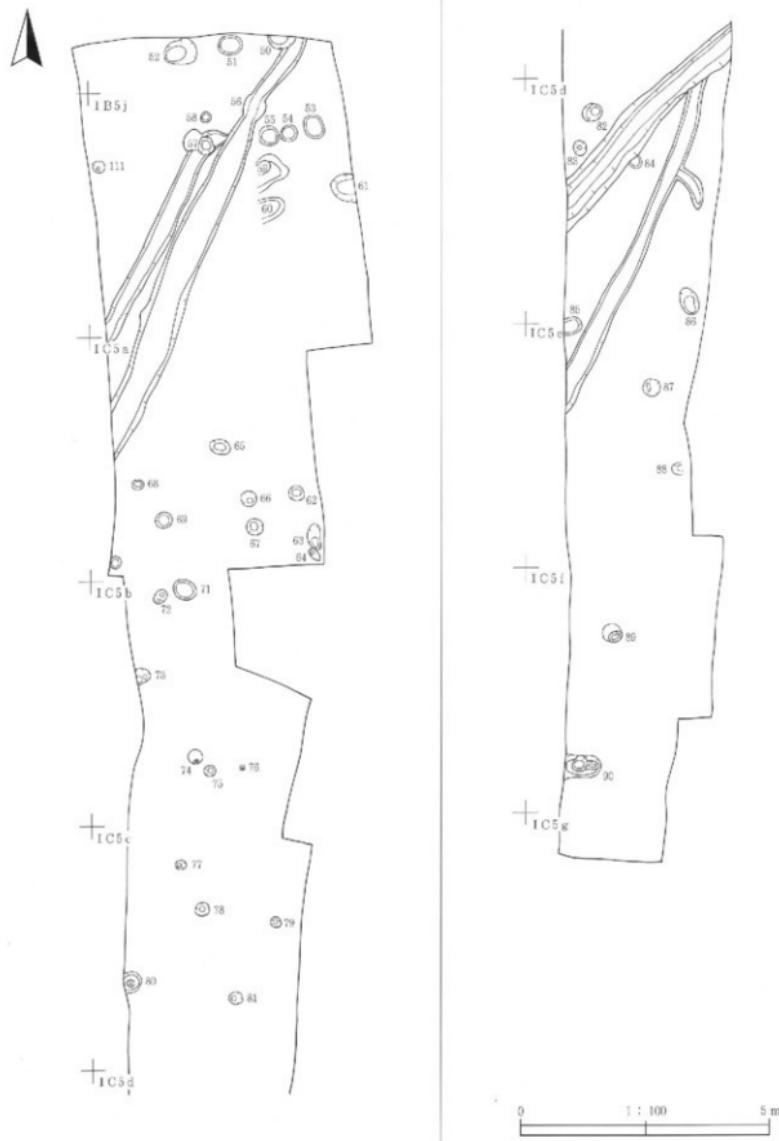
第6図 1号～5号土坑



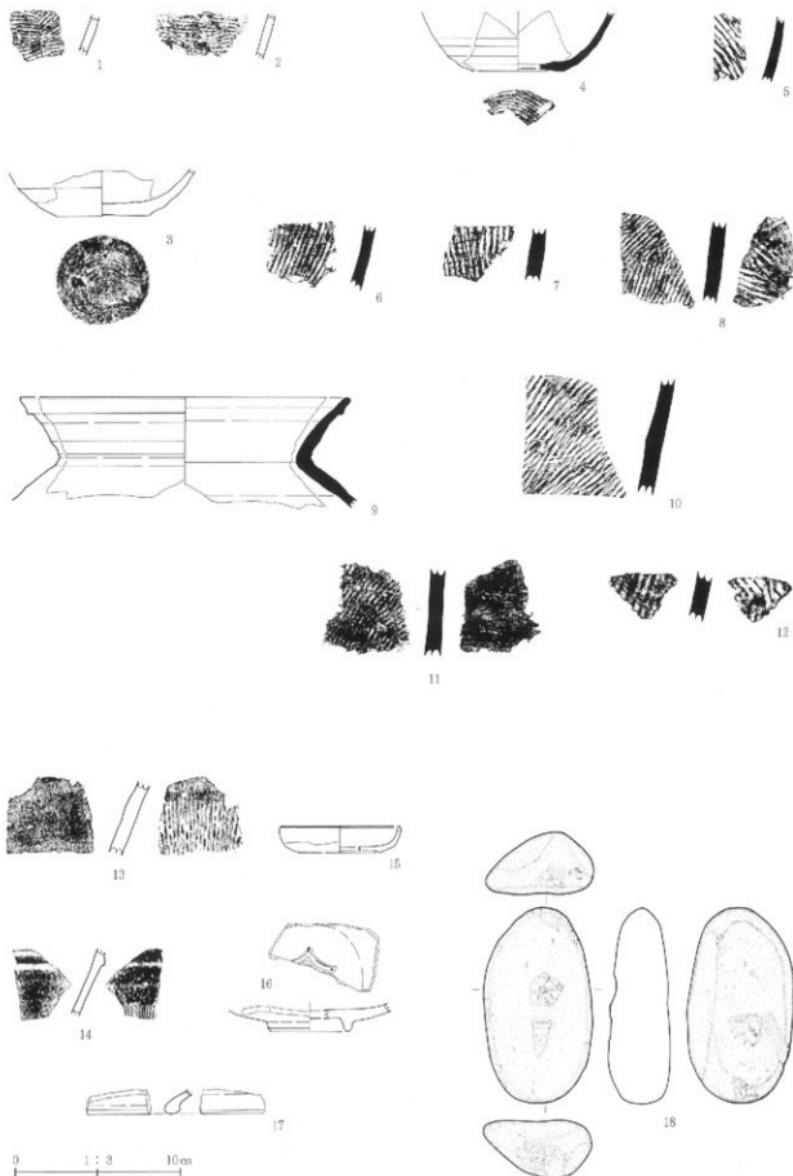
第7図 1号～4号溝跡・6号溝跡



第8図 柱穴群(1)



第9図 柱穴群(2)



第10図 出土遺物



遺跡遠景（北から）



遺跡近景（南から）



西側調査区北端部（東から）



西側調査区北部（南から）

(8) 潟沢1遺跡



西侧調査区中央部遺構検出（東から）



西侧調査区中央遺構検出（南東から）



西侧調査区1・2号溝跡平面



西侧調査区3・4号溝跡平面



西侧調査区南部（北から）



西侧調査区南端（北から）



東側調査区北端、6号溝跡平面



東側調査区中央（南から）

写真図版2 各調査区



1号竪穴住居跡（東から）



1号井戸跡（北西から）



2号井戸跡平面（北西から）



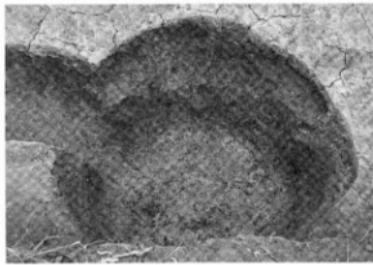
1号井戸跡断面（西から）



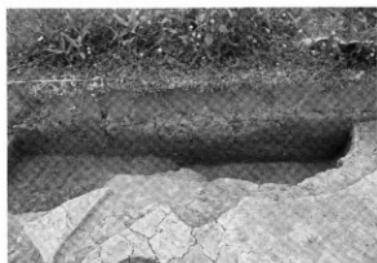
2号井戸跡断面（東から）



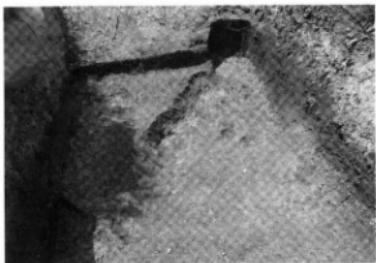
1号土坑（東から）



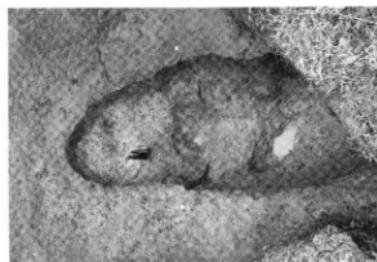
2号土坑（西から）



3号土坑（東から）



4号土坑（南から）



5号土坑（南から）



1・2号溝跡断面



3・4号溝跡断面



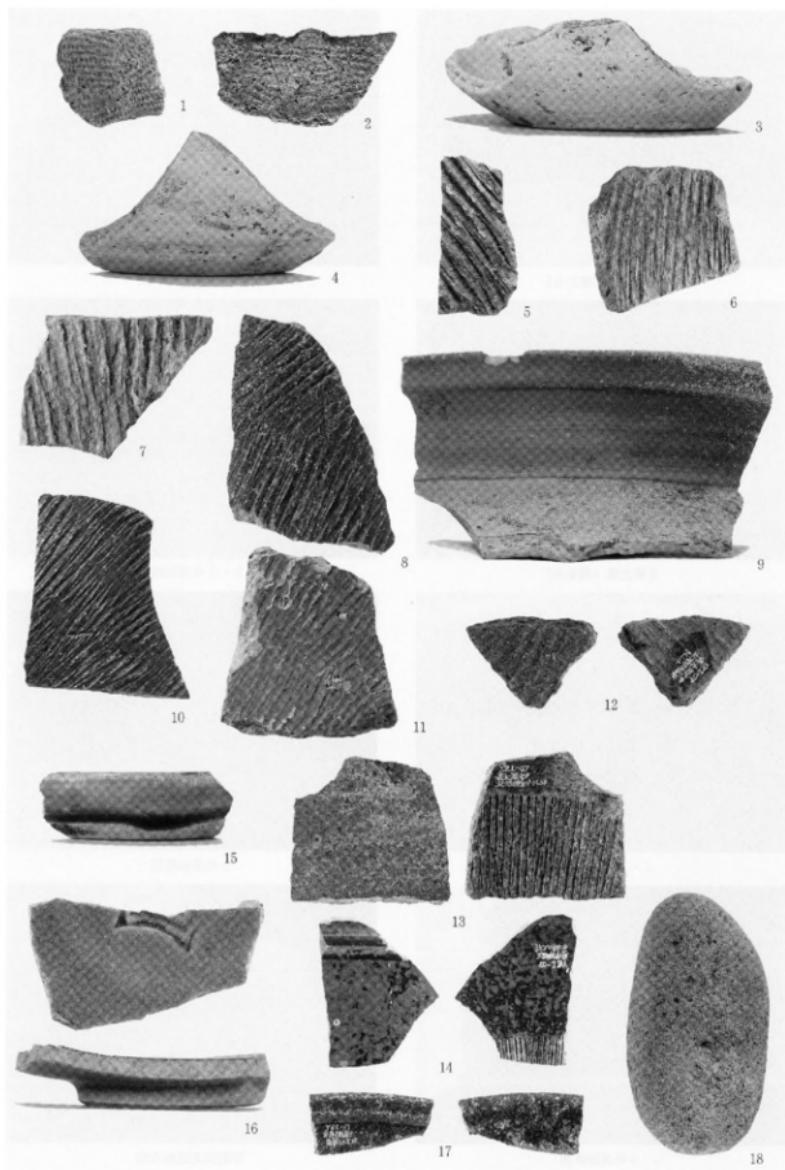
5号溝跡断面



6号溝跡断面



東側面査柱穴群



写真図版 6 出土遺物

## (9) 下平遺跡 第2次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町長島字下平  
遠跡コード・略号 NE77-2060・ST07-02  
委 託 者 岩手県南広域振興局一関総合支局土木部  
調査対象面積 700m<sup>2</sup>  
事 業 名 主要地方道一関北上線地方特定道路整備事業  
調査終了面積 700m<sup>2</sup>  
発掘調査期間 平成19年10月15日～11月12日  
調査担当者 菊池昌彦・丸山浩治

### 1 調査に至る経過

下平遺跡は「緊急地方道路整備事業舞川工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存するところから、発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道路一関北上線は、一関市から奥州市を通過し北上市に至る総延長約60kmの幹線道路であり、国道4号、国道284号を補完し南北軸を形成する重要な役割を担っている。しかし事業対象地区である「舞川工区」は、一関遊水池にあることから度々の冠水による通行止めを余儀なくされ、市民生活に大きな影響を及ぼしていた。このことから災害に強く安全な社会基盤整備を図るために、平成13年度より緊急地方道路整備事業により事業着手し、平成21年度の完成供用を目指すものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局一関総合支局土木部から平成18年9月29日付一総土第473号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年11月8日に試掘調査を実施し、工事に着手するには下平遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年11月27日教生第1140号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。その結果を踏まえて当土木部は教育委員会と協議し、平成19年度に財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して、発掘調査を実施することとなった。

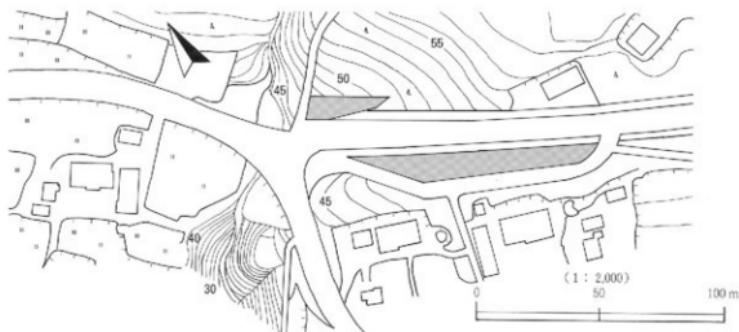
（岩手県県南広域振興局一関総合支局土木部）

### 2 遺跡の位置と立地

下平遺跡はJR東北本線平泉駅の東約3kmに位置し、北上高地の裾野の斜面に立地している。標高は約47m～53mである。今回の調査区は県道一関北上線に隣接し、下平バス停留所近辺にある。現況は山林である。（第1・2図）



第1図 下平遺跡の位置



第2図 周辺の地形

## 3 基本層序（第4回）

調査区は2カ所に分かることから、北区、南区それぞれに基本層序を記録した。北区は法面の断面から大きく2層に分かれる疊層を確認した。南区は場所によってII、III層がなかったり、V層に入量に入るなど様相が異なる。

（北区基本層序） I層：10YR4/6褐色シルト 表土 II a層：10YR5/4にぶい黄褐色シルト 磨～5 cmを5%含む。 II b層：10YR5/8黄褐色シルト 磨～5 cmを20%含む。 II c層：10YR5/8黄褐色シルト 磨～5 cmを5%含む。 II d層：7.5YR5/8明褐色シルト やや赤く鉄分を含むと思われる。

III a層：10YR5/8黄褐色シルト 磨～5 cmを5%含む。 III b層：10YR5/8黄褐色シルト 磨～1 cmを20%含む。砂も混じる。 III c層：10YR5/6黄褐色シルト 磨～1 cmを5%含む。 III d層：7.5 YR5/8明褐色シルト II d層とほぼ同じ。 IV層：2.5Y6/4にぶい黄褐色砂質シルト 磨～1 cmを5%含む。 V層：7.5YR5/8明褐色砂質シルト II dやIII d層と同様に鉄分を含むと思われるが、砂質である。 VI層：2.5Y5/2灰黄褐色粘土質シルト VII層：10YR2/3黒褐色粘土 VIII層：10YR4/3にぶい黄褐色砂白色砂粒を40%含む。

（南区基本層序） I層：10YR4/6 褐色シルト 黄褐色土ブロック～L=48.300 m  
2 mmを10%含む。表土 II層：10YR4/4褐色シルト 遺物包含層

III層：7.5YR4/6褐色シルト 炭化物を微量に含む。遺物包含層

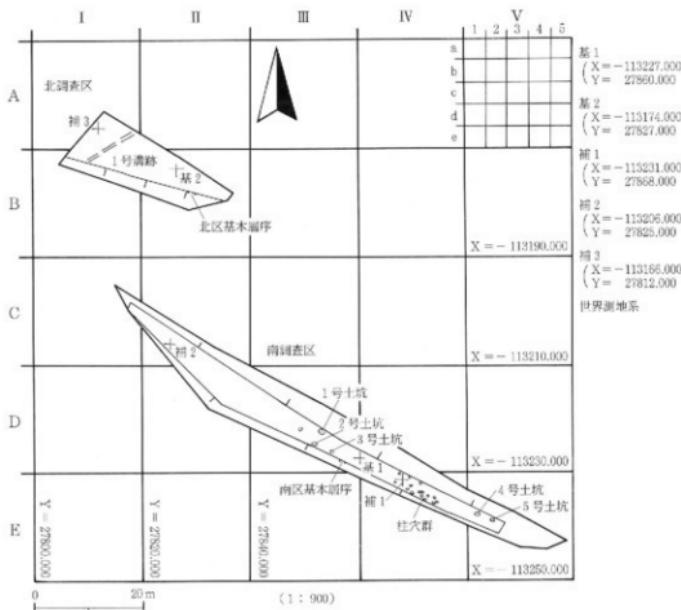
IV層：7.5YR3/4暗褐色シルト 炭化物を微量に含む。遺物包含層

V層：7.5YR5/6 明褐色シルト 雲母を微量に含む。遺構検出面

VI層：7.5YR5/8 明褐色シルト 黄褐色土粒、雲母を微量に含む。



第3図 基本層序



第4図 下平遺跡（第2次）遺構配置図

#### 4 調査の概要

##### (1) 遺構（第5図）

土坑5基、溝跡1条、柱穴19個が検出された。柱穴のうち3個は柱穴列として規則的に並ぶ。1～3号上坑と、柱穴群、4・5号土坑がそれぞれまとまって分布している。

1号土坑：ⅢD 3d グリッドで検出された。円形で、直径120cm、深さ16cm。断面は楕円状である。遺物は確認されていない。後述の3号土坑と埋土の様相が近く近辺に位置することから、縄文時代のものと推測される。用途は不明である。

2号土坑：ⅢD 3d グリッドで検出された。楕円形で、長軸106cm、短軸56cm、深さ22cm。断面は北側が底面に縫があるため浅く、南側が深くなる不規則な形状である。遺物は確認されていない。後述の3号土坑と埋土の様相が近く近辺に位置することから、縄文時代のものと推測される。用途は不明である。

3号土坑：ⅢD 3d グリッドで検出された。円形に近い楕円形で、長軸が90cm、短軸が80cm、深さが12cm。浅いが形状から人為的に掘られた上坑と判断した。遺物は確認されていないが、埋土が縄文土器片が出土したIV層の下層になっていることから、縄文時代のものと判断した。用途は不明である。

4号土坑：VE 1b グリッドで検出された。円形で直径90cm、深さが41cm。底部の縁辺部がくぼんでいる。最下層の4層の上部に木片が敷き詰めてあった。また、鍋の底部の可能性がある鉄製品が2層から出土した。形状や遺物の状況から、近世以後のものと推測される。用途は不明である。

5号土坑：VE 2c グリッドで検出された。円形で直径60cm、深さは55cm。4号土坑と同様、最下層の2層の上部に木片が敷き詰めてあった。4号土坑と同様、近世以後のものと推測される。用途は不明である。

1号溝跡：IA 4e グリッドを中心に検出された。長さは9m70cm、幅は30~75cm、深さは35cm。遺物は確認されていない。時期、用途ともに不明である。

柱穴状土坑：主にVII 2b とその付近のグリッドで19個検出された。その中で規模や埋土状況から、1列に並ぶ7・8・9号柱穴を同じ時期の柱穴列と確認した。柱間距離は1.45、1.65m。軸方位はN-9°-E。直径18cm~34cm、深さ4cm~8cm。浅くなっているのは畑の開墾の際に上部が削られたためと思われる。埋土はいずれも黒褐色であった。遺物は確認されていない。時期は遺物が出土していないため不明であるが、埋土の様相から近世以降と推測される。なお建物跡となる対の列は南側にあり、道路工事で消失したのではないかと推測される。

## (2) 遺物

縄文土器片4点、陶磁器片11点、鉄製品2点が出土した。そのうち縄文土器片2点、近世のものと思われる陶磁器片と碗をそれぞれ1点、そして鉄製品1点を掲載した。

縄文土器片No.1の文様は沈線の様相から縄文時代中期後葉～後期の可能性が考えられる。他は摩耗しており時期の特定は不可能である。陶磁器は2点とも18世紀またはそれ以前のものと推測される。4号土坑から出土した鉄製品は鉄錠の底部の可能性が考えられる。時期は近世と思われる。

## 5まとめ

今回の調査で調査区周辺は縄文時代の人の生活の痕跡があることと、近世以降も居住域だったことが明らかになった。

1~3号土坑は南調査区のIII Dグリッドにまとまって分布している。縄文土器片もそれらの上坑の付近から出土したこと、3号土坑の埋土が縄文土器が出土したIV層の下だったことから、それらは縄文時代のものである可能性が高い。土坑の用途は不明だが、形状から陥し穴以外のものと思われる。もし食料の貯蔵穴であれば、この近辺に人が住んでいた可能性も考えられる。

4・5号土坑と柱穴群は南調査区の南西部に分布し、I層直下のV層で検出された。II~IV層は畑の開墾等で消失したと思われる。埋土の様相、4・5号土坑の底部の木片の出土状況、4号土坑の埋土から近世のものと思われる鉄製品が出土したことなどから判断すると、これらの土坑や柱穴は近世以降のものと推測される。平泉町の泉屋遺跡第10・11・13・15次調査報告書では、底面に木片が敷いてある土坑を肥だめまたは便所ではないかと推測しているが、今回確認された4・5号土坑については便所である確証はない。便所であればそれに伴う柱穴があるはずだが、土坑の周りに柱穴はなかったからである。肥だめか、住居に伴う食料の貯蔵穴だった可能性も考えられる。また柱穴の規模や検出数から、ここに掘立柱建物の住居があった可能性は高いと言える。

ちなみに試掘では六道鏡と思われる寛永通宝がIII D 1b グリッドから出土したが、今回の調査で墓廣は確認できなかった。

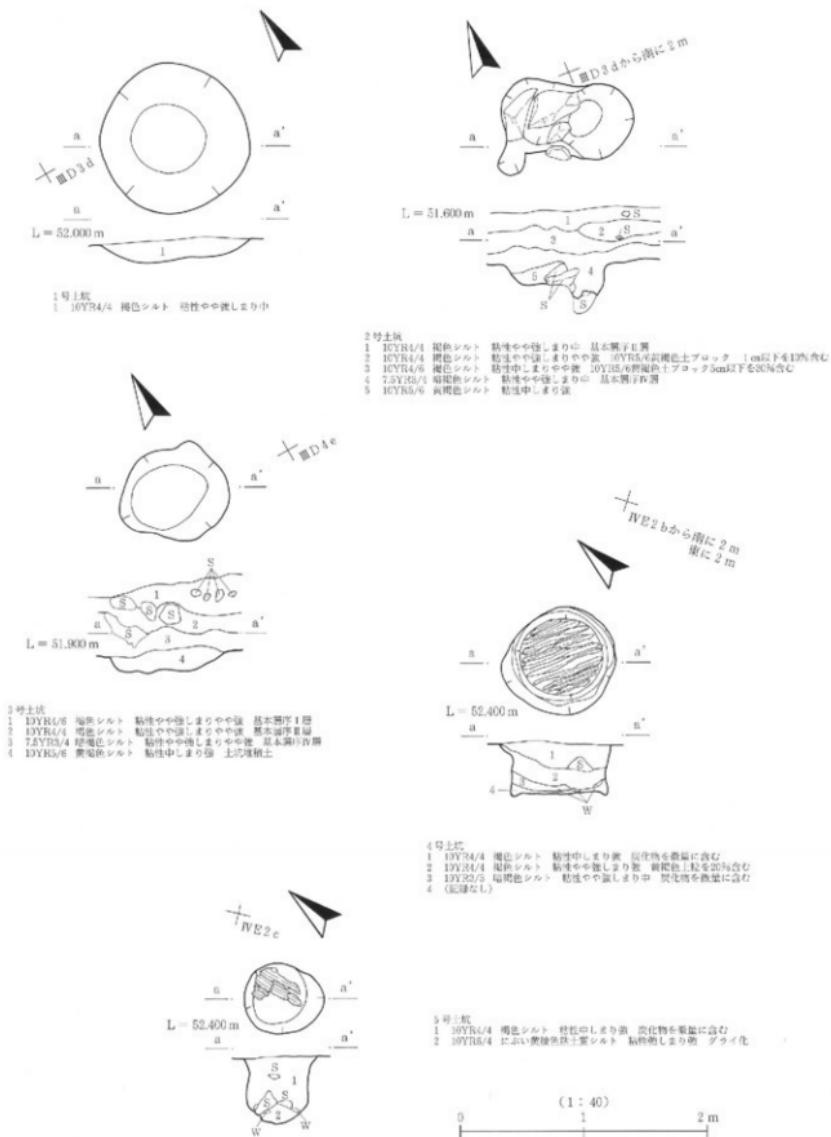
なお、下平遺跡第2次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

## <引用・参考文献>

(財) 岩文振興文化財センター 羽柴直人ほか 1997「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」(第247集)

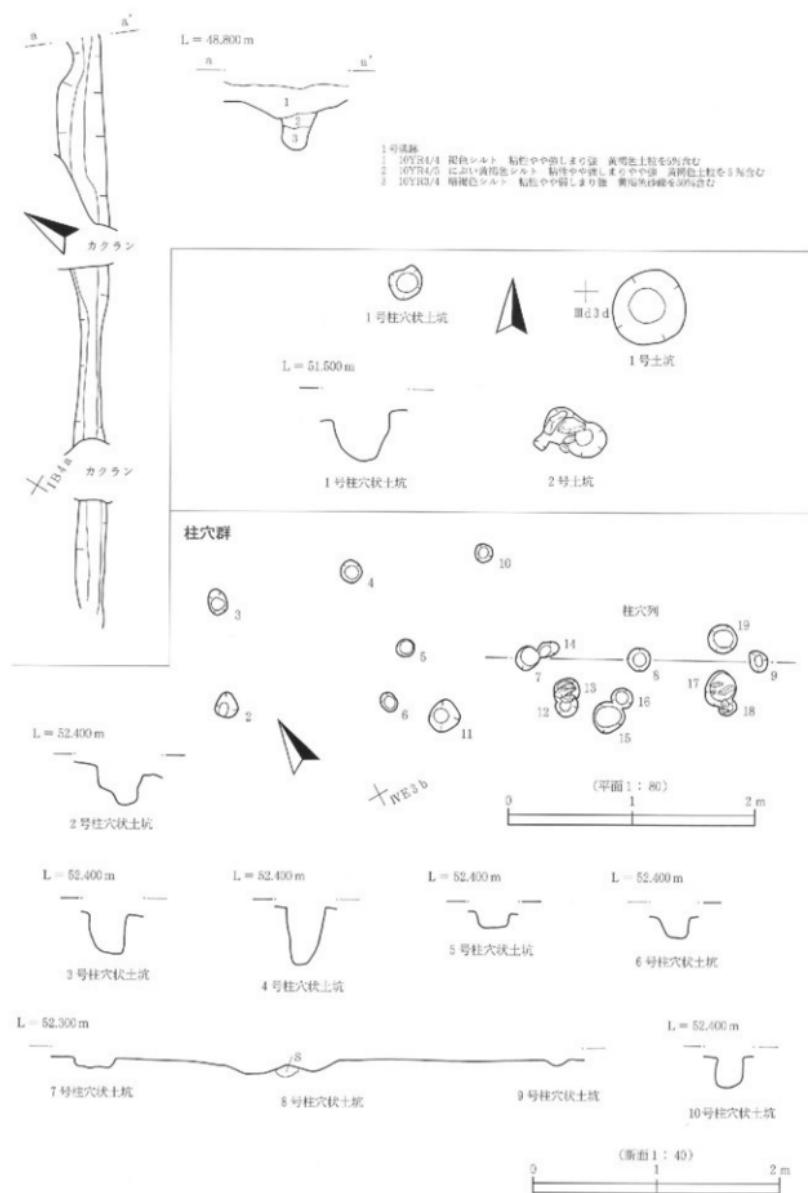
下中邦彦ほか 1984「やきものの辞典」平凡社

下中直人ほか 1984「増補 やきものの辞典」平凡社

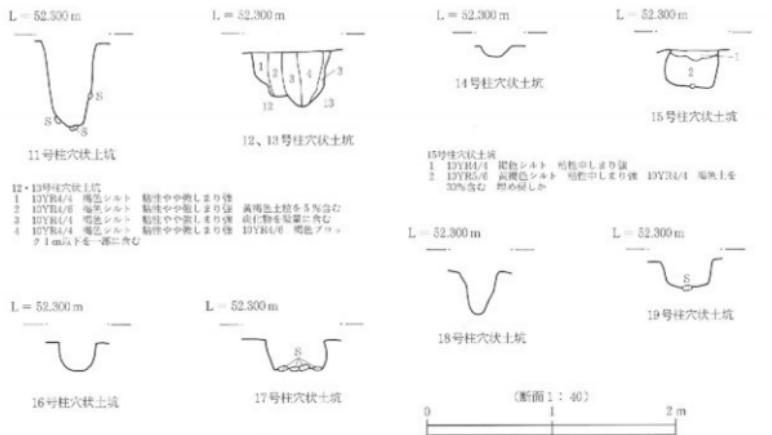


第5図 下平遺跡（第2次）検出遺構

(9) 下平遺跡 第2次調査



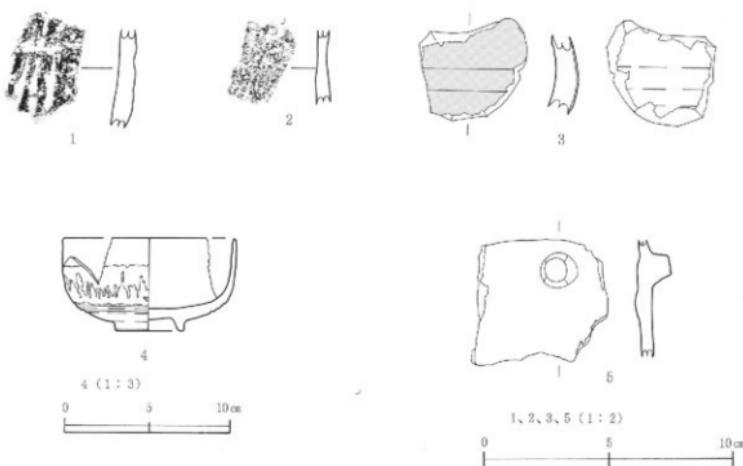
第6図 下平遺跡（第2次）検出遺構



第7図 下平遺跡（第2次）検出遺構

第1表 柱穴状土坑一覧表

No.	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	理 土 (非耕のもの以外は遺構図版参照)
1	IVD2e	6.0	4.6	3.9	50.955	10YR4/4暗褐色シルト
2	IVE2a	2.9	3.8	3.9	52.020	7.5YR4/6暗褐色シルト
3	IVD2e	4.0	3.0	3.2	52.000	10YR4/6暗褐色シルト 黄褐色土粒～5mmを30%含む
4	IVE3a	3.5	3.2	4.5	51.977	7.5YR3/4暗褐色シルト 黄褐色土粒～1mmを20%含む
5	IVE3a	2.9	2.5	1.2	52.189	10YR4/4暗褐色シルト
6	IVE3a	3.2	2.6	1.8	52.110	10YR4/3ないし黄褐色シルト
7	IVE3a	3.6	重複で不明	8	52.594	10YR3/6暗褐色シルト
8	IVE4b	3.6	3.2	8	52.587	"
9	IVE4b	3.4	2.5	4	52.592	" 炭化物を微量に含む
10	IVE3a	3.0	2.4	2.5	52.506	10YR3/4暗褐色シルト 黄褐色土粒～1mmを20%含む
11	IVE3a	5.3	5.0	7.0	52.033	10YR4/4暗褐色シルト 黄褐色土粒～2cm一部含む
12	IVE3b	重複のため不明		3.5	52.124	(遺構図版参照)
13	IVE3b	"		4.5	52.127	(遺構図版参照)
14	IVE3a	重複で不明	2.5	8	52.566	10YR3/4暗褐色シルト
15	IVE3b	5.2	4.7	3.3	52.299	(遺構図版参照)
16	IVE4b	3.4	3.2	2.4	52.406	10YR4/4暗褐色シルト 黄褐色土ブロック～2cm一部含む
17	IVE4b	6.1	5.0	2.0	52.372	10YR3/4暗褐色シルト
18	IVE4b	3.0	重複で不明	3.4	52.136	10YR4/4暗褐色シルト
19	IVE4b	4.5	4.5	2.0	52.067	10YR3/4暗褐色シルト



第8図 下平遺跡（第2次）出土遺物

## 縄文土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部 位	文 様	時 期	備 考
1	IVD 1 e	II層	不明	不明	平行比線(縦)	中期後葉～後期	
2	IVD 1 e	IV層	不明	不明	? (斜)	不明	

## 陶磁器観察表

No.	出土地点	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	施業	遺地	年代	備 考
3	IB 5 a	II層	碗	—	—	—	灰白色	綠釉	瀬戸	～18世紀	
4	IV E 2 a付近	IV層	碗	(10.2)	4.0	5.7	灰白色	灰釉+緑	大瀬戸馬	18世紀	口径は推定

## 鉄製品観察表

No.	出土地点	層位	種別	幅	高さ	厚さ	備 考
5	4号土坑	2層	鉄鏃の底?	5.2	4.9	0.6	



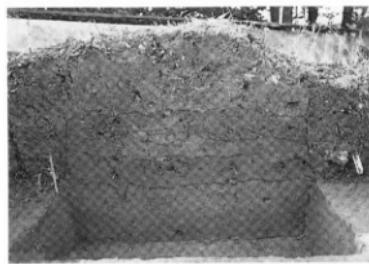
北区全景（西から）



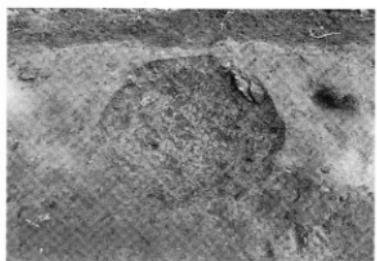
南区東側（東から）



北区基本層序



南区基本層序



1号土坑平面



2号土坑平面



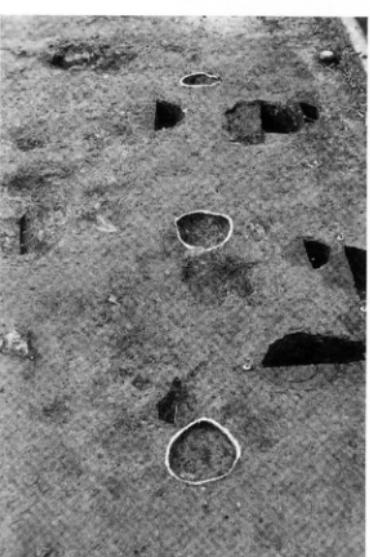
断面



断面



3号土坑平面



柱穴列全景



断面



4号土坑平面



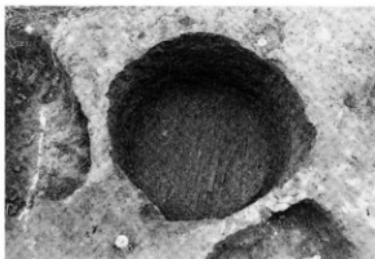
5号土坑平面



断面



断面



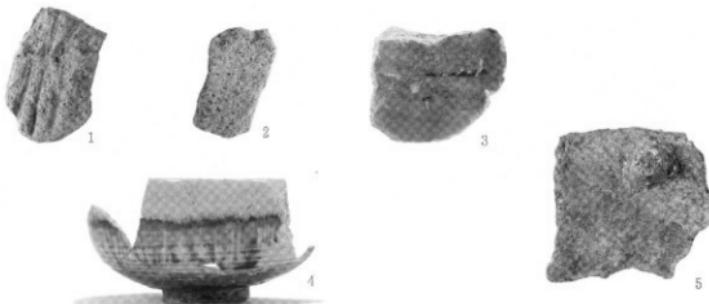
底面木質遺物



1号溝跡断面



1号溝跡平面



写真図版4 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	下平遺跡第2次調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	菊池昌彦						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下戸巻町第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○°	東経 ○○°	調査期間	調査面積	調査原因
下平遺跡 第2次調査	いわてけんにしきやまとくわいせき 岩手県西磐井郡 平泉町長島字 下平	03402	NE77- 2060	38度 58分 47秒	141度 09分 18秒 ~ 2007.10.15 2007.11.12	700m <sup>2</sup>	県道一関北上 銀杏佛事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下平遺跡 第2次調査	居住域	縄文時代	土坑	3基	縄文土器片		
		近世～近代	土坑 柱穴状遺構 (内3個が柱穴列1) 時期不明	2基 19個 溝跡1条	陶磁器片 鉄製品		
要約	調査区付近は縄文時代の人の生活の痕跡があることと、柱穴の状況から近世以降の居住域だったことが明らかになった。近世の土坑の底部からは木片が出土した。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (10) 清田境 I 遺跡

所 在 地 一関市千厩町清田字境131-4ほか 遺跡コード・略号 NF91-1299・KTZ I -07  
委 託 者 県南広域振興局一関総合支局 調査対象面積 1,050m<sup>2</sup>  
土木部千厩土木センター 調査終了面積 1,050m<sup>2</sup>  
事 業 名 道路改築（交安）事業 調査担当者 吉田泰治・米田 寛  
発掘調査期間 平成19年6月1日～6月28日

### 1 調査に至る経緯

清田境 I 遺跡は、一般国道284号清田地区道路改築工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道284号は、陸前高田市と一関市を結び、県南部を横断する幹線道路である。事業対象地域である一関市千厩町清田地区には市営テニスコートや第13区ふれあい花壇（H15全国花いっぱいコンクール内閣総理大臣賞受賞）があり、交通量も多く、一関市立清田小学校の通学路としても利用されている。しかし、当該区間にはJR大船渡線の跨道橋があり、3.9mの高さ制限と前後区間の狭隘な道路現況により、安全な通行に支障をきたしている。また、近傍に準用河川金田川があり、当該道路との交差部付近では大雨等による冠水・通行止めがたびたび発生している。このため、本事業によりクリアランス確保・視距改良・歩道整備（拡幅）・冠水対策等を行うこととし、平成18年度に事業着手したものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱については、千厩土木センターから平成18年6月6日付千土セ第299号「一般国道284号清田地区道路改良事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年7月14日に試掘調査を実施し、工事に着手するには清田境 I 遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年8月1日付教生第657号「一般国道284号清田地区道路改良事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木センターへ回答してきた。

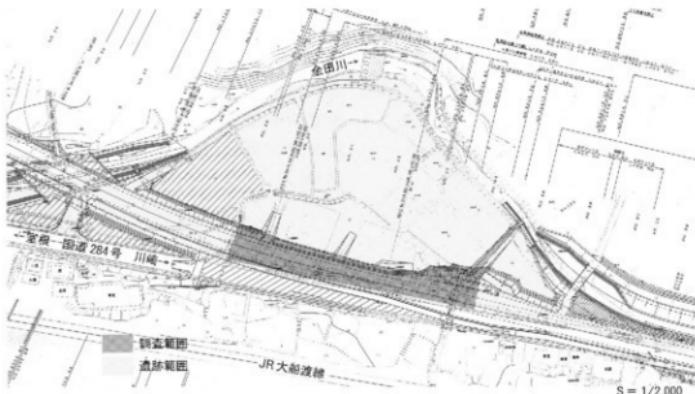
その結果を踏まえて当土木センターは岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年5月15日付で財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（県南広域振興局一関総合支局土木部千厩土木センター）



第1図 遺跡の位置

1 : 25,000 千厩北部



第2図 遺跡調査範囲

## 2 遺跡の位置と立地

清田境 I 遺跡は、JR 大船渡線千厩駅の東約2.1km、千厩川支流の金田川北岸の沖積低地上に位置する。今回の調査区は国道284号線に沿った東西約87m、南北約13mの範囲である。標高111mに位置し、現況は畑地であった。国道284号に面している調査区北側は、現代の道路側溝跡で幅約1.5m削平されている。また、調査区南側は畑の造成によって削平が進む一方で、客土の搬入が繰り返し行われており、遺構の大半は消失したものと考えられる。

## 3 基本土層

第I層 10YR4/1 暗灰色上層（盛土・耕作土）粘性微 しまり密 層厚15~30cm 昭和60年代の空き缶・空き瓶など包含。

第II層 10YR3/2 黒褐色土層（遺物包含層）粘性微 しまりやや密 層厚0~45cm 調査区北側では削平され、ほとんど残っていない。

第III層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂層（洪水堆積層）粘性弱 しまりやや密 層厚1m以上 上面を遺構検出面とした。

第IV層 2.5YR4/3 オリーブ褐色花崗岩風化礫層 粘性なし しまり密 層厚不明

## 4 調査概要

### (1) 検出遺構：溝跡1条、土坑2基

時期の特定できる遺構は確認できなかった。1号溝跡は南北方向に走り、長さ10.07m、幅0.68m、深さ17cmを測る。横断面形は皿状を呈する。堆積層は1層のみで第II層を起源とする。堆積土上部からは、流れ込みと考えられる縄文土器が3点出土している。1号土坑は長さ0.96m、幅0.66m、深さ17cmを測る。平面形は長方形で、断面形は逆台形を呈する。2号土坑は長さ1.12m、幅1.01m、深さ16cmを測る。平面形は円形で断面形は逆台形を呈する。

### (2) 出土遺物：縄文土器（早期・前期主体）25点、土師器片2点、石鎌1点、敲石1点

大半がII層中から出土した。土器は磨耗が著しく、遺跡内に流れ込んだものと考えられる。縄文土器は縄文早期の貝殻文系土器や縄文前期の織維混入土器が数点、土師器は壺や甕の破片が出土した。石鎌は凹式で両面を丁寧に調整されている。敲石は円形の安山岩を素材として利用している。

## まとめ

本遺跡は、著名な縄文時代中期の集落跡である清田台遺跡と約600m離れている。清田台遺跡と清田境I遺跡はともに金田川流域に所在するが、立地する河成段丘面が異なり、清田境I遺跡は現在の金田川との標高差が3m程度しかない。今回の調査では所属時期が明確な遺構は確認されず、遺物も遺跡内へ流れ込んだものと考えられる。清田境I遺跡周辺では、今回の調査区の北側に位置するJR大船渡線路が走る段丘があり、ここでは遺物が表探できる。今回の調査地で出土した遺物と同時期の集落が営まれているとすれば、この段丘面と考えられる。したがって、本遺跡周辺の人類の居住活動は台地面に集中し、今回の調査地のような沖積低地面は廃棄場や狩場としての機能が想定される。なお、清田境I遺跡2007年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。(米田)

## &lt;引用・参考文献&gt;

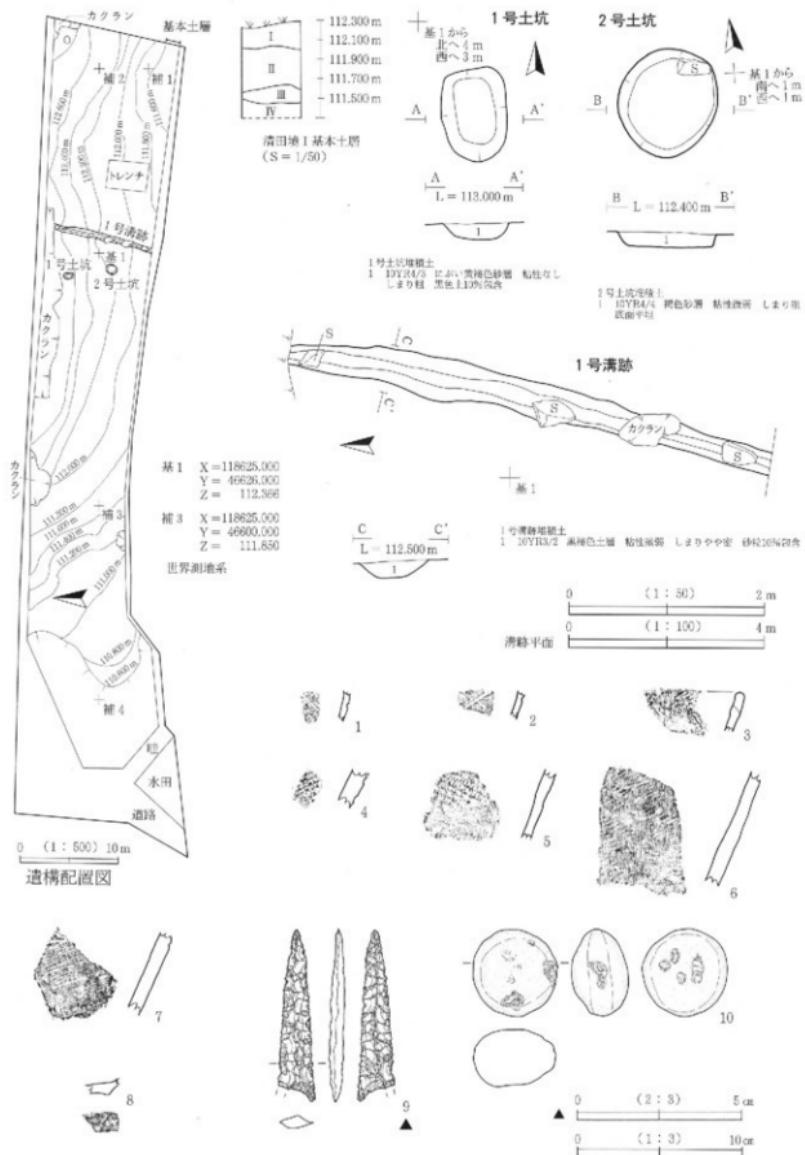
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 「清田台遺跡発掘調査報告書」  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集

## 報告書抄録

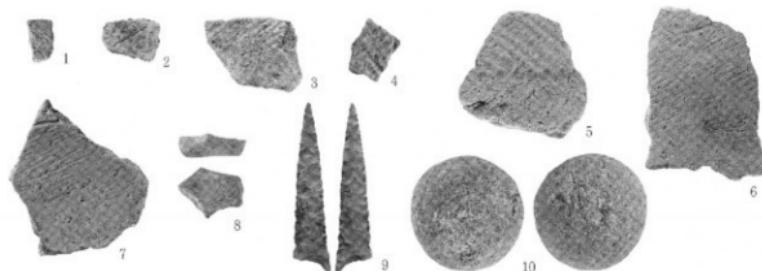
ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	平成19年度発掘調査報告書					
副書名	清田境I遺跡					
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第524集					
編著者名	吉田泰治・米田 寛					
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638 9001					
発行年月日	2008年3月21日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村「遺跡番号」	北緯 。 。	東経 。 。	調査期間	調査面積
清田境I遺跡	岩手県・関市 千厩町清出字境 131-4ほか	NF91- 03209 1299	38度 55分 49秒	141度 22分 15秒	2007.6.1 ~ 2007.6.28	1,050m <sup>2</sup> 道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
清田境I遺跡	散布地	縄文時代 古代	溝跡 土坑	1条 2基	縄文土器(早期・前 期)、上師岩	
要約	JR千厩駅から東に2.1kmの金田川北岸の沖積低地上に立地する。遺構・遺物が散在し、遺構の所属時期は不明である。本遺跡よりも標高で約15m高い段丘面上に集落の主体があり、今回の調査区は遺跡の先端部に位置するものと考えられる。					

\*緯度・経度は世界測地系による数値である。

(10) 清田境 I 遺跡



第3図 検出遺構・出土遺物



写真図版 1 出土遺物

第1表 清田境 I 遺物観察表

No	種別	器種	部位	層位	時期	特徴
1	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅰ層下部	縄文早期山型	貝殻模縞文 器底磨耗
2	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ層下部	縄文早期山型	貝殻沈縞文 器底磨耗
3	縄文土器	深鉢	口縁	Ⅱ層下部	縄文前期前半	利状縞文LR-RL 脊部微量 器面磨耗
4	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅱ層中部	縄文前期前半	羽状縞文LR-RL 器底微量 器面磨耗
5	縄文土器	深鉢	胴部	黒色土層	縄文前期前半	縞文RL 繩縞發達 調査区西端の黒色土層はⅡ層対応
6	縄文土器	深鉢	胴部	Ⅲ層下部	縄文早期中葉?	縞文LR 治土がNo.7と類似
7	縄文土器	深鉢	胴部	黒色土層	縄文早期中葉	貝殻集痕文、沈縞文 調査区西端の黒色土層はⅡ層対応
8	土器器	环?	底部	Ⅱ層	古代	回転系切痕
9	剥片石器	石盤	略尖形	Ⅱ層	縄文時代	凹式 基部破損 長:5.25cm、幅:1.15cm、厚:0.40cm、重積:1.80g
10	環石器	環石	尖形	黑色土層	縄文時代	敲打痕表裏面有 調査区西端の黒色土層はⅡ層対応 長:5.51cm、幅:5.11cm、厚:3.48cm、質量:126.30g



調査区全景

写真図版 2

(10) 清田境 I 遗跡



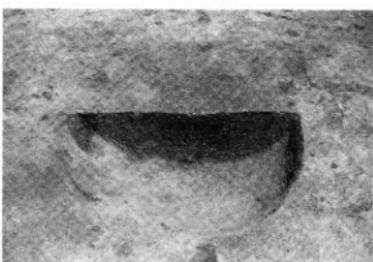
1号溝跡 平面



1号溝跡 断面



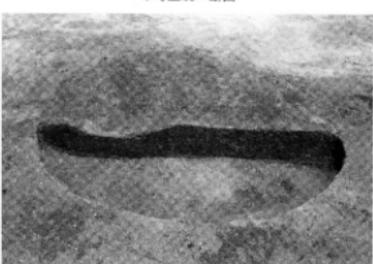
1号土坑 平面



1号土坑 断面



2号土坑 平面



2号土坑 断面



調査区東端壁セクション



調査区西端壁線

写真図版 3 検出遺構

## (11) 森崎II遺跡

所 在 地 宮古市田老字森崎81-3ほか

委 託 者 宮古地方振興局土木部

事 業 名 一般県道有芸田老線末前地区

緊急地方道路整備事業

発掘調査期間 平成19年7月17日～8月1日

遺跡コード・略号 NF91-1299・MS II -07

調査対象面積 900m<sup>2</sup>

調査終了面積 585m<sup>2</sup>

調査担当者 北田 純・川又 晋

### 1 調査に至る経過

森崎II遺跡は、『一般県道有芸田老線末前地区緊急地方道路整備事業』道路改良工事の実施に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

一般県道有芸田老線は、宮古市（旧田老町）の西部に位置し、岩泉町を起点とし宮古市（旧田老町）に至る道路であり、その機能は当該道路沿線の地域交通を広域的幹線道路である一般国道45号へと誘導する補助幹線道路である。

事業対象地域である『末前地区』は、地形的制約から1車線かつ急カーブが連続し、大型貨物車両のみならず、一般車両のすれ違いにも支障をきたしており、安全で円滑な交通が確保されていない状況にあることから、これらの交通障害を解消し交通の安全と円滑化、さらには地域の生活改善を図るため事業着手したものである。

当該事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、宮古地方振興局土木部から平成18年5月18日付け宮地上第168号『緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）』により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成18年6月16日に試掘調査を実施し、工事に着手するには森崎II遺跡の発掘調査が必要となる旨、平成18年6月23日付け教生第437号『緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）』により、当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は、岩手県教育委員会と協議・調整を重ねて平成19年6月19日付けで、財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

（宮古地方振興局土木部）

### 2 遺跡の立地

森崎II遺跡は、宮古市田老総合事務所の北西約4.5kmに位置し、神田川によって形成された河岸段丘上に立地している。調査区の標高は173～178m、現況は畠地・山林である。



第1図 遺跡の位置

1 : 25,000 田老

### 3 遺跡の基本層序

調査区内の基本層序は下記の通りである。

- I a層 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱 締まり疎 木根を極めて多く含む表土。
- I b層 10YR8/1 帽白色砂質土 現道(県道177号)建設時の盛土。
- II層 10YR2/1 黒色土 粘性やや弱 締まりやや密 旧表土。
- III層 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強 締まり密 下位に白色細礫を多量に含む。遺物包含層。
- IV層 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱 締まり極めて密 全体に白色細礫を多量に含む。
- V層 10YR5/6 黄褐色土 粘性やや弱 締まり中 部分的に30~50cm大の戸礫(角礫・安山岩)を多量含む。いわゆる地山。

### 4 調査の概要

調査区は東西に細長い形状で、東側は道路法面を含み、やや膨らんでいる。調査区西側から中央までは山裾緩斜面であるが、東側は急斜度になっており標高が下がる。調査区中央から東側にかけては山裾を大きく削上して現道(県道177号)が造られており、北側には上面がカットされた急傾斜が確認される。調査区東側の現道南法面にトレンチを2ヵ所設定したが、上部は褐灰色砂質土の盛土が2m以上あり、その下層にIII層黒褐色土を確認したが遺構・遺物は検出されなかった。

#### (1) 検出遺構

III層黒褐色土は調査区中央と東端で発達しており、東端の一部では上面に縄文土器が微量散見された。調査区中央では1~3号焼土3基がほぼ直線上に並んで見つかった。いずれも不整な平面形であるが、焼土層が2~4cmの深さで形成されており、現地性と思われる。調査区西端の1号十坑は表土直下のV層上面で確認されたが、上部をかなり削平されて見つかった。平面形状は162×160cmの略円形で、断面形は皿形、深さ24cmである。調査区中央の2号十坑は調査区境にあるため開口部など全形は不明だが、断面形からフラスコ形で、底部は240×180cm前後の楕円形で上方に向かって窄まる形状である。掘り込みがI層からであるため、現代の室(むろ)の可能性もある。

遺物包含層を想定して、調査区西側のIII層黒褐色土の部分を中心に14ヵ所のトレンチを設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。また道路北側斜面にもトレンチを2ヵ所設定したが、盛土直下に切りされたV層が確認されたことから、西側も大半は大きく削平されているものと考えられた。

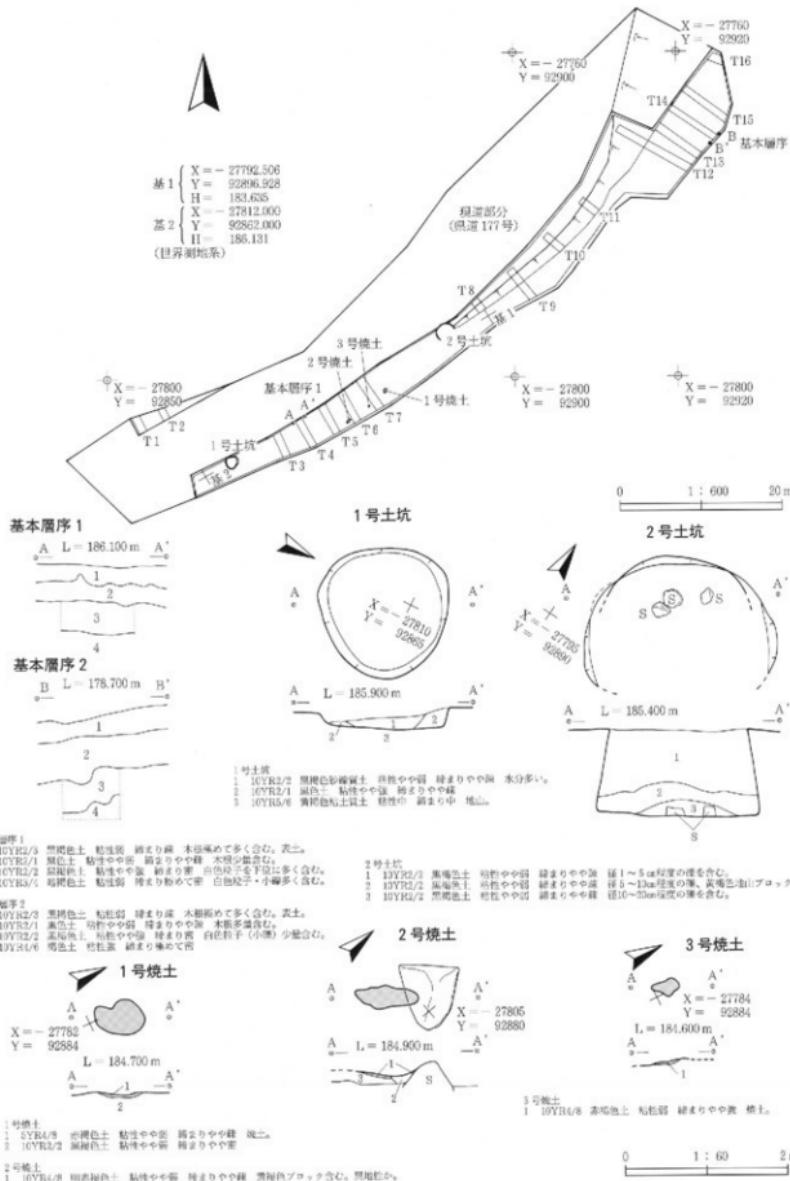
#### (2) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器9号袋1袋、上師器4号袋1袋、羽口1点、砥石1点、特殊磨石1点である。このうち、1~3号縄文土器、4・5号土師器、6羽口、7砥石、8特殊磨石の計8点を掲載した。1~3の縄文土器はいずれも胎土に纖維を含むもので、縄文時代前期前葉の大木2a式に相当する。調査区東端の土器集中地点から一括で出土していることから、同一個体となる可能性もある。4・5は土師器壺と思われる破片で、いずれも非ロクロ成形によると思われ、奈良時代に想定される。6の羽口は焼上が検出されている付近からの出土であるが、焼土との関係は不明である。7の特殊磨石はその形態から出土した縄文土器と同時期と考えられる。8砥石は、形状から4・5の時期に含まれるかもしれない。

### 5 調査のまとめ

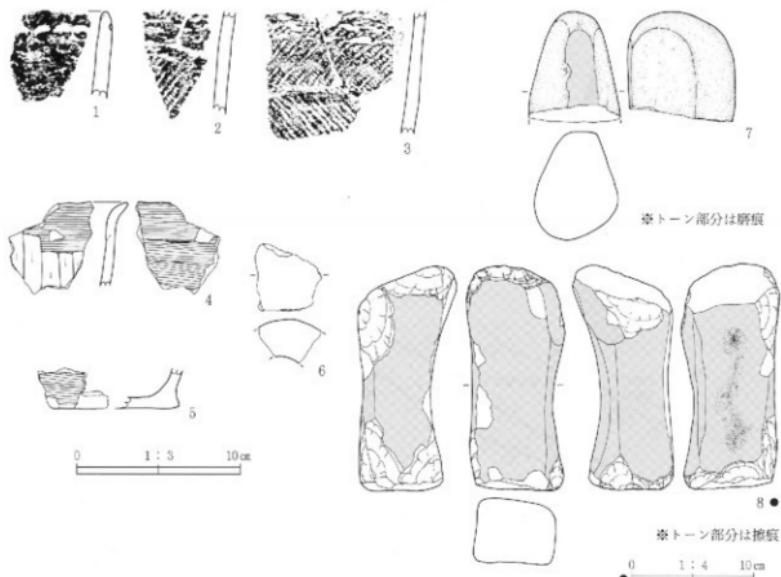
今回の調査では、時期不明の焼土3基・土坑2基の遺構と上述した縄文及び奈良時代と思われる各種遺物が確認された。遺構は今回の調査区の北西から西側にかけて拡がる可能性があり、斜面下位にある神田川との間に若干延びると思われる。

なお、森崎Ⅱ遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。

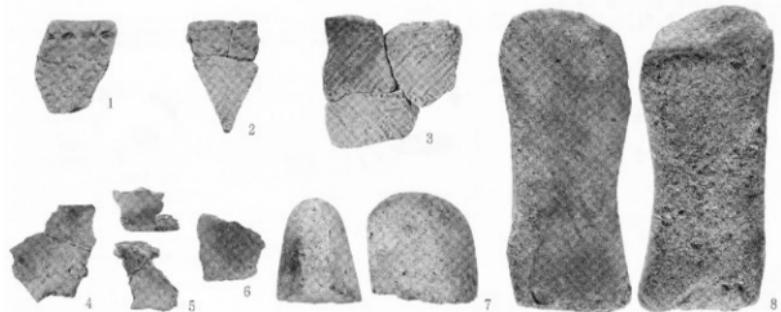


第3圖 滾標配置圖：檢出遺標

(11) 森崎II遺跡



編號No.	出土地點	層位	種類	石種	石種	保存部位	調査・測定など	粘土	色調表面	色調内面	備考	
1	調査区東岸土器集中地點	尾端色土	灰文土器	泥沫	口縁	不整然系文・追焼穴形鉢	礫泥少	緑	黄褐色			
2	調査区東岸土器集中地點	尾端色土	灰文土器	泥沫	口上半	不整然系文・追焼(口縁)	礫泥少	明黄色	明黄色			
3	調査区東岸土器集中地點	尾端色土	灰文土器	泥沫	口上半	不整然系文・追焼(口縁B・口2)	礫泥少	明黄色	明黄色			
4	T6と7の間南斜	尾端色土	土頭器	真割込	口縁～頭上半	外ケズリ(口)・ナメ、内ナメ	砂礫多	にひく青緑	緑	赤コクロ形成		
5	2号地土	上端及び地中土	土頭器	真割込?	頭部	外・内ナメ	砂礫多	暗灰	暗青色	赤コクロ形成		
編號No.	出土地點	層位	種類	石種	石種	調査・測定など	粘土	色調表面	色調内面	備考		
6	3号地土	To-5混じり柴場地土中位	土頭器	泥沫	口縁	内外ナメ	黒	黄褐色	白	玻璃		
編號No.	出土地點	層位	種類	石材	石材产地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	備考	
7	1号庭土西側	高尾色土	石器	特殊磨石	岩紋岩	北上山地	(6.03)	1.64	0.58	293.1	研ぎ鏡	1/2以上欠損
8	T6と7の間南斜	高尾色土	石器	粘石	砂岩	北上山地(宮古群)	17.95	7.60	8.19	1656.4	漆喰4層	



第3図 森崎II遺跡出土遺物



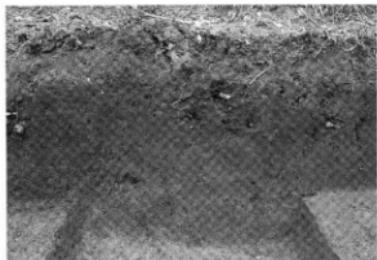
調査区西侧全景（南西から）



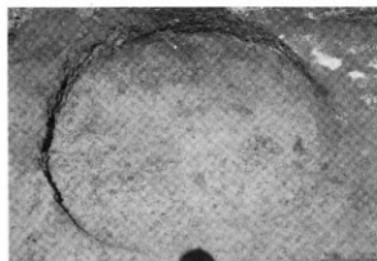
調査区東側全景（西から）



調査区西侧基本土層 断面（南から）



調査区東側基本土層 断面（北から）



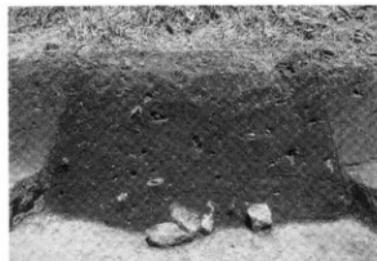
1号土坑 平面（南から）



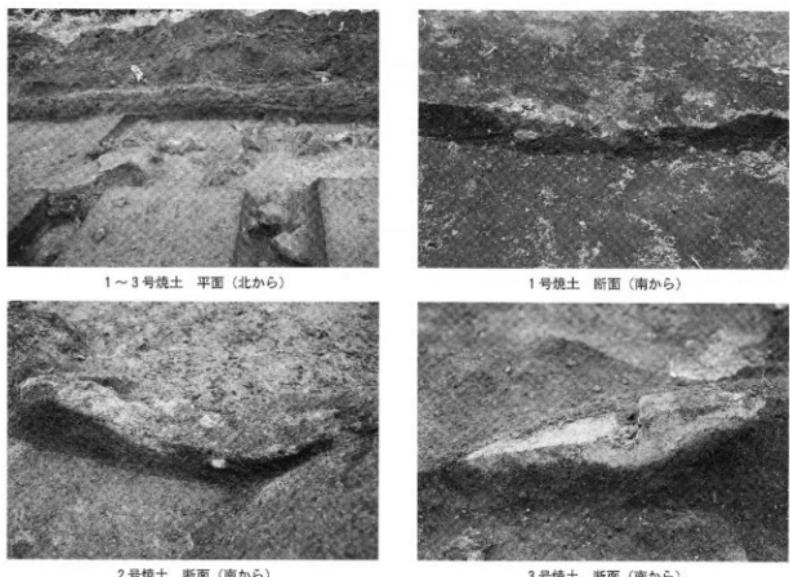
1号土坑 断面（東から）



2号土坑 平面（南東から）



2号土坑 断面（南から）



写真図版2 掘出遺構（2）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	森崎II遺跡							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	北田 熊							
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○°○○'	東経 ○○°○○'	調査期間	調査面積	調査原因	
森崎II遺跡	岩手県宮古市 田老字森崎 81-3ほか	03202	NF91- 1299	39度 44分 30秒	141度 55分 15秒	2007.7.17 ～ 2007.8.1	585m <sup>2</sup>	一般県道有芸田老 羅木前工区緊急地 方道路整備事業に 係る緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
森崎II遺跡	集落跡	時期不明	焼土 土坑	3基 2基	縄文土器・土器器・ 土製品・石器			
要約	神田川の左岸に立地する複合遺跡。今回の調査では焼土・土坑などの遺構と共に縄文及び奈良時代の遺物が確認された。調査区の北西側などが開けており、遺構遺物が存在する可能性が高い。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (12) 南日詰八坂遺跡

所 在 地	紫波郡紫波町南日詰字木本362-1他	遺跡コード・略号	LE77-2116・MIIYS-07
委 託 者	岩手県花巻地方振興局 農政部農村整備室	調査対象面積	1,359m <sup>2</sup> (本調査414m <sup>2</sup> 、確認調査945m <sup>2</sup> )
事 業 名	経営体育成基盤整備事業	調査終了面積	1,359m <sup>2</sup>
	南日詰地区	調査担当者	吉田泰治・米田 寛

## 1 調査に至る経過

南日詰八坂遺跡は、「経営体育成基盤整備事業南日詰地区」のは場整備工事に伴ない、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本事業地区は、紫波郡紫波町南日詰に位置し、東側を北上川、南側を滝名川、西側を国道4号線に開まれた約90haの水田地帯である。は場の区画整理、用水路のパイプライン化、道路及び排水路の拡幅、新設により、高生産性農業の確立による地域農業の持続的発展及び地域の生活環境の向上に資することを目的として、平成12年度より事業を実施している。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所から平成10年10月23日付盛農整第1043号「は場整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成10年12月9日に試掘調査を実施し、工事に着手するには南日詰八坂遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成10年12月16日付教文第1001号「は場整備事業南日詰地区に関する埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

さらに、発掘区域を確定させるため、盛岡地方振興局農政部農村整備室から平成18年9月28日付盛地農整第470号「経営体育成基盤整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して追加試掘調査の依頼を行った。

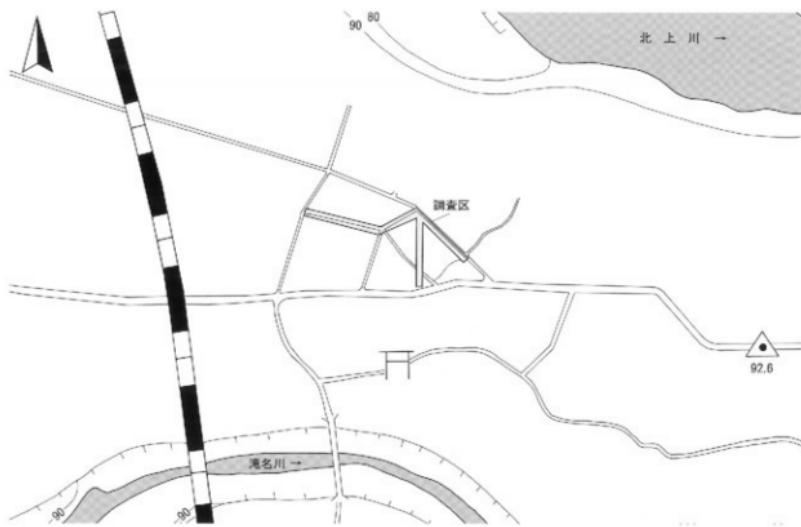
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年10月5、6、10、18日に試掘調査を実施し、発掘調査が必要となる範囲を平成18年11月2日付教生第1043号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答してきた。

その結果を踏まえて当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年6月1日付けて財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（盛岡地方振興局 農政部 農村整備室）



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

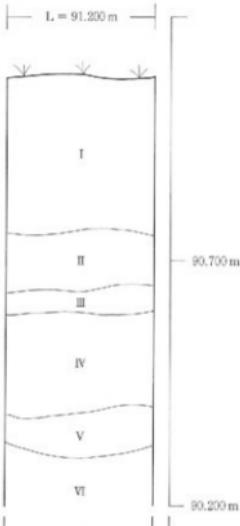
## 2 遺跡の位置と立地

本遺跡はJR東北本線口詰駅の南東約2.1kmに位置し、西から南へ、北から東へとそれぞれ湾曲する浪名川と北上川に南北を挟まれた微高地に立地している。遺跡の標高は91m前後であり、現況は水田・道路・宅地となっている。

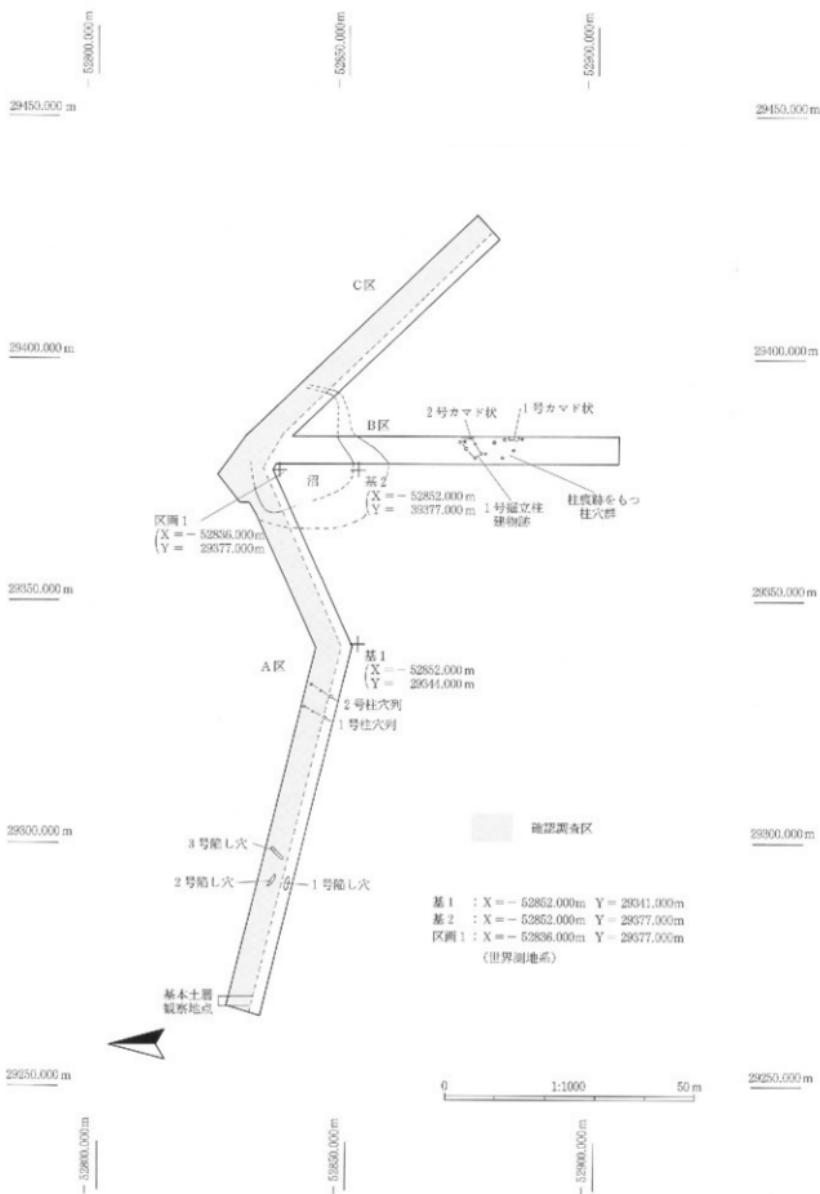
### 3 基本層序

本調査区の基本土層は以下の通りである。

- 第I層 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性弱 しまりやや弱  
現代の耕作土
- 第II層 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや強  
現代耕作土の床土
- 第III層 10YR4/4 褐色 シルト 粘性やや弱 しまり強  
地点により堆積が確認できる。細粒砂を主体とし、北上川の洪水に由来する可能性がある。上面が古代以降の生活面と考えられる。
- 第IV層 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 粘性強 しまり強  
細粒砂を10%含む。
- 第V層 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり強  
細粒砂を10%含む。IV～VI層への漸移層でVI層が土壤化した可能性が高い。
- 第VI層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 細粒砂層。V層との境界は漸移的。



第3図 基本層序 (S=1/10)



第4図 遺構配置図

## 4 調査の概要

調査区は北側中央を扇の要にし3方向に放射状に広がる。北側中央から南西に向かい西へ向きを変える調査区をA区、南南東に向かう調査区をB区、南東に向かう調査区をC区とし調査を進めた。

幅6mのA区・C区内、小排水路となる南側1mの部分は本調査、道路となる北側の5mの部分は確認調査を行った。確認調査範囲には現況で周辺の人家への進入路となっている部分があるため、本調査範囲の遺構に隣接する地点及び住民の生活に支障のない地点のみ表土掘削・調査をし、他は遺構なしとして表土掘削をせず調査終了とした。

この結果、A区では陥し穴3基（本調査1基・確認調査2基）、柱穴列2列（2列のうち各1個の柱穴状土坑のみ本調査）、B区では掘立柱建物跡1棟、柱痕跡をもつ柱穴群1か所、カマド状遺構2基、柱穴状土坑4個を検出した。C区に遺構は確認されなかった。

遺物は上器・石器・鉄製品・占錢が出土したが、遺構に伴うものはない。調査区の北側には厚く黒褐色土が水性堆積する範囲があり、近隣住民からここに沼があったという情報を得た。トレンチを開け調査したがここからも出土遺物はない。

報告に際し一部の柱穴状土坑の名称を改めた。旧遺構名と本報告での遺構名の対応関係は第1表の通りである。

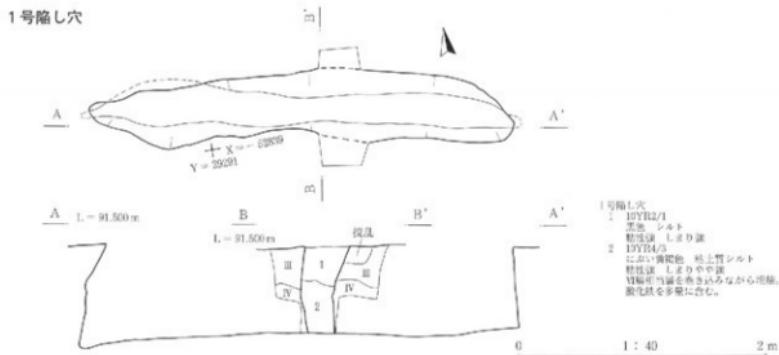
第1表 新旧遺構名変更表

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
P 1 1	P 7	P 2 0	P 1 6
P 1 2	P 8	P 2 1	P 1 7
P 1 3	P 9	P 2 2	P 1 8
P 1 4	P 1 0	P 2 3	P 1 9
P 1 5	P 1 1	P 2 4	P 2 0
P 1 6	P 1 2	1号カマド状遺構	1号カマド状遺構
P 1 7	P 1 3	2号カマド状遺構	2号カマド状遺構
P 1 8	P 1 4	3号カマド状遺構	3号カマド状遺構
P 1 9	P 1 5	2号掘立柱建物跡	柱根跡をもつ柱穴群

## (1) 遺構

<陥し穴> A区の（X=-52837m, Y=29295m）地点周辺に集まって3基検出された。いずれも平面形状は溝状で表面は黒色土が堆積し、開口部の規模も類似している。それぞれの位置・規模・長軸方向は第2表の通りであるが、2・3号陥し穴は確認調査であるため、記載以上の詳細は不明である。

1号陥し穴の開口部の形はやや北側が膨らむように湾曲しているが、底面は平坦である。深さは、



第5図 検出遺構（1）1号陥し穴

長軸方向の東側が最も浅く、西に向かってゆるやかに深くなり、最深の西端で検出面からの深さは82cmになる。底面は東西端とも長軸方向に開口部より広く、開口部に向かい直線的にオーバーハングする。短軸方向は平面形と異なり南側に湾曲して立ち上がる。

長軸方向は1号・2号陥し穴には類似が見られ一連の造構である可能性がうかがえるものの、3号陥し穴は大きく異なる。いずれからも伴う遺物等がないため構築時期は不明であるが、形状から縄文時代に属すると思われる。

第2表 陥し穴觀察表

造構名	位置(m)	開口部規格		長軸方向
		長さ(cm)	幅(cm)	
1号陥し穴	(X=-52839, Y=29292)	352	52	N 79° W
2号陥し穴	(X= 52836, Y= 29292)	320	40	N-58° -W
3号陥し穴	(X=-52837, Y=29297)	330	50	N 48° E

<柱穴列> A区の(X=-52842m, Y=29329m)地点をはさみ約4m離れて平行に2列検出された。どちらも北に対し東に34°傾いて(N-34°-E)それぞれ3個の柱穴(1号柱穴列はP4~6、2号柱穴列はP1~3)が約230cmの間隔で一列に並んでいる。調査区に斜交し全体を検出できないため、造構の両端は更に延び3個以上の柱穴が並ぶ可能性がある。2列が類似し、それを構成する6個の柱穴も規模・埋土共に類似するが、2列の相互に対応するかに見える柱穴を結ぶ直線は柱穴列とは直交しないため、同時期の同じ性格を持つ一連の造構が2列あると判断した。造構の時期・性格を判断する材料には乏しいが、埋土から現代に属すると思われる。

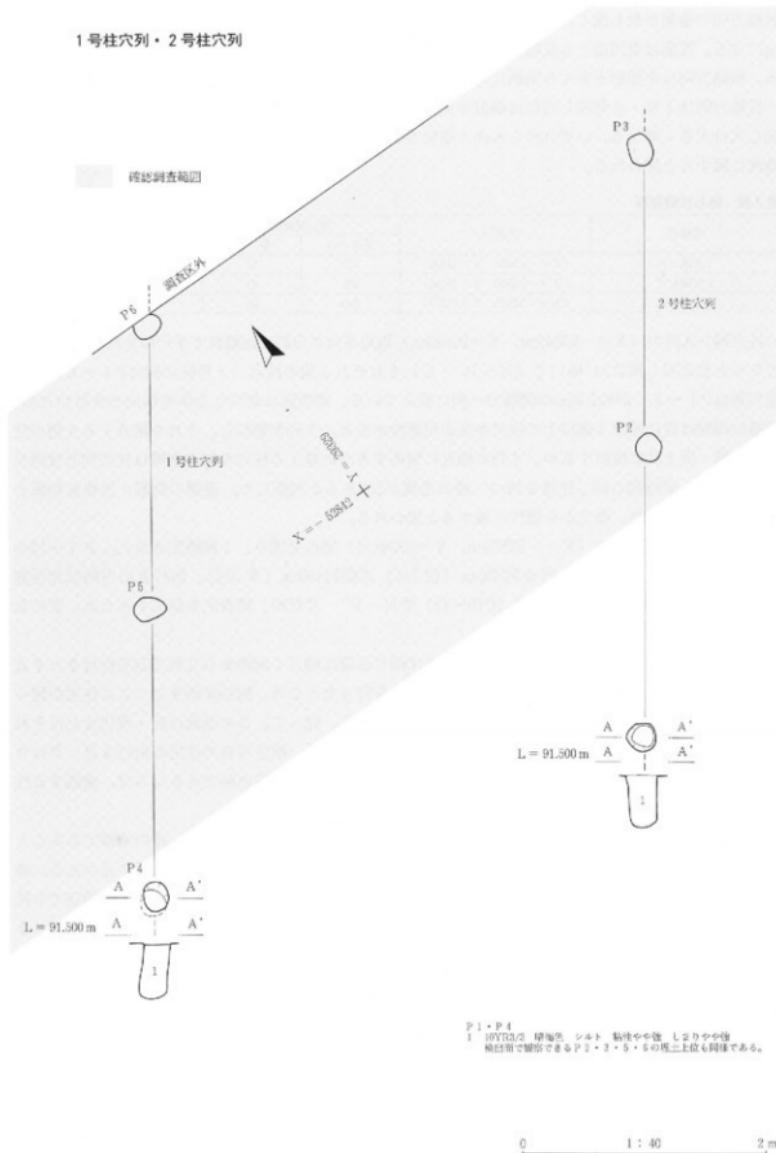
<掘立柱建物跡> B区の(X=-52875m, Y=29381m)地点を開み、1棟検出された。P7~12の6個の柱穴で構成され、総桁行き約380cm(12.5尺)梁間約190cm(6.3尺)、桁行きの方向は北西側(P7~9)でN-53°-E、南東側(P10~12)でN-57°-Eだが、調査区を斜交するため、更に北東の調査区外に延びる可能性もある。

昭和22年の米軍による航空写真をみると、ほぼ同じ位置に同じく南西から北東方向を桁行きとする住宅が建っている。その住宅の元居住者に聞き取りを行ったところ、約10年前までここに住宅が建っていたことが確認でき、本造構付近に玄関があったという。従って、この造構は近・現代またはそれ以前の時代に同じ位置にあった建物のものということになろう。航空写真的住宅の桁行きは、やはり調査区を越え北東方向に延びているため、もしこの造構が写真的住宅の跡であるならば、構成する柱は6本以上あったものと思われる。

6個の柱穴には、配置はもとより平面形や埋土にも類似が見られ、これらが一連の造構であることがわかるが、底面標高は一様でなく最も深いP10と最も深いP8の底面標高には45cmの差がある。繰り返し北上川が氾濫し、地山にも川砂の層が混じり、沼のほとりに位置するこの地点は、現在でも柱の間隔ほど離れただけで地盤の硬さが異なる様子を示しており、当時もそれに応じて安定する深さまで穴を掘り下げ柱を立てなければならなかったのではないか。なかなか安定が保てなかつたのか最も深く掘られているP10の柱痕跡から礎石が出土しているのもその表れのように思われる。

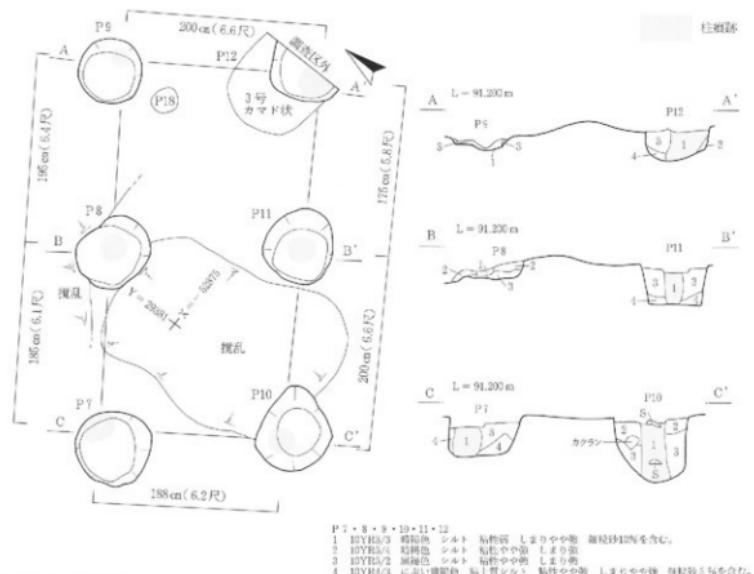
南東列の北東側に位置するP12は2号カマド状造構と重複し、建物がそれより後に構築されたことを示している。建物の内外にはP17~19があるが建物との関係は認められない。

<柱痕跡をもつ柱穴群> B区の(X= 52881m, Y=29382m)を閉み、4個の柱穴群が1か所検出された。柱穴の規模・底面標高・埋土には類似が見られ、位置も他の柱穴から離れてまとまっているように見えるが、桁と梁が直行せず建物跡としての構築要素を欠く。時期・性格共に不明であるが、埋土は1号掘立柱建物跡と同様であるため、同時期かもしれない。

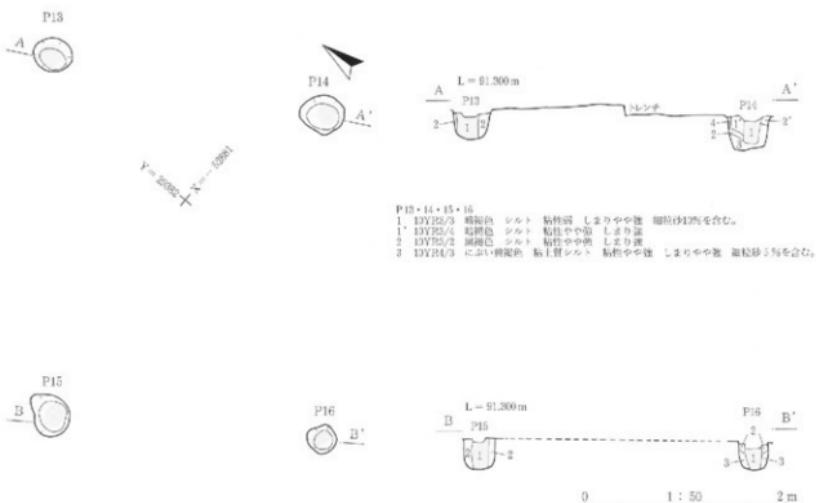


第6図 掘出遺構(2) 1・2号柱穴列

## 1号掘立柱建物跡



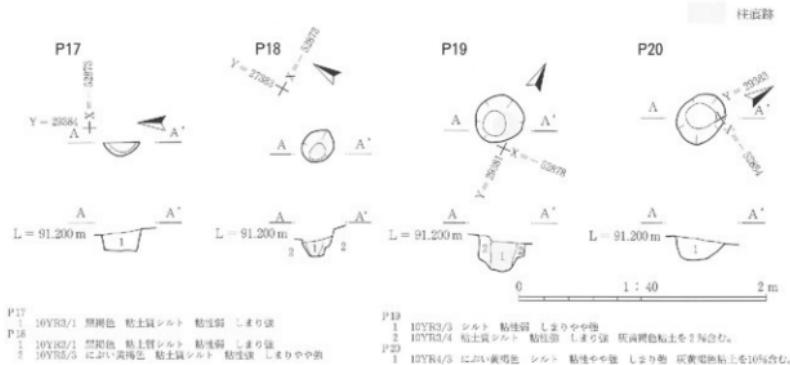
## 柱痕跡をもつ柱穴群



第7図 検出遺構（3）1号掘立柱建物跡、柱痕跡をもつ柱穴群

<柱穴状土坑>P17~19は1号掘立柱建物跡の付近にあり、P18・19には柱痕跡が見られるものの、1号掘立柱建物跡の柱穴の平面径65~83cmに対し18~30cmと小さく、平均底面標高も90.64mに対し90.89mと浅い。埋土も異なるため、建物に付随する施設であるなどといった関係は認められない。

<カマド状遺構>1号カマド状遺構はB区の(X=-52882m, Y=29384m)地点の東に検出された。調査区外に延びるため形状は不明であるが、検出された部分は梢円が2つ接する形状であったことか



第8図 検出遺構(4) 柱穴状土坑P17~20

第3表 柱穴状土坑観察表

遺構番号	位置(m)	直径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕跡の直徑(cm)	堆積状況 柱痕跡/壁面(上位より)	隣する遺構
P 1	(X=-52845, Y=29330)西	25	43	90.96	直径同じ	暗褐色	2号柱穴列 南西から1
P 2	(X=-52843, Y=29331)東	23	不明	不明	直径同じ	暗褐色	2号柱穴列 南西から2
P 3	(X=-52841, Y=29332)東	24	不明	不明	直径同じ	暗褐色	2号柱穴列 南西から3
P 4	(X=-52844, Y=29336)北西	22	46	90.97	直径同じ	暗褐色	1号柱穴列 南西から1
P 5	(X=-52842, Y=29337)北	23	不明	不明	直径同じ	暗褐色	1号柱穴列 南西から2
P 6	(X=-52840, Y=29328)東	(23)	不明	不明	直径同じ	暗褐色	1号柱穴列 南西から3
P 7	(X=-52875, Y=29380)南西	79	41	90.64	30	暗褐色/黒褐色・にぶい黄褐色	1号掘立柱建物跡 北西列南西から1
P 8	(X=-52874, Y=29381)	71	22	90.82	26	暗褐色/暗褐色・黒褐色	1号掘立柱建物跡 北西列南西から2
P 9	(X=-52873, Y=29383)西	65	15	90.78	18	暗褐色/暗褐色・黒褐色	1号掘立柱建物跡 北西列南西から3
P 10	(X=-52877, Y=29381)北	83	66	90.87	26	暗褐色/暗褐色・黒褐色	1号掘立柱建物跡 南東列西から1
P 11	(X=-52875, Y=29382)南東	83	44	90.59	27	暗褐色/黒褐色・にぶい黄褐色	1号掘立柱建物跡 南東列南西から2
P 12	(X=-52874, Y=29384)	(70)	37	90.68	(42)	暗褐色/黒褐色・にぶい黄褐色	1号掘立柱建物跡 南東列南西から3
P 13	(X=-52879, Y=29385)西	38	30	90.90	24	暗褐色/黒褐色	柱痕跡をもつ柱穴群
P 14	(X=-52882, Y=29384)北西	42	35	90.78	18	暗褐色/暗褐色・黒褐色・にぶい黄褐色	柱痕跡をもつ柱穴群
P 15	(X=-52881, Y=29380)西	43	33	90.90	22	暗褐色/黒褐色	柱痕跡をもつ柱穴群
P 16	(X=-52884, Y=29381)北	31	31	90.87	18	暗褐色/黒褐色・にぶい黄褐色	柱痕跡をもつ柱穴群
P 17	(X=-52875, Y=29384)南	(30)	18	90.97	不明(調査区外)	黒褐色单層	
P 18	(X=-52873, Y=29385)南西	27	29	90.91	17	黒褐色/にぶい黄褐色	
P 19	(X=-52878, Y=29381)北西	40	39	90.80	21	暗褐色/にぶい黄褐色	
P 20	(X=-52884, Y=29383)	38	29	90.59	直径同じ	にぶい黄褐色单層	

直徑・柱痕跡の直徑は検査面における長径・短径の中間値、( ) は推定値。P 2・3・5・6は確認調査のため検出状況のみ。下位は不明

ら、近隣遺跡の調査報告に見られる8の字形あるいは隅丸長方形のカマド状遺構と同様の形状であると思われる。

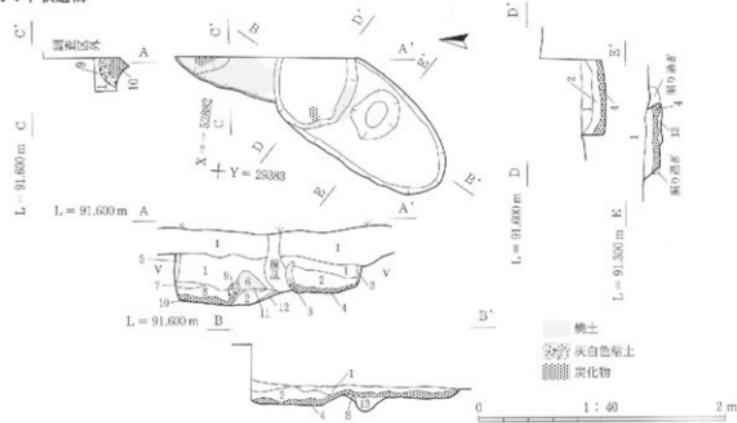
長軸方向はN-31°-Eで、焼土の形成が明確な北東部が燃焼部、南西部が前庭部ということになるか。前庭部は長さ140cm、幅85cmである。前庭部の底部は2段になっており、浅い南側は9cm、深い北東側は17cm掘り窪められ、直径70cmの皿形をしている。燃焼部は更に1段深く26cmの深さがある。煙道部は燃焼部の更に北東の調査区外にあると考えられる。

埋土には、炭化物・焼土に加え、白色の粘土が混入しており、燃焼部に粘土でドーム状の構造が作られていたことが推測される。出土遺物はなく、構築時期は不明であるが、近隣遺跡において同形のカマド状遺構は中世・近世に構築された遺構と関連するものという報告がなされている。

燃焼部の底面には炭化物が集中して堆積しているが、前庭部の1段深い皿状構造の底面にも炭化物の集中層が観察できる。この集中層の両側には明確ではないものの焼土が壁状に立ち上がるような堆積も見られる。今回の調査では明らかにはできなかったが、3段階の底面をもち、焼土の立ち上がりに開まれた2つの炭化物集中層が観察できるこの遺構は、2つのカマド状遺構が重複したものである可能性もある。

この遺構の長軸方向の南東に並ぶP20は、1号カマド状遺構と近い白色粘土を含むにぶい黄褐色土で埋まっていたが2遺構の関係性は明らかにできなかった。しかし同様の柱穴状土坑は他ではなく、P20の独自の性格を表しているのかもしれない。

#### 1号カマド状遺構



##### 1号カマド状遺構

- 1 10Y33/4 黒褐色 シルト 粘性質 しまりや中強 厚さ1例。炭化物1例。10Y46/5 灰褐色シルト粘土1例を含む。
- 2 10Y32/4 灰褐色 粘土質シルト 粘土質や中強 厚さ1例。炭化物1例を含む。10%含む。
- 3 10Y32/5 黒褐色 シルト 粘性質 しまりや中強 炭化物1例を含む。
- 4 10Y32/2 黒褐色 シルト 粘性質 しまりや中強 炭化物1例を含む。
- 5 5734/4 赤褐色 シルト 粘性質 しまりや強 (ガマドの壁の赤色)
- 6 5735/4 緑赤褐色 シルト 粘性質 しまりや強
- 7 10Y32/3 黒褐色 シルト 粘性質 しまりや強 壁面灰褐色土 (カマド構築上)を10%含む。
- 8 10Y32/2 黒褐色 シルト 粘性質 しまりや強
- 9 10Y35/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘土や中強 しまりや強 (カマド構築上)
- 10 10Y41.1/1 黒色 シルト 粘性質 しまりや強 (底盤付近)
- 11 5734/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘土や中強
- 12 5735/6 赤褐色、粘土質シルト 粘土質 しまりや強
- 13 10Y32/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性質 しまりや強

第9図 検出遺構（6）1号カマド状遺構

2号カマド状遺構はB区の(X=-52875m, Y=29384m)地点の北に検出された。1号掘立柱建物跡を構成するP12と重複し、東の調査区外に延びているため、全体の形状は不明であるが、検出した部分の平面形はほぼ円形で、直径90cm程度の規模と思われる。皿状に掘り込まれ、深さは12cmである。検出面に焼土ブロックは見られたものの、壁面や床面に焼土ではなく、これが1号カマド状遺構と同様に8の字形あるいは隅丸長方形をしているのであれば前庭部であると思われる。南縁埋土上位には白色粘土の堆積も見られた。P12との重複から、この遺構が1号掘立柱建物跡よりも前の時代に構築されたことが分かる。元居住者によると、居住していた時期に住宅周辺に地焼炉等がつくられたことはないようである。より詳細な構築時期は不明である。

## (2) 遺物

<土器>繩文中期・晩期の土器片、古代の土師器片が出土している。点数は僅かであり遺構内から出土したものはないが、1以外は自然堆積の層位から出土しており、縄文晩期及び古代の生活の場がこの地または周辺に所在したことがうかがわれる。

第4表 出土遺物観察表(土器)

No.	出土地点	層位	種別	機種	部位	文様・装飾	内部調整	胎土	表面焼成	色調	備考
1	B区北溝状底	根札	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部に波状	ナデ	砂粒を少量含む	良好	明瞭褐色	中層
2	A区西端	V層上面	縄文土器	鉢	縁部	沈線文	ナデ		良好	黄褐色 焼成による黒斑	駆羽後葉
3	B区中央	VI層上面	縄文土器	深鉢	縁部	LR鉢 LR横	ナデ	砂粒を含む	良好	明瞭褐色～橙色	晩期
4	A区	V層上面	縄文土器	深鉢	肩部	LR横		砂粒を含む	良好	灰白色 焼成による黒斑	晩期
5	B区	II層上面	土師器	瓶	口縁部			砂粒を含む	良好	に赤い橙色	古代 ナデ
6	B区中央	VI層上面	土師器	鉢	縁部		ナデ	砂粒を少量含む	良好	に赤い橙色	古代 ロクロ使用

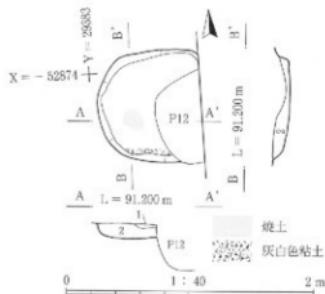
<石器>礫石器が2点出土している。7は敲磨器、8は敲石で紐を結ぶと思われるえぐりも見られる。現代耕作土であるI層からの出土であり、遺跡の性格を示すものではない。

<古銭>寛永通寶が1点出土している。新寛永の一文銭である。現代耕作土最下位と接するIII層上面からの出土であり、遺跡の性格を表す遺物とは言いがたい。住民の方からこの付近に神社があったということを伺っており、それに関連するものかもしれない。

第5表 南口詰八坂遺跡 土遺物観察表(石器・古銭・鉄製品)

No.	出土地点	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状態	備考
7	A区中央	I層	礫石器(敲磨器)	<14.7>	7.5	6.4	欠損	安山岩
8	A区東側	I～II層	礫石器(磨石)	<12.1>	5.5	3.5	欠損	安山岩 中央部にえぐり
9	A区 X=-52840m Y=29366m 東	III層上面	古銭(寛永通寶)	外径2.18 内径0.64	0.1		完形	新寛永 重さ1.9g
10	A区西側	I層最下位	鉄製品(釘)	6.1	1.3	1.4	完形	先端は錐くなる。基部は太く盤方向に穿穴が貫通
11	B区	I～II層	鉄製品(火打金)	<6.5>	2.8	0.3	欠損	板状

&lt; &gt;は現存値



第10図 検出構造(6) 2号カマド状遺構

<鉄製品> 2点出土しているがいずれも現代耕作土からの出土であり、遺跡の性格を表すものではない。10は基部に穿孔がある釘で縄等を通して使用したと思われるが、時期等詳細は不明である。11は欠損部分が多く時期・用途共に不明であるが、板状の形状から火打金が考えられる。

### 5まとめ

今回の調査では、主に绳文時代・近世～現代の遺構を検出し、绳文時代・古代の遺物を出土した。本遺跡は古代に属すると登録されているが、それに関連する遺構は検出されず、遺物として上師器片2片が出土したのみであり、古代の遺跡の主体は今回の調査区にはないことが明らかとなった。

遺跡面積の約36%にあたる今回の調査において本遺跡の全容を把握することは困難であったが、今回の調査記録が今後の調査や周辺遺跡の調査成果と比較検討され、新たな位置づけをされていくことに期待するものである。

なお、南日詰八坂遺跡2007年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。

### <引用・参考文献>

金子佑知子はか	2007	『細谷地遺跡第9・10次発掘調査報告書』岩文振報書第500集 (財) 岩文振報文化財センター
佐々木務はか	1993	『下川原II遺跡発掘調査報告書』岩文振報書第192集 (財) 岩文振報文化財センター
杉沢昭太郎ほか	2001	『台人部遺跡第26次発掘調査報告書』岩文振報書第416集 (財) 岩文振報文化財センター
杉沢昭太郎ほか	2003	『台人部遺跡第23次発掘調査報告書』岩文振報書第415集 (財) 岩文振報文化財センター
高橋義介ほか	2001	『台人部遺跡第18次発掘調査報告書』岩文振報書第369集 (財) 岩文振報文化財センター
永井久美男編	1996	『日本山十銭絶賛』兵庫埋蔵金報告書
丸山直美はか	2006	『高木中船遺跡・下道跡発掘報告書』岩文振報書第471集 (財) 岩文振報文化財センター

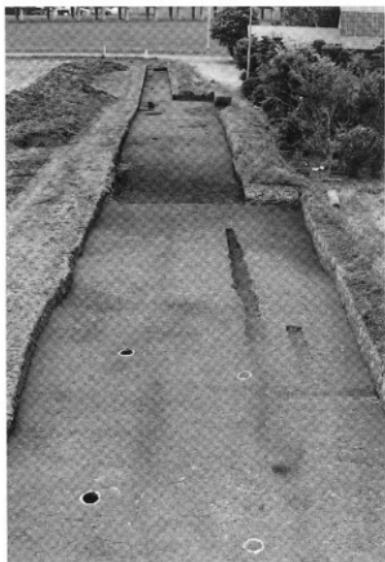
### 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	南日詰八坂遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	吉田泰治・米田 寛							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638 9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。 。 。 。 。 。	東経 。 。 。 。 。 。	調査期間	調査面積	調査原因	
南日詰 八坂遺跡	岩手県南日詰字 八坂368-1ほか	03321	LE77- 2116	39度 31分 14秒	141度 10分 41秒	2007.7.2 ~ 2007.7.31	1,359m <sup>2</sup>	経営体育成基 盤整備事業南 日詰地区
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
南日詰 八坂遺跡	散布地 集落	縄文	陥穴状遺構	3基	土器片・礫石器			
			柱穴状土坑	7個	土器片			
		近世～現 代	柱穴列	2列	古錢			
			柱根跡をもつ柱穴群	1箇所				
			柱穴状土坑	4個				
時期不明			鉄製品					
要約	当遺跡は古代の散布地として登録されている。遺跡範囲の約36%にあたる今回の調査で確認されたのは、縄文時代の陥穴3基と土器片・礫石器、古代の土器碎片、近世～現代の植立柱建物跡1棟・カマド状遺構2基・柱穴列2列・柱根跡をもつ柱穴群1箇所・柱穴状土坑4個と近世の古錢、時期不明の鉄製品である。古代に属する遺跡の主体は今回の調査区外にあると思われる。							

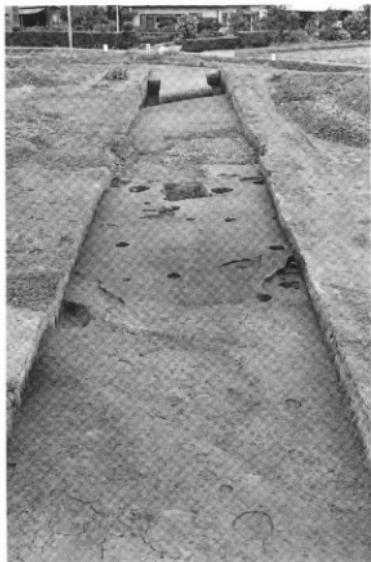
※緯度・経度は世界測地系による数値である。



第11図 出土遺物



A区西半全景（東から）



B区全景（南から）

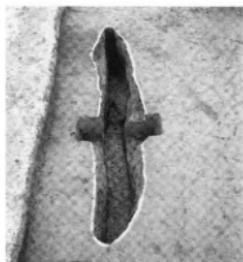


C区全景（北西から）

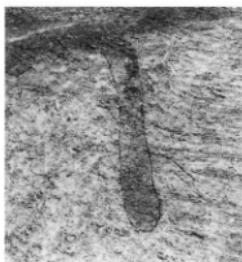


基本土層（南から）

(12) 南日祐八坂遺跡



1号陥し穴（東から）



2号陥し穴（西から）



3号陥し穴（南から）



1号陥し穴断面（東から）



1・2号柱穴列（南西から）



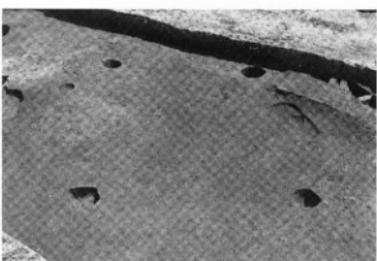
1号据立柱建物跡挨出（北西東から）



P10断面（北東から）



1号据立柱建物跡完掘（北西から）



柱痕跡をもつ柱穴群（南西から）

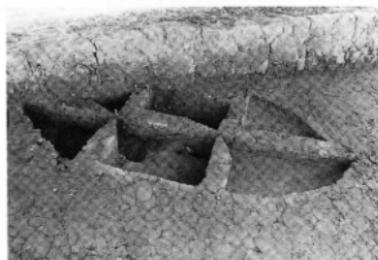
写真図版2 検出遺構（1）



1号カマド状遺構 (南西から)



1号カマド状遺構燃焼部 (北から)



1号カマド状遺構南西一北東断面 (北西から)



1号カマド状遺構南一北断面 (西から)



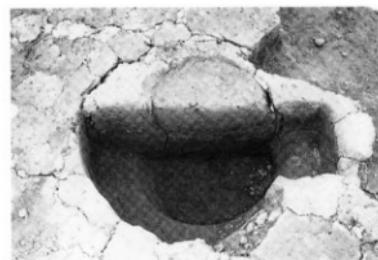
2号カマド状遺構 (西から)



P 19



2号カマド状遺構南一北断面 (西から)



P 19断面

写真図版3 掘出遺構 (2)



写真図版4 出土遺物

## (13) 八坂遺跡

所 在 地	花巻市石鳥谷町中寺林地内	遺跡コード・略号	LE96-1159・YS-07
委 託 者	県南広域振興局花巻総合支局 農林部農村整備室農村計画課	調査対象面積	620m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業 中寺林地区	調査終了面積	620m <sup>2</sup>

### 1 調査に至る経過

八坂遺跡は、経営体育成基盤整備事業中寺林地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

本事業地は、花巻市石鳥谷町のはば中心に位置し、北側は葛丸川、南側は耳取川に開まれた平坦な地帯であるが、水路が用排水兼用の上水路なため法面崩壊等による土砂堆積や通水能力不足で、水路の維持管理等に多大な労力を費していた。

このため、本事業により用排水路の整備を実施し、水路の維持管理にかかる営農労力の軽減を図るため、平成12年度に事業着手したものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、花巻地方振興局農林部農村整備室から平成17年9月27日付花地農（整）第73-6号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対し試掘調査の依頼を行った。

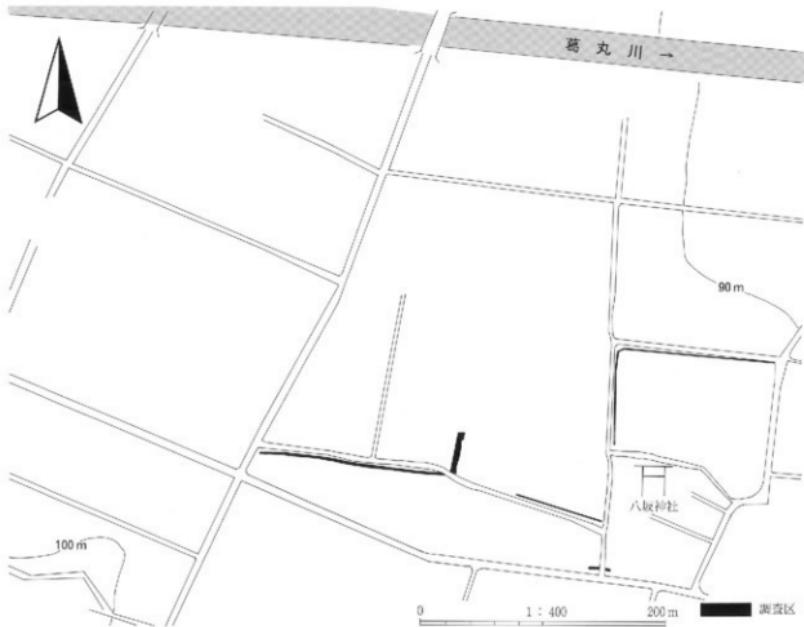
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成17年10月31日に試掘調査を実施し、工事に着手するには、発掘調査が必要となる旨を平成18年2月14日付教生第1586号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当整備室に回答してきた。

その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年11月1日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（県南広域振興局花巻総合支局 農林部農村整備室農村計画課）



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

## 2 遺跡の位置と立地

本遺跡はJR東北本線石鳥谷駅の南西約2kmに位置し、北上川の支流耳取川と葛丸川に挟まれた河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は98m前後であり、現況は水田・畑地・農道となっている。

## 3 基本層序

比較的高位にある遺跡中央付近において以下の層序で堆積しているのが確認された。他の地点においても、耕作等により第II・第III層が失われている他は同様に堆積していた。

### 第I層（耕作上）

I a層 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや弱

I b層 10YR3/3 暗褐色 シルト～

10YR4/6 褐色 粘土質シルト粘性弱～強 しまり強

耕作土の床土で地点により礫を含む。

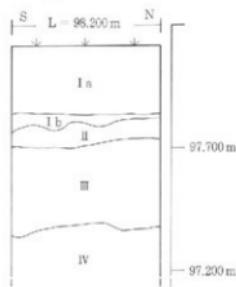
### 第II層 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや強

上位が層厚10cm程度 黒色になっている地点がある。

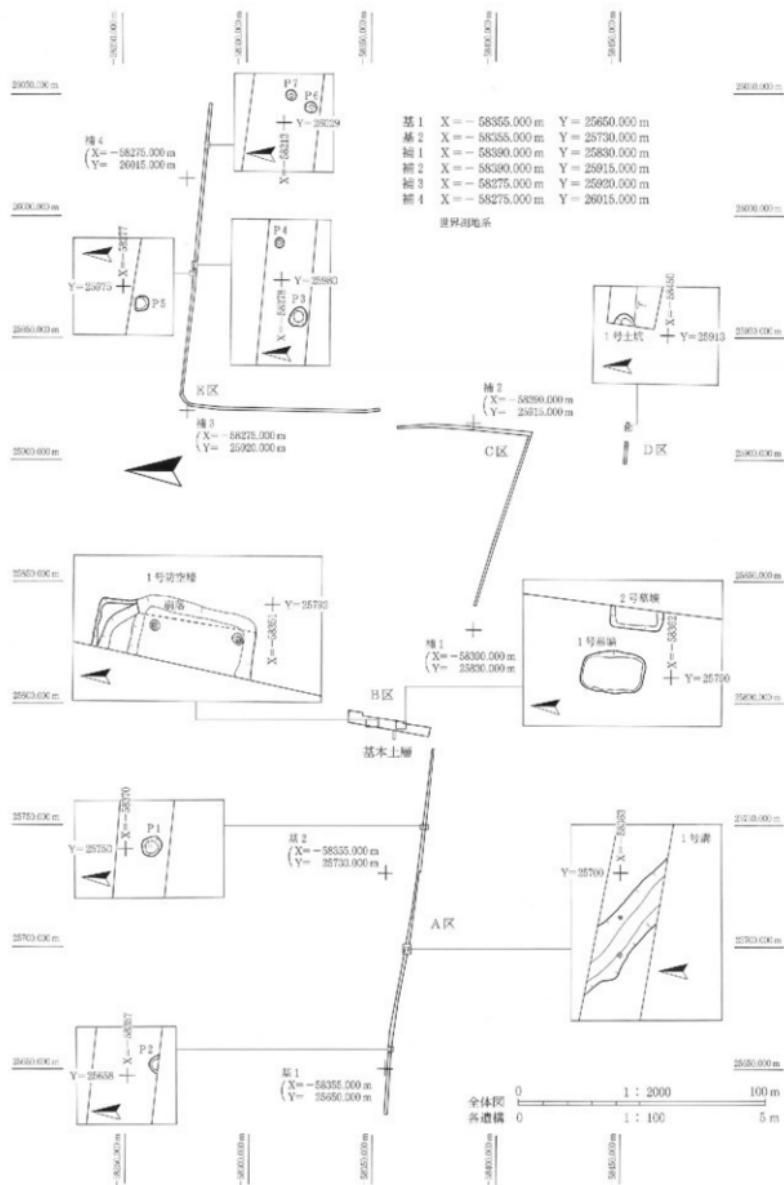
### 第III層 10YR1.7/1黒色 粘土質シルト 粘性強 しまり強

### 第IV層 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり強

地山層。上面を最終検出面とした。



第3図 基本層序 (S=1/20)



第4図 遺構配置図

## 4 調査の概要

検出した遺構は柱穴状土坑7個、土坑1基、溝跡1条、防空壕1棟、墓壙2基、出土した遺物は陶器、石臼、古銭、煙管、鉄片である。時期を特定できる遺構・遺物は全て近世～現代に属する。

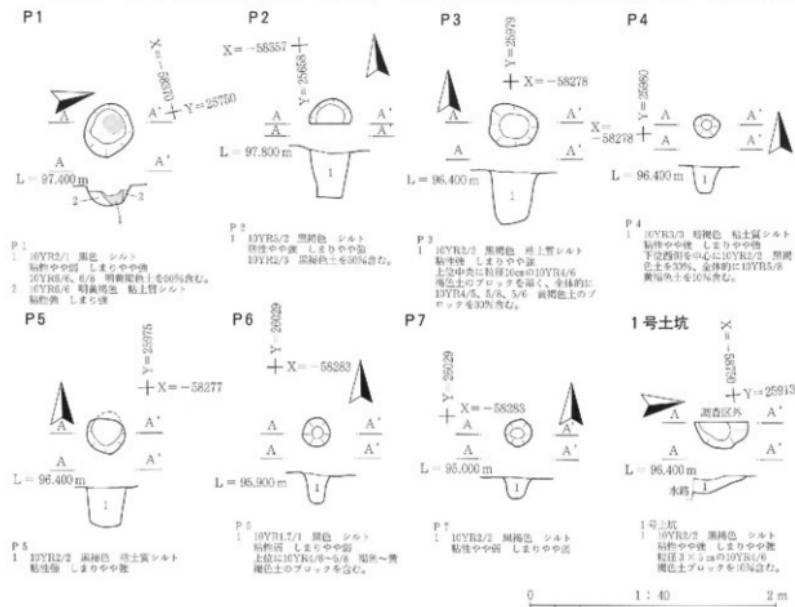
## (1) 遺構

<柱穴状土坑> A区より2個、E区より7個検出された。散在し形状も開口部規模22cm～40cm、底面標高95.6m～97.2mと様々で、わずかにP 6・7に一連の遺構である可能性があるのみである。

柱痕と掘り方が確認できるものはP 1だけで、いずれも遺物等時期を特定する材料はないが、P 1以外は現代に属すると思われる単層の土で埋まっている。

<土坑> D区より1基検出された。円形と仮定して調査区内に検出された部分から推測される規模は、直径約45cm深さ約10cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

<1号溝跡> A区より1条、調査区に斜交して一部が検出された。上軸方向はS-52°-Eで約2m



第5図 検出遺構(1) 柱穴状土坑P1～7・1号土坑

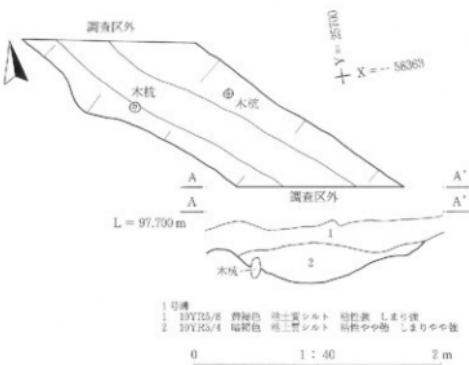
第1表 柱穴状土坑観察表

遺構名	位置(m)	直径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
P 1	(X=-58357, Y=25750) 南	43	21	98.809
P 2	(X=-58357, Y=25658) 南	34	32	98.830
P 3	(X=-58278, Y=25979) 南	37	44	97.788
P 4	(X=-58278, Y=25980) 東	20	23	97.805
P 5	(X=-58277, Y=25975) 南西	31	33	97.798
P 6	(X=-58283, Y=26029) 南東	23	26	97.761
P 7	(X=-58283, Y=26029) 東	22	18	97.753

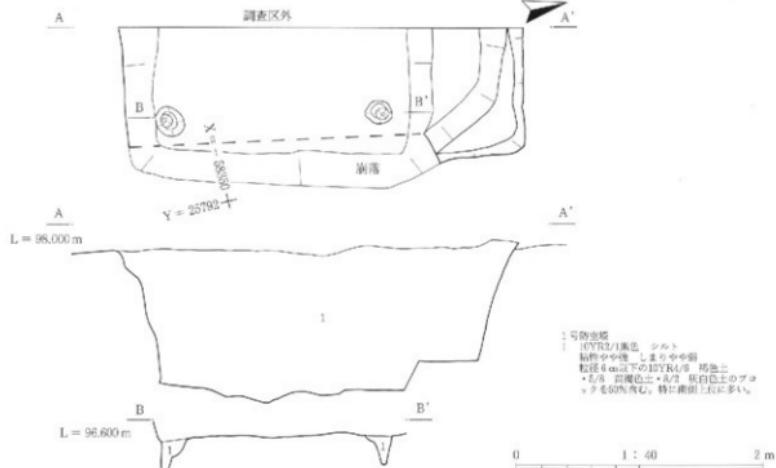
間に約9cm深くなり、幅は約70cm、最下位の標高は97.1mである。底近くに太さ約10cmの木杭が2本南北に並んで立っており、溝の埋上断面を兼ねる調査区南側の壁面上にも立った状態で1本確認されている。溝の調査時の廃土からも同じものと思われる木杭が抜けた状態で1本確認され、計4本の木杭は溝に伴う構造物の一部であると考えられる。底面より空き缶やプラスティック片が出土したため現代に属する遺構と思われる。

< 1号防空壕 > B区より1棟検出された。検出された部分は遺構の東端

でその規模は南北に約3m東西に約1mだが西側の調査区外に更に延びる。構造は竪穴式で深さは現表上より約1.5mである。検出された底面の北東・南東隅には直径約10cmの柱穴が確認された。また、北東側には地山を削って作られた3段の階段もあり、出入り口であったと思われる。この遺構を防空壕としたのは、この遺構の東隣に居住される高橋英雄氏のご記憶に因る部分が大きい。氏によれば、壕には筏状に木材を組んだ屋根をかけてあったそうで、柱穴はその支えとなつた柱のものであろうか。< 墓壙 > B区北の神社に至る小道の入り口付近で東西に並んで2基検出された。1号墓壙は128cm×86cmの隅丸長方形で、深さは約20cmである。2号墓壙は調査区外に延びるが、同様の形状・規模と思われる。どちらの底部からも近世の副葬品が出土している。遺物から構築時期は1号が18世紀前半以降、

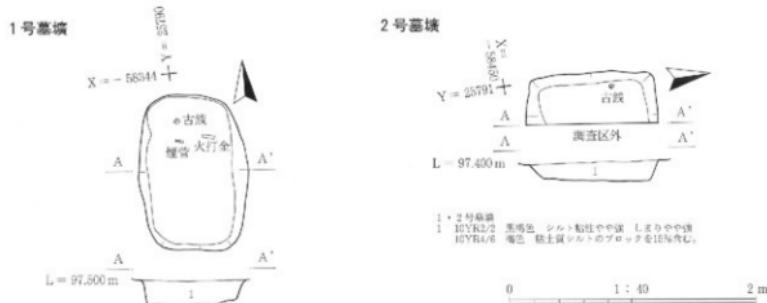


第6図 検出遺構(2) 1号溝



第7図 検出遺構(3) 1号防空壕

2号が17世紀後半以降と考えられる。



第8図 検出遺構(4) 1・2号墓壙

## (2) 遺物

- <陶器> A区の表土から出土した。形状より描鉢と考えられ、近・現代に属すると考えられる。
- <石臼> A区の搅乱より出土した。搅乱からは他にプラスチック片等も出土したことから、現代またはそれ以前に属するものが現代に廃棄されたのであろう。
- <古鏡・煙管・火打金> 寛永通寶が1号墓壙から3枚、2号墓壙から6枚それぞれ重なって出土した。六道銭を供える習慣に沿うものと思われる。全て新寛永の一文銭で、1号墓壙の内1枚、2号墓壙の内4枚は文銭である。煙管・火打金は1号墓壙から出土した。煙管は18世紀前半に製造された形状である。

第2表 出土遺物観察表(寛永通寶を除く)

No.	種別	出土地点	層位	備考
1	陶器	添跡	A区	I層 脊部 在地系 19世紀
2	石臼	石臼	A区	搅乱 直径(35cm) 高さ<10.7cm>
6	銅鋳品	煙管煙首	1号墓壙	底面 長さ4.48cm 小口径0.96cm 大口径1.65cm 重さ<4.9g> 18世紀前半
7	鉄製品	火打金	1号墓壙	底面 長さ<9.8cm>幅<3.6cm>厚さ<0.6cm>

( ) は推定値、< > は現存地

第3表 出土寛永通寶観察表

出土遺構	No.	種別	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土遺構	No.	種別	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1号墓壙	3	新寛永一文	2.29	0.62	0.06	1.6	2号墓壙	10	新寛永一文	2.44	0.58	0.08	2.5
	4	新寛永一文	2.42	0.65	0.08	2.8		11	新寛永一文	2.42	0.55	0.09	3.9
	5	文銭一文	2.48	0.59	0.08	2.9		12	文銭一文	2.48	0.58	0.09	3.5
2号墓壙	8	文銭一文	2.52	0.60	0.08	2.5		13	文銭一文	2.49	0.59	0.09	3.4
	9	文銭一文	2.50	0.58	0.07	2.6							

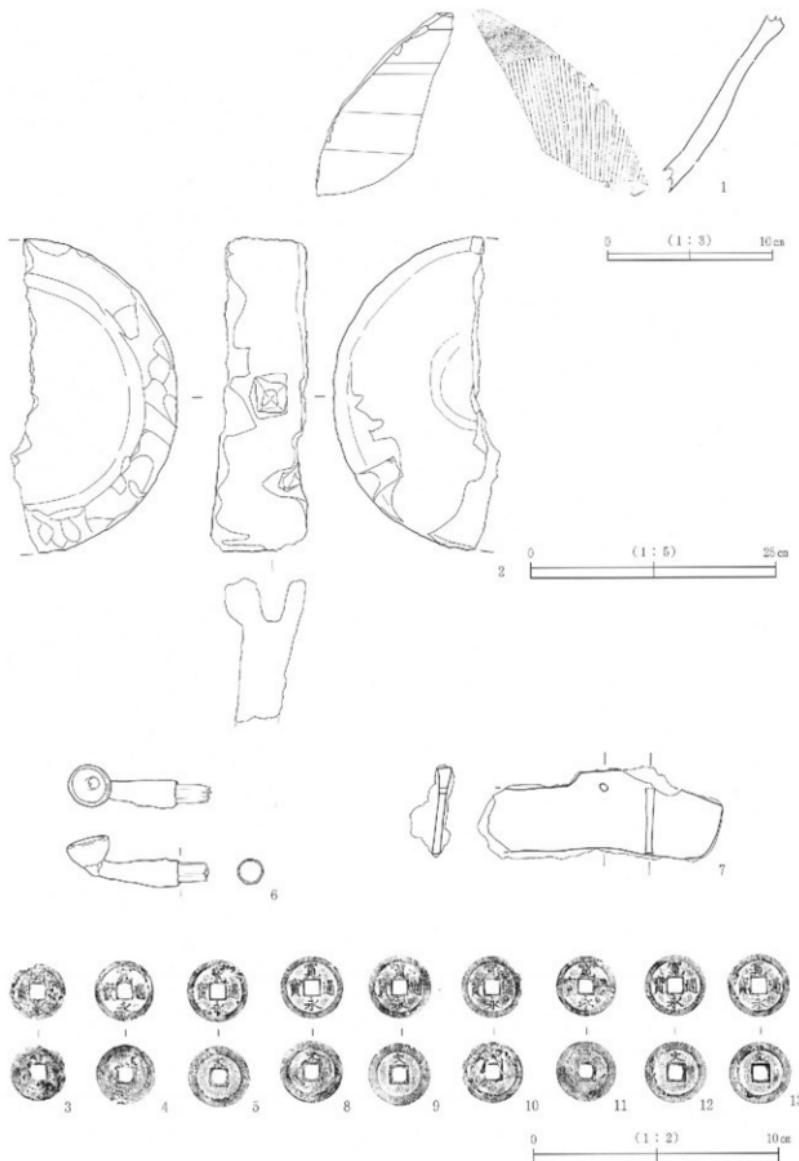
## 5まとめ

遺跡面積の約1.6%にあたる今回の調査は、近世～現代あるいは時期不明の遺構・遺物を僅かに確認するにとどまった。古代に属すると登録されている遺跡の主体は今回の調査区外にあると思われる。

なお、八坂遺跡2007年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。

## &lt;引用・参考文献&gt;

- 小畠弘 1987 『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社  
永井久美男編 1996 『日本出土銭鑄造』兵庫県総合資源開発会

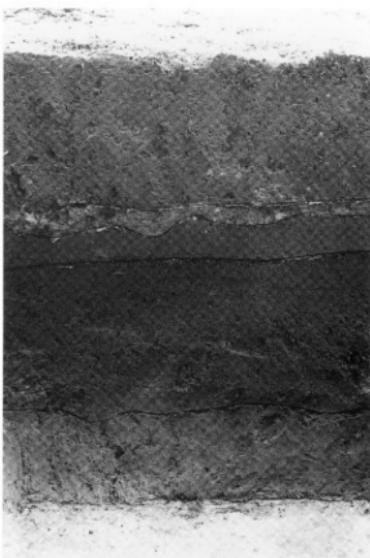


第9図 出土遺物

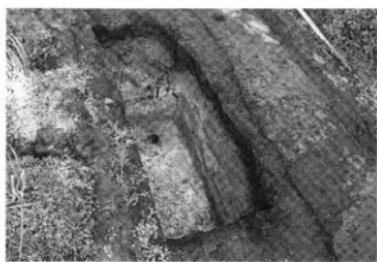
(13) 八坂遺跡



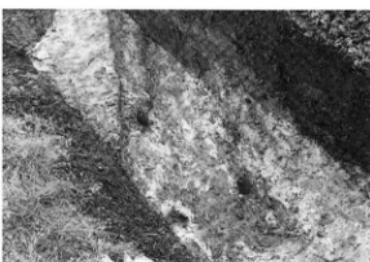
B区全景（北から）



基本土層（東から）



1号防空壕（南西から）



1号溝跡（北西から）



断面（東から）



断面（北から）

写真図版1 B区全景、基本土層 検出遺構（1）



P 1 (東から)



P 1 滑面 (東から)



1号墓壇 (南から)



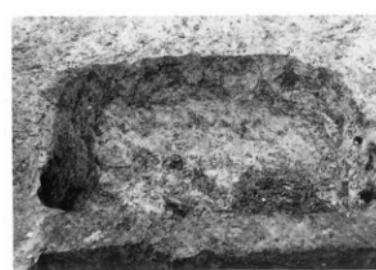
2号墓壇 (南から)



1号墓壇断面 (南から)



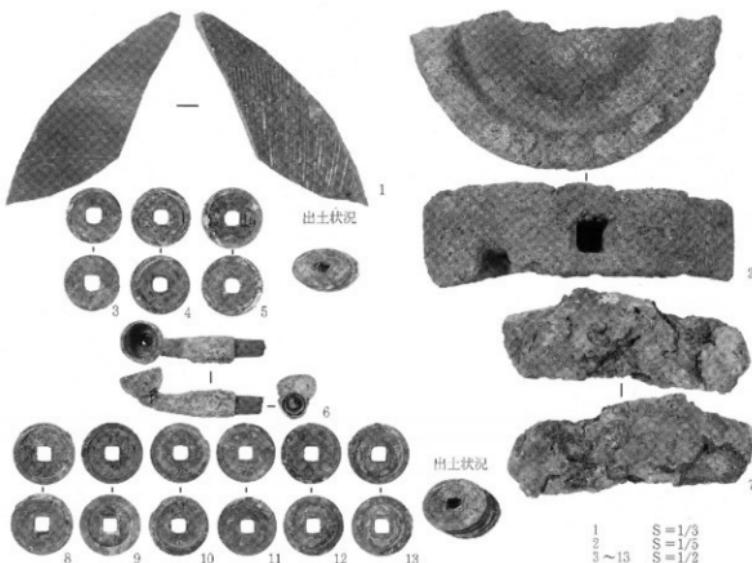
2号墓壇断面・遺物出土状況 (西から)



1号墓壇面 遺物出土状況 (南から)



1号土坑 (東から)



写真図版3 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさはうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	八坂遺跡						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	吉田泰治・米田 寛						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八坂遺跡	岩手県花巻市石鳥 谷町中守林地内	03205	LG96- 1159	39度 28分 26秒	141度 07分 53秒	2007.11.1 ～ 2007.11.22	620m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
八坂遺跡	散布地 墓地	近世	墓塚	2基	古銭・煙管・鉄片		
		近・現代	溝跡	1条	陶器・石臼		
		不明	防空壕	1基			
要約	当遺跡は古代の散布地として登録されている。遺跡範囲の約1.3%にあたる今回の調査で確認されたのは、18世紀に属すると思われる墓塚2基とその副葬品、近・現代または時期不明の遺構・遺物である。古代に属する遺跡の主体は今回の調査区外にあると思われる。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (14) 鶴ヶ沢遺跡

所 在 地 一関市真流域内  
委 託 者 岩手県土地開発公社土地経営企画課  
事 業 名 一関研究開発工業団地整備事業  
発掘調査期間 平成19年9月3日～10月12日

遺跡コード・略号 OE07-1196・TS-07  
調査対象面積 12,000m<sup>2</sup>  
調査終了面積 6,534m<sup>2</sup>  
調査担当者 潤 浩二郎・藤原大輔

### 1 調査に至る経過

岩手県は、平成11年度に「岩手県総合計画」を策定し、その中で、地域産業の付加価値生産性の一層の向上を図るために、研究開発型企業等の集積を促進するとともに、両替地域に公社等を事業主体とする研究開発工業団地等工業立地基盤の整備を進めるものとした。予定地は、両替地域の中でも都市機能や交通の利便性に恵まれ、既存の工業集積や（独）一関工業高等専門学校等研究開発支援機能を併せ持つ一関市が、候補地として県に推薦したものである。

県の要請を受けて事業主体となった岩手県土地開発公社は工業団地の整備を進めるに当たって、当該予定地は埋蔵文化財包蔵地とはなっていないが、工事中に遺跡が確認された場合の工事停止等不測の事態を回避するため、県及び一関市と協議のうえ、平成17年9月27日付開公第77号により岩手県教育委員会に分布調査を依頼した。その結果、平成18年3月31日付教生第1857号により岩手県教育委員会から試掘調査についての協力要請があった。これを受けて平成18年6月1日付開公第37号により岩手県教育委員会に試掘を依頼した。これを受けて岩手県教育委員会は平成18年7月18日～21日に試掘調査を実地し、工事に着手するに当たっては鶴ヶ沢遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年7月26日付教生第632号により岩手県土地開発公社に回答してきた。その結果を踏まえて当公社は岩手県教育委員会と協議し、調査を受けて平成19年7月26日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で遺跡の発掘調査に係わる委託契約を締結し、調査を実地することとなった。

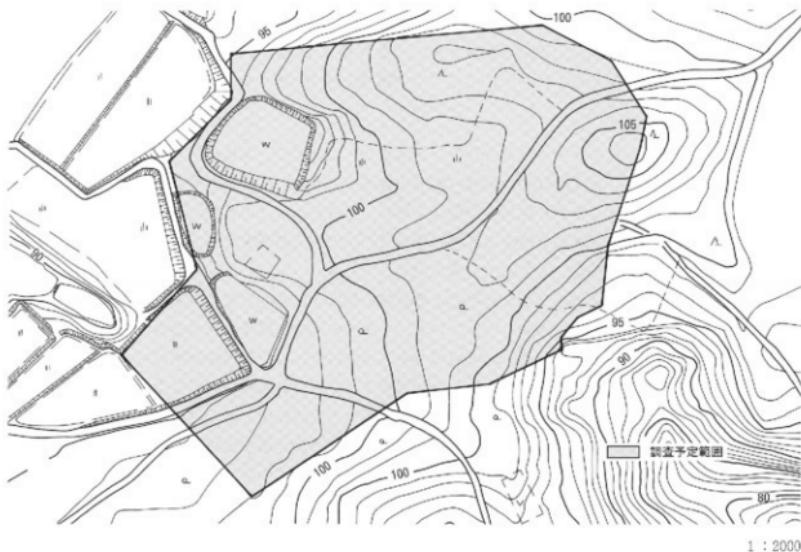
（岩手県土地開発公社）



第1図 遺跡の位置

## 2 遺跡の立地

遺跡はJR東北本線一関駅から南東約8.7kmに位置し、国道283号沿いの丘陵地上に立地する。遺跡の標高は99~106mで、調査前の現況は牧草地・畑地・雑木林である。



第2図 調査区と周辺の地形

## 3 基本土層

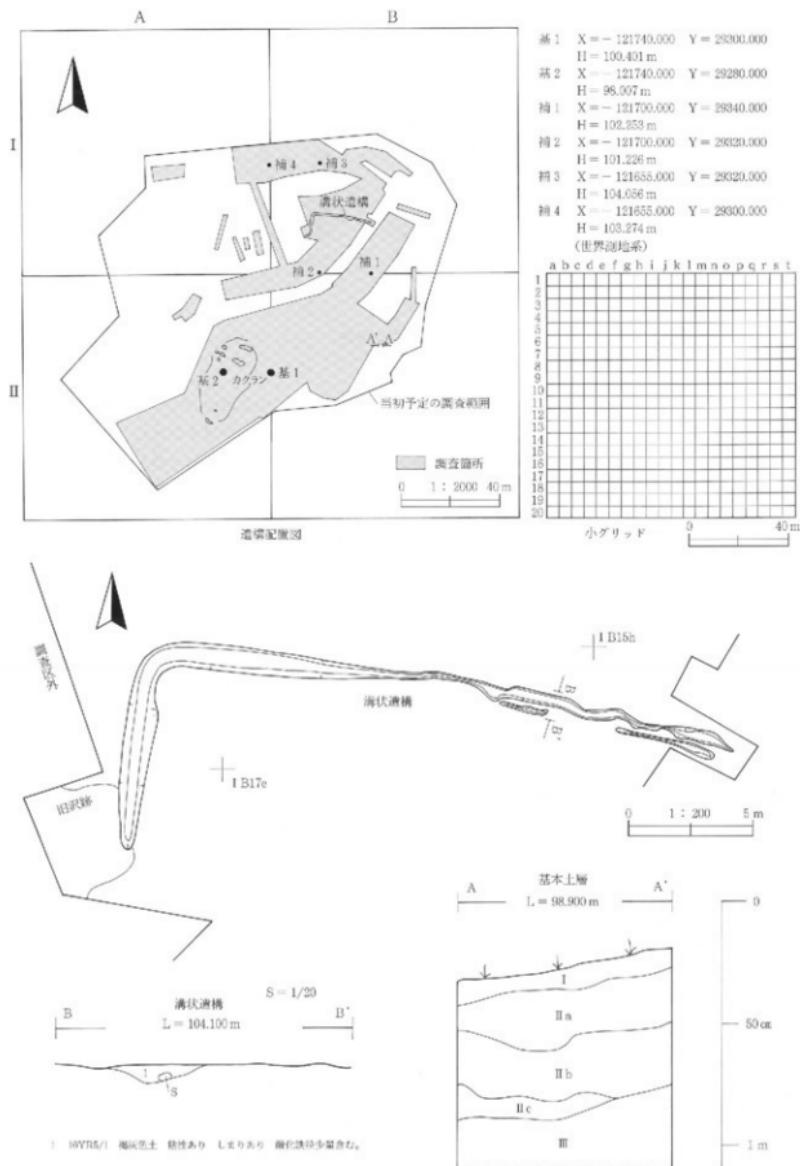
本土層については概ね以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 10YR4/6 褐色 シルト 粘性なし しまりややあり 現表土。
- 第Ⅱa層 10YR4/6 褐色 粘土質シルト50%、10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト50%の混合土層。粘性なし しまりあり 盛土。
- 第Ⅱb層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまりあり 盛土。
- 第Ⅱc層 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性なし しまりあり 盛土。
- 第Ⅲ層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性なし しまりあり

## 4 調査の概要

### (1) 遺構

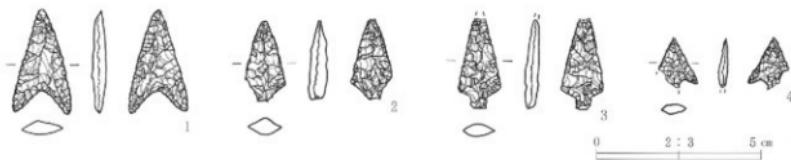
調査区北東側から溝状遺構が1条検出された。調査に先立って行われた県教育委員会の試掘調査で確認されていたもので、規模は長さが約32m、幅0.2~1.0m、深さ0~7cmで西端部分は旧沢跡へと続く。検出時には埋土もほとんど残存しておらず、大半がシミ状になっている平面プランを確認した状況であったため、人為的に掘られたものか、沢の上流部の一部かの判断は出来なかった。旧沢跡との合流点付近の底面からは石鐵が出土している。



第3図 遺構配置図、基本土層、検出遺構

## (2) 遺物

石鏃が4点出土した。いずれも縄文時代のもので、旧沢跡や溝状遺構がある調査区の北東部から出土し、旧沢跡やこれを埋め立てた土中に混入していたものである。石材には1～3は頁岩、4は黒曜石が使用されている。他に黒曜石が2点出土している。



第4図 出土遺物

## 5まとめ

今回の調査で、鶴ヶ沢遺跡が縄文時代に狩猟場として利用されていた場所であったことが確認された。また、調査区の大部分が過去の造成工事で大きく掘削され、地形が改変されたことにより、本来の遺跡の全容は知り得ない状況ではあったが、生活の痕跡を示す遺構や土器などが全く見つかっていないことから、居住地から離れた場所であった可能性が高い。

なお、鶴ヶ沢遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	鶴ヶ沢遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	瀬 浩二郎							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
つるがさわいじゆせき 鶴ヶ沢遺跡	岩手県・盛岡市 真流地内	03209	OE07— 1196	38度 54分 12秒	141度 10分 18秒	2007.9.3 ～ 2007.10.12	6,534m <sup>2</sup>	一閣研究開発 工業団地整備 事業に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
鶴ヶ沢遺跡	散布地	縄文時代	溝状遺構1条（時期不明）		石鏃4点			
要約	遺跡は一閣市街より、気仙沼市方面へと続く国道283号沿いにある丘陵地上に立地し、調査前の現況は牧草地・畑地・雜木林などであったが、いずれの箇所においても過去の造成工事の影響で地形改変されており、旧地形をとどめていない状況である。調査では旧沢跡周辺から石鏃が4点出土し、縄文時代に狩猟場として利用されていたことが確認された。							

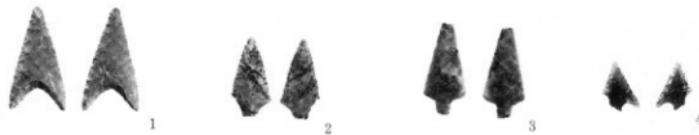
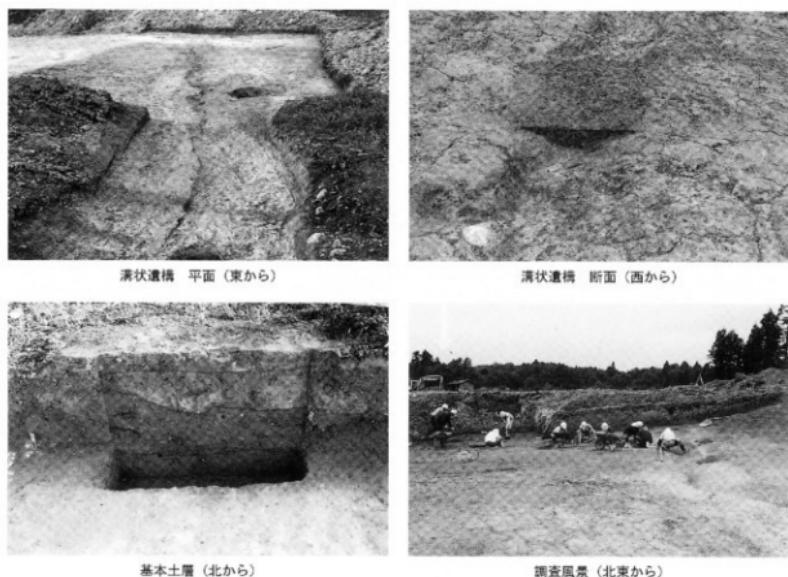
幸緯度・経度は世界測地系による数値である。



遺跡遠景（上が北）



調査区（上が東）



石器観察表

No	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	I B 18 r・旧沢跡埋土	石鏃	3.2	1.8	0.4	1.53	頁岩	完形
2	I B 15 d・溝状遺構埋土	石鏃	2.4	1.2	0.6	1.31	頁岩	基部欠損
3	II A 12 o・カクラン	石鏃	(2.8)	(1.5)	0.5	1.25	頁岩	先端部欠損
4	I B 15 e・溝状遺構埋土	石鏃	(1.5)	(1.2)	0.3	0.28	黒曜石	基部欠損

写真図版2 検出遺構、基本土層、出土遺物

## (15) 濱原II遺跡 第10次調査

所 在 地	西磐井郡平泉町瀬原字192-2ほか	遺跡コード・略号	NE66-1086・SW07-10
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	554m <sup>2</sup>
事 業 名	国道4号線平泉バイパス改築工事	調査終了面積	554m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年6月18日～6月28日	調査担当者	菊池昌彦

### 1 調査に至る経過

「瀬原II遺跡」は、平泉バイパスの改築工事の竣工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に至る延長約858kmの我が国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

国道4号平泉バイパスは、平泉町平泉字高田と同町森下の間約3.4kmの区間で計画されている。現国道は市街地の中心部を南北に縦貫する全幅員9.5kmの2車線道路で、広域観光ルートの路線でもあり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和56年度に事業着手、昭和59年から工事着手、平成11年一部供用し事業を進めている。

「瀬原II遺跡」については、柳之御所に近接する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会及び平泉町教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。平成18年度に実施された試掘調査の結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、平成19年6月8日付で岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとの間で受託契約を締結し、「瀬原II遺跡」の発掘調査に着手した。

### 2 遺跡の位置と立地

瀬原II遺跡は平泉前沢インターの南南東約1km、北上川西岸の低位段丘上に立地している。今回の調査区は、国道4号線と箱石橋に通じる県道長坂東稲前沢線の交差点の南側に位置する。(第1・2図)



第1図 瀬原II遺跡の位置



第2図 調査区位置図

### 3 基本層序

I層は水田の耕作土層、II層は水田造成時の盛土層で、いずれも近現代に形成された層と見られる。III層は地山で遺構検出面であるが、遺構の状況から水田造成時に上部が掘削されたと思われる。

I層 10YR4/2灰黄褐色シルト 表土、耕作土 層厚10cm程度

II層 10YR4/1褐灰色シルト 水田の盛土 層厚10cm程度

III層 10YR5/6黄褐色粘土 地山層 遺構検出面

### 4 調査の概要

#### (1) 遺構(第3図)

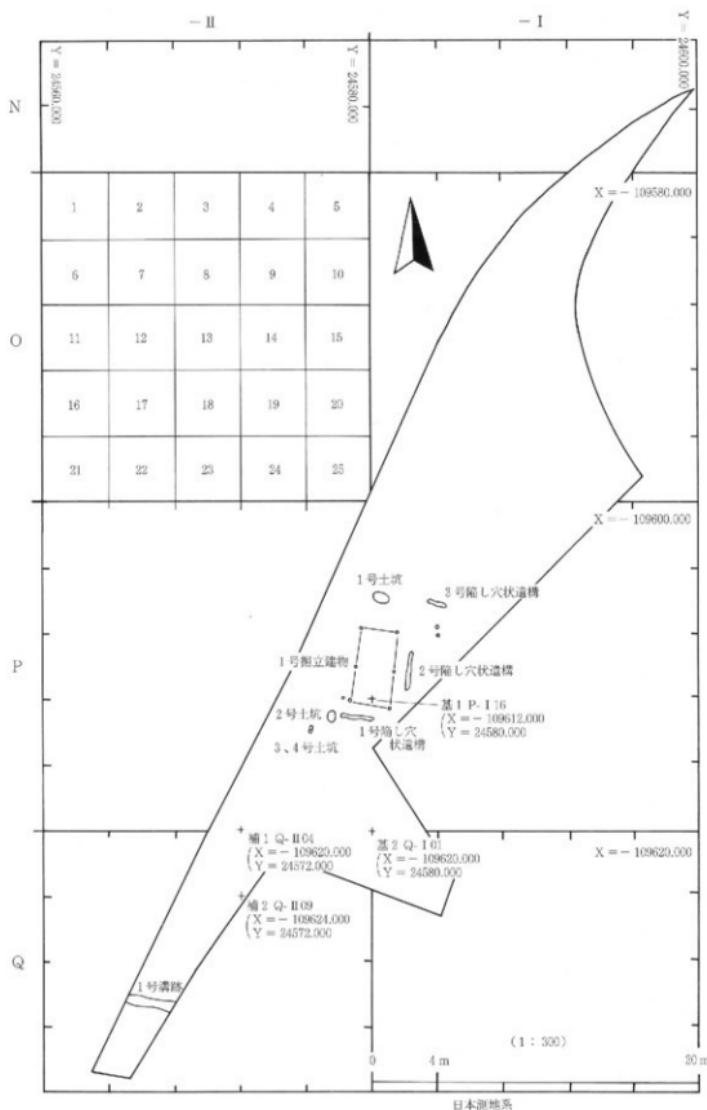
土坑4基、陥し穴状遺構3基、溝跡1条、柱穴状土坑9個が検出された。そのうち6個は規則的に並ぶため、掘立柱建物跡となった。

1号土坑：P-I 06グリッドで検出された。円形に近い楕円形で、長軸138cm、短軸105cm、深さ30cm。断面は椀状である。遺物は確認されていない。時期、用途ともに不明である。

2号土坑：P-II 20グリッドで検出された。円形に近い楕円形で、長軸105cm、短軸73cm、深さ61cm。断面はビーカー状である。遺物は確認されていない。時期、用途ともに不明である。埋土の状況から1、2号土坑は近い時期に作られたものと推測される。

3・4号土坑：重複している。P-II 20グリッドで検出された。埋土の堆積が少なく新旧の判断が不可能であった。規模的には柱穴の可能性もあるが、他の柱穴と比較すると深くないことや底部の形状が異なることから、重複した土坑の上部が切られたものと推測する。6号土坑は円形に近い楕円形で長軸が70cm、短軸が50cm、深さが14cm。7号土坑もほぼ円形で直径は40cm、深さが6cm。いずれも断面は椀状である。遺物は確認されていない。時期、用途ともに不明である。

1号陥し穴状遺構：P-II 16グリッドで検出された。水田開発の際に上部がほとんど削られたと思われ、深さが6cmしかなかった。(以下記述の2・3号陥し穴についても、上部がほとんど削られている状況は同じである。)長軸205cm、短軸35cmの溝状である。長軸方位はN-83°-W。土器等遺物が出土していないため時期の特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。



第3図 濱原Ⅱ遺跡（第10次）遺構配置図

2号陥し穴状遺構：P-I 11グリッドで検出された。長軸245cm、短軸40cmの溝状である。深さは8cm。長軸方位はN-5°-E。遺物は確認されていない。形状から縄文時代のものと推測される。

3号陥し穴状遺構：P-I 06グリッドで検出された。長軸174cm、短軸30cmの溝状である。深さは6cm。長軸方位はN-79°-W。遺物は確認されていない。形状から縄文時代のものと推測される。

1号溝跡：Q-II 12グリッドで調査区を横断するように検出された。長さは345cm、幅は68cm、深さは14cm。遺物は確認されていない。時期、用途ともに不明である。

1号掘立柱建物跡：主にP-I 11グリッドに位置する。桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。規模は南北柱列総長4.5m~4.6m、東西柱列総長2.2m~2.4m。軸方位はN-9°-E。柱間距離は桁方向で2.35~2.45m。柱穴はいずれもほぼ円形で径20cm~30cm、深さ40~45cm。柱痕跡は確認できなかった。埋土はいずれも灰黄褐色であった。遺物は確認されていない。時期は遺物が出土していないため不明である。

その他3個の柱穴状土坑についても時期は不明である。(掘立柱建物跡も含め柱穴状土坑の詳細は第1表、位置は第4図参照)

第1表 柱穴状土坑一覧表 (No. 1~6は掘立柱建物跡)

No.	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	埋上
1	P-I 6	3.0	3.0	4.6	34.765	10YR6/2 灰黄褐色シルト 黄褐色土10%含む
2	P-I 11	3.2	3.0	5.4	34.778	" "
3	P-I 16	2.0	1.9	3.8	34.385	" "
4	P-II 10	2.5	2.3	3.9	34.760	" "
5	P-II 15	2.0	1.6	4.2	34.346	10YR6/2 灰黄褐色シルト 黄褐色土20%含む
6	P-II 20	2.5	2.4	4.4	34.404	10YR6/2 灰黄褐色シルト "
7	P-II 20	2.0	1.9	3.6	34.445	10YR6/2 灰黄褐色シルト 黄褐色土10%含む
8	P-I 7	2.1	1.7	3.0	34.470	" 黄褐色土20%含む
9	P-I 12	2.9	2.8	6.5	34.763	" "

## (2) 遺物

Q-II 04グリッドのII層から1点の陶磁器片の出土があったが、判別不能の小片であることから掲載しなかった。

## 5まとめ

今回の調査で調査区周辺は、陥し穴の存在から縄文時代の狩り場だったことと、掘立柱建物跡の存在から古代以降の居住域であることが明らかになった。

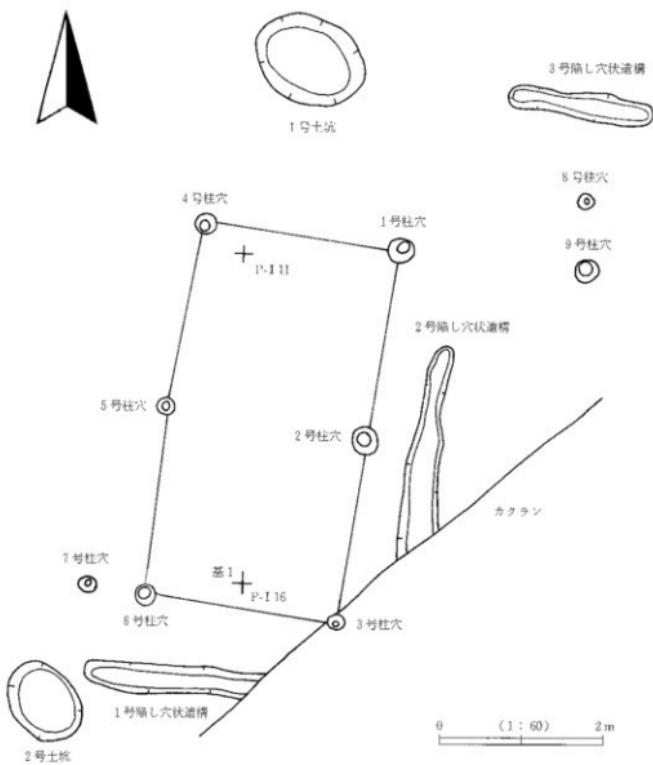
瀬原II遺跡は今までの調査でも掘立柱建物跡が多数確認されており、古代～近世の長い時期にわたって居住地だったことが確認されている。今回確認された建物跡は遺物がないため時期の特定はできないが、今までの調査結果から古代以降のものと推測される。また建物跡に隣接して1、2号土坑があつたことや、建物跡の柱穴と土坑の両方の埋土からほぼ同じ灰黄褐色土が確認されたことから、建物跡と1、2号土坑は同時期に存在し、建物跡に伴うものとして使用された可能性も考えられる。

また溝跡については、今回の調査区に隣接する6次調査において12世紀の窯窓陶器（常滑窯口線）が出土したという記録（及川2005）が残っているが、今回の1号溝は遺物がないため関連は不明である。

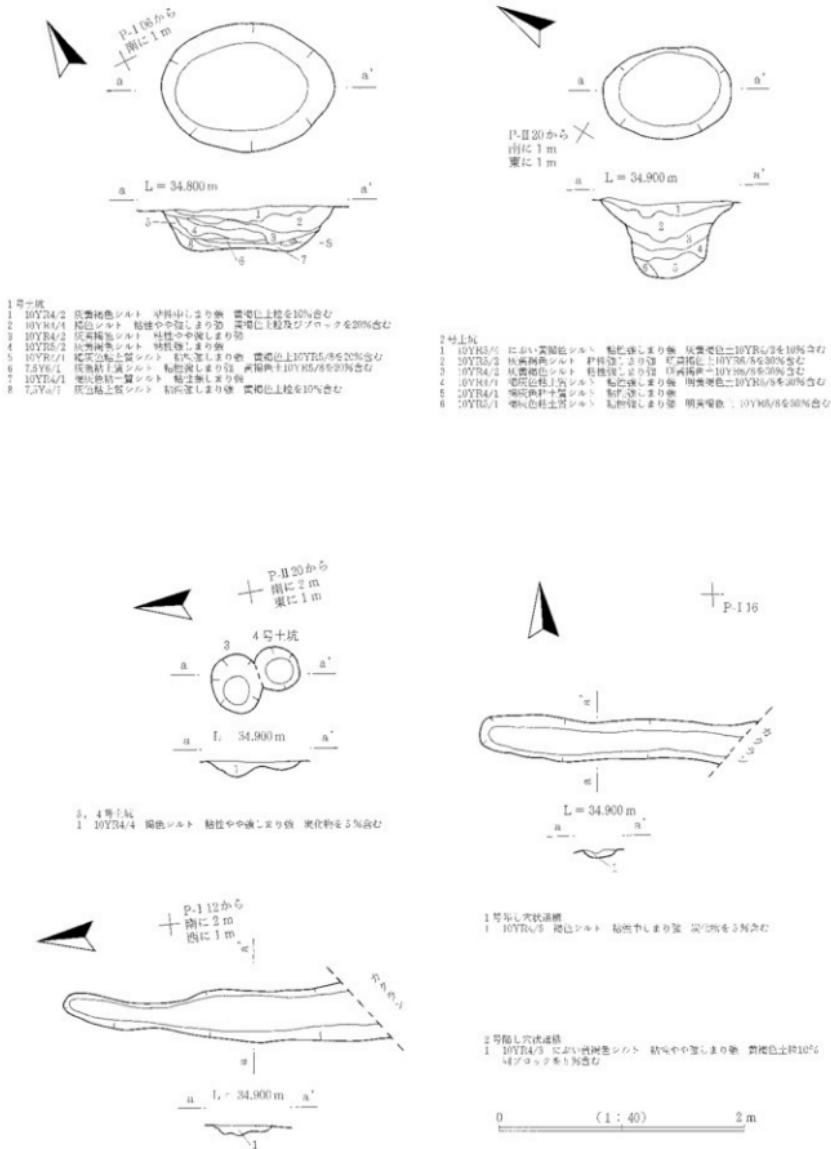
なお、瀬原II遺跡第10次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

## <引用・参考文献>

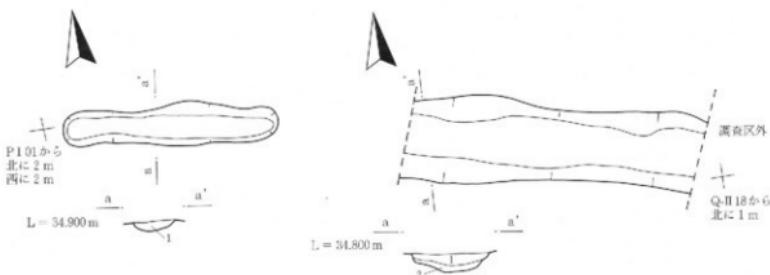
及川 司 2005 『平泉遺跡群発掘調査報告書』瀬原II遺跡第5・6・7次



第4図 柱穴群とその周辺の遺構



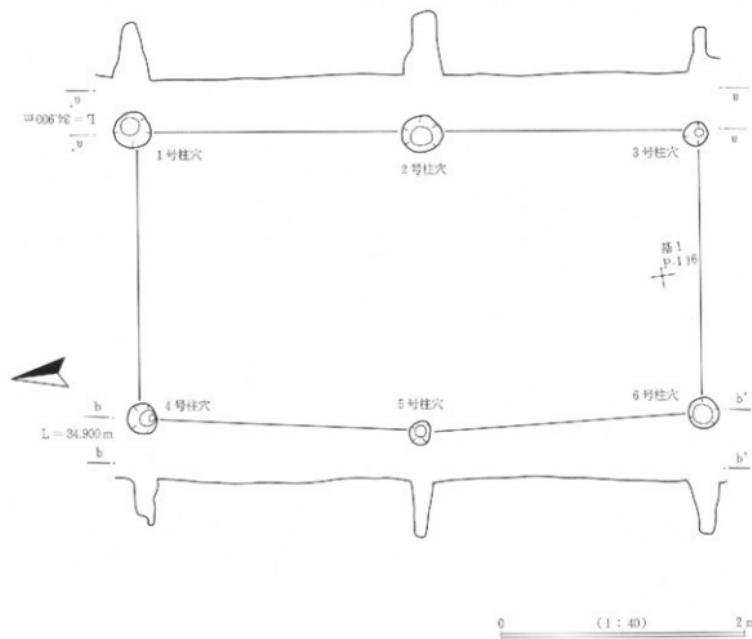
### 第5回 濱原II遺跡（第10次）検出遺構



3 可能な穴状構造  
1 10YR4/2 深黄褐色シルト・粘性やや強しまり土 黄褐色土砂を10%含む

1号測線  
1 10YR4/2 稀色シルト・粘性やや強しまり土 黄褐色土砂を10%含む  
2 10YR4/3 に少い黄褐色シルト・粘性やや強しまりやや強 黄褐色土砂を5%含む

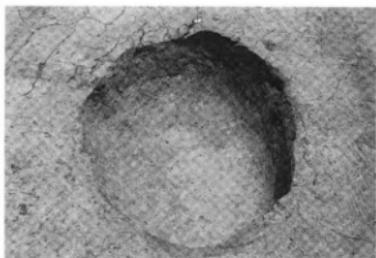
1号柱立柱跡物（上層柱記は第1表No. 1～6参照）



第6図 潤原 II 遺跡（第10次）検出遺構



調査終了状況（北から）



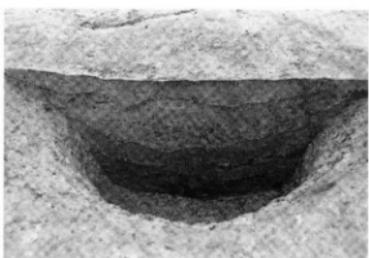
1号土坑平面



断面



2号土坑平面

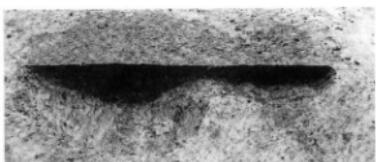


断面

写真図版1 濱原II遺跡（第10次）



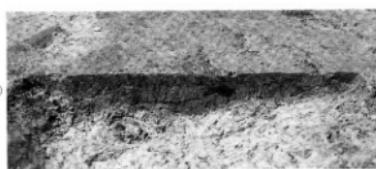
3、4号土坑平面



①



②



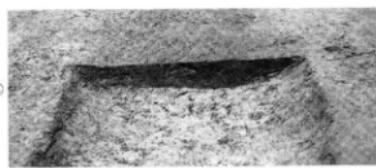
③



1号陥し穴状造構平面

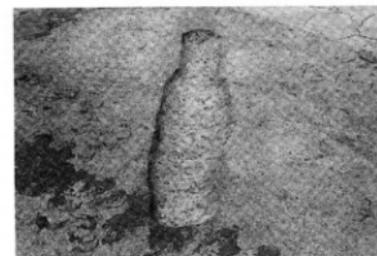


2号陥し穴状造構平面

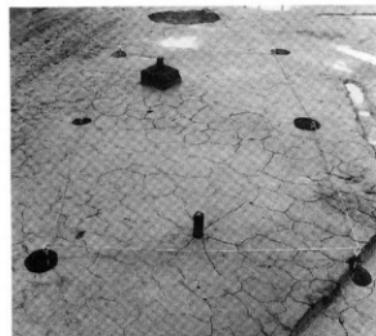


④

上から順に①3、4号土坑 ②～④1～3号陥し穴状造構断面



3号陥し穴状造構平面



1号掘立建物跡全景



1号溝跡平面



断面

写真図版2 濑原II遺跡（第10次）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度免握調査報告書						
副書名	瀬原II遺跡第10次調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団理蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	菊池昌彦						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積	調査原因
瀬原II遺跡 第10次調査	岩手県西磐井郡 平泉町字瀬原 192-2	03402 NE66- 1086	39度 00分 54秒	141度 06分 49秒	2007. 6. 18 ~ 2007. 6. 28	554m <sup>2</sup>	国道4線平泉 バイパス工事 に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
瀬原II遺跡 第10次調査	狩獵場	縄文時代	陥し穴状遺構 3基				
	居住域	古代以降	土坑 4基 掘立柱建物跡 1棟 溝跡 1条				
要約	調査区周辺は縄文時代の狩り場だったことと、古代以降の居住域だったことが明らかになった。掘立柱建物の時期については不明だが、古代以降のものと推測される。土坑と建物は同時期に存在した可能性もある。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

## II 試掘・確認調査報告

#### 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

## (16~18) 金浜 I 遺跡・金浜 II 遺跡・可能性あり⑩

所 在 地	宮古市大字金浜・八木沢地区	発 挖 調 査 期 間	平成19年9月10日～11月14日
委 託 者	国土交通省東北地方整備局 三陸国道事務所	調 査 対 象 面 積	21,240m <sup>2</sup> 試掘・確認調査面積 1,640m <sup>2</sup>
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調 査 担 当 者	福島正和・横井猛志

## 調査に至る経過

金浜 I 遺跡、金浜 II 遺跡、可能性あり⑩の 2 遺跡、1 地点は一般国道45号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い、試掘・確認調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号の線形不良及び陥路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成16年1月26日付け「国東整陸調第78号」により、国土交通省三陸国道事務所長から、岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成16年1月26日～1月28日、2月24日～2月25日にわたり分布調査を実施した。

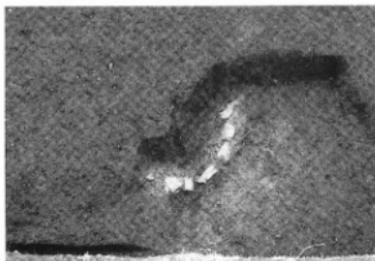
その結果、平成16年3月4日付け「教生第1879号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされた。

今回試掘・確認調査を行った 2 遺跡、1 地点については、三陸国道事務所長から、岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、平成19年8月1日付け「国東整陸調第21-2号」等により、試掘・確認調査の依頼を行い、岩手県教育委員会生涯学習文化課と三陸国道事務所の協議を経て、試掘・確認調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託することとなったものである。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



竪穴住居（可能性あり⑩：T118）



竪穴住居内炉跡（可能性あり⑩：T118）



第1図 宮古道路建設事業 関連遺跡位置図

1 : 25,000 宮古

かねはま  
**(16) 金浜 I 遺跡**

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上、調査対象面積 3,050m<sup>2</sup>  
 第2地割字古館ほか確認調査終了面積 290m<sup>2</sup>  
 遺跡コード・略号 LG43-2342・KH1-07調査担当者 福島正和・横井猛志  
 発掘調査期間 平成19年9月10日～9月21日

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線津軽石駅の北2.0kmに位置し、東に宮古湾および重茂半島を望む畠地に立地する。調査区は西から派生する尾根部とこれに付随する北側谷部からなり、斜面部を除いて概ね平坦である。金浜I遺跡は、北に位置する森の神III遺跡、南に位置する金浜II遺跡とそれぞれ隣接している。

### 2 基本層序

I層(表土・耕作土・盛土層)	層厚5～150cm
II層(褐色～黒褐色シルト層)	層厚0～60cm *縄文時代～古代の遺物を含む
III層(黒色シルト層)	層厚0～60cm *縄文時代の遺物を含む
IV層(暗褐色シルト層)	層厚不明
V層(黄色～灰黄色シルト層)	層厚0～40cm
VI層(灰白色花崗岩風化層)	層厚不明

### 3 調査の概要

今回の確認調査では、事業予定地内に25ヶ所のトレンチを設定し、すべて人力による掘削を行った。作業は表土除去以降、各層界上面での遣構検査を行った。

各トレンチでは尾根部から斜面にかけて、人為的な削平と盛土の痕跡が認められた。尾根部では頂部に当たる部分が削平され、一方で斜面側に盛土がなされている。斜面部では谷部に連続する裾付近で削平がなされている。これらのことより、現在みられる平坦な地形および棚段は、人為的に造成されたものであることが確認できた。造成された時期は不明であるが、これら造成土直上で耕作土層が途切れなくみられることから近代あるいは現代の可能性が高いと推察される。

遣構検出作業の結果、尾根部で竪穴住居状遺構1基と土坑2基、谷部で焼土1基、土坑1基をそれぞれ検出した。いずれの遺構も遺物を伴っておらず、出土遺物による詳細な帰属時期は不明である。谷部T1では、III層中あるいはIV層上面において焼土を1基検出した。この焼土は直径約20cmの平面円形を呈するが、どのような施設に伴う焼土かは不明である。谷部T9では、表土直下のIII層上面で土坑を2基検出した。いずれも長細い楕円形の平面形態であることから陥り穴である可能性が考えられる。尾根部T11では、I層直下のVI層上面において平面円形の土坑を1基検出した。この遺構埋土はV層起源のシルトであり、周辺の遺跡で確認される縄文時代の遣構埋土と酷似する。このことから縄文時代の遣構である可能性が高いと考えられる。尾根部T17では、I層直下のII層上面において断面楕円形の土坑を1基検出した。尾根部T18では、I層直下のII層上面において平面不整な円形と推測される竪穴住居状遺構を1基検出した。

遺物は25ヶ所中、12ヶ所のトレンチにおいて出土した。出土傾向としては、谷部に配したトレンチのII～III層より出土したものが多い傾向である。縄文時代の遺物では、縄文土器(前期～中期)・剥片石器・礫石器、古代の遺物では、土師器・須恵器、近世あるいは時期不明の遺物として、陶磁器片や鉄製品・鉄滓が少量得られた。遺物の数量は、土器類小1箱、石器類7点、鉄製品6点、鉄滓2点である。

## 金浜 I 遺跡

No	遺構	遺物
T 1	埴土 1基	縄文土器(中期)、削片石器、礫石器、土師器、鉄滓
T 2		縄文土器、土師器、鐵製品、鉄滓、近世陶器
T 3		縄文土器(中期)、疊石器、土師器
T 4		縄文土器(中期)
T 6		縄文土器、須恵器、鉄滓
T 7		縄文土器、削片石器、土師器、鉄滓
T 8		縄文土器、土師器、鉄滓
T 9	土坑 2基	縄文土器
T 10		土師器
T 11	土坑 1基	
T 13		近世陶器
T 15		鉄滓
T 16		疊石器、鐵製品
T 17		近世陶器、鉄製品
T 18	土坑 1基 堅穴住居状遺構 1基	陶器、鉄製品
T 19		鉄製品



土坑（金浜 I 遺跡：T 9）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成19年度免掘調査報告書
副書名	金浜 I 遺跡
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第524集
編著者名	福島正和・横井猛志
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田第11地割185番地 TEL (019) 638-9001
発行年月日	2008年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩手県宮古市 金浜 I 遺跡	岩手県宮古市 金浜第2地割 占館ほか	03202	LG43- 2342	39度 35分 41秒	141度 56分 33秒	2007. 9. 10 ~ 2007. 9. 21	305m <sup>2</sup>	三陸縦貫道路宮 古道路建設事業 に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
			堅穴住居状遺構	1基		
金浜 I 遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	堅穴住居状遺構 土坑	1基 3基	縄文土器(中期)、疊 石器、土師器、須恵器、 陶器、鉄製品、鉄滓	

要約

今回の調査対象箇所は東側に開けた谷部とその西方に位置する尾根部からなり、現況は畠および市道となっている。尾根部では畠地造成時に地形が大きく改変されており、遺構・遺物ともに希薄であった。一方谷部においては、遺構は尾根部同様に少ないものの古代の遺物がやや密に出土している。宮古市教育委員会による遺跡内隣接地の調査では同時期と考えられる堅穴住居跡が確認されており今回の調査区の一部も同一集落内に含まれるものと推測できる。

\*緯度・経度は世界測地系による数値である。

## (17) 金浜Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上、

調査対象面積 10,740m<sup>2</sup>

第2地割字古館ほか

確認調査終了面積 450m<sup>2</sup>

遺跡番号・略号 L G 43-2363・KH II-07

調査担当者 福島正和・横井猛志

発掘調査期間 平成19年9月25日~10月19日

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線津軽石駅の北2.0kmに位置し、東に宮古湾および重茂半島を望む小高い丘陵に立地する。調査区は西から派生する尾根部とこれに付随する南側および西側谷部からなり、斜面部を除いて概ね平坦である。また、谷部の大半は現況においても湿地となっており、一部進入が困難である。金浜Ⅱ遺跡は、北に位置する金浜Ⅰ遺跡、南に位置する金浜Ⅲ遺跡とそれぞれ隣接する。

### 2 基本層序

I 層（表土・耕作土・盛土層）	層厚5~150cm
II 層（褐色~黒褐色シルト層）	層厚0~60cm *縄文時代~古代の遺物を含む
III 層（黒色シルト層）	層厚0~60cm *縄文時代の遺物を含む
IV 層（暗褐色シルト~青灰色粘土層）	層厚不明 *湿地では砂層と粘土が互層になる地点も存在する
V 層（黄色~灰黄色シルト層）	層厚0~40cm
VI 層（灰白色花崗岩風化層）	層厚不明

### 3 調査の概要

今回の確認調査では、事業予定地内に46ヶ所のトレンチを設定し、湿地の深掘りおよび重機の進入が可能な地点は表土掘削を機械によって行い、その他は人力による掘削を行った。作業は表土除去以後、各層界上面での造構検出を行った。

尾根部から斜面にかけて、人為的な削平と盛土の痕跡が認められた。尾根部では頂部に当たる部分が削平され、一方で斜面側に盛土がなされている。斜面部では谷部に連続する裾付近で削平がなされている。これらのことより、現在みられる平坦な地形および棚段は、人為的に造成されたものであることが確認できた。造成された時期は不明であるが、これら造成土直上で耕作上層や宅地基礎などが認められることから近代あるいは現代の可能性が高いと推察される。また、広範囲な湿地は近現代においては水田として利用されていたらしいが、地下水位が著しく高く沼地のようになっている。この辺のやや標高の高い地点においてもⅡ層あるいはⅢ層で湧水が顕著である。

造構検出作業の結果、谷部T101、T102において炭窯をそれぞれ1基検出した。谷部T101の炭窯は、Ⅲ層上面において検出した。この炭窯は隅丸長方形を呈し、長軸方向が等高線に並行する。また、検出時に炭化物や焼土もみられる。谷部T102の炭窯もT101と同様の特徴を有する。T101、T102は近接して設定したトレンチであるため、両造構は連続する同一の炭窯である可能性が高い。

遺物は46ヶ所中、16ヶ所のトレンチにおいて出土した。出土傾向としては、谷部に配したトレンチのⅡ~Ⅲ層より出土したものが多い傾向である。また、谷部最低地の湧水の著しい湿地では深さ約2mで自然木等の有機物がみられるトレンチもあったが、人工遺物は確認されなかった。縄文~弥生時代の遺物では、縄文土器（前期~中期）・弥生土器（後期?）小1箱・剥片石器2点・礫石器9点、古代~中世の遺物では、土師器・須恵器小1箱、中世の中国白磁片1点、中近世あるいは時期不明の遺物として、陶磁器片や鉄製品・鉄滓が少量得られた。

## 金浜 II 遺跡

No	遺構	遺物
T101	炭窯 1基	縄文土器、弥生土器、礫石器、土師器、須恵器、鐵滓
T102	炭窯 1基	礫石器、土師器、須恵器、試製品、鐵滓、羽口、斷面窓
T103		縄文土器、片石器、土師器、鐵滓
T104		剥片器、土師器、須恵器、鐵滓
T106		縄文土器
T107		縄文土器、土師器、中性陶器、鐵製品、鐵滓
T108		縄文土器、土師器、近世陶器
T110		礫石器、土師器、陶器、鐵製品
T111		土陶器、近世陶器、鐵滓
T113		土師器
T115		鐵製品
T116		近世陶器
T121		土師器
T123		縄文土器
T124		礫石器、鐵製品、鐵滓
T125		縄文土器、近世陶器
T214		土師器

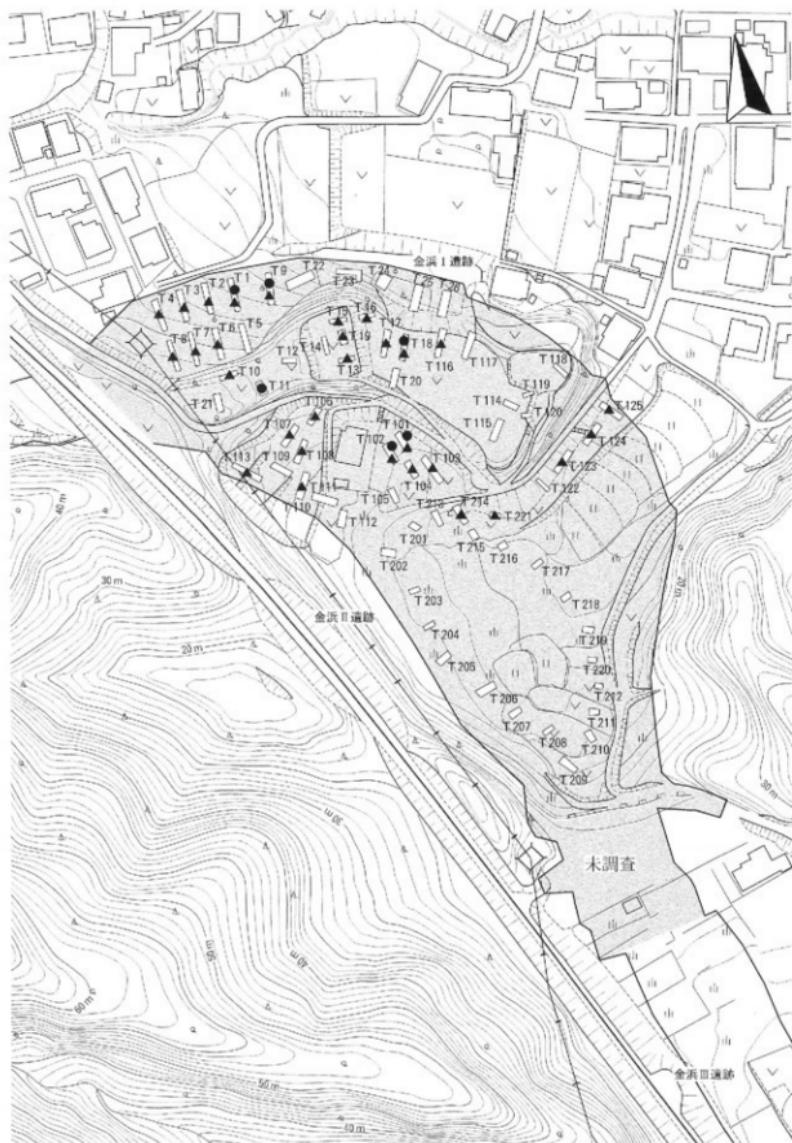


炭窯（金浜 II 遺跡：T101）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	金浜 II 遺跡							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	福島正和・横井猛志							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
かねはま 2 い せき あ 金浜 II 遺跡	岩手県宮古市 金浜第2地割 占地ほか	市町村 03202	遺跡番号 LG43— 2363	39度 35分 34秒	141度 56分 41秒	2007. 9. 25 ～ 2007. 10. 19	450m <sup>2</sup>	三陸架貫道宮 古道路建設事業 に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金浜 II 遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	炭窯 2基	縄文土器、弥生土器、圓 石器、土新器、須恵器、 陶器、鐵製品、鐵序				
要約	今回の調査対象範囲は西側に開けた谷部とその東方に位置する尾根（金浜 I 遺跡と共に）の一部から成り、現況は煙および市道となっている。尾根部では畠地造成時に地形が大きく改変されており、遺構・遺物共に希薄であった。一方谷部においては、山裾から古代を中心に遺構・遺物が確認されているが、谷の最深部は湿地を形成しており遺構・遺物ともに確認されなかった。							

北緯度・経度は世界測地系による数値である。



凡例 ●：造構検出 ▲：遺物出土

第2図 金浜 I・II 遺跡 トレンチ配置図

## (18) 可能性あり⑩

所 在 地 宮古市大字八木沢第3地割字中村 調査対象面積 7,450m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 確認調査終了面積 900m<sup>2</sup>  
発掘調査期間 平成19年10月22日～11月14日 調査担当者 福島正和・横井猛志

### 1 遺跡の立地

可能性あり⑩は、JR山田線磯鶴駅の北2.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸の小丘陵地帯に立地する。調査区は西から派生する尾根部とこれに付随する南北の谷部からなる。調査前現況は、尾根部および南側谷部は山林、北側谷部は畠地であった。今回の調査区の北に位置する八木沢Ⅱ遺跡、南に位置する可能性あり⑨とそれぞれ隣接する。

### 2 基本層序

I層（表土・耕作土・盛土層）	層厚 5～80cm
II層（褐色～黒褐色シルト層）	層厚 0～70cm *縄文時代～古代の遺物を含む
III層（黒色シルト層）	層厚 0～60cm *縄文時代の遺物を含む
IV層（暗褐色シルト層）	層厚不明 *谷部においては部分的に中嶽火山灰を確認
V層（黄色～灰黄色シルト層）	層厚 0～40cm
VI層（灰白色花崗岩風化層）	層厚不明

### 3 調査の概要

今回の試掘確認調査では、事業予定地内に58ヶ所のトレンチを設定し、南側谷部、北側谷部は重機の進入が可能であったため表土削除を機械によって行い、その他の作業は人力によって行った。作業は表土除去以後、各層界上面での遺構検出を行った。

斜面部では谷部に連続する傾斜面で削平がなされている。のことより、現在谷部でみられる平坦な地形および棚段は、人為的に造成されたものであると推察される。

遺構検出作業の結果、尾根部T3、T6、T10、において溝跡をそれぞれ1条、T21において土坑1基を検出した。これらは表土直下で認められ、溝は3ヶ所とも一連の溝であると考えられる。また、T21の上坑は斜面に立地する小形円形の土坑である。谷部ではT25で竪穴住居跡・土坑、T26で鍛冶炉、T103で焼上、T114で柱穴状土坑、T117で溝跡、T118で竪穴住居跡、T120、T122で柱穴状土坑をそれぞれ確認した。T25の竪穴住居跡は表土直下のV層上面において検出した。この竪穴住居跡は平面方形のコーナーを検出したのみである。未削除であるが、埋土中に土師器が認められた。このT25では、平面やや不整な円形を呈する土坑も同様に検出した。T26の鍛冶炉は、検出した焼土の周辺で鍛冶鉄滓や鍛造剥片が出土したため鍛冶炉とした。T114、T120、T122の柱穴状土坑は、いずれも1個ずつであり、建物を構成するかどうか不明である。T118の竪穴住居跡はIII層上面で検出し、平面円形で石阱炉を有する。石阱炉は小さな亜角礫を用いた平面円形のもので焼上も確認できた。このトレンチでは縄文時代晩期の上器が多く出土しているため、この時期の遺構である可能性が考えられる。

遺物は58ヶ所中、15ヶ所のトレンチにおいて出土した。南側谷部および中央の尾根部では、T100出土の近世陶器片1点以外に遺物は出土しなかった。一方、北側谷部では、ほとどのトレンチからも遺物が出土しており、II～III層より出土したものが多い傾向である。縄文～弥生時代の遺物では、縄文土器（前期～晩期）・弥生土器（後期？）中1箱・礫石器2点、古代の遺物では、上師器数片、近世あるいは時期不明の遺物として、陶磁器片や鉄製品（刀子？）・鉄滓・鍛造剥片などが少量得られた。

## 可能性あり@

No	遺構	遺物
T5.6.10	溝 1条	
T21	土坑 1基	
T24		縄文土器、礫石器、割石器、土師器、鐵滓、近世陶器
T25	堅穴住居 1棟 土坑 1基	縄文土器
T26	溝跡	縄文土器、鉄滓(鍛造剝片)
T27		縄文土器、土薄器、鉄製品
T28		縄文土器、土薄器、近世陶器
T29		縄文土器、フレイク
T100		近世陶器
T103	溝土遺構 1基	
T112		縄文土器、弥生土器
T113		縄文土器(前・中期)
T114	土坑 1基	
T115		縄文土器(後期)
T116		縄文土器(後期)
T117	溝 1条	縄文土器(後期)、弥生土器
T118	堅穴住居 1棟	縄文土器(中期・後期)、石器、 弥生土器、土師器、刀子
T119		縄文土器(後期)、弥生土器、 フレイク

No	遺構	遺物
T120	不明遺構 1基	
T121		縄文土器(中期)、鉄滓
T122	小穴 1個	



北側谷部 トレンチ配置(可能性あり@)

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成19年度発掘調査報告書							
副書名	可能性あり@							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第524集							
編著者名	福島 正和・横井 猛志							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2008年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○○	東経 ○○○	調査期間	調査面積	調査原因	
可能性あり@ 岩手県宮古市八木沢字中村地内	いわてけんみやこしやまざわなかむらちじない	03202	39度 36分 55秒	141度 56分 04秒	2007.10.22 ~ 2007.11.14	900m <sup>2</sup>	三陸海岸道路宮古道路建設事業に伴う試掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
可能性あり@	集落跡	縄文時代 平安時代 時期不明	堅穴住居跡 堅穴住居跡 土坑 溝跡 炉 焼土 柱穴状土坑	1基 1基 2基 2条 1基 1基 1基	縄文土器、弥生土器、 礫石器、土師器、須 恵器、陶磁器、鉄製 品、鉄滓(炉内滓、 鍛造剝片)			
要約	今回の調査対象範囲は東側に突き出た尾根部とその南北に開けた谷部から成り、現況は山林となっている。尾根部では溝跡を確認しているが遺物は尾根全体で皆無であり、時期の推定はできない。谷部においては北谷部で縄文、古代の堅穴住居跡が確認されており、各時代を通じて居住域として利用されていた可能性が高い。南谷部では遺構・遺物ともに乏しい。							

※緯度・経度は世界測地系による数値である。



凡例 ●：遺構検出 ▲：遺物出土

(S = 1 : 1000)

第3図 可能性あり⑩ トレンチ配置図

## (19) 北部環状線G・H・I 地点

所 在 地	宮古市小沢二丁目地内	遺跡番号・略号
委 託 者	宮古市都市整備部建設課	調査対象面積 (G: 700m <sup>2</sup> , H: 270m <sup>2</sup> , I: 370m <sup>2</sup> )
事 業 名	宮古市北部環状線道路改良事業	確認調査終了面積 (G: 88m <sup>2</sup> , H: 32m <sup>2</sup> , I: 42m <sup>2</sup> )
発掘調査期間	平成19年11月13日～21日	調査担当者 福島正和・横井猛志

### 1 調査に至る経過

遺跡名「未命名G・H・I地点」は、宮古市北部環状線道路改良事業に伴い、その事業区間内が埋蔵文化財包蔵地であることから発掘調査（試掘）を実施することとなったものである。

北部環状線は、県道宮古岩泉線の市西部に位置する山口地区と一般国道45号の佐原地区を結ぶ延長2,331mの路線で、一般国道45号と一般国道106号が市内で結節していることによって生じる市街地の慢性的な渋滞の解消と灾害等、非常時における45号の代替道路、市の西部及び市街地から県立宮古病院へのアクセス道路としての機能を併せ持つ地域幹線道路である。

本事業は、平成5年度に事業着手し、以来、今日まで事業用地の取得と埋蔵文化財調査を実施して工事着手に向けた環境整備を図ってきた。計画では、用地取得を平成20年度までに、埋蔵文化財調査を21年度までに完了し、工事については22年度以降、県代行工事として岩手県が実施することになっている。

本事業に係る埋蔵文化財調査については、平成6年度から市教育委員会で実施してきたが、この間、事業の進捗を計るため平成8・9年度、15・16年度において、岩手県教育委員会及び財團法人岩手県文化振興事業団から調査の協力を得ている。しかしながら、埋蔵文化財調査の進捗率は平成18年度末で49.47%と低く、調査の遅れが日下の懸案である。

のことから、埋蔵文化財調査の平成21年度完了と県代行による早期着工を図るため、岩手県教育委員会と協議し、同教育委員会に対し平成19年10月25日付建第96号「市道北部環状線道路改良事業用地に係る埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」により、試掘調査の依頼を行った。

その結果、岩手県教育委員会の調整を受けて、財團法人岩手県文化振興事業団と平成19年11月9日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、委託を受けた岩手県文化振興事業団は、平成19年11月13日から試掘調査を実施することとなった。

(宮古市都市整備部建設課)

### 2 各地点の位置と立地

今回試掘調査を行った北部環状線G・H・I地点は、JR山田線宮古駅より1.5km北に位置し、現在の宮古市街地を見下ろす標高75～110mの丘陵地帯に立地する。今回調査区が配されている3地点は、北から南へと延びる尾根部とそれに付随する谷部からなる場所に立地し、各地点は、西から東にG地点、H地点、I地点とそれぞれ並んで配されている。最も西に位置するG地点は北から南へ開削されている谷部に位置し、I地点はG地点の位置する谷部から連続する尾根部に、H地点はI地点から一筋の谷部を挟んで東側の尾根部に位置する。

### 3 基本層序

各地点ともに花崗岩地帯特有の地山を形成している。各地点通有の基本層序は、以下に示す通りである。なお、上層の収斂現象により、特に堆積が発達している谷部に位置するG地点の層序を基本としている。

I 层 明褐色シルト〈表土・盛土〉	層厚 5~20cm
II 層 褐色砂質シルト〈流出土 1〉	層厚 0~60cm
III 層 黒褐色砂質シルト〈流出土 2〉	層厚 0~50cm
IV 層 黒色シルト〈縄文土器片出土〉	層厚 0~40cm
V 層 褐色~黄褐色砂質シルト・黄褐色シルト	層厚 0~30cm
VI 層 灰黄色花崗岩風化土	層厚不明

\*尾根部 (H・I 地点) は、I 層→V 層 (部分的) →VI 層が確認される。

#### 4 調査の概要

##### (1) G 地点

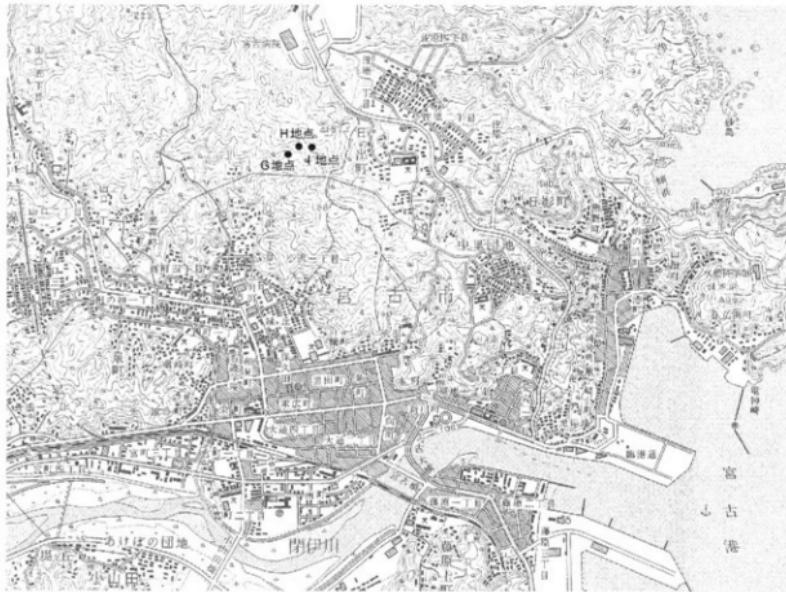
東側尾根から続く斜面部のトレーナーでは、遺構・遺物ともにみられなかったが、最下位に位置する T 5 では、IV 層中より縄文土器片 (中期か?) が 4 点出土した。これらは接点こそないものの胎土や色調、文様等から同一個体であると考えられる。また、II 層中から不明鉄製品が 1 点出土した。この G 地点では遺構はみられなかった。

##### (2) H 地点

表土直下の V ~ VI 層上面において遺構検出作業をおこなったが、植物の擾乱の痕跡があるのみで人為的な遺構はみられなかった。表土から縄文土器片が 1 点出土したが、微細な破片であるため詳細な時期は不明である。

##### (3) I 地点

表土を除去すると人為的な盛土が認められ、これらを除去し、V ~ VI 層上面において検出作業を試みたが遺構はみられなかった。出土遺物は、T 201 で表土中より頁岩製の剥片が 1 点出土した。



第1図 調査区の位置

G地点

No	遺構	遺物
T5		縄文土器、鉄製品

H地点

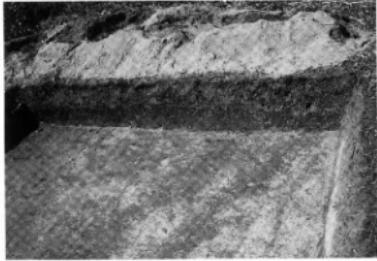
No	遺構	遺物
T101		縄文土器



基本土層（G地点：T5）

I地点

No	遺構	遺物
T201		剝片石器

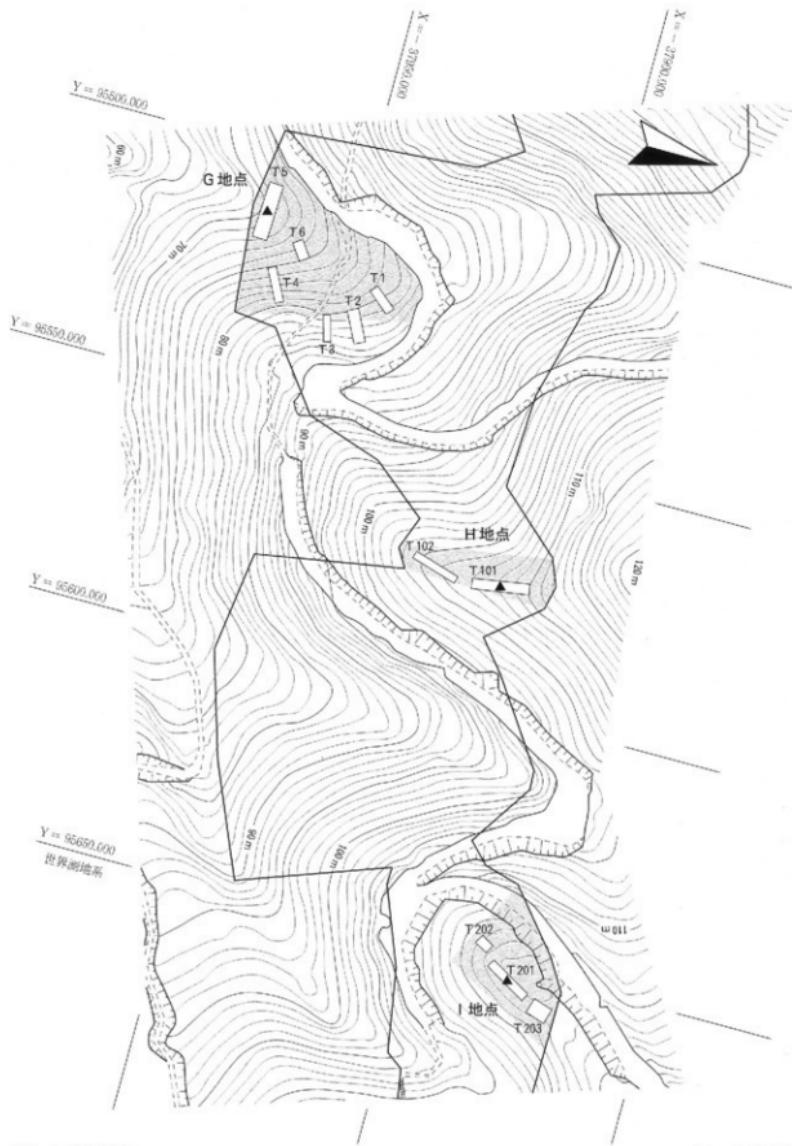


基本土層（I地点：T202）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度発掘調査報告書						
副書名	宮古市北部環状線 G・H・I 地点						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第524集						
編著者名	福島正和・横井猛志						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下戸崎岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2008年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○.〃	東経 ○.〃	調査期間	調査面積	調査原因
G地点 H地点 I地点	岩手県宮古市 小沢二丁目地内	03202	39度 39分 11秒	141度 39分 51秒	2007.11.13 ～ 2007.11.21	88m <sup>2</sup> 32m <sup>2</sup> 42m <sup>2</sup>	宮古市北部環状 線道路改良事業 に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
G地点 H地点 I地点		縄文時代 縄文時代 縄文時代		縄文土器 縄文土器 剝片石器			
要約	今回の調査対象範囲はそれぞれ谷（G地点）と尾根（H、I地点）の一部に限定されている。現況はいずれの地点も山林であった。I地点では削平盛土が見られ、地形が著しく変化されていた。遺構はいずれの地点においても確認されておらず、遺物密度も希薄であった。						

※緯度・経度は世界測地系による数値である。



第2図 北部環状線G・H・I地点 トレンチ配置図

### III 発掘調査概報

#### 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

## (20) 川目A遺跡 第5次補足

所 在 地	盛岡市川日第5地割49-2ほか	遺跡コード・略号	LE28-0151・YKA-07-05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	2,750m <sup>2</sup>
事 業 名	一般国道106号都南川目道路	調査終了面積	1,180m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月10日～11月29日	調査担当者	八木勝枝・平野祐

### 遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南東約7.5kmに位置し、南大橋付近で北上川に合流する築川によって形成された河岸段丘上の左岸に立地する。標高は179m前後である。

### 調査の概要

過去に岩手大学草間教授によって3度、盛岡市教育委員会によって1度の発掘調査が行われており、縄文時代後晚期の配石遺構が検出されている。過去調査地点はいずれも今回調査区以北に位置する。第5次調査は昨年度1,080m<sup>2</sup>を対象として行ったが、配石遺構や遺物等を大量に検出したため次年度継続となり、今年度は新たに1,670m<sup>2</sup>を追加して調査を行った。

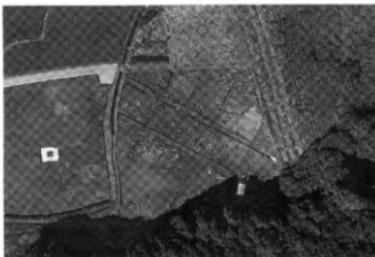
基本層序はI～VI層。遺構検出面はII～V層上面である。II～IV層は遺物包含層で、調査区全体に広がる。III層は主に南山側からの土砂堆積が含まれ、a～c層に分層される。II層は晚期が大部分で、III層は後期前葉～晚期前葉、IV層は中期末～後期前葉が含まれる。

今次調査では、縄文時代中期末土坑1基、縄文時代後期～晚期前葉竪穴住居跡1棟・配石遺構15基・埋設土器遺構3基・焼土14基・土坑8基・柱穴状小土坑21個、近世の土壙墓3基を検出した。出土土器から、縄文時代の中期末から晚期中葉にかけて営まれた遺跡であることが分かった。重層する包含層中に配石遺構が調査区南西から北東に広がっていた。配石遺構はIII a層上面・III b層上面・III c層上面で検出され、後期前葉から晚期初頭にかけて形成されており、配石遺構には下部に土坑を伴うものと伴わないものがあった。

配石群の地点では配石遺構が作られ始めた時期（後期前葉）の竪穴住居跡が1棟見つかったほか、後期中葉の埋設土器が検出された。以上のことから川目A遺跡第5次補足調査区は、縄文時代後期前葉には住居跡があり、縄文時代後期前葉から晚期にかけては墓地（配石遺構）として利用された遺跡であることが考えられる。

出土遺物は、縄文時代中期末・後期・晚期土器大コンテナ271箱、石器中コンテナ53箱、土製品（斧形土製品・土偶・イノシシ形土製品・鐸形土製品・スタンプ形土製品・土版・異形土製品・土製耳飾・土製腕輪・土製玉・土器片円板・土鍾）、石製品（石棒類、玉等）がある。

他に近世墓からキセル1点・鉄製鉄1点・寛永通寶18枚、表土から磨滅した洪武通寶1枚が出土している。



配石遺構集中区全景

## (21) 川目A遺跡 第6次調査

所 在 地	盛岡市川目第5地割51ほか	遺跡コード・路号	LE28-0151・YKA-07-06
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	10,900m <sup>2</sup>
事 業 名	一般国道106号都南川目道路	調査終了面積	11,472m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月10日～11月29日	調査担当者	星 雅之・吉野紀子・藤原大輔

## 遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅から南東約7.5kmに位置し、北上川の支流、築川左岸の河岸段丘上に立地する。第6次調査は、昨年度から継続調査が行われている第5次調査補足区の西側や南西側を対象とし行われた。調査区の標高は177～205mで、調査前の現況は水田、山林であった。

## 調査の概要

今回の調査では、堅穴住居跡15棟、集石・立石19基、埋設土器2基、焼土9基、炉1基、土坑61基、土取り穴7箇所、柱穴状土坑402個、掘立柱建物跡3棟、堅穴建物跡2棟、捨て場1箇所を検出した。

遺物は、縄文・弥生土器大コンテナ92箱分、土師器3点、須恵器1点、陶磁器10点、石器中コンテナ61箱分、石製品19箱分、琥珀3点、鉄製品6点、古錢13枚などが出土している。

今回の調査区は、大きく調査区西部、南西部、中央部、東部の4つに区分して行った。調査区西部は、縄文時代中期末葉を中心とした集落跡であることが確認され、特記事項として粘土採掘を意図した土取り穴の検出が挙げられる。調査区南西部は、縄文時代前期を中心に早期の集落跡を確認した。調査区中央部は、縄文時代前期後葉の捨て場1箇所と、時期が未確定の土坑2基・柱穴状土坑24個を確認した。調査区東部は、中近世と考えられる堅穴建物や掘立柱建物跡などの遺構を主体に、縄文時代の集石などを確認した。



縄文時代 土取り穴

## (22) 鶴ノ木遺跡

所 在 地 奥州市前沢区鶴ノ木102-1 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手川国道事務所

事 業 名 一般遊水地衣川本川築堤工事

発掘調査期間 平成19年4月9日～5月31日

遺跡コード・略号 NE76-0051・UK-07

調査対象面積 996m<sup>2</sup>調査終了面積 996m<sup>2</sup>

調査担当者 北村忠昭・吉田泰治・高橋聰子

## 遺跡の立地

本遺跡は、奥州市役所前沢支所の南東約4kmに位置し、北上川西岸の水沢段丘上に立地する。北東側には国指定史跡の白鳥館遺跡が所在する。調査前の状況は山林で、標高は平坦部で約34m、斜面端部で約24mである。

## 調査の概要

今回の調査では後期旧石器時代の旧石器ブロック3箇所、縄文時代～弥生時代の住居状遺構1棟、柱穴状土坑3個、弥生時代の竪穴住居跡1棟、集石1基、土坑1基、古代の土坑1基、溝跡1条、柱穴状土坑1個、時期不明の溝跡1条、柱穴状土坑12個が検出された。

出土遺物は旧石器1678点（座標データ付1180点、グリッド一括資料・フローテーション資料498点）、縄文土器・弥生土器大コンテナ0.5箱、土師器・須恵器大コンテナ1箱、縄文時代の石器208点、古代・近世の石器4点、弥生時代の紡錘車1点、縄文時代の石製品1点、古代の鉄製品1点、時期不明の鉄製品1点、陶磁器小コンテナ0.5箱である。



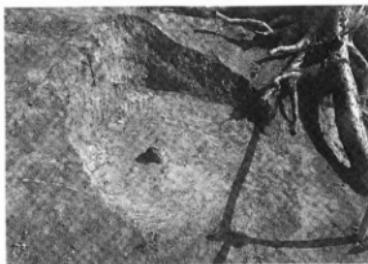
調査区全景



旧石器出土状況



弥生時代の竪穴住居跡



古代の土坑

## (23) 倉沢3区I遺跡

所 在 地 花巻市東和町倉沢3区89ほか  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業  
 発掘調査期間 平成19年5月8日～6月15日

遺跡コード・略号 NE49-2021・KS 3 I - 07  
 調査対象面積 2,523m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 2,523m<sup>2</sup>  
 調査担当者 中村繪美・太田代一彦

### 遺跡の立地

遺跡は花巻市東和町の南部、JR釜石線晴山駅から南へ約4kmに位置し、低位段丘上に立地する。調査区は東向きの緩斜面であるが、現況の水田及び畑地によって傾斜に沿って階段状に整地されていた。検出面での標高は175～176m前後である。同事業で調査された倉沢3区II遺跡が南隣し、両調査区間は約400m離れている。

### 調査の概要

検出された遺構は、平安時代の堅穴住居跡1棟、近世以降の墓壙7基、土坑1基、柱穴列1列、時期不明の土坑2基、溝跡27条、柱穴約90個である。遺構の大半は削平を受け、溝跡は断続的に確認された。調査区の南東端で検出された堅穴住居跡も同様で、壁際の掘方の一部と煙道部が確認できたのみである。残存部から推定される規模は一辊3m以上、煙道は南西に向けて造られている。遺物は、土師器、須恵器、近世陶磁器、石器がそれぞれ少量、墓壙から銭貨、キセル、釘等が出土している。



遺跡遠景（東から）



調査区全景（東から）



溝跡

## (24) 中島遺跡

所 在 地 花巻市東和町安俵11区148-1 ほか 遺跡コード・路号 NE28-2198・NS-07

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 5,800m<sup>2</sup>

事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業 調査終了面積 2,900m<sup>2</sup>

発掘調査期間 平成19年6月18日～9月14日 調査担当者 中村絵美・太田代一彦

### 遺跡の立地

遺跡は花巻市東和町、JR釜石線土沢駅から南へ約1kmのところに位置する。現況は水田で平坦な地形が広がるが、もともとは猿ヶ石川北岸の自然堤防及び後背湿地で、江戸時代から「中島」と「大沼」があったという伝承の残る場所である。調査対象面積は5,800m<sup>2</sup>、このうち4,300m<sup>2</sup>分の表土を除去したところ、調査区北側に湿地が広がり、南側はこれよりも一段高くなることが確認された。今年度は主に北側湿地部分2,900m<sup>2</sup>の調査を終え、残りは次年度以降調査を行う予定である。

### 調査の概要

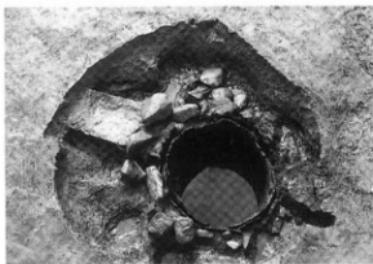
南側の高い区域には平安時代の堅穴住居跡が複数重複して検出され、今年度はこのうち1棟のみを調査している。湿地では、古代の井戸跡1基、上坑（上器焼成遺構？）1基、時期不明の上坑2基、溝跡9条などの遺構が確認された。井戸跡には、水溜めとして直径80cmの大きな丸太を削り貫いた木枠が置かれ、この外側を板状の木材で囲み、さらに疊で周囲をかためている。井戸の底からは、土師器の环が伏せた状態で二つ重ねられ、内側の土器体部には墨書きが施されていた。

出土遺物は、土師器・須恵器が大コンテナ7箱と大半を占め、それ以外は縄文・弥生土器、近世陶磁器、石器、土製品（楕字硯・羽口）、木製品（椀？・曲物）、鉄滓、銭貨、種子等である。古代の遺物は住居跡とその周辺、湿地埋没土中からも出土した。湿地内では高い区域からの落ち際に遺物が多く、これらに完形のものではなく同一固体が周辺に広がる様子も見られないことから、周囲から流れ込んだものと考えられる。しかし、落ち際に墨書き土器がまとまって出土する場所もあり、包含層の性格の違いを検討する必要がある。

今年度の調査で、高い場所を居住域とし、低い湿地も有効的に利用していることが窺えたが、次年度以降調査を行うことにより、さらに詳細な様子が明らかになってくると考えられる。



調査区全景（北東から）



井戸跡

## (25) 賽の神Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上はか  
 委 託 者 國土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名 三陸縱貫自動車道宮古道路建設事業  
 発掘調査期間 平成19年4月12日～9月7日

遺跡コード・略号 LG43-2353・SKⅢ-07  
 調査対象面積 8,900m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 8,388m<sup>2</sup>  
 調査担当者 福島正和・近藤匡樹・横井猛志

## 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線津軽石駅の北約2.0kmに位置し、東に宮古湾および重茂半島を望む山林に立地する。調査区は西から派生する3つの尾根部とこれら各尾根部に付随する3つの谷部からなり、尾根頂部の最高位が標高74m前後で、谷部最低位が標高40m前後である。

## 調査の概要

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡2棟、製鉄関連遺構8基、フラスコ土坑5基、土坑28基、柱穴状10個、鐵冶炉2基、廃滓場1ヵ所、炭窯6基を検出した。縄文時代の竪穴住居跡は中央の谷部に位置し、地床炉を有する。この遺構周辺から出土した土器から縄文時代晩期に属すると推測される。また、南側尾根先端部では、フラスコ状土坑がまとまってみつかっており、縄文時代の生業範囲であることが判明した。平安時代の竪穴住居跡は南側尾根部と谷部で各1棟検出した。製鉄関連遺構は北側谷部で検出した。すべて平面円形の小形炉である。炉内における還元層の存在や廃滓場における流出滓の存在から製鉄（製錬）工程の炉であると考えられる。上器などの遺物が出土していないため時期は不明であるが、炉の形態等により古代のものと考えられる。これら炉が立地する平坦面より低位に位置する沢筋には廃滓場が形成されており、鉄滓等が中コンテナ約50箱出土した。また、鐵冶炉は南側谷部で2基存在している。これらは、周辺で検出した鍛造剝片の存在から鍛錬鍛冶工程のがあると考えられる。

調査の結果から縄文時代の集落および生業域、古代の鉄生産に関わる遺跡であることが明らかになった。



航空写真（直上・写真上が西）

## (26) 八木沢Ⅱ遺跡

所 在 地	宮古市大字八木沢第3地割字中村129ほか	遺跡コード・略号	LG43-0205・YGS II -07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	7,500m <sup>2</sup>
事 業 名	三陸縦貫道路宮古道路建設事業	調査終了面積	7,500m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月12日～8月10日	調査担当者	阿部勝則・横井猛志・八重畠ちか子

### 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯館駅の南西約2.9kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の西岸の山地に立地する。調査区は、南部にある山地から連なる尾根部・斜面部、及び八木沢川の支流によって形成された低地からなる。標高は約46～90mを測る。現況は畑地・山林である。

### 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡4棟、住居状遺構2基、フラスコ状土坑8基、陥し穴状遺構6基、古代の竪穴住居跡2棟、現代の炭窯2基、時期不明の溝跡8条などである。遺構の分布をみると、調査区北端の尾根上の比較的傾斜が緩やかな箇所には、縄文時代の竪穴住居跡及びフラスコ状土坑があり、その尾根南側にあたる緩斜面と低地には、古代の竪穴住居跡及び縄文時代の陥し穴状遺構がある。調査区南端の南斜面には、現代の炭窯がつくられていた。

出土した遺物は縄文土器が大コンテナ4箱、土師器が小コンテナ1箱、石鏃、磨石などの石器類が約40点、石棒1点などである。縄文土器は中期末葉が主体で、土師器は平安時代とみられる。

今回の調査では、時代によって当地の土地利用のあり方が異なることが分った。当時の生活や生業を考える上で良好な資料になると考えられる。



航空写真（東から）

## (27) 木戸井内IV遺跡

所 在 地	宮古市大字千徳第14地割字木戸井内71	遺跡コード・略号	LG33-2263・KDN IV-07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸開道事務所	調査対象面積	5,900m <sup>2</sup>
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	5,900m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月12日～7月31日	調査担当者	丸山直美・鈴木博之

### 遺跡の立地

本遺跡はJR宮古駅の南西約2.5kmに位置し、閉伊川南岸の小起伏山地に立地する。調査区はこのうち南北を沢に挟まれ、西側へ延びる丘陵にかかる3つの尾根部と、その間の谷部の5,900m<sup>2</sup>を対象とした。標高は尾根部最高位で約58m、谷部最低位で約40mを測る。現況は山地で、谷部には近現代まで営まれていた炭焼きなどの産業に伴う小屋の廃材（タン・コンクリートブロック）などの集積が見られた。

### 調査の概要

今回の調査では縄文時代の堅穴住居跡2棟、土坑6基、奈良時代の堅穴住居跡1棟、平安時代の堅穴住居跡9棟、中世の堅穴建物跡2棟、近世の炭窯1基、烟跡6箇所、墓跡4基、時期不明の住居状遺構1棟、焼土3基、土坑10基を検出している。遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、いずれの時代においても、尾根頂部から南向き斜面裾部において堅穴住居跡や土坑が集中する傾向を示す。調査区北側の谷部においては近世以降に斜面裾を人工的に削削して炭窯跡が作られ、それと前後して烟跡が営まれた様子が看取できた。

出土遺物は縄文土器（前・中期）、石器、土師器、須恵器、羽口、金属製品、鉄滓など、総量で大コンテナ5箱分である。



航空写真（上が東）

かくれざと  
(28) 隠里Ⅲ遺跡

所 在 地	宮古市大字八木沢第3地割字中村119-3	遺跡コード・略号	LG33-2292・KZⅢ-07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	9,800m <sup>2</sup>
事 業 名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業	調査終了面積	9,800m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年8月1日～12月5日	調査担当者	丸山直美・鈴木博之

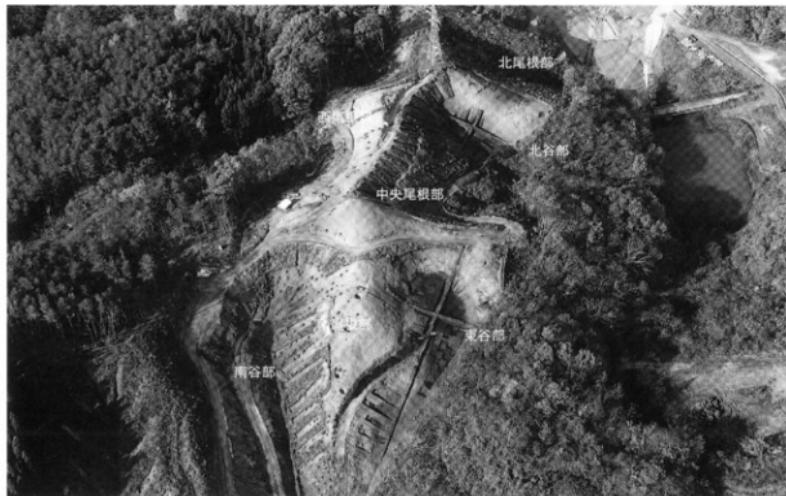
#### 遺跡の立地

本遺跡は、JR宮古駅の南西約3kmに位置し、閉伊川南岸の小起伏山地に立地する。調査区はこのうち主に北西一南東方向に延びる丘陵にかかる東向き・南向きの尾根部と、その間の谷部の9,800m<sup>2</sup>を対象とした。標高は尾根部の最高位で95m前後、谷部の最低位で60m前後を測る。

#### 調査の概要

南向きの尾根斜面部および両側の谷部にかけて、平安時代の堅穴住居跡4棟、住居状遺構9棟（工房含む）、鍛冶炉1基、火葬関連施設1基、土坑12基、大溝1条、炭窯2基、焼土3基、集石遺構1基が検出され、調査区南半部に鉄（製品）づくりを行った古代集落が形成されていることが判明した。一方、谷幅が狭く急峻な北半部では焼土遺構が2基確認されたに過ぎない。東谷斜面下位の沢筋からは鉄滓、羽口を主体とする遺物が多く出土しており、小規模な排泄場が形成されている。

遺物は総量で大コンテナ10箱分が出土している。内訳は繩文土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、羽口、鉄製品、炭化種子（クリ・イネ他）、動物遺体（アサリ）の他、鉄滓、鍛造剝片などの鉄生産関連遺物が出土している。また、堅穴住居跡・火葬関連施設より灰釉陶器片が計8点出土しており、沿岸部における貴重な出土例として注目される。



航空写真（上が北西）

おおだいらの  
**(29) 大平野II遺跡 第2次調査**

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字大平野1-132ほか	遺跡コード・略号	NE30-2300・ODN II -07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所	調査対象面積	10,000m <sup>2</sup>
事 業 名	胆沢ダム建設事業	調査終了面積	29,600m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年6月25日～10月25日	調査担当者	濱田 宏・木戸口俊子

#### 遺跡の立地

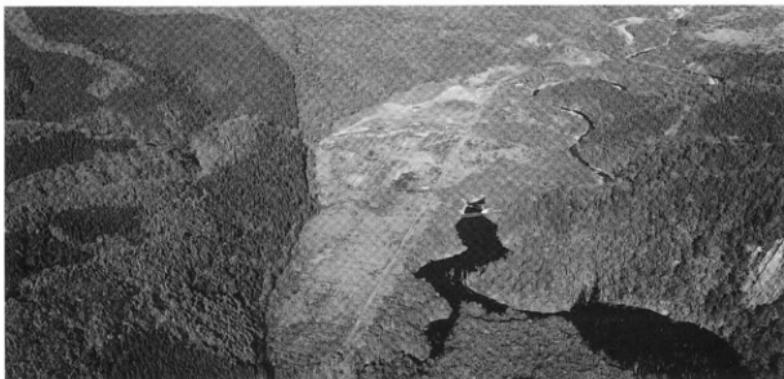
遺跡は、胆沢総合支所の南南西およそ19km、石淵ダムの南西約4kmに位置し、北西から延びる丘陵の南東向き緩斜面上に立地する。この付近は、遺跡の南東側を流れる前川によって形成された河岸段丘と、北東側から流れる小河川によってつくられた扇状地からなり、遺跡の周辺には広大な平坦地が広がっている。調査区の標高は358.0m～371.0m、調査前の状況は山林・荒地である。

#### 調査の概要

今年度は、当初面積10,000m<sup>2</sup>を対象として調査を開始したが、遺構・遺物とも予想を大きく下回ることとなり、途中数回の協議を経て、次年度以降の調査予定箇所の試掘調査、およびそれによる一部本調査が追加された。

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟（近世以降）、土坑17基（うち縄文時代の土坑は5基、他は時期不明）、焼土3基（時期不明）、柱列6列（近世以降か？）柱穴状小土坑51基（時期不明）、カマド状遺構7基（中世以降か？）と現代の窯窓3基である。遺物は、縄文時代早期・前期初頭・中期後半・後期前半、弥生時代後期などの土器片が中コンテナ（容量28袋）1箱、縄文時代の石器（尖頭器・石鎌・石匙・搔器・石皿など）が中コンテナ1箱あまり出土した。

試掘調査では、遺跡の中央部西寄りを流れる小寒沢沿いに、縄文時代前～後期に属すると思われる堅穴住居跡が数棟存在することが明らかとなった。なお、本調査19,600m<sup>2</sup>以外の区域はトレントによる調査を実施し、その実面積は10,000m<sup>2</sup>であった。以上により、調査対象範囲71,300m<sup>2</sup>についての調査は全て終了した。



航空写真

### (30) 坪渕II遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字追分34ほか	遺跡コード・略号	NE31-1023・TF II -07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所	調査対象面積	6,000m <sup>2</sup>
事 業 名	胆沢ダム建設事業	調査終了面積	5,029m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年5月1日～6月22日	調査担当者	木戸口俊子・濱田 宏

#### 遺跡の立地

遺跡は、奥州市役所の西南西方向約25.1kmに位置する。胆沢川支流前川左岸の河岸段丘面に立地し、南東向きの緩斜面となっている。500m東には下嵐江I・II遺跡が、1.5km西には大平野II遺跡がある。現況は山林で、約40年前までは数件の民家があったが、ダム建設に伴う移転後は無人となっている。標高は346m～353mである。

#### 調査の概要

現道により調査区は南北に分断されている。南側調査区では、住居等構築しやすい崖縦性堆積物の希薄な南側部分から縄文時代および近世の遺構が検出された。北側調査区についても同様で、東側沢寄りの高位面から中位面に縄文時代の遺構が、低位面にて近世と見られる遺構が検出された。今年度の調査によって検出された遺構は、縄文時代後晚期の竪穴住居跡2棟をはじめ、掘立柱建物跡2棟、土坑21基、焼土2基、柱穴状小土坑5個、近世の遺構としては、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、墓壙18基、溝跡1条、焼土1基、柱穴状小土坑15個、時期不明の掘立柱建物跡2棟、土坑1基、焼土3基、柱穴状小土坑11個である。遺物は、縄文土器中コンテナ3箱弱（後期・晚期）、石器中コンテナ3箱（鍛石器含む）、また近世墓壙の副葬品として古錢、キセル、鉄製品（和バサミ等）が出土している。

なお、今回の調査により、調査対象範囲5,900m<sup>2</sup>についての調査は全て終了した。



航空写真（南西から）

がんどうづみ

## (31) 岩洞堤遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区小山字岩洞沢地内	遺跡コード・略号	NE34-1263・GDZ-07-02
委 託 者	農林水産省東北農政局いわ南部	調査対象面積	4,300m <sup>2</sup>
	農地整備事務所	調査終了面積	4,516m <sup>2</sup>
事 業 名	国営いわ南部農地整備事業	調査担当者	村木 敬・小林弘卓
発掘調査期間	平成19年4月10日～7月12日		濱田 宏・木戸口俊子

## 遺跡の立地

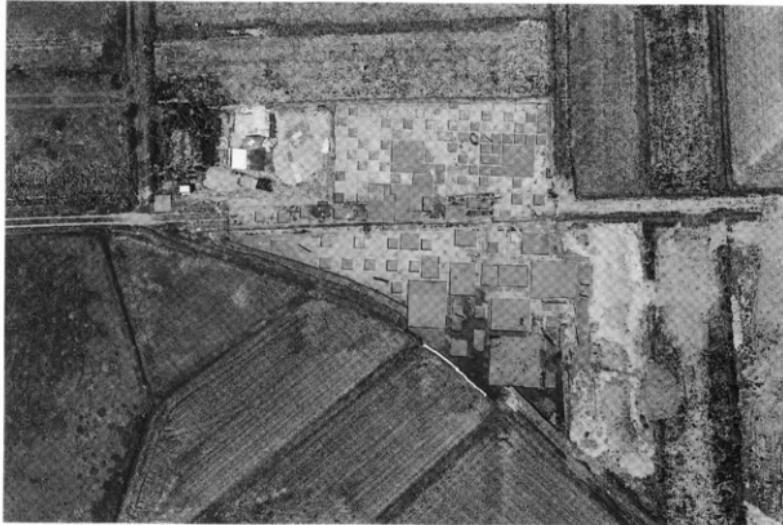
遺跡はJR東北本線水沢駅の西南西約10.5km付近に位置し、胆沢扇状地中位の標高143m前後の横道段丘上に立地している。現況は休耕田・水田・畑地である。

## 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、旧石器時代の遺物集中部8箇所、縄文時代の陥し穴8基である。遺物集中部は尾根上の頭頂部から緩斜面に広がり、平面形は楕円形状を呈し規模が直径4～8mを測る。2枚の文化層を確認しており、第Ⅰ文化層は1箇所、第Ⅱ文化層は7箇所の遺物集中部がある。陥し穴は、平面形状が長楕円形、円形、方形を呈するものが認められ、斜面のほぼ同一等高線上に配置されている。

出土遺物は、旧石器時代の石器約650点、縄文時代の土器片5点である。石器の器種は、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、削器、剥片、石核、台石などがある。

旧石器時代の遺物の年代は、自然科学分析などから後期旧石器時代後半と想定されるが、今後は岩手県内の旧石器時代遺跡との比較検討により本遺跡の位置づけを明らかにしていきたい。



遺跡全景

(32) 上町遺跡  
かみまち

所 在 地 二戸市金田一字新田野26-7ほか 遺跡コード・略号 IE89-2346・KM-07  
 委 託 者 農林水産省東北農政局馬淵川沿岸 調査対象面積 180m<sup>2</sup>  
 農業水利事業所 調査終了面積 180m<sup>2</sup>  
 事 業 名 馬淵川沿岸(一期)農業水利事業 調査担当者 川又 晋・北田 熱  
 発掘調査期間 平成19年4月9日～5月14日

遺跡の立地

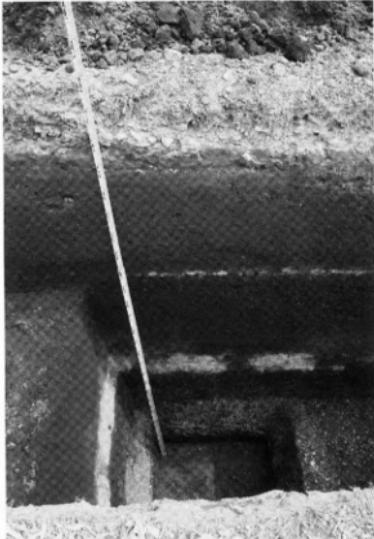
上町遺跡は、IGRいわて銀河鉄道金田一温泉駅の南方約2km、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区周辺は東向きの緩斜面で、標高は122～130mである。調査区は畑地の間の道路部分で、幅1m、全長180mの細長い範囲である。

調査の概要

遺構は、陥し穴状遺構2基、土坑4基、柱穴状土坑3個を確認し、調査区東側の一部では遺物包含層を確認した。遺物は、縄文土器大コンテナ4箱と、土偶、石器類(石錐・石錐・石匙・石核・剥片・磨石・凹石・石皿・石棒)などが少數ずつ、主に包含層から出土した。縄文土器は、大半が晩期中葉のもので、深鉢・浅鉢・台付鉢・壺・ミニチュア土器などがある。遺構は、いずれも土器とほぼ同じ時期に属するものと考えられる。調査区に隣接する畑地では縄文土器・石器が表採できる。



遺物出土状況(東から)



基本層序

## (33) 割沢遺跡

所 在 地	下閉伊郡普代村第30地割147-3ほか	遺 跡 番 号・路 号	KG01-2113・WS-07
委 托 者	独立行政法人緑資源機構	調 査 対 象 面 積	3,170m <sup>2</sup>
事 業 名	東北北海道整備局下閉伊北建設事務所	発 挖 調 査 面 積	3,170m <sup>2</sup>
発掘調査期間	農地地籍合算箇事業下閉伊北区城農業用道路普代工区 平成19年5月16日～8月10日	調 査 担 当 者	北村忠昭・米田 寛・高橋聰子

## 遺跡の立地

本遺跡は、普代村役場の南南西約5kmに位置し、普代川沿いの山間地に立地する。調査前の状況は畠地と山林で、標高は約233～255m、近世の遺構が検出されている面の標高は約236～238mである。

## 調査の概要

本遺跡は、江戸時代後期に操業された盛岡南部藩の割沢鉄山として知られ、経営や技術を記録した『萬帳』や生活や文化等を記録した『割沢御鉄山雑書』等の鉄山関係文書が残ることで著名である。

今回の調査では、鉄山操業時のものと考えられる掘立柱建物跡4棟、鍛冶炉7基、炭窯2基、焼土2基、溝状遺構6条、柱穴列1条、柱穴状土坑24個、排滓場3箇所、時期不明の土坑3基、焼土1基、柱穴列1条、配石遺構1基、不明遺構1基が検出された。

出土遺物は纏文土器片13点、土師器小片2点、陶磁器大コンテナ約2箱、砥石や用途不明の石器31点、羽口大コンテナ約58箱、培塿などの土製品6点、小刀・鎌・釘などの鉄製品235点、簪・煙管などの銅製品19点、寛永通寶などの銭貨54点、碁石などの石製品28点、貝殻21点、鉄滓・炉壁大コンテナ約120箱等である。

調査の結果、鍛冶炉や排滓場が検出され、本調査区は割沢鉄山の鍛冶場の一部であることが判明した。平成9年に『たたら研究』第38号に佐々木清文・羽柴直人氏により「割沢鉄山現況地形調査報告」がなされており、高殿を本調査区の南側の一帯高い平坦部に存在すると推定している。この報告や今回の発掘調査の成果により、割沢鉄山の様相が解明されつつあるが、高殿の正確な位置や鍛冶炉以外の鉄山に付随する様々な施設、工人集団の居住域の所在等の解明は今後の課題である。



東側調査区全景



近世の鍛冶炉

### (34) 細谷地遺跡 第17次調査

所 在 地	盛岡市向中野字野原13-2 ほか	遺跡コード・略号	LE26-0214・OHY-07-17
委 託 者	独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所	調査対象面積	5,563m <sup>2</sup>
事 業 名	盛岡南新都市上地区西整理事業	調査終了面積	5,563m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月11日～11月29日	調査担当者	村田 淳・金子佐知子・ 金子昭彦・千葉正彦・藤田 佑

#### 遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西約1.3kmに位置する。赤石川右岸の河岸段丘上に立地しており、検出面標高は121～122mである。調査前の現況は宅地・畠地であった。

#### 調査概要

今次調査区は、遺跡範囲南端付近を東西に横断する形で設定されており、南北両側に第16次調査区が隣接する。竪穴住居跡3棟、住居状遺構1棟、土坑23基、溝跡3条、柱穴状土坑22個、焼上1基を検出した。調査区内には沢状地形が存在し、古代の遺構のほとんどはこれより北側にしか分布しないことから、この沢状地形が集落の南端を示すものであったと考えられる。出土遺物及び埋土の状況から、竪穴住居跡及び住居状遺構はすべて平安時代、土坑のうち9基が古代、その他の土坑や溝跡は近世以降あるいは年代不明なものである。

遺物は上師器・須恵器が中コンテナで4箱、その他に竪穴住居跡から炭化種子が小袋1袋分出土している。土器は器形が確認できるものはすべて平安時代に属するものである。



平安時代の竪穴住居跡

や もり  
(35) 矢盛遺跡 第13次調査

所 在 地	盛岡市向中野字野原50-1 ほか	遺跡コード・略号	LE26-0139・IYM-07-13
委 託 者	独立行政法人都市再生機構	調査対象面積	1,040m <sup>2</sup>
	岩手都市開発事務所	調査終了面積	1,040m <sup>2</sup>
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	千葉正彦
発掘調査期間	平成19年7月2日～11月1日		

#### 遺跡の立地

矢盛遺跡はJR東北線盛岡駅から南約3km付近に位置し、零石川右岸の低位段丘面および旧河川跡に立地する。当遺跡については平成4年以降、当センターがこれまでに計8回の調査を行っており、今年度も今次調査と並行して第12・14次調査が実施された。今次調査区域の現況は休耕田である。

#### 調査の概要

今次調査の対象区域は約300m離れた南北に分かれているが、南側調査区については遺構・遺物ともに確認されなかった。北側調査区は第12次調査の南側調査区内に位置する道路設置部分で、遺構も両調査区に跨って続いている。ここでは検出遺構のうち柱穴群および掘立柱建物跡について、第12次調査区を含めた概略を述べる。それ以外の遺構（堀、竪穴、井戸等）については、第12次調査の概要を参照していただきたい。

検出された柱穴は総数約800個である。直径30cm前後の円形のものが主であるが、一部に方形のものもある。深さはバラつきがあって一様ではなく、柱痕を確認できたものは少ない。これらの柱穴について配置・形態を検討し、掘立柱建物跡25棟、柱穴列3条を想定した。掘立柱建物跡のうち、堀による方形区画の内部に位置するものは6棟である。また堀と重複しているより古い時期の建物が1棟ある。堀内部の6棟は間仕切りを持たない側柱建物である。区画内北側では柱穴も疎らで建物は存在せず、建物分布は区画内の南側に偏っている。一方、堀区画外部の建物は内部同様の側柱建物の他、間仕切りがなされたものも複数棟ある。うち1棟は間尺に7.5尺を用い、大径の柱穴で構成される規模の大きなものである。いずれの建物も柱穴からの出土遺物が無く、柱穴同士の重複も見られないため新旧関係不明であるが、概ね中世～近世期に属するものと思われる。



堀区画内の柱穴群（掘立柱建物跡群）



間仕切りのある掘立柱建物跡（近世？）

### (36) 細谷地遺跡 第16次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原13-1 ほか  
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業  
 発掘調査期間 平成19年5月1日～11月29日

遺跡コード・略号 LE26-0214・OHY-07-16  
 調査対象面積 13,329m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 13,329m<sup>2</sup>  
 調査担当者 金子佐知子・藤田祐・小林弘卓

#### 遺跡の立地

細谷地遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、栄石川によって形成された沖積段丘上に立地する。調査区の標高は約122mである。

#### 調査の概要

今回の調査区は、遺跡の中央、北側及び西側、南側の一部で、広範囲にわたっている。検出された遺構は、堅穴住居跡14棟、掘立柱建物跡3棟、柱穴列2列、土坑40基、住居状遺構1基、溝跡2条、畝間状遺構3箇所、焼土2基などで、平安時代の遺構が主である。

最も遺構が集中しているのは調査区中央から北側で、第8次・第15次調査区の隣接地である。過去の調査において、東西に延びる段丘崖沿いに平安時代の集落が密に展開することがわかっていたが、この集落は、南に向かうにつれて疎になり、中央調査区を東西に横切る沢跡を南の限界としていることを確認した。この沢跡は東側調査区で南へ緩やかに屈曲するが、この付近では沢をまたいで平安時代の集落が広がっている。また、西側調査区から集落の南西端にあたる堅穴住居跡が1棟検出された。なお、南側調査区の、遺跡内で最も標高の高い段丘頂部からは、古代の遺構は検出されなかった。



平安時代集落の南限（中央調査区）西側から

や もり  
(37) 矢盛遺跡 第12次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田4地割6-2ほか	遺跡コード・略号	LE26-0139・IYM-07-12
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	18,343m <sup>2</sup>
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査終了面積	18,343m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年5月1日～11月29日	調査担当者	金子昭彦・千葉正彦ほか

#### 遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、宝石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

#### 調査の概要

昨年の第10、11次調査区の隣接地に相当し、中近世の居館跡、集落跡の全体像が見えてきた。

遺構は、第13次調査区と合わせ、縄文時代のフ拉斯コ状土坑3基、平安時代の溝跡1条、中近世の堅穴建物跡16棟、カマド状遺構5基、焼土2基、掘立柱建物跡17棟（1棟は13次調査区）、柱穴850個（10個は13次）、井戸跡42基（5基は13次）、土坑17基、堀跡2条、溝跡12条検出された。土坑、溝跡には平安時代のものが含まれている可能性がある。

一辺40～50mの並んだ方形（五角形に近い）に堀を巡らせた居館跡があり、その周囲には同じ頃の集落が広がるが、集落は堀区画とは関係なく、現在の堀に沿って東西方向に広がるようである。なお、掘立柱建物跡や柱穴についての概要は、第13次調査の報告を参照されたい。

遺物は、第13次と合わせても非常に少なく100点に満たない。平安時代の土師器・須恵器片、近世を中心とした陶磁器片、銭貨1点（洪武通宝）、釘等の鉄製品、曲げ物等の木製品などである。



中近世の居館と集落跡（工事開始後南側上空から）

ほんなんみ  
(38) 本波VIII遺跡

所 在 地	久慈市侍浜町本波11地割51-32ほか	遺跡コード・路号	JG10-0332・HNVIII-07
委 託 者	久慈地方振興局土木部	調査対象面積	5,700m <sup>2</sup>
事 業 名	一般県道侍浜夏井線本波地区 緊急地方道路整備事業	調査終了面積	5,700m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年8月1日～11月29日	調査担当者	北田 眞・川又 晋・高橋聰子

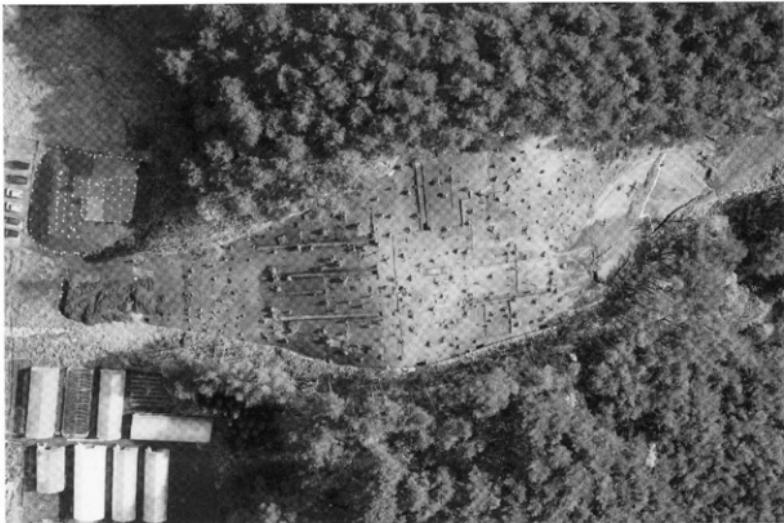
**遺跡の立地**

本波VIII遺跡は久慈市役所の北北東約5.6kmに位置し、九戸段丘（白前段丘）面である尾根状の微高地に立地している。標高は133～153m、現況は山林・原野・牧草地である。

**調査の概要**

今回の調査で検出した遺構は、尾根上から北及び南斜面上部に約2,200m<sup>2</sup>の範囲に拡がる縄文時代前期初頭の遺物包含層1ヵ所、時期不明の焼土1基、土坑26基、集石2基、ピット4個である。

調査区は大きく、北斜面区、尾根上区、南斜面区の3つに区分できる。見つかっている遺構は北斜面～尾根上に偏っており、比高差が約20mある急傾斜の南斜面区では確認されなかった。北斜面区は比高差約10mで緩傾斜である。斜面下位は近年の牧草地造成の名残か元地形を改変しており、やや平らに造成されており、一括堆積の土坑が集中する。尾根上区は北斜面との傾斜変換点付近に若干の遺構が集中する。尾根上を中心に広範囲に希薄な遺物包含層が拡がっており、出土している大半の遺物はここから見つかっている。出土層位は十和田中燃火山灰を若干含む暗褐色土の単層であり、時期は縄文時代前期初頭に限られる。



航空写真（直上、左が北）

### (39) いたごやしき 板子屋敷 3 遺跡

所 在 地 九戸郡綾米町大字上館22地割25-13ほか  
委 託 者 二戸地方振興局土木部  
事 業 名 広域農道整備事業綾米九戸第2期地区  
発掘調査期間 平成19年9月18日～11月30日

遺跡コード・略号 IF74-0096・IKY3-07  
調査対象面積 5,160m<sup>2</sup>  
調査終了面積 5,160m<sup>2</sup>  
調査担当者 中村絵美・太田代一彦

#### 遺跡の立地

遺跡は綾米町の北部、町役場の北東約4kmに位置し、遺跡南側を流れる雪谷川の支流、坊里沢に開析された丘陵縁辺部に立地する。調査範囲は谷部と東西方向にこれを挟む斜面部で、平成17年度から3カ年にわたり合計15,160m<sup>2</sup>の調査を行った。このうち今年度は谷部北側660m<sup>2</sup>と西側の斜面上方4,500m<sup>2</sup>を調査対象とした。

#### 調査の概要

今年度は縄文時代の土坑19基が検出された。土坑の形状はフラスコ状10基、袋状4基、隅丸長方形3基、不正梢円形2基である。フラスコ状土坑の中には底面中央に副穴を持つものも確認された。これらの土坑は調査区西側と中央付近にまとまりがみられ、両者の標高はほぼ同となる。遺物は縄文時代早期および後期の土器片、礫石器が少量出土したが、遺構に伴うものは少ない。過年度分の調査区である谷部南側と東斜面部では、竪穴住居跡群と土坑群が重複していることが多く、周囲にはこれらの遺構から斜面下へと流れたものと考えられる包含層が形成されていた。今年度は遺物も少量で土坑群のみの検出と、これまでとはやや異なる様子を示している。



調査区全景（南東から）

(40) 桂平 I 遺跡

所 在 地	二戸市淨法寺町大字御山字桂平6-3ほか	遺跡コード・略号	JE36-1308・KTI-07
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	5,270m <sup>2</sup>
事 業 名	主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業	調査終了面積	5,270m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年8月17日～11月15日	調査担当者	川又晋・北村忠昭

**遺跡の立地**

桂平I遺跡は、二戸市役所淨法寺総合支所の南方約800m、安比川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区の地形は、東～中央部が平坦もしくは緩斜面、西側は主に斜面で中段・上段に平坦部がある。標高は210～230mであり、調査前は主に畠地であった。

**調査の概要**

平成18年度からの継続調査であり、東側と西側に調査区が延長された。確認した遺構は、陥し穴状遺構25基、竪穴住居跡（平安時代）2棟、竪穴住居状遺構2棟、土坑16基、掘立柱建物跡9棟、柱穴状土坑（近世～）720個、焼土28基である。竪穴住居跡からは、土師器（中コンテナ1箱）、鉄製品（刀子など）が出土した。柱穴からは陶磁器、銭貨（永樂通寶・寛永通寶）、銅製品（煙管など）、砥石が出土した。遺構外では縄文土器や剥片が出土している。

平成18年度調査結果と合わせて、平安時代の竪穴住居跡は、調査区東～中央にかけて疎らに分布することが判明した。柱穴は調査区中央～西で密度が高く、重複も多い。陥し穴状遺構は、調査区東～西端まで、ほぼ全域に分布することが判明した。



調査区中央全景（北東から）

さかい  
(41) 境遺跡

所 在 地	北上市稻瀬町地蔵堂	遺跡コード・略号	ME86-0069・S A -07
委 託 者	北上地方振興局土木部	調査対象 面積	6,100m <sup>2</sup>
事 業 名	主要地方道北上一関線下門町地区道路改良工事	調査終了 面積	6,100m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月11日～9月27日	調査 担 当 者	鳥居達人・須原拓

#### 遺跡の立地

本遺跡は北上市の南東部、JR東北本線北上駅から南4.5kmに位置する。北上川の東岸にひろがり、おむね平坦ではあるが、その中で若干の高低差がみられる。標高は50mである。

#### 調査の概要

調査は昨年度からの継続となった。今回では縄文・弥生時代の竪穴住居跡および住居状遺構5棟、古代の竪穴住居跡7棟、時代不明の溝跡3条、堀跡2条、土坑58基、柱穴状土坑121個のほか、古代期と思われる配石遺構4基が検出された。

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器類が中コンテナ1箱、縄文および弥生土器が大コンテナ6箱、石器は石鎌や磨製石斧など大コンテナ1箱、その他でスタンプ型や土鉢などの土製品も出土している。

今回の調査の特色として、弥生時代後期の土器を出土させる住居状遺構が検出されたこと、平安時代の住居跡は東壁の南東側にカマドをもつことが分かったこと、昨年度検出された堀状の人溝は、南に延長する可能性があることが挙げられる。古代に属すると思われる配石遺構とともに、北上川東岸の人々の暮らしを考える上で貴重な資料となった。



北上川と境遺跡

なりたいわたどうだて  
**(42) 成田岩田堂館遺跡**

所 在 地 北上市成田1地割他  
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局土木部  
 事 業 名 緊急地方道路整備事業成田更木地区  
 発掘調査期間 平成19年7月1日～11月16日

遺跡コード・路号 ME46-1221・NTIT-07  
 調査対象面積 4,800m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 4,800m<sup>2</sup>  
 調査担当者 杉沢昭太郎・田中美穂

**遺跡の立地**

遺跡は北上市の北端部、JR東北本線北上駅から北へ約6kmに位置し、北上川西岸に形成された河岸段丘に立地する。南側は中世和賀氏の居城である二子城跡に接し、北側は飯豊川が東西方向に流れている。遺跡と飯豊川の比高は約20mを測る。遺跡西端には奥州街道があったと伝えられている。

**調査の概要**

中世城館に関する遺構としては堀跡・土塁が各1条、掘立柱建物跡9棟、溝跡2条が検出されている。他に平安時代の方形周溝1基、縄文時代の陥し穴9基、時期不明の土坑12基と焼土1基が検出された。出土遺物は大コンテナ換算で約8箱、弥生土器と石器類を中心で他には縄文土器、土師器、須恵器が出上した。

今回の調査は遺跡の中央を東西に細長く調査したことになる。出土遺物と検出された遺構などから縄文時代は狩猟場、弥生時代が集落、平安時代は墓域、中世には城館として使われていたことが判明し、城館の範囲も概ね明らかになった。遺跡の東側である段丘縁辺部付近を堀と土塁で東西約90m、南北約160mに区画し曲輪とした単郭の城館であった。中世後半に和賀氏が二子城を築き家臣団もその周囲に屋敷を構え集住する中で、本城館も二子城の北縁に構築されたと推察される。



掘立柱建物跡

## (43) 宝禄II遺跡

所 在 地 奥州市江刺区稻瀬字宝禄276-1 ほか  
 委 託 者 県南広域振興局土木部道路整備課  
 事 業 名 地方特定道路整備事業（稻瀬工区）  
 発掘調査期間 平成19年10月1日～12月14日

遺跡コード、略号 ME97-1011、HR II - 07  
 調査対象面積 1,850m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 1,850m<sup>2</sup>  
 調査担当者 須原 拓・鳥居達人

## 遺跡の立地

宝禄II遺跡は奥州市江刺区の北西端に位置する。遺跡から約150m東に広瀬川が、約3km西には北上川が流れている。遺跡は北上川によって形成され、広瀬川の旧河道や氾濫原が複雑に入り組んだ、「江刺平野」と呼ばれる沖積平野の上に立地し、標高は42～43mを測る。

## 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代後期前葉の堅穴住居跡2棟、住居状遺構4棟、土坑19基、焼土2基、古代の土坑2基、性格不明遺構2基、古代以降の溝跡6条、近世の上坑7基、性格不明遺構1基を検出し、複数の時代に渡る複合遺跡であることが分かった。

遺物は大コンテナ30箱分出土している。出土した遺物の主体は縄文時代後期前葉に比定されるものである。他に小片であるが、土師器、須恵器や陶磁器が出上している。

また近世のものと思われる木製歟や杭、木製甕など木質遺物が數点見つかっている。本遺跡は沖積地に立地しているため、深い遺構の底面からは水が湧いており、そのため木質遺物が残っていたものと思われる。出土した木製歟は刃がないが、それ以外は完形で、組立式ではなく、1本の木を加工して作られている。



航空写真（直上）

## (44) 上野 I・II・III 遺跡

所 在 地 一関市厳美町字上野229-1ほか  
 委 託 者 県南広域振興局一関総合支局土木部  
 事 業 名 一般国道342号厳美バイパス道路改築事業  
 発掘調査期間 平成19年4月11日～8月30日  
 遺跡コード・番号 NE95-0181ほか・UN-07

調査対象面積 I : 3,361m<sup>2</sup> II : 2,263m<sup>2</sup>  
 III : 1,517m<sup>2</sup> 合計7,141m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 I : 3,049m<sup>2</sup> II : 2,081m<sup>2</sup>  
 III : 1,381m<sup>2</sup> 合計6,511m<sup>2</sup>  
 調査担当者 村上 拓・横山寛剛

## 遺跡の立地

本遺跡は一関市の西部、一関市役所の西約4.8kmに位置し、北上川の支流、磐井川左岸の河岸段丘縁辺部に立地している。微高地と低湿地が入り組み、調査前の現況は水田・畠地・宅地等となっていた。遺跡の標高は約64.5m（上野I遺跡付近）である。

## 調査の概要

東から順に隣接する上野I遺跡・上野II遺跡・上野III遺跡を東西方向に貫く調査区は、総延長700mに及ぶ。このうち遺構・遺物が検出されたのは、調査区東部（上野I遺跡東端部～上野II遺跡東端部）と、調査区西部（上野II遺跡西部～上野III遺跡東部）の2地点である。

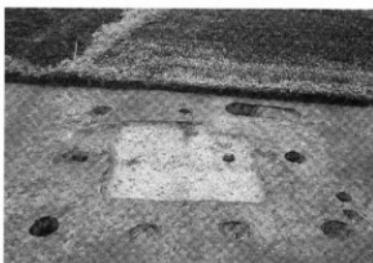
調査区東部は、柱穴群が構成する建物跡をはじめ竪穴状造構・土坑・溝跡などからなる屋敷跡となっている。これらの遺構の帰属年代を示す遺物はほぼ皆無であり時期は不明であるが、概ね中世～近世に帰属するものと考えられる。同区域からは、縄文時代晚期終末期の土器片も少量出土しているが、磨滅が著しいことから二次的な堆積によるものと思われる。付近の風倒木痕には比較的多くの土器片が入ることから、本來は存在した該期の遺構や包含層が後世の削平によって失われた可能性が高いと思われる。

調査区西部では縄文時代中期（中葉中心か）の土器片が少量出土し、特に上野III遺跡東端部では遺物を包含する黒褐色土を埋上主体土とする柱穴状土坑群が検出された。これらは建物跡（住居跡）等を構成する可能性があるが、柱穴配置や造構の性格は不明である。

遺構・遺物が分布する上記の地点はいずれも微高地頂部に相当するが、これ以外の区域は微高地間を分断する沢跡・低湿地となっており、風倒木痕や近代以降の耕作痕などが検出されるのみであった。



空中写真（東から）



竪穴状の掘り込みを伴う建物跡

しちかわら  
(45) 下川原 I 遺跡

所 在 地	紫波郡紫波町南口詰字八坂208ほか	遺跡コード・略号	LE77-2159・SKWI-07
委 託 者	盛岡地方振興局農政部農村整備室	調査対象面積	4,437m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業南日詰地区	発掘調査面積	4,437m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年7月30日～10月31日	調査担当者	米田 寛・吉田泰治

#### 遺跡の立地

JR東北本線日詰駅から南東に約2.5kmの北上川西岸の氾濫平野上に位置する。南日詰の八坂・下川原地区付近では北上川の蛇行によって袋状の地形が東側に張り出している。この袋状の範囲は現在水田として利用されているが、かつては後背湿地であったと考えられる。遺跡範囲の地形は北上川と接する①自然堤防、②後背湿地、③低位の低地面、④高位の低地面からなる。遺構・遺物の多くは④の高位の低地面で多く確認できた。また、②の後背湿地には12世紀代の廃棄場が形成されていた。

#### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、墓壙1基、柱穴列3列、陥し穴3基、土坑14基、柱穴状土坑151個、溝跡6条、焼土1基、遺物包含層約500m<sup>2</sup>で、12世紀を主体とする。

出土遺物は、土師器・須恵器小コンテナ2.0箱、国産陶器小コンテナ0.5箱、かわらけ小コンテナ1.5箱、白磁3点、青磁2点、鉄製品6点、繩文土器9号1袋、礫石器小コンテナ1箱である。

今回の調査では9世紀代と12世紀代の遺構・遺物の密集が確認された。特に12世紀代の墓壙とそれに伴うと考えられる掘立柱建物跡は堂形式による葬送儀礼の痕跡と考えられる。



下川原 I 遺跡 C・D 区全景

## (46) 市の川 I 遺跡

所 在 地 北上市更木 2 地割31-1 ほか  
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局  
 　農林部農村整備室  
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業  
 　更木新田地区

発 掘 調 査 期 間 平成19年4月10日～4月16日  
 遺 跡 コード・略 号 ME46-0343・IKI-07  
 調 査 対 象 面 積 290m<sup>2</sup>  
 調 査 終 了 面 積 290m<sup>2</sup>  
 調 査 担 当 者 潤 浩二郎・藤原大輔

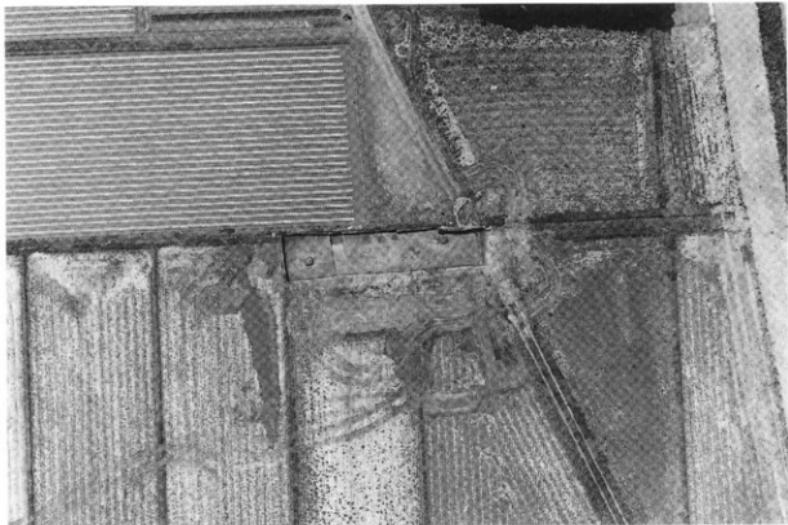
## 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約3.7kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田である。

## 調査の概要

市の川 I 遺跡は平安時代の遺跡として周知されている遺跡であり、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査において、事業予定地内で遺構が確認されたために遺跡周縁部にあたる今回の調査箇所の調査を実地したものである。

今回の調査では繩文土器片が約20点出土したが、古代の遺構・遺物は見つからなかった。土器はいずれも小片で摩滅が激しい。



航空写真（上が南）

## (47) 市の川II遺跡

所 在 地 北上市更木2地割106-1ほか  
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局  
 農林部農村整備室  
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業  
 更木新田地区

発掘調査期間 平成19年4月17日～4月27日  
 遺跡コード・略号 ME46-0374・IK II - 07  
 調査対象面積 393m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 393m<sup>2</sup>  
 調査担当者 潤 浩二郎・藤原大輔

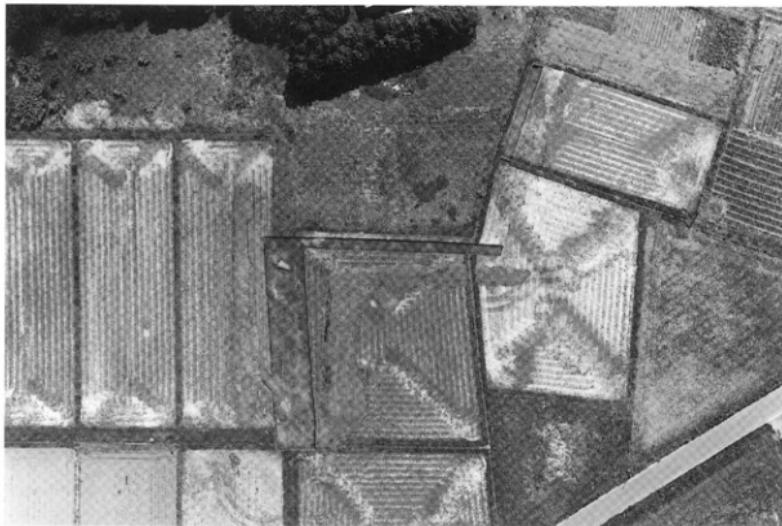
## 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約3.6kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は67m前後で、調査前の現況は水田である。

## 調査の概要

市の川II遺跡は平安時代・近世の遺跡として周知されている遺跡であり、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査で、今回の調査区を含む遺跡内に遺構が確認されたために調査を実地したものである。

今回の調査は本調査面積200m<sup>2</sup>、確認調査面積193m<sup>2</sup>の計393m<sup>2</sup>である。本調査部分において県教育委員会による試掘調査で見つかった溝状の遺構を検出し、確認を行ったが埋土の状況等から現在の水田使用時に掘削されたものと判断した。他に遺構・遺物は見つかっていないが、南側の遺跡隣接地（六日市遺跡で調査）からは平安時代の堅穴住居跡が見つかっている。



航空写真（上が東）

やまぐち  
**(48) 山口遺跡**

**所 在 地** 北上市更木1地割67ほか  
**委 託 者** 県南広域振興局北上総合支局  
**農林部農村整備室**  
**事 業 名** 経営体育成基盤整備事業  
 更木新田地区

**発掘調査期間** 平成19年4月10日～5月18日  
**遺跡コード・略号** ME36-2394・YG-07  
**調査対象面積** 1,320m<sup>2</sup>  
**調査終了面積** 1,320m<sup>2</sup>  
**調査担当者** 深 浩二郎・藤原大輔

**遺跡の立地**

遺跡は北上市の北東端部にあり花巻市にまたがっている。JR東北本線村崎野駅から北東約4.3kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は67m前後で、調査前の現況は水田である。

**調査の概要**

今回の調査は昨年行った花巻市側調査区の南側にあたり、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査で、今回の調査区を含む遺跡内に方形周溝・整穴住居跡等の埋蔵文化財が確認されたために調査を実地したものである。

今回の調査面積は本調査面積795m<sup>2</sup>、確認調査525m<sup>2</sup>の計1,320m<sup>2</sup>で、見つかった遺構は本調査部分から堅穴住居跡3棟（うち1棟は確認調査にまたがる）、溝跡（方形周溝）1条、柱穴状土坑3個、確認調査部分から堅穴住居跡1棟（本調査にまたがる）、焼土1基である。

出土遺物は土器（土師器・須恵器）が小コンテナで1箱、繩文土器2点、石鏸1点、金属遺物（刀子）1点である。



航空写真（上が東）

おがわやしき  
(49) 小川屋敷遺跡

所 在 地 北上市更木2地割41ほか  
委 託 者 県南広域振興局北上総合支局  
農林部農村整備室  
事 業 名 経営体育成基盤整備事業  
更木新田地区

発 掘 調 査 期 間 平成19年5月16日～7月13日  
遺跡コード・略号 ME46-0335・OGY-07  
調 査 対 象 面 積 3,473m<sup>2</sup>  
調 査 終 了 面 積 3,473m<sup>2</sup>  
調 査 担 当 者 清 浩二郎・藤原大輔

#### 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約4.2kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田および未舗装道路等である。

#### 調査の概要

今回の調査に先立って行われた県教育委員会による試掘調査で、今回の調査区を含む遺跡内および遺跡隣接地において竪穴住居跡等の埋蔵文化財が確認されたために調査を実地したものである。

今回の調査面積は本調査面積1,933m<sup>2</sup>、確認調査1,540m<sup>2</sup>の計3,473m<sup>2</sup>で、見つかった遺構は本調査部分から竪穴住居跡7棟、住居状遺構1棟（確認調査にまたがる）、土坑6基、焼土3基、柱穴状土坑1個、井戸跡1基、確認調査部分から住居状遺構1棟（本調査にまたがる）、土坑3基、焼土3基、陥し穴状遺構1基、溝状遺構1条である。出土遺物は土器が大コンテナ2箱、金属遺物2点である。土器は大半が土師器・須恵器で他に縄文土器が少量出土している。



航空写真（上が北）

(50) 六日市遺跡  
むいかいち

所 在 地 北上市更木3地割ほか  
委 託 者 県南広域振興局北上総合支局  
農林部農村整備室  
事 業 名 経営体育成基盤整備事業  
更木新田地区

発掘調査期間 平成19年4月10日～5月11日  
遺跡コード・略号 ME46-0392・MKI-07  
調査対象面積 1,905m<sup>2</sup>  
調査終了面積 1,905m<sup>2</sup>  
調査担当者 杉沢昭太郎・田中美穂

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線北上駅の北北東側約7kmに位置し、北上川東岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡範囲は東西約300m、南北約250mで標高は調査区内で約65～67mあり、遺跡の北端部が少し高く、他は僅かに低くなるが概ね平坦である。

調査の概要

検出された遺構は平安時代に属する竪穴住居跡が2棟と焼土1基、縄文時代の陥し穴が3基、時期不明の溝跡が2条検出された。出土遺物は土師器・須恵器・金属製品・縄文時代晚期他の土器・石器等が大コンテナ換算で3.5箱出土した。遺物の中心は土師器・須恵器で、殆どが竪穴住居跡から出土したものである。

平安時代の竪穴住居跡は比較的高い面が広がる調査区の北端部に点在する傾向がある。一方、調査区の南半部は一段低い面にあたり、遺物は広範囲から出土するものの遺構は焼土のみで住居跡などは検出できなかった。よって集落の中心は遺跡北側にあると推測される。縄文時代には調査区北西側が狩猟の場として利用されていたといえる。



航空写真



平安時代の竪穴住居跡

はってんきた  
**(51) 八天北遺跡**

所 在 地	北上市更木34地割ほか	発 挖 調 査 期 間	平成19年5月1日～6月8日
委 託 者	県南広域振興局北上総合支局	遺 跡 コード・略 号	ME47-2051・HTK-07
	農林部農村整備室	調 査 対 象 面 積	1,343m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業	調 査 終 了 面 積	1,343m <sup>2</sup>
	更木新田地区	調 査 担 当 者	杉沢昭太郎・田中美穂

**遺跡の立地**

本遺跡はJR東北本線北上駅の北北東約6.5kmに位置し、北上川東岸の沖積地に形成された自然堤防上に立地している。遺跡範囲は東西約80m、南北約200mあり、調査区内での標高は約64mである。本遺跡の南側の丘陵上には八天遺跡が位置している。

**調査の概要**

発掘調査面積490m<sup>2</sup>、確認調査面積853m<sup>2</sup>、計1,343m<sup>2</sup>である。検出された遺構は平安時代の焼土1基、近世の柱穴約110個、時期不明土坑6基・溝跡3条である。出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、縄文時代の土器及び石器が小コンテナ換算で1箱出土した。

平安時代の遺構は焼土が1基検出されただけだが、事前の試掘調査では複数の竪穴住居跡が確認されている。それによると平安時代の集落は自然堤防のはば中央付近にあったといえる。同じく縄文時代の遺物包含層が遺跡南側で確認されていることから、その付近に居住域があった可能性がある。北側調査区では近世の柱穴が多数検出されている。これらは複数の民家及び付属屋の一部と考えられ、現在ある集落の成立と展開を示す例といえよう。



航空写真（西から）

(52) 合野遺跡

所 在 地	奥州市前沢区白山字合野4-1ほか	遺跡コード・略号	ME47-0084・AN-07
委 託 者	県南広域振興局農林部農村整備室	調査対象面積	5,400m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業白山地区	調査終了面積	5,324m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年7月1日～10月12日	調査担当者	丸山浩治・菊池昌彦

#### 遺跡の立地

本遺跡は、北上川西岸の自然堤防上に立地する。所々に南北方向の旧小河道が確認される。標高は30～31mで、現況は水田、畑地である。本遺跡の東側には道上遺跡が、南東側には小林繁長遺跡がある。昨年、一昨年と行なわれた道上遺跡第1次・第2次調査区は本遺跡と同段丘面上に立地し、今年度実施の第3次調査区は一段下の低湿地部分にあたる。

#### 調査の概要

今回調査面積のうち974m<sup>2</sup>は確認調査であり、遺構、遺物を検出した段階での記録に留めている。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡2棟、溝跡3条、柱穴状土坑1個、近世の掘立柱建物跡2棟、時期不明の土坑8（うち確認調査分1基。以下カッコ内同義）基、溝跡12条、柱穴状土坑42（3）個である。いずれも開田時の削平などにより残存状態が悪く、竪穴住居はカマドとピットが確認されたのみである。

遺物は小コンテナ2箱分出土した。内容は、縄文土器（詳細時期不明）、石器、土師器・須恵器（平安時代）、陶磁器（中～近世）、鉄製品（煙管）などである。



航空写真（上が北）

こばやししげなが

## (53) 小林繁長遺跡

所 在 地	奥州市前沢区白山字繁長19ほか	遺跡コード・略号	LE47-1046・KBSN-07
委 託 者	県南広域振興局農林部農村整備室	調査対象面積	800m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業白山地区	発掘調査面積	352m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月16日～7月18日	調査担当者	丸山浩治・菊池昌彦

## 遺跡の立地

本遺跡は、奥州市立白山小学校の北側、北上川西岸の自然堤防上に立地する。標高は29m前後で、現況は畑地および水田である。遺跡範囲としてこれまで白山小学校付近のみが周知されていたが、県教育委員会の試掘調査で今回調査付近にも埋蔵文化財が確認されたことにより、北側に拡張された。本遺跡の一部（白山小学校の東側）は、昭和61年に前沢町教育委員会によって発掘調査が行なわれており、縄文土器（中期・晚期）、弥生土器（前期）などが出土している。

なお、今回調査区の北側には道上遺跡が、北西側には合野遺跡が存在する。

## 調査の概要

今回の調査では、近世の掘立柱建物跡1棟、時期不明の溝跡1条、柱穴状土坑2個が検出された。掘立柱建物跡の規模は桁行約20mと大形で、柱間は約2mもしくは1mを測る。道上遺跡第2次調査および川岸場II遺跡で確認された当該遺構との類似性が指摘される。

出土した遺物は、縄文時代中期以降の土器片、石鎌、須恵器甕片、近現代の陶磁器片などで、総量は小コンテナ1箱弱である。



掘立柱建物跡

どうのうえ  
(54) 道上遺跡 第3次調査

所 在 地 奥州市前沢区白山字白山前50ほか 遺跡コード・略号 NE47-0045・DU-07-03  
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室 調査対象面積 1,996m<sup>2</sup>  
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区 調査終了面積 1,793m<sup>2</sup>  
 発掘調査期間 平成19年4月11日～8月30日 調査担当者 丸山浩治・菊池昌彦

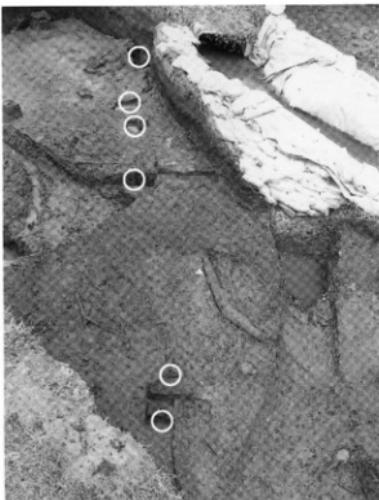
遺跡の立地

本遺跡は、北上川西岸の自然堤防上および低位の旧河道部分に立地する。標高は29～30mで、現況は水田、道路である。遺跡登録時、本遺跡の範囲は北側の高位面のみであったが、県教育委員会による数度の試掘調査の結果、徐々に南側に拡大し、今回調査区のような低湿地部分も含む形となった。北側高位面については、昨年、一昨年と当センターによる発掘調査が実施されている。

調査の概要

今回調査面積のうち338m<sup>2</sup>は確認調査であり、遺構、遺物を検出した段階での記録に留めている。また、一部箇所（小排水路第74号部分）は現地表下1.5mより下位にも木質遺物等の包含が確認されたが、安全面を考慮し、工事掘削深度下20cmまでの調査に留め、これより下位は保存扱いとなった。検出された遺構は、平安時代以前の柱穴列1列、柱穴状土坑3個、平安時代の杭列3箇所、杭1本、遺物包含層2箇所（確認調査区でも検出）、整地層1箇所、溝跡1条、時期不明の土坑1基、溝跡1条である。うち、杭列の構成材1本に墨書きが確認された。

出土した遺物は、縄文土器（前～晩期）・土師器・須恵器（平安時代）大コンテナ約52箱、石器大コンテナ約6箱（縄文・平安混在）、木質遺物（杭、工具柄、皿など）約250点、鉄製品（鉸具）1点、陶磁器数点（以上平安時代）である。大半は低湿地から出土したものである。



杭列



木質遺物出土状況



皿・曲物出土状況

## (55) 倉沢3区II遺跡

所 在 地	花巻市東和町倉沢3区175ほか	遺跡コード・略号	NE49-2041・KS 3 II - 07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	2,212m <sup>2</sup>
事 業 名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	2,212m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年4月9日～5月31日	調査担当者	中村絵美・太田代一彦

## 遺跡の立地

遺跡は花巻市東和町の南部、JR釜石線晴山駅から南へ約4kmに位置する。段丘が張り出した岬状の地形の先端部である調査区は、東向きの緩斜面地で、北～東側は湿地となる。この湿地を挟んで北側には倉沢3区I遺跡が所在する。調査前は宅地として利用されており、斜面上方に削平を受けている。検出面での標高は175～176m前後である。

## 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の土坑5基、陥し穴状遺構2基、近世のカマド状遺構4基、時期不明の土坑3基、溝跡1条、掘立柱建物跡2棟、柱穴184個である。底面中央に副穴を持つ円形の土坑や、溝状の陥し穴が、湿地への落ち際にそれぞれ並んで検出された。調査区中央には、カマド状遺構が並列する。壁面は被熱し炭化物層及び焼土層が複数重なっており、繰り返し火を焚いた形跡が窺えるが用途は不明である。遺物は縄文土器、近世陶磁器、石器等がそれぞれ少量出土した。縄文土器は後期末～晩期のもので、湿地の底面で確認された。これらの密度は薄く、摩滅しているものが多いことから、周囲からの流れ込みと考えられる。



調査区全景（東から）

## (56) 松岡屋敷遺跡 第2次調査

所 在 地 盛岡市上田字松屋敷11-25ほか  
 委 託 者 岩手県教育委員会事務局教育企画室  
 事 業 名 県立松園養護学校整備事業  
 発掘調査期間 平成19年9月3日～12月5日

遺跡コード・略号 KE86-2378・UMY07-02  
 調査対象面積 780m<sup>2</sup>  
 調査終了面積 780m<sup>2</sup>  
 調査担当者 村上 拓・横山寛剛

### 遺跡の立地

本遺跡は、盛岡市役所の北約6.5kmに位置し、北上川左岸に接する北上山地西縁の四十四田丘陵に立地している。今次調査区付近の標高は187m前後である。

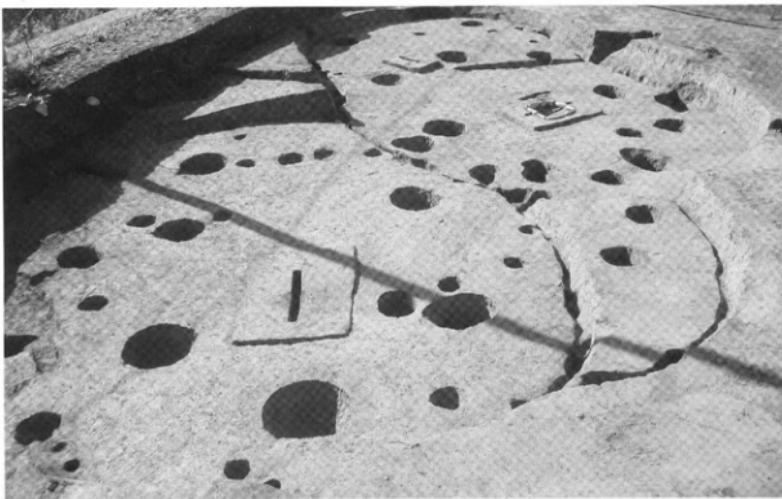
### 調査の概要

検出遺構 繩文時代（中期）竪穴住居跡3棟、土坑1基、陥し穴状遺構2基、焼土1基、土器捨て場1箇所。

出土遺物 繩文早期土器（貝殻文）数片、同中期土器大コンテナ25箱、円盤状土製品・ミニチュア土器各数点、石器類（尖頭器・石鏃・石匙・石錐・石斧・磨礫器類）小コンテナ1箱、琥珀片（細片小1袋）。

調査区は松園養護学校グラウンドの南縁部に沿った狭小な範囲で、北側から南西方向に向かって連続する痩せ尾根を斜めに横断している。尾根頂部に相当する調査区中央では、繩文時代中期（大木8a式期主体）の竪穴住居跡3棟が重複して検出された。尾根頂部の両側はそれぞれ斜面となっており、このうち南東側斜面からは土器等の遺物がまとまって廃棄されている状況が観察された。

出土遺物の大半が繩文時代中期に属するが、ごくわずかに数片の早期土器（貝殻文）破片が確認されている。また、住居跡埋土や捨て場からは多数の琥珀細片が出土している。



重複して検出された竪穴住居跡

(57) 八木沢駒込 I 遺跡  
やぎさわこまごめ

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-2ほか 遺跡コード・略号 LG43-1206・YGK I -07  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所 調査対象面積 5,900m<sup>2</sup>  
 事 業 名 三陸縦貫道路宮古道路建設事業 調査終了面積 5,900m<sup>2</sup>  
 発掘調査期間 平成19年8月17日～10月31日 調査担当者 阿部勝則・八重畠ちか子

## 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南西約3.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川沿いの山地に立地する。遺跡の微地形は、西部の山地から続く尾根部と、八木沢川によって形成された低地面から構成される。今回の調査区は、遺跡の北端にあたる独立丘陵とその南側の低地、さらに遺跡の中央付近に位置する尾根の一部からなり、標高は約20～60mを測る。現況は畠地・山林である。

## 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の土坑30基、陥し穴状遺構4基、炉3基、中世の墓壙1基などである。これらの遺構は、独立丘陵及び尾根の上で、標高が比較的高いところから検出された。特に調査区北側の独立丘陵の頂上付近で、直径1.5m程度のフラスコ状土坑や、平面形が楕円形を呈する陥し穴状遺構などが集中して検出された。また中世の墓壙1基が検出され、埋葬された人骨1体と、副葬品として永楽通寶・洪武通寶などの銭貨3枚が出土した。

出土した遺物は、縄文土器が中コンテナ1箱、石匙・磨石などの石器類が数点、近世以降の陶磁器片数点、羽口1点、銭貨3点、鉄滓数点などである。縄文土器は晩期が主体である。

調査は、次年度以降も行われる予定であり、今年度に引き続き良好な資料の蓄積が期待される。



航空写真（東から）

## (58) 八木沢ラントノ沢 I 遺跡

所 在 地	宮古市大字八木沢第3地號字駄込7-1ほか	遺跡コード・路号	LG43-0279・YGR I-07
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国事務所	調査対象面積	700m <sup>2</sup>
事 業 名	三陸縦貫道路宮古道路建設事業	調査終了面積	700m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年10月9日～10月25日	調査担当者	阿部勝則・八重畠か子

## 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯崎駅の南西約3.0kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸の山地に立地する。遺跡の微地形は、北西部から連なる山地の尾根部と、それに隣接する斜面部及び谷部から構成される。調査区は東側の尾根から西側の谷部までの急斜面上にあり、標高は約35～45mを測る。現況は山林である。

## 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構1基、土坑1基である。陥し穴状遺構は、溝状を呈し、両端が膨らみをもつ形状で、規模は長軸3.5m、短軸0.3～0.7m、深さ1.1mを測る。土坑は楕円形を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.4m、深さ0.8mを測る。

出土した遺物は、土坑から出土した炭化物2点である。

今回の調査で検出された陥し穴状遺構は、尾根から谷部に向かう獸道上に設けられたものと考えられる。今回は限られた範囲の調査ではあったが、本遺跡の周辺では縄文時代の良好な資料が蓄積されつつあり、今後は、それらの成果とあわせて当時の生活や土地利用について検討していく必要がある。



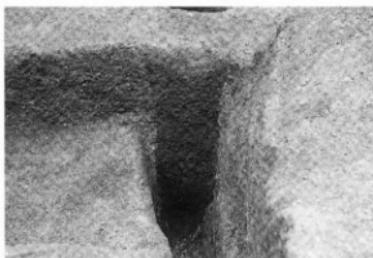
遺跡遠景（南から）



調査区全景（南から）



平面（南から）



陥し穴状遺構

断面（南から）

(59) 八木沢駒込Ⅱ遺跡  
やぎさわこまごめ

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込40ほか  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事 業 名 三陸縦貫道路宮古道路建設事業  
発掘調査期間 平成19年10月30日～12月5日

遺跡コード・略号 LG43-1244・YGK II - 07  
調査対象面積 1,900m<sup>2</sup>  
調査終了面積 1,900m<sup>2</sup>  
調査担当者 阿部勝則・八重畠ちか子

## 遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南西約3.7kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。遺跡の微地形は、西部にある山地から連なる尾根部と、八木沢川の支流によって形成された低地面から構成される。今回の調査区は、遺跡の北端部に当たり、標高約37～38mの北側の低地面と、標高約47～50mの南側の尾根部に大別される。現況は、畑地・山林である。

## 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居跡2棟、土坑11基、陥し穴状遺構8基、近世以降の柱穴状土坑25個などである。遺構の分布を見ると、南側の尾根部の先端に堅穴住居跡と大形土坑があり、北側の低地面に陥し穴状遺構がある。堅穴住居跡は、径4mほどの円形基調で石囲炉をを持っており、径1～1.5mほどの大形土坑と重複している。時期は、出土遺物から縄文時代中期と考えられる。陥し穴状遺構は、規模が長軸1～3m、短軸0.5mほどの溝状を呈するものである。

出土した遺物は、縄文土器が小コンテナ1箱、石器・磨製石斧など石器類が数点、銭貨1枚である。

調査は、次年度以降も引き続き行われる予定である。今回の調査で、縄文時代の集落の立地を考えるうえで良好な資料が蓄積されており、今後の調査が期待される。



航空写真（直上）

## (60) 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字下嵐江地内	遺跡コード・略号	NE31-0084・NE31-0096
委 託 者	国土交通省東北地方整備局	OS I・II-07	
	胆沢ダム工事事務所	調査対象面積	10,200m <sup>2</sup>
事 業 名	胆沢ダム建設事業	調査終了面積	100m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成19年10月29日～11月15日	調査担当者	濱田 宏・木戸口俊子

## 遺跡の立地

遺跡は石淵ダムの南西約2km、東流する胆沢川とそれとは方向を異にする前川の合流点付近に突き出す地点にあって、山地から北東に細長く延びる台地の緩斜面上に立地する。遺跡がのる段丘は、水沢低位段丘高位面、金ヶ崎段丘相当である。調査区の標高は344～349mほどで、調査前の状況は山林および宅地移転後の荒地である。遺跡周辺の地形的環境もさることながら、遺跡内には「下嵐江番所跡」なる標柱もあって、これまで人々の生活の痕跡はかなり色濃いと感じられる。

## 調査の概要

本遺跡の調査は、当初次年度に実施される予定であったが、ダム建設工事の工程の関係で対応が急がれる箇所のことから、7,000m<sup>2</sup>を対象とした調査に着手した。

結果、上述の番所跡に関連すると思われる柱穴が300個以上のほか、近世以降の墓壙が20基あまり確認され、さらに後期旧石器時代の終末期か、あるいは縄文時代草創期・早期に属すると思われる石器が漸移層から数点出土した。その種類にはナイフ形石器、荒屋型彫器、細石刃などがあるが、調査期間の制約もあって石器組成を含めたこの文化層の詳細な検討はなされていない。この他には、縄文土器數十点と近・現代の陶磁器類が小コンテナ1箱、古錢、キセルなどが出土した。

今回の調査によって、本遺跡は近世と旧石器時代終末期、あるいは縄文時代の旧い時期の複合遺跡であることが明らかとなった。なお、この結果から下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡を合わせた調査対象面積は3,200m<sup>2</sup>増えて合計10,200m<sup>2</sup>に変更となり、精査を終了した100m<sup>2</sup>以外については、次年度以降に調査を継続することとなった。



航空写真

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集

## 平成19年度発掘調査報告書

印 刷 平成20年3月20日

発 行 平成20年3月24日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 セーコー印刷  
〒020-0877 岩手県盛岡市下の橋町2番23号  
電 話 (019) 651-3606

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008

